
神様それはないよ！

紅姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神様それはないよ！

【Nコード】

N0677V

【作者名】

紅姫

【あらすじ】

大学を卒業しても中々仕事が決まらない桂木正美かつらぎ まさみはある日、異世界へ飛ばされてしまう。気がついた先では男から女になっていた。癖のある人間に動物、妙な性癖すら持つメイドに囲まれて前途多難。唯一もってる力である主人公補正は、運の悪さだけ？

気がついたら女に・・・

薄暗^{うすくら}、夜の街の歩道を一人の男が雨に打たれながら歩いていた。

雨の中、傘を持たずに歩いてる事もあって、男が声を立てずに涙を流しているのに気がつく者はいなかった。

俺の名前は、桂木正美^{かつらぎ まさみ}という。

経済大学を卒業してから、すでに1年が経過している23歳の男。

今、俺は雨の降る中を一人自宅へ向っていた。

自宅は2F立ての一軒屋で一人暮らしをしている。

一人暮らしなのには理由があって、両親共に去年、交通事故にて他界しているからだ。

父と母は共に学生結婚らしく、22歳の息子の俺がいるのに両親共に42歳という若さでこの世を旅立ってしまった。

俺が大学を無事に卒業して肩の荷が下りたのか去年、伊豆へ両親二人で旅行に行った際に、何もない所でガードレールを突き破って海に転落しそのまま帰らぬ人となった。

当時は、新聞一面に事故の原因がはっきりと掴めなかった事からテレビ局や新聞記者の連中が面白おかしく視聴率を取る為だけに、幽霊の仕業だのと報道していた。

そして、視聴率を取るためのマスコミは遺族の心情なんて一切、気に掛けずに過剰、いや苛烈なまでの取材を、家まで押しかけて行ってきた。

両親の葬式をする時も取材陣、報道陣が押しかけてきた。

俺は、両親を失った事と遺族の心情をドキュメンタリーとしてテレビや新聞に載せられた事でノイローゼになっていた。

そのマスコミも事故があってから一週間を過ぎると潮が引くようにいなくなった。

俺に残されたのは両親が残してくれた家と、マスコミにズタズタに引き裂かれた心だけだった。

俺の家は、最近問題になっている核家族で親戚付き合いも皆無だった事もあり、お葬式自体は質素な物だった。

両親の会社の関係者と友人が来るくらい。

お墓の手続きをしてから両親の死んだ後の手続きが全て終わった頃には、俺の体重は80kgあったのが60kgまで減っていた。

両親の死が実感出来たのは、全てが終って、ふとした事が切っ掛けだった。

部屋を掃除してる時に、俺宛に父親の名前で運送会社から小さな箱が届いた。

その日、俺は丁度、誕生日だった。

震える手で、小さな箱を開けると『22歳の誕生日おめでとう』と書いてあるプラカードと品薄で平均一年待ちの最新の携帯電話機が入っていた。

そしてプラカードには両親の名前が書いてあった。

プラカードと携帯電話機が入っている綺麗にデコレーションされている箱が次々と湿っていくのが分かる。

その日、俺は両親が死んでから初めて嗚咽おえつを噛み締めるようにして泣いた。

その後、両親が死んで、俺が悲観に暮れていた時、大学の同級生であった結城奈津実ゆうき なつみが俺を見かねていろいろと世話をしてくれた。

料理を作ってくれたり、掃除をしてくれたりと……精神的にまいっていた俺は、奈津実とすぐに彼氏彼女の関係になった。

その後は、結婚も視野に入れて付き合っていた。

それからしばらくして、彼女は少しずつ俺から距離を置き始めた。

その頃から、大学の仲間達が奈津実の素行については噂をし始めていた。

奈津実はずでに、他の男がいてそいつに体を許していると．．．．

奈津実の相手の男は、外務省の高級官僚の息子で大学を卒業後コネで外務省に入る事が約束されてるらしいとか。

外務省の年収1000万を超えるとか。

噂の域を超えた話しもチラホラと出始めていた。

それでも俺は、そんな事を彼女がするはずがない！

何かの間違いに違いないと信じていた。

さつき、ホテルから彼女ともう一人の男が一緒に出てくるのを目撃するまでは．．．．

彼女は俺の方に気がついて、ばつの悪そうな顔をした後、一言言ってきた。

「あーあ、ばれちゃたか。せっかく、あの土地と家を売らせて貢がせようとしたのに」

悪びれもせずに、男と一緒に俺を指差して、笑っていた。

今までの、事が全て演技だと分かった途端、俺の中の物が音を立てて崩れていくのを感じた。

「俺は一体何をしていたんだろうな．．．．」

本当に溜息しか出てこない。俺は、家の帰り道にあるスーパーでビールと摘み^{つま}を購入した。

30分ほど時間をかけ、自宅へ戻ったあとは、雨ですっかり冷えた体をシャワーを浴びて温めてからテレビをつけながら、ビールを飲んでた。

テレビを見ているのも最近は劣化したつまらない番組しかやってない。

「くだらないな、嘘や偽りで塗り固めたニュースに、それに便乗するように下らない番組こんな放送しかないテレビに見る価値なんかあるのか？」

以前、仲間と作った日本の近況を探ろうサークルのメンバーと昨日話した内容を頭に浮かべていた。

サークル内で話した内容だと、最近はテレビの視聴率が3%を越えれば良い方らしい。

まあ、こんなつまらない番組を流してるくらいではお話にならないと思うが……

「明日から、どうするか……」

どうするかと言っても結局は、就職活動をするしかない。

でも、はっきり言って二流大学出の俺が就職できるのは、この就職氷河期の時代にはかなり難しい。

日本の企業が海外へ利益追求の為に工場を移転したのが切っ掛けで、本来あった仕事が海外に移った事で働き場所を無くした、団塊世代より下の人は仕事を失ってしまった。

そしてそれにより日本は弊害を受けた。

つまり需要と供給のバランスが崩れた事だ。

資本が外国に流れる事により本来、国内に循環するはずだったお金が無くなり

それにより消費の冷え込み。消費が冷え込めば国内の企業は立場の弱い従業員の給料を削る。

それにより更に消費が伸び悩むと言った負のスパイラルが出来上がる。

これを改善する為には、海外にある日本の企業の工場を国内に戻せば解決するのだが、

今の政治家は企業から多額の献金を受けてる為、それは不可能と言える。

そして海外に工場を移転した一番のデメリットが、壊れにくいと言われていた日本の電化製品の劣化を招いてる事だ。

昭和40年代に発売された乾燥機などは20年くらいは電化製品寿命があったが、最近では3〜5年しかない。

パソコンに至っては1年という、信じられない程短い期間の保障。

いま、ニュースでやっている中国の高速鉄道一週間で10回以上の故障発覚!!

などデカデカと表示されてるのを見ると、中国に工場を作った事が原因で日本の製品の壊れにくいとされていた神話が崩れているのは明らかだし、そんな壊れやすい物を高いお金を出してまで買うのはナンセンスだとは思えない。

それでも、企業が日本国内へ工場を戻さないのは消費者の視点からではなく、

上からの目線で経営をしてるからだ。

本当に良い物を作れば売れる。

売れないのは買う価値が無い物というのを今の日本の経営陣は分か
つてないからだ。

まあサークル活動だと、最近はそんな嫌な事ばかりが情報と入って
きて、落ち込んだ気持ちに更に落ち込む。

「はあ、やってられないな」

俺は呟きながら、ソファアーの上で寝転がる。丁度、アルコールも体
に回ってきて眠くなってきた。

ソファアーの近くに置いておいた毛布を体にかけると俺はそのまま、
眠りについた。

もう、こんな世界も女もコリゴリだ……

心の中でそう呟きながら俺の意識は夢の中に旅立った。

その時、意識がはつきりしていたなら、”お前の願いを聞き届けよ
う”という声が聞えたはずだった。

——鳥のさえずりが澄んだ空気を振るわせる。川のせせらぎが
耳に入ってきて俺は眼を覚ました。

俺が周りを見渡すと周辺は広い緑の草原に覆われており、俺は草原
のど真ん中にいた。

「まだ、夢の中なのか？さっきまで家で寝てたしな？」

俺が、寝るとき着ていた服は青いパジャマだった。いまでも青いパジャマだが、パジャマの胸の部分がかなり大きく膨らんでいるのが見て取れる。

「え？」

パジャマのボタンを2つほど外すと瑞々しい2つの胸が視界に入ってきた。

さらにパジャマも随分、裾が余っていて190cm近くあった身長がかなり縮んでいるのがわかる。

それにさっき、一番最初に声を上げた時に気がついたけど、声もずいぶんと高いソプラノになっている。

首に指先を這わしても喉仏が見当たらない。俺は慌てて、立ち上がると頭に痛みを感じた。

頭に指をもっていくとずいぶんと長い髪が指先に絡まっていた。

「まさか……」

慌てて、男の象徴であるモノを確認しようとしたがそこには茂みはあったが男たるモノが存在していなかった。

俺はたっぷり30秒ほど放心した。

そして、草原に言葉使いに似使わない女性の叫び声が響いた。

お姫様扱いは嫌です

俺は立ち上がって体を調べてからショックのあまり、叫んだ後、うなだれるようにして草原に倒れこんだ。

倒れこんだ俺の体を草がやさしく抱きとめてくれる。

あたり一面に生えている草が微風で波のように揺れて耳に漣さざなみのような心地いい音を運んでしてくれる。

俺は、草原に寝転ねころがって、空を見上げると一面青空が広がっていて白い雲がゆっくりと流れている。

気候的には日本で言う春という感じだろうか？

強すぎない、やわらかい日差しが丁度よく降り注そそいでくる。

俺は、瞼まぶたを閉じて、太陽の日差しと風が運んでくれる草の匂いと音を聞いた。

そうしていると、心が軽くなって悩んでいた事が霧散していくのを感じた。

どのくらい、時間が過ぎたのだろうか？

日差しが少し強くなってきた気がする。

ゆっくりと瞼まぶたを空けていくと青空がずいぶん濃い色になっていた。

女の体になった異常性、そして自宅から気がついたら草原に投げ出されていた事。

明らかに、現実ではありえない出来事が続いている。

「夢ならそろそろ覚めてもいいと思うんだけどな」

俺の呟きは至極真つ当な事だと思う。

それでも、脳の片隅でここは現実かも知れないと思い始めていた。あまりにも現実味があり過ぎる五感に対しての刺激。

そして、草を踏んだ際の感触と空気の匂いを考えて夢では無い事に薄々気がついていた。

何か手がかりが無いのかと思い、立ち上がってから自分の姿を確認すると、服装は寝たときのままの青いパジャマをきている。

身長が190cm近い俺のパジャマは、今の女の体にはかなり大きいらしく裾がかなり余っていた。

裾を捲り上げてから腰紐を引き絞ってサイズを合わせたあと、パジャマのズボンの部分が不自然に膨らんでいるのが分かった。

膨らんでいる部分は、ズボンのポケットのはず。

ポケットに手を入れてから中の物を取り出すと携帯電話が入っていた。

電波は繋がっていなかった。それでもそれを握り締めるだけで自然と心が落ち着いた。

周りを見渡す余裕が出来た事もあり、草原の先を視てみるが視界には草、草、草しか映らなかった。

「俺、これからどうなるんだよ……」

溜息をつきながら、青空を見上げて風に頬を撫でられていると落ち込んでいた気持ちが霧散していくような気がする。

このまま、ここにおいても状況は改善しないと思った俺は、地面までつきそうな黒い髪を胸元にもってきて地面につかないようにして歩き出した。

自分の視界から見た手足はすごく細くて雪のように真っ白だった。

歩きだして3分ほどで草原から抜け出る事が出来、舗装はされていないが人が通った事で踏み固められた道に出ることが出来た。道に足を踏み出した途端、「痛ーっ！」足裏から突然、激痛が走った。

足裏見ると、白いぷにぷにした感触の右足裏の皮膚に尖^{とが}った形をした

小石が刺さっていた。

俺は、男の時ならこんな事なかったのにと呟きながら、小石を抜くと黒い血が流れてきた。

道を再度歩こうとすると、痛みで歩く事が出来ない。傷口を洗う事もできない。

「破傷風にもなったらどうするんだよ・・・」

的外れな呟きをしつつ、気がついた時に近くにあった川の位置まで戻って洗い流そうと思った。

一歩歩くだけで、痛くて蹲るうずくまことが精一杯だった。

無駄な事をたくさん考えていた為、自分以外の者が近づいてくる気配に気がつくのが遅れた。

突然、寒気がして俺が、後ろを見るとトカゲの顔に人の体をした身長190cmくらいの斧を持った奴がいた。

「ひっ！」

驚きのあまり、冷静さを失い痛みを忘れて足で踏み固められた地面である道をがむしゃらに走った。

後ろを見ると、逃げた俺をそのトカゲは追いかけてくる。

身長、体力ともに相手の方が遥かに上だろう。

それでも、慣れていない女の体で、何度も転びながらも必死に俺は逃げ続けた。

本能在理解していた。きっと捕まったら殺される。

ここが夢の中じゃなければ間違いないく死ぬ。

何度、転んで傷だらけりようがになっても俺は走り続けた。

恐怖心が痛みを凌駕りようがしていた。2分ほど走ると、心臓が抗議しだす。俺は、それを意思で押さえつけながら走り続けるが体が言う事をきかずにとうとう、足が縛もつれてしまい地面に倒れてしまった。

何度も転んだせいか膝の皮がむけて血が滲んでいて皮がむけている。きっと足裏もすごい事になってると思う。

俺は倒れたまま顔だけを肩越しに後ろを見るとトカゲが俺に押し掛かってくるところだった。

「うあああああ」

俺は、悲鳴を上げたが、トカゲは舌を揺らしただけで右手にある斧を俺の首にあわせて来た。

俺はここで死ぬのか・・・それも悪くはないか。

どうせ生きていてもロクな事ないしな。親父、お袋俺もそっちにくわ。

死を覚悟してるわりには穏やかな気持ちのまま最後の瞬間を目に写さないように、瞼を閉じた。

どうやら死ぬ瞬間に走馬灯を見るってのは嘘みたいだ。そんなどうでもいいことを考えていた。

10秒ほど経っても、痛み、斧が振り下ろされる気配が無い事に俺は不思議に思い、

瞼を開けるとそこには胴体を長剣で貫かれたトカゲが絶命していた。力を失ったトカゲが後ろに倒れこむようにして倒れた為、斧もそれに伴い倒れたトカゲに突き刺さった。

「大丈夫だったか？」

俺に声をかけてくれたのは燃えるような紅い髪に紅い瞳をした180cmほどの20歳くらいの青年だった。

青年を見上げながら、俺は助けってもらった青年へお礼をいいつつ、立ち上がろうとすると、

安心したのか腰が抜けてしまい立ち上がる事が出来なかった。

さっきまでは死ぬ覚悟が出来ていたのにと自分自信に呆れ返っていた。

俺が自力で立てないと理解してくれたのか成年は、近くに寄って来ると俺の背中と膝裏に腕を通してから抱えるようにして立ち上がった。

いわゆるお姫様抱っこと言うモノなのだが・・・女でも羞恥プレーに近い物があるのに、男の俺にとっては辛すぎる

体勢である。

「一人で歩けるので、下ろしてもらえませんか？」

俺のその言葉をその男はスルーしながら、自己紹介を始めた。男はアレイという名前らしい。

俺も助けてもらった事もあるし、自己紹介をされたこともあったので「正美^{まさみ}」です。

と答えた。

「それでは正美、こんな所で何をしていたんだ？ここはリザードマンの縄張りという事を知らないわけではないだろう？」

「リザードマン？俺、日本って国にいて気がいたら草原にいたんです。」

「日本？気がついたら？」

アレイという名前の青年は不思議そうに首を傾^{かし}げている。

「日本と言うのは、町か村の名前か？」

どうも話を通じないと俺は思いつつも国の名前ですと答えた。

唯一、持ってきた携帯電話を見せるとその青年は納得したような顔を笑みに浮かべてこう俺に囁いてきた。

「ようこそ、幻想大陸ルシアードへ」

と・・・

アレイは俺をお姫様抱っこしたまま、道に放置していた茶色い馬の元へ歩いていくと

先に俺を馬の上に乗せてから俺をすっぽりと抱き抱えるようにして馬を巧^{たくみ}に操りながら道を走っていった。

馬に乗るのが始めてだった俺は、最初はわくわくしていたが、膝と肘と足裏の激痛からそういう感情はすぐに霧散してしまった。

あとは馬に揺られながら痛みと戦いつつ、20分ほど我慢している

と、門構えのある一つの立派な館が見えてきた。

館と魔法と女の子

正美を乗せた馬が門へ近づくと、両開きの鉄製の門がアレイの指示により開いていく。

門は格子のように鉄製で作られているようで、高さは4 m近かった。門が開くと、槍と剣で武装している10人程の衛兵が内側に待機していた。

その全ての人がアレイに抱しめられている俺を見て目を丸くしていた。

一番近くにいた衛兵にアレイが話しかけると、一人の長身の金髪の男性が俺達の方へ向かって歩いてきた。

「無事お戻りになられて幸いです。」

近くにきた金髪の男性は、アレイにそう言いながら、俺の方へ不審者を視るような視線を這わせてきた。

「特に問題はなかったか？」

「いえ、レイユーズ公爵様が館の応接間でお待ちです。」

アレイは兵士の話を聞くと少し思案した顔をしてから、俺を抱いたまま馬を館の方へ向けて馬の手綱を操った。

私は今、館に来たばかりの新人のイリシアに通路の掃除の仕方を教えていた。

「先輩、先輩！」

「どうしたの？」

「アレイクード様が戻ってきましたよ」

「そう、でもきちんと仕事はしましょうね？」

まったく、最近の新人の子は本当に仕事をしないんだからっ。

「でも、先輩」

「先輩じゃなくて、お姉さま！」

「はーい。エルフィーナお姉さま、アレイクード様が女性を馬に乗せて館に向かって来てますよ?」

え!?! 私は、窓ガラスに張り付くようにして外を見ると、主のアレイ様と一緒に一人の少女が馬に乗っていた。

その少女は、この世界では、存在しない黒髪と黒い瞳に白い肌をしている。

「ちっちゃくてかわいいー」

「エルフィーナお姉さま何か言いましたか?」

「ううん、何も言っていないわよ」

私は、アレイ様ともう一人の少女を見ながら面白くなりそうと心の中で考えていた。

館の正面玄関は3m近い両開きの木材で作られてる扉だった。

扉に続く階段の前に馬を操ると、俺を抱き抱えたままアレイは馬から降りた。

館の大きさはかなり大きく、庶民の感覚だとホラーゲームで出てくる洋館のようだった。

俺を抱き抱えたまま館の両開きの扉の前に歩いていくと内側に扉が開いていった。

自動ドア? と思っていると10人近いメイドぽい人が並んでいた。

メイドって現実で見たのは初めてかも知れない……

アレイは、メイド達の中を当然のように俺を抱いたまま、屋敷の通路を進んでいく。

お姫様抱っこされてる俺を、メイド達が食い入る様な視線で見つめてくる。

体の痛みが見つけれられ続けている羞恥心が凌駕して痛みを感じなかった。

これが視線で人を殺せるというものなのですか。

冷静に俺は、自分自身で心の中で突込みを入れていた。

アレイは、俺を抱き抱えたまま進み、のぼりきった階段近くの部屋のドア開け部屋に入った。

部屋の中は、天蓋つきのベットと、白い家具が綺麗に設置されていて、赤い絨毯が敷かれていた。そのまま、俺をベットに下ろしてくれた。

柔らかい羽毛がやさしく俺を抱きとめてくれる。

ベットの上から顔を上げると、アレイの瞳と見詰め合う形になってしまった。

顔を瞬時に真っ赤に染め上げたアレイが、挙動不信な態度をとりながら、治療師を呼んでくるから大人しく待っていてくれと言われた。俺は、アレイと会ってからずっと考えていた事を口にすることにした。

「アレイ、何で会ったばかりの俺にここまでしてくれるんだ？」

「ん？困ってる人がいたら助けるのは当然だろう？」

「当然？」

「ああ、それに……正美はかわいいしな」

そう言いながら、屈託の無い顔で俺に笑いかけてきた。

一瞬、ドキッとしてしまった。

「変な理由だな。まったく」

そう言いながら。俺は思わず笑ってしまった。

笑いながら俺は思ってしまった。まったく変な男だな、俺が男だっ
て知らなくても……こんなに簡単に異性の容姿を褒めるな
んて。

男に褒められても微妙にうれしくない感じがするけど、なんとなく
心が軽くなった気がする。

しばらくしてから、アレイは俺の頭を撫でながら部屋を出て行った。

その後、しばらくすると扉が開いた。

年配の白髪の男と20歳くらいの身長180cmくらいの女性が部屋に入ってきた。

「始めまして、私はクレイネルと申します。こちらは正美様の専属メイドとなるエルフィーナです。」

ベットの側まで来た、白髪の男の人が女性を含めて自己紹介をする、エルフィーナと呼ばれた女性が腰を折り曲げるようにして挨拶をしてきてくれた。その際に腰まである青色の髪の毛が揺らめいて光っていた。

「え、えっと、俺は正美まことみです。よろしくお願いします」

二人とも俺が自己紹介した途端に怪訝な顔をしていたが、すぐに俺の傷の手当てをしますといい両手、両足、を含む俺の体中を診察し始めた。

「この程度の怪我でしたら魔法ですぐ治りますな」

クレイネルはそういうと、俺が見てる前で魔法を唱え始めた。クレイネルの手の周辺に光球が旋回しそれが俺の足裏に吸い込まれていく。

そして・・・何も起こらなかった。

「む！」

「え？」

二人とも、驚いていたようだったが俺としてはそんなすぐに完治する魔法など存在えないと思っていた事もあり二人に診察を任せた。そのあと、何度かクレイネルという男は魔法というのを使っていたみたいだったけど、俺の体中の傷は相変わらず痛かったし、特に改善されてる気はしなかった。

「おかしいですな、魔法が効かない体質ですか？」

クレイネルは俺を見ながらそう聞いてきたけど、俺には「さあ？」としか答えることは出来なかった。

俺の返答に、二人はしばらく考え込んでいたようだったが、薬草を

潰して、傷跡に当ててから包帯を巻いて来た。

傷口洗わなくていいのかよーと思わず突っ込みを入れそうになった。どうやらこの世界はあまり医学が進んでいないようだ。

包帯を両足の裏と膝と肘に巻いてからクレイネルは部屋を出ていった。

部屋の中には、俺とエルフィーナさんがそのまま残されたわけだが、
．．．．．

「えーと、エルフィーナさん何か用事でも？」

俺のその言葉にエルフィーナさんは用事？という顔を向けてきた。

「私は、主様より正美様のお世話を言い使ったメイドですのでこの部屋におります。」

「．．．．．」

落ち着かん．．．．．何かしないと。

そうそう。傷口洗わないと．．．．．お湯と清潔なタオルを持ってきてもらおう！

「すいません、エルフィーナさん。ぬるま湯と清潔なタオルか包帯を持ってきてもらえませんか？」

俺の頼みにすぐに反応して部屋から出て行った。

はぁ、知らない人とずっと居るとこんなに疲れるもんなのか。

俺はダブルベットに倒れこんだ。

そういうえば、洋服がパジャマのままだった．．．．．どうしよう．．．
．．．

エルフィーナさんが戻ってくる間に色々考える事があるんだよな。お酒を飲んで目が覚めたら、女になっていて、さらにここはアレイの言う事が本当ならば幻想大陸ルシアードと言う知らない場所という事。

変な化け物も存在し、魔法も存在してる。どうやって帰るか想像もつかない。

俺、これからどうなるんだよー。

俺が頭を抱えて考えてると、部屋の扉をノックする音が聞えてエルフィーナさんが部屋の中に入って来た。

カートの台の上には陶器が2つ乗っており、包帯とタオルが添えられていた。

「正美様、お待たせしました。」

腰から折り曲げて謝罪してきてくれるが、日本人としてはそういうのは堅苦しい訳だったけど。

「エルフィーナさん、俺のことは正美まひみで呼び捨てでいいです」

「それは出来ません、主様の大事なお客様ですから。あと私の事はエルフィと呼び捨てにして頂いて構いません」
.....

はあ、生真面目だよな。

「わかった、エルフィでいいかな？でも出来れば俺の事も正美と呼んでほしいんだが」

それは無理ですときっぱり断られた。

融通利かないなと心の中で突っ込みをいれた。

その後、俺はエルフィが持ってきてくれた、ぬるま湯で傷口を綺麗に洗ったあとつけていた、薬草を傷口に付けてから包帯を自分で巻いた。

「ずいぶんと手馴れているんですね？」

「それほどでもないです」

「でも何故一度、治療した傷口を洗ったりしたのですか？」

「あーそれね。水で傷口を洗い流すと、傷口の腐った組織とか、表面についた細菌を取り除く事が出来るんだ。」

何日も洗わないでおくと、腐った組織が細菌の栄養になったりして化膿しやすくなるからなるべく洗って清潔にしてから手当てした方が直りが早くなるんだよ」

最近？栄養？組織？私は、それを聞きながら、何か植えるのかなって思っていた。

羞恥心

正美を客室のベットへ下ろしたあと、俺は突然訪問したレイユーズ公爵の待つ応接間へ向った。

扉を開けると相変わらぬの典型的な成金姿が眼に映る。

体中、金・金・金。毒々しいまでに金を散らばめた服装に両手に一本一本に指輪を一つづつ嵌めた姿は、頂けないと思う。

俺の姿を見て、レイユーズ公爵は笑顔を向けてきたと思うが、カエルのようにしか見えない。

「ずいぶんと久しぶりですな、アレイクード公爵殿」

「こちらこそ、おひさしぶりです。レイユーズ公爵殿」

俺は、はっきり言ってこいつが嫌いだ。

レイユーズのいる公爵家は元々、豊かな広大な土地を持ち作物で領地運営をしている土地柄であった。

それをこの男が経営する商会在、その時の公爵家家長を誑かして無理な土地開発を行った結果、最初は良かったが数年で付けが回って来た。

土地がやせ細り作物が取れなくなった時期が数年続き食料を確保する為に公爵家が奔走する間、レイユーズが経営してる商会はあろう事か公爵家の娘を差し出せば無償で食料を供給すると言ってきたのだ。

最初の数年で荒稼ぎし、自分達で食料が確保出来ないようにして、最後にはその食料を楯に公爵家を事実上乗っ取った。

その事から、貴族達の間からもレイユーズの評価は限り無く低い。公爵と言う地位を金で買った男と呼ぶ者も多くいる。

王室関係者のかなり上の方までこの男は献金していて、公爵家の乗

っ取り関して王室が動く事はなかった。
噂では宰相までこいつの息がかかっているともっぱらの噂だ。

「今日はどうかしたのですか？」

俺は、嫌悪感を押し殺して笑顔で話を切り出した。

「実はですね、アレイクード公爵殿もそろそろお歳かと思ひまして
ぜひ我が娘をと思ひまして」

レイユーズがそう言うのと、レイユーズの隣に座っていた女性が立ち
上がりスカートの裾を軽く持って優雅に挨拶をしてきた。

容姿は金髪にスレンダーと言った感じだろうか？目元はレイユーズ
に似ていてかなりきつい印象を受ける。

この女性が、レイユーズと元、公爵令嬢ルフィンの間に生まれた子
供なのだろう。身長は170cmくらいか。

「よろしくお願ひしますわ、私はフィンナです。アレイクード様を
ずっと前からお慕ひしてました。」

ずっと前からって、今、初めて会ったんだがと心の中で突込みつつ
冷静に挨拶を返した。

「こちらこそ、よろしくお願ひします。」

社交辞令だけ返してから俺はレイユーズの方へ顔を向けた。レイユ
ーズはニコニコと笑っているが俺としては特に親しい間柄でもない
者に婚姻話をもってくるのは些か問題があると思えなかった。

「レイユーズ公爵殿、本日はM.S. フィンナ嬢のご紹介だったので

すか？」

俺が聞くと、そうですよと肯定してきた。

まったく、この男は貴族社会どころか一般人にまでどう思われてるか分かっていないならしい。

そのあと、レイユーズは自分の娘を俺に嫁がせようと実りの無い話ばかりを切り出してくれるため、かなり疲れた。

レイユーズ公爵と娘のフィンナが、馬車に乗り姿が消えていくのを見たあと、どっと疲れが出た。

まったく、親も親なら子も子だな。

俺は、執務室に入り、一冊の古い本を取り出した。

その本は幼児向けに書かれた昔話の本だ。

創生時代、太陽神と月の女神は大陸を作り多くの動植物を生み育て文明は栄華を謳歌していた。そこへ異界からの白い悪魔が現れ世界を絶望の暗闇へと落とした。太陽神と月の女神はお互いの力を合わせ異界より一人の女性を召還した。

その女性は黒い髪に黒い瞳をしており異国の美しい衣を纏い、不思議な術を使い最後は白い悪魔を封じたと言う。

その女性の最後は、救った人と結ばれたと、この本には書いてある。

俺は今読んだ、幼児むけの昔話の本を執務室の机に置き、溜息をついた。

もし伝承どおり本当ならば、近いうち同じ事が起きるかもしれない。実際、大陸全体で不作が続く、疫病や本来存在するはずの無い魔物までいる始末だ。

俺は頭を左右に振り、今日の領地内に関する書類の整理を始めた。

そしてその頃、正美がいる部屋では一つの事件が起きていた。

「えっとエルフィ？これは一体。」

「これは、正美様の着替えになります。」

俺の目の前には、白いシルクで編まれたネグリジェとドロワースが置いてあった。

「……………えーっとエルフィさん？普通の男物の寝巻きでお願いします」

俺が頼むとキツパリと無理ですと言われた。

くっ、融通が効かないなと…………俺が考えていると、エルフィが何人かのメイドを連れてきて俺を両脇から抱えて一つの部屋へ連れていった。

そこは…………浴室だった。

「まってください、一人で入れますから！！！！！！」

俺の意見はスルーされ浴室に裸の女性が何人も入ってくる。
体は女性だが心は男なんだ！刺激がつよすぎる

「ちよっ、まっ、一人であらえ」

体を押さえつけられて背中、足、手、髪と同時に洗われる。

そして胸と大事な部分に差し掛かったところで意識が飛んだ。
意識がフリーズしたままベットの上でネグリジェを着たまま俺はボ
ーっとしていた。

三途の川

俺は、川のほとりに気がつくと思っていた。誰か俺の名前を呼ぶ声が聞こえる。

「正美やゝい。こっちはいいぞ」

5年前に無くなったおじいちゃんが川の向こうから手を振っているのが見える。

俺は、なんか大事なモノを損失した気持ちが一杯だった事もあり、川へ入ろうとするが突然、地震に襲われ地割れに飲み込まれた。

「ハッ！」

意識が覚醒すると、肩を両手でむんずと掴んだエルフィが大丈夫ですかー？と言いながら俺の体を揺さぶっている。

体が揺さぶられるとそれに釣られて頭がぐんぐんと揺れ動く。

うつ．．．．．気持ち悪い．．．．．

俺が気持ち悪そうな顔をしてエルフィの瞳を見ると安心したような顔をして肩から手を離してくれた。

「一時はどうなるかと思いました。正美様の魂が体から抜けかけて昇天しかかっていたので心配しました」

ちよ、昇天って．．．．．

そういえば、なんか不思議な夢を見たような見なかったような気がする。

「そうだったんですか」

俺はエルフィの言葉に相槌だけ打ち立ち上がろうとすると、膝と腿と胸にやわらかい違和感を感じた。

「え？」

「どうかしましたか？」

俺は違和感から、体を見下ろすとそこには体の線に沿うように薄いシルクで編まれたネグリジェを着ていた。ネグリジェは胸元で大きく開いており腰の部分で紐を結ぶ形になっている。腰の部分からスカートのように踵まで伸びていた。しかも半分透けているものだから俺は自分が女の体になった事を再認識すると同時に俺の体をじっと見ていたエルフィから逃げるようにベットの掛け布団を剥がして体に巻いた。

「え．え．え．え．え」

自分自身で初めて真直で見た女の体と卑猥な寝巻きを着ていた事、それを異性に凝視されていた事から、うまく舌が回らなかった。俺の様子を見ながらもエルフィは怪訝な表情で俺の顔を見てくる。

「エ．．．エルフィ。お、俺のパジャマはどこにやったんだ？」

「パジャマ？」

「寝巻きのことだよ！」

「今、着てるじゃないですか？」

エルフィが何をこいつ言ってるんだ？と言う瞳で俺を見つめてきた。

「いや、そうじゃなくて俺がさっきまで着てた服だよ！」

「それなら、今洗っていますか？」

「そう．．．．．」

そこで俺は携帯電話をパジャマの中に入れていた事を思い出した。

「じゃねえー。エルフィすぐに俺のパジャマを回収してきてほしい」

「回収ですか？」

「洗わなくてもいいのですか？」

俺は、服をまず持ってきてくれるように頼むとエルフィが部屋を出て行った。携帯電話を水洗いとか勘弁してください．．．．．エルフィがいない間に、着せられた服装のチェックをすることにした。

良く発育している2つの胸はブラをされておらず直にネグリジェを着せられている。キャミソールみたいな物にロングスカートを合わせた形と言えば、分かりやすいだろうか？白いシルク生地で仕立てられていて、胸元が大きく開いていて胸の頂が自分から見えてしまうという問題のある作りになっている。

しかも半分透けてる事もあり、服の上からも素肌が見えてしまうという．．．．．下半身はドロワースを穿いていた。

ドロワースもシルクで出来ていて肌触り的には女の体になった敏感肌にはとても気持ちのいいものだ。

とりあえず、俺は着ている服をどうしたらいいのか考えた。

1. 元の服に着替える。
2. 男性用の寝巻きを持ってきてもらう。
3. このままこのネグリジエを着る。

とりあえず、3はないな、こんな服装は男の俺にはきびしすぎる。

1は、かなり走って汚れてるし、汗も染み込んだる事から却下だな。そうすると2の男性用の寝巻きを借りるしかない。

そこまで、考察すると扉が数度ノックされてからエルフィが部屋に入ってきた。その手には俺が着ていた青いパジャマを持っていた。

「正美様、お持ちしました。」

俺は、お礼を言いパジャマを受け取るとすでに湿っていた。

俺の携帯電話、終わったか？と思いつつパジャマのズボンのポケットから塗れた携帯電話を取り出してボタンを操作すると問題なく動いた。

携帯電話をベッドの枕の方へ置いてパジャマをエルフィに渡して再度洗ってくれるように頼んだ。

エルフィが出ていってしばらくしてから戻ってくると、俺は男性用の寝巻きを用意してもらえるようお願いした。

「男性用の寝巻きを？」

エルフィは、困惑した顔をしながらストックはありませんと言ってきました。

「え？それは困ります。こんな服で寝るのはちょっと・・・」

「

俺のその言葉にエルフィは、さっと紐のついた小さいコインのような物をスカートから取り出して左右に揺らしてきた。

「あなたは寝むくなる。眠くなる」

「な！ん・・だ・・と・・」

どうしてそんな古典的な方法を、と続けようとした俺の意識が睡魔に負けて闇に沈んだ。そして、ポフツと言う音と同時にベッドの上に正美の体は倒れこんだ。

エルフィは寝ついた正美をベッドに寝かせてから布団をかけてた。

私は、正美様のようなかわいい女の子が男のような言葉とガサツな態度を取っていた事から苦労していた事をすぐに理解した。

だから、私が正美様のメイドでいる限り、本来の女の子らしい幸せを享受^{きやうじゆ}出来るように頑張ろうと心に誓^{ちか}った。

正美様に着せた、高級シルク製の寝巻きも侯爵以上の令嬢用にストックしていたものだった。

それでも、正美様の身長があまりにも小さかった為、膝までの丈が床につきそうになってしまった。

着せた女性用の寝巻きを拒否して男性用の寝巻きをご所望^{しよぼう}された時は思わず、泣きそうになってしまった。

治癒術師顔負けの怪我への教養がある以上、きっと位の高い地位の家柄に生まれて男として育てられたのだろう。

だから、私は少し強引に骨董屋で購入した催眠術の手引きと言う本に乗っていた術を使って正美様を寝かせたのだった。

「正美様、明日からは無理に男の真似事をしなくてもいいように、

女の子らしいドレスを用意しておきますね!」

主の為に最善を尽くす事はメイドとして当然の事。私は明日に向けて、寝ている正美様の3サイズを測った。B90、W58、H88ですか、すごいですね。思わずゴクリと唾を飲み込んでしまった。

同じ女としてウェストが私の方が太い……はうほうほう。落ち込んでも仕方ないのですが落ち込んでしまいました。

私は、測ったサイズにあったドレスを用意するべく後輩メイド達へ指示を出す事にしました。

罰ゲーム

日が沈んだ屋敷内の通路で扉を数度ノックする音が響き渡る。扉の主たるアレイはノックをした訪問者へ入るように伝える。

しばらくして、ストレートにすれば腰まで届く青い髪をツインテールにしたおっとり系のお姉さんと言った女性が部屋にはってきた。

女性の名前はエルフィーナと言ってこの公爵邸では

メイド長の次の位にあるメイド副長という肩書きをもっている。

見た目は18歳程度に見える。

エルフィーナが俺に向って礼を取ると、正美に関しての報告を上げてきた。

正美には治癒魔法が効かない事、治療術師顔負けの医術に対する見解を持っている事から

それなりの身分の者の可能性が高いことを告げてきた。

「アレイ様、少し気になったのですが、よろしいでしょうか？」

俺が了承をするとエルフィーナが、正美はもしかしたら男として育てられて

今に至っているのではないかと意見を上げてきた。

俺としても、正美の『俺』という言葉や、男のような粗暴な空気を気にしていなかった訳ではない。

男の俺としてはどうしたらいいか分からない事もあり特に指摘する事はしなかったが……

エルフィーナの方を見ると妙案を思いついたような顔をしていた。

まあ女同士の方が分かりやすいだろうと俺は判断した。

「わかった。お前の考えてる通りに行動して構わない。」

「はい！ありがとうございます。それで侯爵令嬢様以上の方用に確保してある洋服や装飾品、靴などの寸法変更を含めた使用を許可頂きたいのですがよろしいでしょうか」

エルフィーナの言った言葉を聞きながら、正美をきちんとした服装で着飾れば

どれだけ美しくなるかを心の中で想像した。

夜空のような漆黒の黒髪に幼い容姿を凜とした瞳が打ち消し一厘の完成された花のような芸術を思わせる輪郭。そして抱いた際の女性特有の香りと体型。

そこまで俺は考えた所で即、了承した。

決して、正美の恥らった姿を見たいわけではないと言いつきはさせてもらおう。

そう、女性として生まれたからには女性らしい服装を与えてあげたいというのは人としてのやさしさの表れだろう。

「わかった、どうせ女はメイド以外には誰もいないんだ。好きなようにしてくれて構わない。

それと、朝食前にはきちんとした服を着せて食堂にエスコートしてくれ」

俺のその言葉にエルフィーナが頭を下げてから執務室の扉から出て行った。

エルフィーナの後ろ姿を見送った後、俺は、王宮からの早馬でつい先ほど届いた書類に目を通した。

そこには、隣国のエスタールの領土の1割が空の海に崩れ落ちたという内容と

今度、王宮で各国の王族達とこれからの事を取り決める会談が行わ

れる事が記載されていた。

目を覚ますと、周りは見渡す限り何もない白い空間だった。

「ここはどこだ？」

疑問に思いながらも、自分の体が男に戻っていた。

来ている服は青いパジャマだ。

しばらく回りを観察していたが、何も変わらなかったこともあり、歩く事にした。

どこまで進んでも、まったく何もない白い空間が広がっていて進んでる気がしない。

《き、聞こえるか？》

突然、俺の頭の中で女性の声が響いた。

「誰だ？」

俺は若干パニックになりながらも声を主を探そうと周囲を見渡した。

《私はお主の中におる。時間がないので手短に話す》

「俺の中に？　どういうことだ？」

《時間がないと言ったじゃろう？　まず、お主をこの世界へ招待したのは私じゃ》

「な！」

《この世界はとても不安定な状態になっているようじゃ、
そこで、お主の意思の強さを反映させる使役獣を一匹つけておく。
何かあったらそれを使うのじゃ》

「使役獣？まさか、ドラゴンとか召還できたりするのか？」

俺はワクワクしていた。まさか、俺がそんな大それたモノが使える
ようになるとは……

まあ、俺が聞いた話の内容はスルーされて女の話が続いたのはデフ
オルトというか何と言うか

《お主の世界では携帯電話と言う物の中に入れておいた。
それを使って危険な時は自分の身を守るのじゃ。呼び出す時は、そ
うじゃの……

「私の正義が悪を撃ち滅ぼす。こい、神の使者！」と言えよ、》

「ちょっとまってええ、何？そのどこぞのヒーロー戦隊モノの必殺技
ぽいネーミングセンスの欠片もない掛け声は。そういうのやめて！
危険人物に思われるから」

《それではがんばるのじゃぞ》

俺の必死の言葉はスルーされてた。

そして女の声が遠ざかると同時に意識が空間の存在が薄くなり始め
た。

人物・世界観編集

人物編集

《桂木正美》
かつらぎ まさみ

大学を出たが、彼女に振られしかも就職も決まらない典型的なダメな人。

すでに両親と祖父・祖母は他界、天涯孤独。

異世界へ飛ばされたと同時に体が女性化。

他の追従を許さないほどの美貌を手に入れる？

身長は150cmほど。

《桂木正美の使役獣》
かつらぎ まさみ

謎？

《謎の声》

正美の中に寄生している？人の話をとにかく聞かない。

《アレイ》

正式名 アレイクード公爵 公爵領領主

《エルフィーナ》

アレイクード公爵邸のメイド副長

《レイユーズ公爵》

貴族達から嫌われている。権力、お金大好き

《フィンナ》

レイユーズ公爵の娘

《ルフィン》

フィンナの母親であり、レイユーズの奥方。

世界観

《アレイクード公爵邸》

正美いわくバイオハザード1の洋館らしい？

《幻想大陸ルシアード》

桂木正美^{かつらぎ まさみ}が謎の声により飛ばされた世界。

催眠術はらめええ

静まりかえったアレイクード公爵邸の通路を靴音を鳴らし、10人近いメイドが歩いていった。

私は、正美様が起きないように少しだけそつと扉を開けた。

そして、正美様が寝ているのを確認した後、人が一人入れるように扉を空けてから通路に待機しているメイド達へ中へ入るように合図をした。

メイド達も私が鍛えた優秀な部下なだけあって、靴音を立てずに全員が正美様を起さずに部屋に入る事に成功した。

そして、手筈どおりに、合図をした5人のメイドが隣の部屋に続くドアを音を立てないように開けて中に滑り込んでいった。

私は、正美様のベッドの近くまで寄ってから、骨董屋で手に入れた本。無意識下へ語りかける催眠術と言うのを実行してみた。

「私は、女の子らしくしたくなる。俺という言葉から私と言う言葉を使いたくなくなる」

と耳元で囁くと、私の言葉を無意識的に聞いているのか

「私は、女の子らしくしたくなる？私と言う言葉使いむにゃむにゃ」

と呟いてる。私はどうやら催眠術が有効と思い、催眠術の手引き初級編を読んだ。

「これから、あなたは何をされても目が覚めなくなります。わかりましたね？はい、言ってください、私は起きませんと」

しばらく、様子を見てみると、正美様の唇が開いて、私は起きない

です。と言った後、まぶた瞼を開いても何も映さない瞳で私を見つめてきた。

それは人形のようにでいて、とても綺麗だった。思わずたべちゃ・・・
けふん

私は、残った4人のメイドに正美様を、朝風呂へお連れするように指示をした。

今日のお風呂は薔薇風呂でそのあと、髪の毛に塗る薔薇のエキスカら抽出した香油もふんだんに用意してある。

正美様がお風呂から出て来る間に、サイズなどを夜なべして調整したフリルをふんだんに使用した

白いドレス。

ドレスに合わせた白いハイヒールと、

スリーインワンとストッキングとシルクの手袋をベットのの上に広げた。

装飾品は、黒い髪に栄えるように銀の蝶の髪飾りで長い髪をアップにしようと考えていた。

しばらくしてから、正美様が薔薇の香油を塗られたのか良い匂いをしてお風呂から運ばれてきた。

私は、正美様に用意したドレスと装飾品と下着を着せていって軽く化粧をした。

うん、きつと今までで一番の会心の出来だわ。自分で自分を久しぶりに褒めてしまっていた。

私は、催眠術を解く為に、あなたは今から0と言われたら覚醒します。と言って少し離れた。

「3. 2. 1. 0」

私は、長い夢を見ていたような気分のまま、ゆっくりとまぶた瞼を開けた。

前を見ると、エルフィが興味津々と感じて私を見ていた。

え？私ってなんで？私って言ってるの？

私は私といってる事に混乱してしまった。

エルフィが私の事を見て、ニヤニヤしている。

この顔は見た事がある、彼女が私に何かする時の顔にそっくりだった。

「エルフィ！ 私に何かしたでしょう？」

「何もしてませんよ？」

「いいえ、間違いなくしてるわって！ あーっもう、なんでこんな言葉使いになってるの」

「きちんと効いてるみたいですね」

「今、さりげなく爆弾発言したわよね？」

「何かありましたか？」

私の言葉をスルーして、エルフィが朝食の準備がそろそろ出来ますのでこちらへ来ててくださいと私の手を取った。

エルフィに手を取られて初めて気がついたけど、シルクの手袋を私はつけていた。

嫌な予感しかせずに洋服を見てみると、私が着てる服装はまるでウエディングドレスみたい。

髪もきちんとアップされてて、暑苦しくなくていいんだけど、ドレスを着るのは男としては羞恥心がありえない事になっていてすごい困った。

私はエルフィに何度も戻すように抗議したけど、全部スルーされて館の中をエスコートされて通路を歩いていった。

通路を5分ほど歩くと重厚な両開きの扉が開いたのでその中に入っていくと、アレイがすでに席に座って部屋に入って来た私を見て顔を真っ赤にしていた。

私としては、これって何の罰ゲー？っという感じもあって終始顔を真っ赤にしながら朝食を食べていたから、朝食を味わう暇がなかった。

俺は、入ってきた正美を見た途端、思わず白い薔薇を連想してしまった。

清楚可憐でいて白いドレスに黒い髪がとても栄えており、銀色の髪飾りがさらにそれを強調している。

今の正美と比べたら昨日、私の元へ自己紹介にきたフィンナなんて霞んでしまう。

いや、どの女性と比べてもこれ以上の女性はいないだろう。

それに、着慣れていないのか、顔を真っ赤にしたまま、恥らってる姿も新鮮で良かった。

いつもの食事は味気ない物だったのだが、この時だけは至福の時を過ごす事ができた。

これは、エルフィーナの基本給のアップも考えてやらないといけないなと心の中で思ったほどの仕事ぶりだった。

俺は、今日一日する事も無い。だからこそ、正美を連れて遠乗りに出かける事にした。

アレイが変な目線で、私を見てきた事に何故か感覚で気がついた。これが、男が女を見るときの目線という物なのかな？

私が溜息をついていると、アレイが少し付き合ってほしいと言って

きたので、どこに行くか聞くと城下町へ遠乗りに出かけるようだった。

アレイにお世話になってる事もあるし、少しは付き合っ**て**あげるか
と思い、了承すると朝食を食べたあと、私をお姫様抱っこするとそ
のまま、屋敷の入り口へアレイが向かって行った。

屋敷から出ると、すでに手配してあったのか昨日の馬がすでに準備
されていて、昨日と同じように私が先に乗せられてから抱き抱えら
れるようにアレイが馬を巧たくみに走らせた。

エルフィーナの決意

えー。拝啓、天国のお父様、お母様。

今、俺はベットの上で体中を襲ってくる激痛と戦っています。

今の現状をご理解頂けない方がたくさんいらっしゃると思いますので時間を少し^{さかのぼ}遡ってみたいと思います

――20分前――

「ねえ、アレイ。城下町ってどんな所なの？」

私がアレイに城下町の事を聞くと、馬を巧^{たくみ}に操りながら、^{エルメルド}司法神を奉^{まつ}つてる大神殿がある所で、中央に政治機関を置き、そこを中心に煉瓦作りの道が放射線状に広がった綺麗な町並みという話を話してくれた。

「へー。それは楽しみだね」

私は、この世界に来てから館と草原しか見たことが無かったのでとても楽しみにしてた。

馬が館の門を潜りぬけるとところで体中が軋む様に激痛が走った。

良く考えて見れば、昨日あれだけ怪我しておいて、今までまったく痛みを感じなかったのがおかしいと言えばおかしいんだけど・・・

私の様子に、アレイは気がついて、すぐに館に戻り、私が滞在している部屋のベットにやさしく横たえてくれた。

「正美、すぐに治療術師を呼んでくるから待っていてくれ」

アレイはそう言うと、飛び出すように部屋から出ていき、廊下から聞える靴の足音が遠ざかっていった。

しばらくすると、エルフィーナが部屋に入ってきた。

「大丈夫ですか？正美様」

「大丈夫じゃないから！というかエルフィ、一体、俺に何をしたんだ？」

「あら、もう術が解けてしまったのですか」

「まて、術って何をしたんだ？」

「大丈夫ですわ、正美様。細かい事を気にしていたら良い男性は掴まりませんよ？」

「俺にそっちの趣味はないから！」

男となんて冗談じゃない。とりあえずこの体の異常をなんとかしたいと……

痛すぎて、段々と意識が朦朧としてきた。

「正美様、これを見てください！」

俺はエルフィーナがあまりにも真剣に話しかけてきたので、エルフィーナの右手にぶら下がって揺れてる硬貨をモロに見てしまった。そのまま正美の体は布団の上に撃沈した。

私は、寝付かせた正美様のドレスが皺になる前にネグリジェに着替えさせた。

着替えが終わった頃に、アレイ様が治療術師のクレイネル殿を連れて部屋に入って来た。

「エルフィーナ、正美の様子はどうか？」

「大丈夫です。疲れて寝ています。」

「そうか、意識を失うほどの激痛だったのだな」

エルフィーナとアレイが話してる間に、クレイネルが正美の怪我を治療していく。

「ふーむ。これは完治するまで最低2週間はかかりますな」

「そんなにか？」

アレイ様が正美様の頭を撫でながら心配そうにクレイネルに聞き返していた。

「何分、魔法が効きませんから」

アレイ様が、正美様をすごく心配しているのが傍^{はた}から見ても分かる。きっと、アレイ様は正美様に恋をしているのですわ。

私は、正美様が痛みを感じなかった理由は、女の子として振舞うように催眠術を掛けた事の副作用で痛覚が麻痺してるからと悟った。それと同時に、屋敷のメイド達には催眠術は効かなかったけど、正

美様にはかかるので、一つの作戦を思いついた。

思わず、ニヤついた顔がアレイ様にバレないかヒヤヒヤしたくらい。男みたいな口調と考え方と態度を催眠術を使い、正美様を立派な淑女に育てあげようと考えた。

きつと正美様は長い間、男として育てられた事から中々女としての幸せを考える事ができないの。

だから私が立派な淑女にしてあげようと、拳を固く握り締めた。

よし、善は急げって言うし、明日から、正美様の精神を淑女のようにする計画を立てないと．．．．．

男の人って・・・

この館の主である、アレイは正美の部屋へ向かって廊下を歩いていた。

俺は、エルフィーナとクレイネルから正美の容態を聞いた後、一度は執務室へ戻ってから仕事をしていたのだが、

正美の容態が気になってしまい仕事が進まなかった。

今までは、どんな事があるうとこのような事は無かった。

父上が死んだ時も、領地内の仕事だけは常に行うようにと言われた事もあり、

冷静に仕事が出来ていた。

それが、正美の痛みにより歪んだ顔が脳裏のうりを掠かすめただけで気が狂いそうになるように

胸が締め付けられる。

クレイネルは、古い文献ぶんけんを探し、魔法が聞かない体質と言うのを欠損した書物から

調べてくれていた。

それでも、古代の文字で書かれてる事もあり、曖昧であったが・・・

それほど、魔法が効かない体質を持つ者はこの世界では異質な存在という事だった。

クレイネルの話によると、この世界を作り出した神々と魔法が効かない体質というのは、

密接な関係があるという事であった。

結局は、魔法が効かない体質の根本的な要因は未だ不明であったが、それは引き続きクレイネルが調べてくれる事になっていた。

「2週間か・・・」

俺は、思わず口に出して呟いていた。

2週間というのは、正美の両手の肘、両足の裏、膝の怪我の回復にかかる時間らしい。それまではあの痛みにずっと苛まれる事を思うと、何もしてやれない事に無力感を感じてしまう。

それと同様に、正美の姿はこの世界の者では無いほど美しく、それでいて儂く思えてしまい、自由にしてしまったら消えてしまう気がして、いつまでも治らなければ良いと心の片隅では思っていた。

俺は、正美が寝ている部屋の扉をそっと開けると音を立てないように部屋に忍び込んだ。

暗闇の中で目を凝らすと、赤薔薇で色付けされた天蓋つきのベットが視界に入って来た。

ベットの方へ歩を進めると、月明かりが丁度、正美を照らし映し出してきた。

この世界では、滅多に見ない顔つき。普段は強い目元が強調されている事もあり幼さが隠れているが今は、瞼を閉じている事もあり幼いながらも、月明かりに照らされた正美の姿は、薄く透けた白いネグリジェが聖女の衣に見え、月明かりが照らしだしてる艶やかな黒い髪が夜空もように輝き、まるで物語に出てくる聖女のようにであった。

そこまで考えた所で俺は、なんという事を考えてるんだと頭を振った。

そして、普段の俺なら絶対にしない事を、俺はしてしまった。

鳥の囀りが、館の住人に朝を知らせる。

エルフィーナとメイド達は、朝の支度をする為に正美の部屋の扉をそっと開けた。

部屋の中に入った、私の視界に入ってきたのは、主様と正美様がベットの上で抱き合ってる姿でした。

「・・・・・・・・」

私は一瞬放心してしまいました。

男性が未婚の女性の部屋で一夜を共にするというのは良くはないですが・・・・・・・・

とりあえず、現状確認としては、一緒にベッドで寝て、お互いに洋服を着ています。

そして正美様を腕の中に抱き抱えるようにして主様が寝ています。

正美様も主様に抱きついて寝ていますが、今日の朝はとても冷えていたので無意識に暖を取るために行ったと思います。

私は冷静に、そう本当に冷静に寝ている主様の服の後ろ襟えりを魔法で強化した両手で握り締めて、正美様から引き離しました。

ぐえっ、という言葉が聞えてきました。が、きっと気のせいでしょう。主さまが目を覚ましたようで、私を恐怖の眼差しで見えますが何故でしょうか？

「ど、どうしたんだ？エルフィーナ。お前怒ってないか？」

何を、主野郎様は言ってるのでしょうか？

私が主野郎様に殺意が芽生えるわけがないじゃないですか。

「別に怒っていませんよ。怒られるような事でもしたんですか？」

「何もないぞ？添い寝くらいしかして・・・・・・・・な・・・・・・・・・・い・・」

・・・・・・？」

話の途中で、エルフィーナの眼が赤く光った気がする。
やばい、エルフィーナが怖い。

くっ、なんて威圧感。戦場でもこれほどの威圧感を感じた事はなかった。

一步一步エルフィーナが俺の方へ近づいてくる。

まさしく、死神の行進のように・・・

というか俺、エルフィーナの主なんだが・・・

余計な事を言ったら大変な事になる気がする。

「エルフィーナ、少し落ち着いて、話合おう。きっと悲しい誤解があったにちが」

アレイのその言葉の途中で、エルフィーナは輝きを失った瞳のまま、ニコツリを笑いそして・・・

館にア————ツと言う声が響き渡った。

一部始終を見ていた、メイド達にその時の証言を聞こうとするとガタガタ震えながら何もありませんでした。何もありませんでした。と壊れた表情をして同じ言葉を繰り返していたとか繰り返してないとか・・・

女の人って・・・

「エルフィ、変な所さわるなよ！」

「あら、女の子同士ですから私は気にしませんよ？」

「俺が気にするんだよ！」

ベットの上では、エルフィが正美の体中を弄まさぐっていた。

私だって、正美様ともっと一緒にいたいのに、主様ったら最低だわ。正美様っていい匂いがして胸も腰も触るだけで、ぴくんって感じてすごく感じやすいわ。

同性なのにドキドキしてきちゃう。

そろそろ、メインデッシュでも頂こうかしら？

俺は一瞬、貞操に危険を感じて、エルフィの鼻に肘打ちを打ちこんだ。

同時に肘の皮がまだむけたままで完治していなかったので激痛が走った。

「痛いすわ！正美様、酷いですわ！女の顔を殴るなんて淑女らしくないすわ！」

「俺は、淑女でもないしその気もない！」

俺のその言葉に、エルフィは世界の終わりみたいな顔をしてきた。

「そんな、正美様。私よりあの野郎が好きなんですか？」

あの野郎って、野郎って事は男だよな？俺の頭の中で心辺りのある人物像をピックアップしていくと、俺とエルフィの接点がある男はアレイくらいしか想像がつかない。
流石に男相手に恋愛感情を持つ事などありえない。

「エルフィ、良く聞いてほしい。」

俺の言葉にエルフィが身をずいと押し出して近づいてくる。

「俺は、男には興味はない。」

続いた言葉に、エルフィの顔がパーツと明るくなる。

そして何かぶつぶつと呟き始めた。

えーっと、エルフィさん、瞳になんか光がありませんよ。 . . .

はあ、俺はエルフィのその様子に頭を抱えた。

どうしてこんなになっちゃたんだろう。 . . .

前はエルフィは、とっても清楚で可憐な女性で感じだったのに。 . . .

———30分前———

ゆっくりと揺り籠の中に居るような、まどろみの中で意識が薄らと覚醒するのを感じた。

まだ寝ぼけてる事もあり、俺の視界に白いモノが映っていた。

あまりにも近かった事からそれが何か分からず興味本位に、なんだろう、これと？思わず握ってしまったモノはふかっと言う音が聞えてくるくらいやわらかいモノだった。

「あんっ、正美様ったら積極的なんだから……」

俺はその言葉を聞いた途端、頭の中のまどろみが一気に晴れていくのを感じた。

そしてすぐに身の危険を感じ、話を逸らす為の行動に移った。

「エ、エルフィ。おはよう」

「おはようございます。正美様」

今の、状況を簡単に説明すれば俺の体は、座ってるエルフィにお姫様抱っこされてる形になっていて顔はエルフィの右胸に押し付けられる形になっていた。

「なあ？エルフィ。朝からそんなに近くにいると息苦しいから離れてくれないか？」

昔の俺からしてみたら信じられないほど、冷静に女性に対して離れるように拒否をする事が出来た。

きっと昔の俺なら、好意を寄せてくれた女の子にこんな風に接する事はできなかったはず。

「でも、正美様。いいのですか？」

エルフィがそんな事を言い確認しながら、俺から離れていく。

「何を言ってるんだ？ 良いも悪いも．．．．．」

俺はエルフィが離れて行った後の自分の姿を見て脳がフリーズした。今の俺の姿は、薄い白いベビードールを着ていて、体の全てが丸見えに透けていてこれって何プレイ？ っていう服装になっていた。

「あわわあわわわわわ」

私の目の前で、正美様は顔を羞恥心しゆうちしんで真っ赤に染め上げていて、意味不明な言葉を発しながら瞳には無意識に涙を浮かべている。

はわあー。とってもかわいい、普段の男らしい正美様から、一枚一枚、剥むけて淑女の階段を上っていくのを感じるわ。

羞恥心を煽あおる為に、夜なべして寝巻きを作った甲斐があったわ。でもあんな風に、扇情的せんじやうてきに煽あおられると我慢できなくなっちゃう。

私は正美様がまだ怪我が治っていない事が分かっていたので、ぬるま湯とタオルで正美様の体を隅々（すみずみ）まで探求し．．．ううん、拭いてさしあげようと、

タオルをお湯でしばって正美様の方を向いた。

正美様は、私の顔を見て、涙を流しながらイヤイヤと頭を左右さゆうに振りながら逃げ場のないベットの上で懸命に私から距離を取って逃げようとするの。

なんで、逃げようとするのかしら？

これから、とくっても気持ちよくなるのに．．．．．

俺は、体中痛みながらも近づいてくるエルフィから逃げるようにベットの upper を移動していく。

「大丈夫ですわ、何もみませんから体を隅々まで探索、ううん拭く

だけですから、とっても気持ちよくなれますわよ？」

エルフィの瞳が壊れた人形のようになっていて、頬が真っ赤に染まってる。

しかも唇を舌で舐めてるし……

俺の、生存本当が危険アラートを滑車気のように振り回してる。もう、エルフィの胸が俺の膝まで来ている。

やばい、やばい、やばい、やばい、やばい

そこでエルフィが、飛び掛るように俺に抱きついてきた。

使役獣―初めての召還編（1）

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

先ほどの、エルフィの過剰なまでのスキンシップを跳ね除けた俺は、今、ベットの上で、エルフィと無言で対峙しながら、もくもくと朝食を食べていた。

エルフィが俺の胸元を見て、じーつと頬ほほを赤らめて、何か物欲しそうな目線を向けて来ているのは、明らかに同性を見る目では無い気がする。

いわゆる好きな異性に向ける目線というか、そんな感じ。

さすがの俺も今は女の体であり、女性に抱きつかれるくらいなら元男だったし悪い気はしないけど、明らかにエルフィの行動は、容認できないと言うか、間違いなく危険物指定のような気がする。

「エルフィさん、そんなに見つめられると困るんですが？」

俺は、先ほどのやり取りと、これからもお世話になる為、なるべく穏便に済ませたいと考えていた為、丁寧語で話しかけていた。

俺のその言葉にエルフィは、まぶた瞼を大きく開いて部屋から走って出て行った。

俺は、思わず何かまずい事でも言ったか？と疑問に思いながらも、ひさしぶりに一人になれたので安心して朝食を食べ始めた。

その頃、この公爵邸の主アレイは執務室にて、怪我を治療してもらっていた。

「申し訳ありません、アレイ様。エルフィーナがとんだご無礼を・・・・・・・・まことに申し訳ありません」

「クレイネル、気にすることはない。女性の寝室に忍びこんだのだ、このくらいの怪我で済んだのは幸いだろう？」

「ですが、アレイ様、主様に危害を加える事は重罪でございます。王族特有の再生呪エールが無ければ半年近い療養が必要になる所でした。後で、エルフィーナには厳しく躑しつけておきます」

クレイネルは昔は王宮勤めの治療術師であったが自分にも相手にも厳しい所があり、一度決めた事は中々変えない頑固な所があった。王宮では、権力になびく事の無いクレイネルは厄介者扱いされ、王宮と勤めを辞退させられてしまった。

そこを、前当主であり我が父であったフルハード公爵がクレイネルの人柄に惚れこんで我が公爵家お抱えの治療術師に誘った。

その後は、クレイネルは時間を置き、専属の治療術師として当家に仕える事になり、その娘も潜在魔力は高いのにも関わらず、礼儀作法の勉強という事でメイドとして年頃になってから我が家に仕える事になった。

「分かった、わかった。お前の娘だ、その辺は任せた」

俺が、そう答えると、クレイネルは納得したようで、傷跡に回復魔法を掛け始めた。

クレイネルが魔法をかけてる間に、俺は今日の朝、王宮より届いた書類に目を通し始めた。

ここ10年ほど、大陸全体の外縁部分がいえんが少しづつ、削れ始め、それがここ数日で目に見えるように崩落を始めたと報告書に記載されていた。

そもそも。

この世界、幻想大陸ルシアードは、大気海と呼ばれる、空の上に浮かんでいる。

大陸の下には永遠えいえんと雲が漂ただよっており、大陸から下を見ても雲の下に何があるのか見る事が出来ない。

それに空を飛ぶ魔流術まりゅうじゅつが、存在して無い事もあり分厚い大気を越えた者は未だに存在しない。

唯一、分かるのが王宮の禁書図書館きんしよとしょかんに封印されている古文書レコードに書かれた内容である。

いにしえはる
古の遙か昔に栄えた文明の後があり、未だに劫火いじつかが燦くすぶつてると書かれている。

この、幻想大陸ルシアードでは、劫火は地獄と言う意味を持つ。
だからこそ、誰も率先して究明する者はいない。

「どうかしましたか？アレイ様」

手紙を読んでから、黙っていた俺の様子を心配してクレイネルが声をかけてきてくれた。

「なんでもないよ、それに私的には子供の頃のようにアレイでいいよ」

「いいえ、普段からきちんとしておきませんと何か合ったときに困りますからな」

クレイネルの言葉に、俺は相変わらず融通が効かないなと思ってしまった。

「アレイ様、今、私の事をこの頑固がんこ爺じいがと思ったでしょう？」

「そ、そんな事ないぞ？」

当たらずとも遠からずのクレイネルの言葉に俺はしどろもどろと答えてしまっていた。

それを聞いていたクレイネルは顎鬚あごひげに手を添えながら俺の眼を見つめてきた。

「アレイ様、一度、正美様に魔力検査を受けてもらったら如何でしょうか？」

「魔力検査をか？」

「そうです。本来、魔力検査と言うのは成人する前の者がどんな魔法に適正しているか、どんな能力があるのか、どれだけの魔力容量キャパシティがあるのかを測るモノですが、今回は、正美様がどこから来たのかそして何故魔法が効かないのか。公爵家の客人とするのでしたら大切な事です。早急にした方がいいでしょう。」

「なるほど、確かにそうだな。私達は正美については何も知らないからな、今後の怪我の手当てを考えていくと情報はあればあっただけいいだろうな。それでは、正美が怪我が治ったら近場の町で魔力

検査をしてみるか」

「いえ、アレイ様、魔力検査でしたらここ公爵邸の地下にある水晶でも調べる事は出来ます。それでしたら正美様の完治を待たずとも検査ができますでしょう」

「ふー分かった。クレイネル、お前に任せようとしよう。」

俺としても、正美の正体を含め、はっきりさせたいことは山ほど会った為、クレイネルの意見に従う事にした。

食事を食べ終わった俺は、食器を下げにきたメイドさんへエルフィーナがどうしてるか聞くと、部屋で何か縫い物をしてると教えてくれた。

たぶん、エルフィーナは俺の何気ない言葉に傷ついて部屋で何かしてるに違いない。

本来ならば、相手を傷つけた俺がエルフィーナの所にいくのが筋なのだが、昨日無理をしてしまったのか足を軽く動かすだけで激痛が走った。

「うっ………」

体中に走った激痛に俺が、声を漏らすと、メイドが顔を真っ青にして近くに寄ってきた。

「大丈夫ですか？正美様」

「う、うん、だ、大丈夫」

俺は体に走る激痛に耐えながら、メイドさんに大丈夫だからと伝えるところとホッとした表情で無理はしないでくださいね。と氣遣ってくれた。

ベットの上に戻されて、布団を掛けさせられた。

特に眠くもないのに、俺の意識はあっという間に闇に飲まれた。

使役獣―初めての召還編（2）

正美が不自然な程の速さで寝付いた頃、屋敷のメイド達が宛がわれている部屋の一室でエルフィーナはせっせと人形を作っていた。

その人形は何かによく似ていた。

黒い絹糸で現した髪の毛に白い布で作られた体そして、白いウェディングドレスがその人形には着せられていた。

エルフィーナはその人形の背中の部分に一本の長い髪を入れてから乾燥した小麦を手足の先まで詰めて背中の部分を赤い糸で縫いつけた。

「完成ですわ！」

エルフィーナが歓喜の声を上げながら、等身大の正美の人形に抱きついて頬擦りほおすをしていた。

そしてエルフィーナの周りには色々な書物が重ねられており、その一冊にはこう書かれていた。《都市伝説万葉集》と……

私の名前はイリシア・ローストと言います。

同僚のメイド達からはイリシアと呼ばれているのです。

今日は、メイド副長のエルフィーナお姉さまから、お客様である正美様のお世話を仰せつかりました。

今、私の前では正美様が唸うなっているのです。

何か怖い夢でも見ていらっしゃるのでしょうか？

「正美様！正美様！」

私は、正美様を起す為に名前を呼びながら体を揺すりますが、起きてください。

正美様の体を見るとうつすらと黒いモヤに包まれてる気が……

私は急いで、クレイネル様を呼びに行く為、ドアを開けてから通路

を走りました。

時間的にはそんなに経っていないのに、初めて任されたお客様である正美様の異常事態と中々見つからずに時間だけが経過していく中で私の体力はあつという間に削られていきました。

執務室の前を通ると、探していた人の声が聞えて来ました。

間違いないです。アレイ様とクレイネル様の声です。

私は、ドアをノックもせずに扉を開けました。

アレイ様とクレイネル様は突然、開け放たれた扉と開けた張本人である私を二人で見えていました。

「イリシア！ここは館の主様のアレイ様の執務室なのだぞ？ノックもせずに開けるとはどういう事だ？」

クレイネル様が私を問い詰めてきます。

でも、今は、正美様の容態を話すのが先決。

「アレイ様、クレイネル様！正美様が大変なのです」

私の言葉を聞いた途端、二人の顔色が目に見えて変わりました。

「クレイネル、急いで正美の元へいくぞ」

私の横を通り過ぎて、クレイネル様とアレイ様は正美様の部屋へ向けて走って行かれました。

私も、お二人の後を追って正美様のお部屋へ疲れた体に鞭を打ちながら向かいました。

今、俺とクレイネルは、メイドのイリシアの話を聞いて、正美の部屋に向かっている。

正美の部屋まであと1分ほどという所で、まだ昼間にも関わらず館のまりゆうしょうめい魔流照明が全て消えうせ、館が暗闇に飲まれた。

「くそ、どういうことだ？クレイネル何か分かるか？」

「検討が付きませんが、嫌な空気が漂ってきています。すぐに正美様のお部屋へ向かいましょう」

昼間なのにやけに暗い廊下を歩いていくと、窓からの景色がおかし

い事に気がついた。

さっきまで晴天の青空だったのが、館の周辺だけ暗い雲に覆われていた。

「やっぱり何かの呪いまじなが掛けられているようすな」

その言葉を聞きながら先に進もうとすると、何もない虚空で何かにぶつかった。

「……………」

俺は、ぶつかった壁の周辺に手を這わせて調べてみると、通路一杯に不可視の壁が作られて居る事がわかった。

不可視の壁を俺は殴りつけたが、5 m程弾き飛ばされて通路の床に背中を打ちつけた。

俺の様子を見ながらクレイネルが魔流術を使い始めた。

そして、言葉と同時に不可視の壁へ力を叩きつけるが全て霧散してしまう。

俺は思わず、奥歯を噛み締めた。

王宮最高峰と言われた、クレイネルの魔流術が通用しないという事はこの不可視の壁は力押しでは破壊する事が出来ないからだ。

「アレイ様、結界の力場の発生地点が分かりました。」

「何？ 本当か？」

「はい、結界に攻撃した際に力の補充を確認しました。恐らくはそこで儀式を執り行ったと思われます。」

そこで、イリシアが俺達に追いついてきた。

俺は、イリシアとクレイネルを連れて、クレイネルが指示する方へ向けて廊下を走っていった。

ここは夢の中？

周りには金色の粒子が舞い上がり幻想的な雰囲気醸し出している。同時に、脳味噌がかき回されるような痛みが体を襲ってきた。

「くそ、またか」

《正美、大変じゃ。どうやらお主に呪いまじなを掛けた者がおる》

「お前、相変わらず突然なのな……」

《細かい事を気にするではない。今は呪いをなんとかするのじゃ》

「呪い？」

《そうじゃ、呪いがかかる直前にお主を強制的に眠らせて意識だけをここに隔離したのじゃ、だがこの呪いはかなり強い物のようじゃ。下手をするとお主の体がマズイかもしれん。私が与えた使役獣しえきじゅうをうまく使って呪いをなんとかするように》

「さてよ！俺には呪いって言われても何がなんだが」

《よし、理解したようじゃな。がんばるのじゃぞ、使役獣を召還する際の合言葉を忘れるでないぞ？》

「だから、少しは俺の話を聞け、俺は何も承知してな……」

「そこで俺の意識が覚醒した。」

意識が覚醒していくと同時に、体中に悪寒が走った。

使役獣―初めての召還編（3）

アレイとクレイネルとイリシアが魔力の発生源であろう扉の前で立ち止まっていた。

「クレイネル、本当にここなのか？」

「はい、間違いありません」

「でも、ここってエルフィーナお姉さまのお部屋なのですよ？」

3者3用の言葉が通路で響く。

「あまり女性の部屋に押し入るのもな……」

アレイが倫理観を持ち出した所でクレイネルは特に気にした様子もなく、エルフィーナの部屋のドアを開け放った。

途端、鳥肌が立つような寒気がした。

クレイネルを先頭にアレイとイリシアが部屋の中へ入っていくと、エルフィーナが床に倒れていた。

クレイネルとアレイが駆け寄り抱き起こす。

「エルフィ、しっかりしろ！」

クレイネルがエルフィーナの肩を揺すりながら声をかけていく。

「――うっ、お父様。主様、一体どうしてここに？」

不明瞭な意識の中でエルフィーナが言葉を紡いだした。

「エルフィ、時間がない、一体何があったんだ？」

アレイが焦りながら、聞いただと、エルフィーナが記憶を遡るさかのぼようにして考えてからゆっくりと口を開いた。

「そこに落ちてる本の通りに一体の人形を作りました。」

エルフィーナが指を指している本をクレイネルが拾い上げて読み始める。

読み始めるにつれ、クレイネルの顔色がどんどん悪くなっていく。

そして、本を閉じた後は真っ青になっていた。

「どうした？クレイネル何かあったのか？」

「アレイ様、この本は王都で禁止された禁書目録の一つです。内容

は反魂の魔流術です」

「反魂？それが今回の用途とどう関係があるのだ？」

「その前に、一つ聞いておきたい事があります。エルフィ、お前は
この本を読んでどんな用途で何をしたのだ？」

「ようやく意識がはつきりしたエルフィーナは、父親の怒ってる理由
がわからなかった。」

「その本に、人に近い人形を作る事が出来ると書いてあったのでそ
れを真似て作ったのですけど？」

「それでその人形は誰を考えて作ったのだ？」

「正美様を考えてですけど？」

そのエルフィーナの答えに、クレイネルが肩を落としながら、説明
を始めた。

「この禁書は、王都で作られた原書のレプリカの一冊です。この禁
書に書いてある『都市伝説万葉集』^{タイトル}と言うのは偽りの題名^{いつわ}。

この禁書の本当の題名は、『死者の魂^{リビング}を利用した人形^{イーター}の開発書』^{タイトル}」
その言葉を聞いた途端、その場にいたクレイネル以外の人間が驚き
の声を上げていた。

国の法律により禁止された内容だったからだ。

禁止された内容としては、死者の魂は正者の魂を好み喰らう性質が
あるためだった。

その研究だけで一つの町が過去滅んだ事もあるくらい。だからこそ、
法律で禁止し悪用しなくても使った者には例外なく極刑が下されて
いた。

「そ、そんな、わ、私、そんな事、し、知らなくて」

エルフィーナがこれから自分の身に降りかかる事を実感してうわ言
のように呟きながら虚ろな眼差しで体を震わせていた。

「で、クレイネル、結果的にどういう事なんだ？」

「はい、正美様はまだ存命の為、恐らく正美様を殺してその魂を自
分で喰らい正美様にとって代わろうとするはずです。」

あの不可視の結界も我々に邪魔をされるのを防ぐ為に作り上げた物

でしような」

正美が殺される？俺の心臓が痛いくらい跳ね上がった。思わず俺はクレイネルの両肩を力一杯握り締めていた。

「なんだって、どうするんだ？何か手はないのか？」

「一つだけあります。その人形に入っている正美様の髪の毛を抜き取り人形を焼くのです。そうすれば騒ぎは収まるはずでしょう。

結界に関しては、幸いこの禁書に結界透過の術がかけられています。この本を持っていけば結界を潜^{くぐ}り抜けるはずが出来るはずです」

クレイネルのその言葉に俺は、長剣^{バスターソード}を右手に、禁書を左手に持って部屋を飛び出した。

クレイネルはアレイを見送ったあと、エルフィーナに視線を移した。

俺は、悪寒^{おかん}で震えるそうになる体を必死に押さえながら、^{まぶた うつつ}瞼を薄らと空けて周辺を確認した。

照明は全て消えていて、窓の外も黒い霧が渦巻いていて光が差し込んでこない。

なのに、俺の視界はこの部屋の中が手に取るように視る事が出来る。そこでふと、俺は部屋の扉のドアが音を鳴らしながら少しづつ開いていくのを視てしまった。

扉が人一人が通れるくらいまで開いた所で、入って来たモノのを視て、小さな悲鳴をあげかけたがそれが言葉となる事がなかった。

なぜならば、どんなに力を込めても、体が動かない体という事を効かないから。

《—金縛り—》

それが俺の頭の中に浮かんだ事だった。

そいつは、血の滴る包丁を両手でもち、真っ赤にそまった白いウェディングドレスを着た私？悪霊？だった。

部屋の中に敷いてある絨毯の上に血をポタリポタリと水滴のように包丁から垂らしながら、ベッドの上でもがいてる俺に一步一步それは近づいてきた。

その行動はすぐ不気味に瞳に映った。

頭の中だけで思考することしか出来ない俺は、その悪霊を恐怖の眼差しで見つめていた。

ベッドの側まで悪霊は来ると、赤い血を滴らせた瞳で俺を見つめて一言呟いてきた。

『契約の名の元に一つになりました。』
と。

両手の包丁を頭上まで上げたあと、包丁から零れた血が俺の唇の上に落ちて、咥内に侵入する。

咥内で甘いような蜜のような味がしてから体全体に広がっていった。

「甘い、何だこれ？」

右手を唇に持っていて俺はそこで自分が動けるようになった事に気がついた。

包丁が俺の腹部へ向けて振り下ろされてくる。

ベッドの上で俺は、転がるようにして包丁をさけ、目標を失った包丁がベッドに突き刺さり布団の中の羽毛が舞い上がった。

俺は、体を横たえたまま転がるようにしてベッドから落ちた。

すぐに立ち上がろうとしたが、先日の無茶な行動で痛めていた四肢が悲鳴をあげて痛みを伝えてくる。

「くああああああああ」

俺は、大声を上げながら痛みを堪えるようにして絨毯の上に両足で立ち上がった。

痛みのあまり、額からの脂汗が止まらない。

「お前、一体なんなんだ？」

俺が話しかけた途端、その悪霊は涙のように血を流しながら俺の方を見つめてきた。

『私は契約を執行する者ジェード。さあ、一つになりましょう』
そういうと、ジェードが俺の方へ駆けてきた。

———ッ！ 転がるようにして首目掛けて振られてきた包丁を避けた。

転がりながら距離を取った後、立ち上がろうとすると足から力が抜けて、絨毯の上に背中から倒れてしまった。

腹部に軽い痺れを感じ、倒れたまま、腹部を見ると黒い包丁がわき腹に刺さっていた。

刃物は心臓のように脈動し、水を飲むように音を立てて血を吸い上げている。

そこまでで、俺の視界が段々とぼやけてきた、それと同時に血が吸い取られて体温が下がっていつているのか体がガタガタ震えだした。俺は、どうにも出来ないまま、妙にあっさりと自分の死を認めていた。

そこで俺の意識が途絶えた。

使役獣一初めての召還編（4）

俺は、エルフィーナの部屋から出て正美の居る部屋に向かう為、通路を駆け走った。

正美の部屋が近づくに連れて、生理的な恐怖で心臓が跳ねるように鼓動を早くする。

正美、無事でいてくれ。俺は心の中で祈りつつ、走る。

部屋まであと少しと言う所で、不可視の壁に弾き飛ばされて通路の床を転がった。

「くっ……」

本があれば、通れるんじゃないのか？

俺は通路に落としてしまった本を拾い上げようとする本が風もないのに開いていく。

ページが次々と破れ、不可視の壁に張りついていく。そして、ガラスが砕けるような音がしたと同時にページが燃え上がった。

これは？

俺は急いで先ほどまで不可視の壁があった場所へ飛び込むと抵抗もなくすんなりと通ることが出来た。

先にいける……

正美のいる部屋にそのまま駆け込むと、正美が絨毯の上に倒れこんでいた。

倒れこんでいる正美の横に正美の形をした人形が立っていて、右手に持っているナイフを正美に向かって振り下ろそうとしていた。

「貴様、何をしているんだ！」

俺は、人形に向けて走りナイフを持っていた右手を握り締め、そのまま扉の方へ投げつけた。

正美の容態を見ると、腹部にナイフが刺さっており、白いワンピースが真っ赤に染まっていた。

「くそが」

俺は、怒りで理性が飛びそうになるのを唇を噛み締めて抑えていた。
『な．．．．．ぜ．．．．．邪魔．．．．．を．．．．．』

．．．．．する？』

俺は、その言葉を吐いた人形に長剣バスターソードを振るう事で答えた。

金属が打ちつけられる音が室内に響き渡る。

俺の剣をナイフで受け止めるだど？

ナイフで長剣を受け止めるなど、普通では出来るはずがない。

俺は一步下がりが相手の出方を見ようとする、それに合わせたように俺へ向かって走ってくる。

横薙ぎに長剣を振るうと人形が跳躍し4 m近い天井を足場にしてから正美に向けて跳躍する。

俺は人形に体当たりして体勢を崩しながら人形と共に絨毯の上を転げた。

一回転したまま、反動をつけたまま、立ち上がりまだ絨毯の上に倒れていた人形の体に長剣を叩きつけた。

長剣が人の体を斬ったような感触を手伝えてきた。

なんで、人形を斬ったのに人と同じ感触がするんだ？

俺が思考している間に、何事も無かったように、人形が立ち上がった。

それも、俺が斬り落とされた右腕を絨毯の上に落としまま．．．．．

同時に室内に正美の悲鳴が響き渡る。

「なっ？」

正美の方を見ると、人形と同じ右手の部分が斬り裂かれていた。
どうということだ？

『くつくつくつ、ようやく。ようやく』

突然、人形が饒舌な言葉を吐いていた。

正美を俺が、傷つけたのか？一体どうなって？

俺が動揺した瞬間、何十本ものドス黒い触手が床から生み出されて俺の体中に巻きついてきた。

「くそ、貴様、一体何をしたんだ？」

俺は絨毯の上に叩きつけられて、身動きが取れなくなった。

その俺を冷ややかな目線で人形が見下ろしてる。

『私の名はジェード、そしてもうすぐ正美になる。すでに体は同化を終えた、お前が私を傷つければそれは正美を傷つける事になる。お前にはもう何も出来はしない。そこでゆっくりと見てるのだな。私が正美を侵食する様をな』

俺の見たる前でジェードが一步一步正美に近づいていく。

「焚^{ほのお}けき炎 我が意^い志^しをまま 命^{めい}ずる者^{もの}を焼^やき尽^{つく}せ」

俺が発動させた魔法が、俺ごと束縛していた触手を焼き払う。

自分が発動させた魔法とは言え、多少は熱かったが耐魔法が自動的に展開される為、死ぬほどの危険性はない。

正美の方を見ると、ジェードが咥内からドス黒い触手を作り出して

正美の咥内を犯していた。

正美の体が時折、びくんと跳ね上がる。

「きさま！」

俺はそのままジェードを組み伏せた。

だが、これ以上はどうすればいい？

こいつを傷つければ正美が傷つく。

俺が考えてる間にも、腹部と右手から血が流れワンピースが吸収しきれなくなった血を絨毯が吸い取っていく。

それはまるで、食虫植物のように見える。

ジェードを組み伏せたまま、俺が「正美をすぐに元に戻せ！」と

言うと、すでに手遅れのような顔をして俺を見つめてきた。

その顔は、人間のような表情をしていた。

『もう手遅れだよ、もうすぐ本物^{まぶみ}は死に、偽りの生であるこの体は実体となる、虚像が実体化する。もうこれは誰にも止められない。』

「なんだ・・・と？」

『くつくくく。人間と言うのは愚かな者だな、そうそう、いい事

を思いついた。

そんなに、この娘がご執心なら私がお前の女になってやろうか？ 体、
そしてもうすぐ記憶も私は正美になる。不都合は何もないぞ？

私ならば長い間生きてきたから、男を喜ばす術をたくさん心得ている。どうだ？ 死にかけのモノなどほっておいて私と契りを結ばないか？』

「ふざけるな！」

俺は、こんな風に人をバカにしたり、冷えたような目をしてるようなモノに興味はない。

すぐに顔を真っ赤にしたり、恥らうような態度や視線を投げかけてきたり、少しの事で笑うような正美が好きなんだ。

顔や体がどんなに似ていてもジェードと正美はまったく違う。

『くつくくく、いいのか？ そんなに考えていて、どんなに考えても、死ぬことには変わらないがな』

俺は正美の容態を見ようと正美の方を見ると一人の男が立っていた。その男の体は透けていて、体を通して背後の壁が見えた。

それでも不思議と怖い、敵という感じがしなかった。

なぜなら、正美を見るその男の眼差しはとてもやさしかったから……

男が、俺が抑えてるジェードを強い眼差しで見ってきた。

『そんな簡単に私達の大事な子供をお前のようなモノにやるわけにはいかない』

男が決意のある強い口調で言うと同時に正美に刺さっていたナイフが砂になり腹部の傷と右手の傷が塞がり始める。

それを見ていた、ジェードが目から血を流しながら男を睨めつけた。

『き、き、貴様！ け、契約を……… 契約を解除したのかああ

あああ』

狂ったようにジェードが俺が押さえ込んでいたにも関わらず暴れはじめた。

何もない空間に俺はいた。

ここはどこだ？

なんで俺はここにいるんだ？

俺は、誰なんだ？

俺は一体俺ってなんだ？

シャボン玉が俺の周囲に浮かんでは割れていく。

床から浮かび上がったきたきたシャボン玉を見ると、知ってるような懐かしいような風景が映っている。

その風景は、大きな建物がたくさん建っていて、夜の街を照らしている。

そして、そのシャボン玉が弾けると同時に俺の中で大事な物が消える。

同時に聞いた事があるようなやさしい声が鼓膜を揺さぶった。

『正美』

一人の女性が俺の前に立っていた。

俺を両手で抱しめて頭を撫でてきた。

とても、安心する匂い。

ずっと待っていた安らぎ。

「だ………れ？………」

それでも、思考に霧がかかったようにボーっとしてくる。

『こんな所で死んだらダメよ、私達の所に来るにはまだ早いわ』

「……………」

『お父さんもお母さんもあなたを見守ってるから』

「……………」

「お、かあさん？」

「うん。お母さんよ」

ギュッと俺を抱しめてくれる。

「ごめんね、一緒にいられなくて……でもね、私もお父さんも貴方をずっと愛してるわ、だから簡単に死んだらダメよ。」
そういうと、おかあさんは光と共に消えた。

それと同時に俺の意識が鮮明になってくる。

『この戯たわけが！何をしているのだ？』

いつも、俺の意見を一切聞かない高飛車な声が頭の中をかき回すように響いてくる。

いつも、いつも突然な奴だな。

俺は思わずイライラしてしまい、言い返した。

「うるせえ、俺だって好きでこんな事してるんじゃないやねえ」

『ふむ、少しは元氣が出たようだな。呼んで来た甲斐があったというものじゃ』

「呼んで来た？訳の分からない事、言ってるなよ」

『ふふふ、どうやら今あった事を忘れてしまったようじゃな。まあ、これはこれで面白いかもしれんな。』

相変わらず人を食ったような態度の奴だ。

「で、なんの用だ？」

『ふむ、用というほどのモノじゃないのじゃ』

「いま、立て込んでるんだが？」

『それは殺されかけてるという事か？』

「知ってるならどうにかしてくれよ」

『お前には使役獣を貸してやったろう？それを使えばいいのじゃ』

「さて、使役獣を使うって事はあの恥ずかしいセリフを言わないといけないんだろ？」

『ふむ、つまり正美、お主はボコボコにやられたまま尻尾を振る腰抜けという事か。まったく日本男児も堕ちたモノじゃな』

「なんだと？俺の中に寄生しているお前だけには言われたくないわ！」

『ほれ、よく言うじゃろう？聞くは一時の恥、知らぬは一生の恥と

それと一緒にじゃ、それとも何か？うわーん、ママ怖いよータスケテ
ーと私に泣きつくならば助けてやらんでもないぞ？』

「ああ？お前、今度絶対泣かすからな！」

『ふむ、なら行って来い』

「ちよつと、まっ………」

俺が話しかけてる途中で、俺はこの空間から弾かれた。

空間に一人、残された私の前に、一組の男女が現れ、頭を下げて光
と共に消えた。

『まったく、あの男はこれだけ両親に愛されてると言うのに、心の
底では死にたがっているとは愚かな者じゃな』

何もない空間に一人の女性の声が木霊した。
こだま

使役獣一初めての召還編（5）

くっ……

俺は、正美の父親が消える前に、俺に伝えてきた言葉に動揺してしまい、その隙をつかれて殴り飛ばされた。

正美の方へ絨毯の上を転がりながらすぐに立ち上がった。
とんでもない力だな。

抑えてる事すら出来ないとはな……

俺は、長剣を両手に握り締めて、正美を庇^{かば}うようにジェードと対峙した。

ジェードが10m近い距離をわずか数歩で詰めてくる。

ジェードは握っているナイフを俺に向けて突き出してくるが俺はそのナイフを持つてる手を長剣で切り落とした。

『くあああああああ』

人が発する事が困難なほどの音を口からジェードが紡ぎだしてくる。
俺は、長剣を構えたまま、相手の出方を伺^{うかが}った。

『や、やっと、ここまで再生出来たのに、貴様が、邪魔をしたから、何もかもダメになった。』

「再生？何もかも？ふざけんなよ。お前達の価値観を人に押し付けてそれでうまく行かなかったら責任転換^{せきにんてんかん}か？

それにな、俺の女に手を出した以上、只で済むと思うなよ。お前のような価値観を通す気はないからな」

俺の話しを聞いた途端、ジェードが走って部屋から飛び出した。

「しまった！」

まさか逃げるとは思わなかった。

正美を置いて追いかけるか？

くそ、そんな事出来るわけないだろうが！

俺は、正美の首元に手を当てて心拍を確認した。よかった、生きる。

そのまま、正美を抱き抱えると正美が身動みじろぎしたあと、瞼を開けた。

「アレイ？」

俺が瞼を開けた後、瞳に映ったのはアレイだった。

「どうしてここにいるの？」

「お前を守る為に、急いで駆けつけたんだ。」

「そうなんだ、ありがとう」

自然とお礼が言えた事に驚いた。

そこで俺は気がついた。

刺された腹部が塞がっていた事に。

「アレイが治療してくれたの？」

「俺じゃないが別の人になるのか？」

「もうゝはつきりしないな」

そういえば、何でこんなにアレイの顔が近いのかな？

・・・・・・・・・・・・・・・・！！

「アレイ、何、私を抱いてるのよ。下ろしてよ」

俺がジタバタするとアレイが少し残念そうな顔をして下ろしてくれた。

「もう大丈夫なのか？」

「う、うん。もう大丈夫みたい」

「そうか、よかったな」

アレイがそう言いながら俺の頭を撫でてくれる。

とってもくすぐったいけど、気持ちいい。

「もう、髪の毛ぼんぼん触らないでよね！」

「すまない。正美が無事だと思って安心したんだ」

そう言ってアレイが笑いながら、俺の瞳を覗き込んできた。

アレイの赤い瞳に見つめられた途端に、心臓がドキドキしてくる。

「ちょ、調子に乗らないでよね、別にアレイの事なんて何とも思っ

てないんだから」

「そうか？ 結構意識してるような気がするんだが？」

アレイがニヤニヤしながら俺を見てくる。

「自意識過剰なの、少しは直した方がいいと思うよ、それにさっきまで居たジェードはもう倒したの？」

「いや、逃げられた。」

え、それって危険なんじゃ？

「すぐ追わないとまずいでしょ。アレイ、私の事はほっといて探しにいつて」

「わかった。正美はこの部屋から出るんじゃないぞ？」

「うん、わかった。」

俺がそう答えると、アレイは部屋の扉から走るようにして出ていった。

さてと．．．．．極力人には見られたく無いから人払いしたんだけど．．．．．

やりますか。

ゴクリ．．． 恥ずかしい．．．．．

．．．．．

やらないと行けないんだよね？

．．．．．

あうー。恥ずかしい．．．

とりあえず、部屋の扉を閉めよう。

部屋の扉から顔を出して通路をチェックする。

左よし。右よし。扉をその後閉める。

はあ、気持ち重いなー。

でもやるって寄生虫に大見得張っちゃたし．．．．．

やるしかないんだよね・・・
よし、両手でほっぺを叩いて喝^{かつ}をいれる。
部屋の中央まで言ってから深呼吸をする。
さてと・・・

「私の正義が」

俺の足元に緑色の魔法陣が展開される。

「悪を撃ち滅ぼす。」

魔法陣の文字が動き出して大気に積層円の魔法陣が書き込まれていく。

「こい、神の使者！」

強力な光が視界を覆い、煙が発生する。

まさか、本当に召喚が成功するなんて・・・一体どんなのが
来るんだろ。

ドラゴン？ユニコーン？ケンタウロス？

煙が少しずつ晴れていく。

同時に俺の期待感が膨らんでいく。

そして煙が晴れた所にいたのは、予想外の使役獣だった。

その使役獣は俺を見てこう言った。

「初めまして、ご主人たま！」

と・・・

使役獣―初めての召還編（6）

・・・・・・・・・・・・・・・・

ゴシゴシ（瞼を擦る音）

じーっ・・・・・・・・

ゴシゴシゴシ（再度、瞼を擦る音）

「どうも私、まだ寝ているみたいだわ」

俺はそう言いつつベットに入ろうとすると、

小動物が俺の移動先であるベットの上に先回りして口を開いた。

「ひどいでち！ご主人たま、僕が存在を無かった事にしようとしてるでち」

俺は、ベットの上で戯言を言っている小動物を両手でむんずと掴むと床に置いてからベットに入った。

「やっぱり、疲れてるな・・・・・・・・」

布団をかけて寝ようとする俺の顔の上に小動物が乗ってきた。

「ご主人たま、なんで意地悪するでちか？」

・・・・・・・・・・・・・・・・

幻覚じゃないのか――。

俺は、ベットから上半身だけ上げると小動物は俺の膝の部分にちょこんと乗った。

小動物は、チンチラと呼ばれる猫だった。

少し違うのが耳がすごく長くてたぶん床に置いたら床につくと思う。色は真っ白で眼の色はブルーで大きさは30cm？くらい。

はぁ、あんな恥ずかしい言葉を言って召還したのがこんなモノなのか。

「ご主人たま、今、酷い事考えたでちね？」

エスパーか、こいつは・・・・・・・・

「ねえ？君、クーリングオフとか効くの？」

「くーりんぐおふ？ってなんでちか？」

「簡単に言えば、お帰りくださいって事かな？」

「ひどいでち！やっと呼んでもらったのにすぐに実家に帰れなんてあんまりでち！」

「私としても、召還したらこんな小動物が出るとは思わなかったから……」

「僕だって、一応使役獣としての面子ってのがあってよ」

「そう、よかったね。じゃ私と話したって事にしてもう帰っていいよ」

「ううー。ご主人たま、とっても意地悪でち」

「だって小動物だとペットにしか出来ないし、

一応ここにお世話になってるからペットはちょっとお願いしづらいんだよね」

「僕はペットじゃないでち！使役獣でち！」

俺を見ながら、うるうると蒼い瞳で見つめてくる。

なんかすごく罪悪感を感じるというか、なんというか……

「仕方がないな。じゃアレイに後で聞くからそれまで大人しくしてるんだよ？」

「分かったでち！そういえば、ご主人たま」

「ん？何？」

「僕を呼んだのは何をさせる予定だったでちか？」

俺がそれに答えようとした所で、ガラスが割れる音が聞えた。

急いで、表を見るとエルフィーナが庭を走ってるのが見えた。

エルフィーナの着ている白いエプロンが真っ赤に染まっている。

「い、一体どうなってるの？」

俺が動揺して言葉を紡ぐと、

いつの間にか俺の頭の上のっていた小動物がエルフィーナを見て呟いた。

「あの女の人、精霊に取り付かれてるでち。早くしないと魂も肉体も食われちゃうでち」

小動物は重要な事をサラリを言っただけで来た。

「ちょっと、どうすればいいの？」

「簡単でち、僕を使ってあの女の人の頭を殴ればいいでち」

俺の瞳で見ても、館の庭を走るエルフィーナの速度はスプリンター選手なみの速さだった。

この非力な体で追いつけるとは思えない。

「いくら、小動物って言っても殴られたら痛いでしょ？ そんな事は出来ないよ。」

それにあんなに早く走られてたら追いつけないよ」

俺は視線を足元に落としながら、言う小動物が「その事なら、大丈夫でち」と言ってきた。

「どういう事？ 大丈夫って？」

「僕と契約すればいいでちよ」

「あー。どっかで聞いた事のあるセリフなんだけど……キ
ノセイだよな？」

「気にしたら負けでち！」

「普通気にすると思うけど……？」

「でも、今回は特別サービスで契約なしで力を貸すでち！ ちょっとだけ体がきついかも知れないでち」

「まあ、そのくらいならいいよ」

「了解でち！」

小動物が答えると同時に、締め切ったある部屋内に風が舞い起こる。それが俺の体を包み込み、終ったあと俺は絶句してしまった。

窓ガラスに映るその姿は……

白いふさふさしたネコミミに巫女装束をきてふさふさな尻尾を生やした、ネコミミ巫女だった。

髪の毛は両端がお団子になってツインテールのように垂れ下がって丁度いい長さになっている。

武器と言えば、一抱えあるほどの大きさのピコピコハンマーを持っていた。

俺は、自分が映った室内の窓ガラスを死んだ魚のような瞳をしたまま見て固まっていた。

使役獣一初めての召還編（7）

.....
《ご主人たま。しっかりしてくださいでち。あぶないでち。》
.....?

《ご主人たま！》

ん？何かあったような気がするような.....？

《前、前を見てほしいでち》

「ん？」

何か、段々と、地面が向かってくるような感じが.....？

《そうなのでち、女の子を追おうと思って窓から飛び出したんでち。そしたら、地面まで5 m以上もあってピンチでち》

「小動物、お前なんて無謀な事してるんだよ」
くっ。

俺は体を捻りながら足元から着陸した。

しかも、まったく足に衝撃を受けない。

《さすがご主人さまでち。それに話し方も元に直ってるでち》

「元に？どういう事だ？」

《さっきまで、ご主人たまは精霊の血を飲んだ影響で言葉使いが無意識的に女性になっていたでち》

「まじか？」

《まじでち！》

はぁ、俺、どこまでいっちゃうんだ。

《ご主人たま、女の人はこちらから4 k m所を走ってるでち》

「わかった。でも裸足^{はだし}で走るの痛そうだよな」

《大丈夫でち、きちんとオプシヨンも完備してるでち》

小動物の声が頭の中で響くと同時に地面を踏んでた感触が変わった。

俺は、足元を見ると赤い袴が膝上20 c mになっており、

膝から下がふさふさの毛がブーツのようになっていた。

足裏を見ると肉球があった……

「あー。俺どこまでいっちゃうんだろうなー」

《ご主人たま、感激してる場合ではないでち。急いで追うでち》

「いや、感激してないから、黄昏てたんだよ」

俺は溜息をつきながらエルフィーナを追うため意識を切り替えた。そして、地面を思いっきり蹴った。

地面が爆ぜるように爆発し、周辺の景色が一気に後ろに流れる。

「な！」

俺が驚いてる間にもたった10歩で館の外門までたどり着く。

バカな？門のところまで軽く300m近くはあるのに……

俺が驚いて、思案していると小動物の声が頭の中に響いた。

《女の人は、この門から出て4kmの場所にいるでち》

突然、門前に現れた俺に警戒しつつ、数人の兵士が俺の方へ走ってくる。

前方を見ると門が閉まっている。兵士に事情を説明してる暇はないよな？

俺は、門を飛び越すために、地面を踏み込み跳躍した。

そして、俺はその跳躍力に驚いてしまっていた。

門を飛び越してさらに、100m以上跳躍している。

館や門が遥か下に見える。

そして、遥か後方に門を置いて地面に降り立つ。

《ご主人たま、やばいでち。女の人が人の生命反応がたくさんいる方に向かってるでち》

「なんだって？それってやばいんじゃないのか？」

《やばいでち、今、あの精霊が人とあったら生命を喰らって力を取り戻してしまうでち》

「ちっ」

足元の地面が破裂するほどの力で地面を蹴りこみ、一気に加速していく。

同時に、体中の皮膚が、尋常ではない移動速度が起す空気の断層に

より浅く切り刻まれていく。

《ご主人たま、それ以上は体に負担がかかるでち》

「一度、係わっちゃまった人が人を殺したり、過ちを犯すのを黙って見ていられるほど大人じゃないんだよ！」

《でも、ご主人たまの体が………》

「俺はいいんだ。もう………」（誰も待っている人はいないからな）後半は心の中で付け足す。

《ご主人たま………》

一歩地面を踏み込むごとに加速し、同時に体中、風で傷ついた傷跡から血が噴出す。

それが血飛沫となって空に舞い上がる。

そしてエルフィーナの姿を見つけることが出来た。

俺とエルフィーナの距離は、このスピードならあと2歩ほど。

町が前方に見えたが、まだまだ距離はある。

ピコピコハンマーを右手で握り締める。

一歩進む、地面に亀裂が入り碎ける。そして上空へ飛び上がり、両手でピコピコハンマーを上段に構える。

落下地点が丁度、エルフィーナの頭上に差し掛かった所で、頭に振り下ろした。

同時に、竹を割ったような音がして、エルフィーナが膝から崩れ落ち、

黒い霧がエルフィーナの体から、沸きあがってきた。

あれ？すごい音がしたんだけど死んでないよな？

俺が恐ろしい、想像をしていると小動物が脳内で叫んできた。

《ご主人たま、今でち。封印するでち》

良く見ると、エルフィーナの体から出た、黒い霧が辺りを漂っている。

放置してて良い物じゃないよな。

でも俺、封印の仕方知らないぞ？仕方ない、小動物に聞くか。

「封印はどうすればいいんだ？」

《僕の言ったとおりに言っでち》

「わかった」

《聖なる巫女の名の元に》

・・・・・

《さあ、ご主人たま、言っでち》

・・・・・

「なんというか、恥ずかしいというか罰ゲームな気がするんだが？」

「

《ご主人たま、あれを放置しておく何人も死んでしまっでち。》

「くそ、わかったよ」

俺は、覚悟を決めると黒い霧に向けて視線を向けた。

《いくでち！》

《聖なる巫女の名の元に》

「聖なる巫女の名の元に」

《数多の神々の名の元に》

「数多の神々の名の元に」

《くる狂えし、御霊、今ここに浄化を封印をおこなわん》

「くる狂えし、御霊、今ここに浄化を封印をおこなわん」

ピコピコハンマーが急に金色に光り輝き、黒い霧を吸い込んだ。

《これで成功でち、ご主人たま？》

正美が虚ろな瞳をしたまま、そのまま倒れこんだ。

《ご主人たま、ご主人たま、ご主人たま！》

誰にも聞えないまま、使役獣の声が主の心の中で響いた。

霧を吸い込んだと同時に俺の意識が別の所に運ばれるような感じがする。

周りの景色がゆっくりと安定してくる。

俺の瞳の先に巨大な人工物が見える。

それは、半分壊れた偶像だった。

「何かの宗教的建物なのか？」

周りを見ても何もない。

唯一、存在する通路を歩いていく。手掘りというか、洞窟のような感じがする。

しばらく歩くと、一筋の光が暗い洞窟の先に見える。

俺は、洞窟を走っていくと、洞窟から出る事が出来た。

そこには、数十人の武器を持った兵士が一人の女性と女の子を引き離そうとしている所だった。

一人の兵士が女性に向けて叫んでいた。

「この異端者が、こんな所に礼拝堂などを作るなど！」

「やめて、ママを苛めないで」

女の子が必死に母親を助けようとしているが、5歳の女の子では、大人の男に叶うはずがない。

「申し訳ありません。娘は、ジェシカは関係ないのです。全ては私
が」

「うるさい！異端の宗教の分際で我々の手を煩^{わづら}わせたばかりか意見を申すというのか」

母親に言葉を吐き出している兵士とは、別のもう一人の兵士が手に持っている槍を女性の背中に向けている。

俺はとっさに飛び出して槍を掴もうとすると手が擦^すり抜けた。

「なっ？どういうことだ？」

俺は、驚き、呟きながらも、違うモノを触ろうとするが、兵士にも女性にも触^{さわ}ることが出来ない。

俺がまごついていると女の子が泣きながら兵士達に懇願していた。

「誰か、ママを助けて、ママは悪い事してないの、だから助けて」
その声を聞きながら一人の兵士が女の子を押さえつけている兵士へ視線を向けた。

「おい、異端の女はいつもの所に連れていけ」

女性の後ろ姿を見たまま、女の子が男に押さえつけられたまま、自分の母親を泣き叫び呼んでいた。

そこで景色が揺らぎ、別の景色が映りこんできた。
どうやら、どこかの建物のようだ。

煉瓦作りのしっかりとした4m近い壁に3m近い分厚い檜かしのの木で作られた扉が据え付けられている。

そこには、二人の兵士が話しをしていた。

「なあ？知ってるか？」

「ああ、例の黒の魔人ジェードの事だろう？」

もう一人の男がそう返すと、最初に話しを振った男が首を縦に振っていた。

「ああ、今年に入って、清教徒騎士が100人近く殺されてるらしい。」

「まったく迷惑な話だな、俺達になんの恨みがあるのか分からないがな」

そこで二人の首が、黒い触手で跳ね飛ばされた。二人の頭はボールのように地面を転がり、体は力を失うようにして膝から前のめりに地面の上に倒れこんだ。

一人の生き物が近づいてくるのが見える。

良く見ると真っ黒な体をしていたが女の形をしていた。

そのまま、真っ直ぐ歩いて、立ち竦んでいた、俺と重なりあった瞬間にジェードの記憶が流れこんできた。

見るも無残に強姦され、虚ろな眼差しのまま事切れた女性とそれを見つけて泣き崩れてる女の子。

「ママ、ママ、嫌だよ、こんなの嫌だよ、なんで返事してくれない

の？なんでなんで？」

女の子の心が壊れるような痛みが、直接、俺の心を締め付けてくる。

いつのまにか、一人の男が、女の子に話しかけていた。

「ママが帰ってくる方法があるよ。」

その男の言葉は、5歳程度の女の子にはとても魅力的に映ったのだろう。

「ほんと？ママ。また話してくれる？」

「ああ、話してくれるよ」

「だから、ちょっと手伝ってくれるかな？」

「うん」

「いい子だ、これを飲んで感想を聞かせてほしいんだ」

男がそう言うといつの瓶を取り出して女の子に渡した。

その後は、凄惨な一言に尽きた。

女の子の体が異形と化し、命を喰らい尽す。

対象は深い憎しみをもった、母親を殺した奴らの同胞。

一人殺すごとに、女の子の心が壊れていく。

男はそれを見ながらこう呟いていた。

「闇の精霊との融合に失敗したか。使えんモルモットだな」・・・と
そして場面は切り替わり、辺りは大理石で作られた巨大な神殿だった。

一人の金色に光り輝く女性が辛い表情をしたまま、異形と化した女の子を封じていた。

「わるいのう、私にはこのくらいしか出来んのじゃ。本当にすまない。闇精霊^{ジェード}いや、ジェシカゆつくりと眠るがいい。いつかお主を救ってくれる者が現れるまでな」

使役獣一初めての召還編（8）

気がつくと俺は一寸先まで闇で見通しの利かない空間に浮いていた。浮いていたというのもおかしい表現かもしれない。

全てが漆黒で塗り固められた空間の中では、自分の手すら見ることが出来ないのだから。

人は暗闇に根源的な恐怖を感じる。

それは、未知なるモノに対する無意識下の中における根源的な生物の本能による。

でも、俺はこの漆黒の空間の中においても恐怖を感じる事は無かった。それと、根源的こんげんてきに違うものを先ほどから感じている。

それは、さびしさ、悲しさといった感情だ。

俺が、親を無くした際に感じた感情に似ている。

偽善かも知れない。でも俺には、ほっておく事は出来ない感情だ。

確信は無かったが、何かに導かれるように暗闇くらやみの中を一步一步進んでいく。

しばらくすると、漆黒の空間の中に淡くすぐにでも消え去りそうな淡い光あわが見えた。

その光に近づくにつれ、輪郭りんかくがはっきりと見えてくる。

目の前までくると、淡い光を放っていたのは幼い5歳くらいの女の子だった。

女の子は俺が近づいてくるのに気がつくと、俺の顔を見上げてきた。

金色の髪に金色の瞳、淡い光を放つ髪が肩で切り揃えられており、

若干ウェーブがかかっている。

「お姉ちゃん、ママがいないの。知らない？」

女の子が、泣きそうな顔で、否。ずっと泣いていたのだろう。

うっすらと瞳から流れている血が女の子が着ている淡い青色の服を紺色に染め上げている。

俺には、女の子にかける言葉を持ち合わせていなかった。

言葉なんかじゃいくら飾り立ててもそれは意味を成さない事を俺は知っているから……

だから、俺は女の子を胸の中に抱いて、頭を撫でた。少しでも、恐怖や悲しみを紛らわせる事が出来ればと。

俺にはそれしか出来ないから……

「おねえちゃん？」

「うん？何？」

俺は、女の子を安心させるために意図的に女性の言葉使いをすることにした。

「私、たくさんの人を殺したの」

「そう」

「だから、もう私には人にやさしくしてもらう資格はないの」

「やさしくしてもらったり、するのに資格なんて必要ないよ。誰かを愛しく思う気持ちが重要なのだから」

「愛しく？」

「そう、誰かを愛したり愛されたり、そういう気持ちが重要な。だから、誰かにやさしくしたり、やさしくされたり、そういうのに資格は必要ないんだよ」

「本当に？」

「うん」

「私も、誰かに愛される資格はある？」

「うん、私が愛してあげる。だから、もう一人で心を碎いて泣かなくていいから、さびしい時や悲しい時は遠慮なく頼っていいからね」

「うん、うん、うん。」

女の子が俺の胸に額を当てて、堰を切ったように泣き始めた。

その涙は、血の色ではなく透明な澄んだ涙だった。

慟哭が空間を震わせていく。

女の子が俺の服を掴んだまま泣き続ける。

きつとずっと我慢して心を壊して泣いていたのだろう。

体全体を震わせて、泣いている女の子は抱いているにも関わらずとて

も儚く壊れやすく脆く感じる。
はかな

気がつくと、漆黒の空間だった場所が辺り一面、色とりどりの花畑になっていた。

淡い光が降り注ぎ、俺と女の子をやさしく照らし出す。

そこで一人の女性がこちらを見て微笑んでいるのに気がついた。

俺はすぐに気がついた。その女性がこの女の子の母親という事に。

女の子の頭に手を置くと、女の子は、俺を見上げてきた。

そこで、俺は女性がいる方に指を指して教えてあげた。

女の子の顔が、花が咲いたように笑顔になる。

俺は女の子を立たせて、女性の方へ向かうように肩を軽く押してあげた。

女性の方へ女の子が走っていく。

そして、女性も走ってくる女の子の方へ走り駆け寄り二人が抱き合った。

「ジェシカ！」

「ママ！」

二人が涙を流しながら抱擁をかわしている。

それに伴い、花が散っていき、女性と女の子が光となって天へ上っていく。

俺は、それを見ながら少しうらやましく思い、同時にさびしい感情を抱いていた。

そして、女の子が母親に会えた事に嬉しさを感じてていた。

「よかったな．．．．．ママに会えて」

自然とその言葉が口から出てきた。

その時、ふと気がつくと女の子を抱いていた女性が俺に頭を下げていた。

恐らくお礼なのだろう。

俺は、それに対して、笑顔で答え、手を振った。
さようならと言う意味合いを込めて。

そして、辺り一面が光に包まれると同時に俺の意識が薄らいでいった。

薄れいく、意識の中で、

—ありがとう、おねえちゃん—

という声を聞いた気がする。

その頃、倒れて意識を失った俺の瞼まぶたから一筋の涙が零れ落ちていた。

それを見ていた、使役獣がそれに気がついて呟いていた。

《ご主人たま?》

その時の正美の顔は、笑顔と悲しみを混ぜた表情をしていた。

使役獣行使の代償

意識が浮上すると同時に風が草の匂いを運んできてくれた。

同時に意識が一気に覚醒していく。

まぶた
瞼をゆっくりと開けていくと視界内にエルフィーナが倒れているのが確認できた。

俺は倒れていた体を持ち上げると膝をついてしまった。

《ご主人たま、大丈夫でちか？》

小動物の俺を心配する声が頭の中で響く。

「ああ、大丈夫だ」

《ご主人たまは今、体と精神がボロボロになってるでち。動かない方がいいでち》

そうか、さっきから感じる疲労はそれが原因か。

俺は、震える足で立ち上がるとエルフィーナの方へ歩き、心拍を確かめようとすると小動物が大丈夫と言ってきた。

「そうか、なら……」

俺が、エルフィーナを背中に担いで、館の方へ向かった。

気がつくと、俺はベットの上で寝ていた。

部屋の中は真っ暗で、窓から外を見ると夜の帳がすでに下りていた。

《大丈夫でちか？ご主人たま》

俺の頭の中で、小動物の声が響く。

「ああ、大丈夫だ」

鈴の鳴るような美しい声に似合わない男口調で答えながら、俺は、ベットの上から体を起おこした。

部屋の中を見ると、俺が公爵邸でお世話になっていた部屋だった。

絨毯についでる血も全て綺麗に消えている。

「もう夜か……」

《違うでち、あれからもう3日立ってるでち》

「3日？俺はずっと寝ていたのか？」

《そうでち、皆、一生懸命看病してくれたでち》

「そうか、そういえば、エルフィーナはどうなったんだ？」

《あの女の人なら大丈夫でち、もう回復したはずでち》

「それなら良かった」

《……ご主人たまは、人の事をばかり気にしてるでち》

「ん？そんな事ないぞ」

俺は、ベットから抜け出しながら小動物の意見に答える。

《……》

（ご主人たまは自分の体の事をどうでもいいように考えてるでち。
まるで……）

そういえば、よくこの耳と尻尾と巫女服の事を突っ込まれなかったな？

《不可視の術式を使ってるでち、だから一般の人に見ることは出来ないでち》

「すごいな、小動物のくせに」

《小動物じゃないでち、僕にはきちんとした由緒正しい名前があるでち》

「ほー。どんなのなんだ？」

「聞いて驚くでち。ルアカーゼ幻獣王と言う立派な名前があるでち」

そういいながら、俺と分離して猫の姿になって頭の上に乗っかってくる。

俺は、フツと笑った。

「名前負けしてる気がするのはいか？」

俺はそう言いながら、頭の上に載った猫を両手で掴んで胸元に抱き

抱えた。

「ルアカーゼって名前だから略してルアでいいか。」

「いやでち、きちんと呼んでほしいでち」

「だが、断る！」

「うう、ご主人たま、相変わらずひどいでち」

「とりあえず、エルフィーナの容態を見にいきましょう」

「もう大丈夫だと思うでち」

ルアの話しを聞きながら、部屋の扉に向かっていくと突然、扉が内側に開いた。

そこには、普段着を着込んだ、アレイとクレイネルが立っていた。

その後は、アレイとクレイネルに数日間寝ていたんだからとベットにリターンすることになった。

クレイネルは俺の体を診察しながら、信じられないと何度も首を捻っていた。

アレイに、聞いた話によると、ジェードが封印されていた禁書が何かの拍子で封印が解かれてる状態で売られて居た事を突き止めたらしい。

禁書は長い時をかけて、エルフィーナの精神を蝕み今回のような騒動を引き起したと教えてくれた。

そしてエルフィーナの処遇についてはしばらく謹慎を言い渡してるそうだ。

「さて、正美、エルフィーナの処遇については一番の被害者である正美に任せたいと思っているのだが？」

アレイが俺を瞳を見て言ってきた。

クレイネルの方を見ると肩を竦めていた。

普通の貴族ならば、これほどの大事を起したのだ。

職の解雇など生やしいだろう、下手をしなくても死刑が妥当なはずだ。

俺はそこまで考えた所で、二人を見てから発言した。別に誰も死ん

でないから、今までどおりでいいんじゃない？と……………

俺の言葉を聞いてクレイネルとアレイは肩の荷が下りたような様子だった。

学校で習ったり、小説で読んだ貴族とは違う事に俺は少し安心した。

そのあと、アレイとクレイネルに寝るように言われてからベットに入った。

改めて、自分の着ている服を見ると、扇情的な格好に顔を真っ赤に染め上げてしまった。

それは…………裸体が全部透けて見えるようなピンク色のネグリジェを着ていたから。

こんな格好で人前で立っていたのかと俺は、海より深く反省した。二人が部屋から出ていってしばらくすると、体が熱くなって疼いて疼いて仕方なくなってきた。

ネグリジェの絹が太股に擦れるのが気持ちいい。

体がどんどん、敏感になっていく。

頭がぼーっとしてきて、無意識に手が胸に触れると所で、ルアが私の頭の上に乗ってきた。

「ご主人たま、気をしっかり持ってくださいでち」

「はぁはぁ、どうしたのルア？」

思考に霞がかかった状態でルアに答える。

「実はでち、ご主人たまの体を修復するのにたくさん精を消費したでち。それで男の人から精を貰わないといけない状態になってるでち」

男の人？精？纏まらない思考で単語が脳内で再生される。

「それででちね、男の人と契りを結ぶ為に思考から言動から女の子になってるでち、それに猫の状態で長時間いたでちから、猫特有の発情期になってるでち」

発情．．．．？

男、精、発情、契り．．．．．。

「それってまさか．．．．．」

「そのまさかでち」

「だから気をしっかりもってほしいでち、食べ物からも補充できるでち。明日まで我慢するでち」

でちでちうるさい。

ん、はあ、無意識に自分の胸を揉んでいた。

ダ．．．．．メ．．．．．

意識が．．．．．

そこで私の意識が、プツンと途切れた。

クレイネルと先ほど分かれて、今までどおりエルフィーナについては館で働いてもらう事になった。

本来の貴族の屋敷ならば、主や客人に手を出す時点ですぐに死刑なのだが、俺はそれをする気はなかった。

アレイクードの屋敷では貴族は俺しかない。

父も母も既に他界しており、クレイネルは俺が幼い頃から魔法や知識を教えてくれた第二の父のような存在であり、一緒に育ってきたエルフィーナは妹のような存在だ。

だが、実際、他に働いてる者の手前、今回のような騒動を起されると俺としても擁護は出来ない。

そこで、正美に判断を依頼したのだ。

正美なら、一番被害を受けていて的確だと思ったからだ。

それに、正美はひどい仕打ちをする女の子ではない。

正美を利用する形になってしまって悪いと思ったが、仕方ないと諦めてもらうしかないな。

俺は、コーヒーを飲みながら領地内から届いた書類を見てみると、扉を叩く音が聞えた。

そして、ゆっくりと扉が開いていく。
ぶはっ、思わずコーヒーを噴出してしまった。

なんと、扉が開ききったそこには、

裸体を晒し、頬を薄く赤く染め扇情的な顔つきをした正美が立っていた。

安心安全設計でち。

俺は、噴出したコーヒーが床を汚した事も気にならないほどパニッ
クに陥っていた。

何故、正美がここに来てるんだ？

それよりも、なぜ裸？

顔を背けて見ないようにしても、俺も健康な成人男性である。

気になる女性が裸体を晒していたらその誘惑には絶対に勝てないと
言い訳しておきたい。

どんなに取り繕って見ないように顔を背けても、目線は正美の裸体
を見てしまっている。

絶妙に配置された顔のパーツに絨毯まで届いている黒い髪の毛がラ
ンプの明りで星の瞬きのように光輝ひかりかがやいている。

体は、透明なピンクのネグリジェで隅々まで見ることが出来る。

身長150cmだが、女性特有の成熟した体つきがほんのりと赤く
そまっている。

瞳は少し垂れていて、熱にうなされたように瞳はトローンとして頬
はピンク色に染まっている。

そこまで考えた所で、俺は何を考えてるんだー。と頭を左右に振る
った。

いつも、あんなに美しく清楚で、憂いを帯びた瞳をしている女性が
こんな事をするわけがないじゃないか。

俺がそう考えてる間にも、ゆっくりと確実に俺との距離を狭めてく
る。

正美と距離を保つ為に俺も部屋の奥へ後ずさりする。

それにより、正美も一歩近づく。

それが交互に繰り返されて、俺はベットに足を引っ掛けてしまいベ
ットのの上に倒れこんだ。

「しまっ……！！」

声を上げたときはすでに遅かった。

正美が俺の上に、被さるようにその豊満な肉体を押し付けてきたから。

正美の体臭が鼻腔を揺さぶり、正美の妖艶な唇に視線がいつてしまう。

とてもいい匂いがする……じゃなくて！

「正美、落ち付け自分が何をしているのかわかってるのか？」

俺は抗議の声を上げながら正美の瞳を見る、そこには憂いを帯びた瞳が揺れていた。

段々と正美の瞳が俺の視界の中で大きくなっていく。

「んっ……！！？」

気がついた時には、時すでに遅く、正美の唇が俺の唇に重ねられていた。

しつとりと柔らかく艶やかな正美の唇は俺の官能を呼び覚まそうとする。

唇を触れ合わせただけで、俺の頭の中は真っ白になった。

しばらくすると、俺の唇の隙間を通して、歯の間を通り正美の舌が咥内を蹂躪していく。

俺は、自分の舌を使って押し返そうとするが、逆に絡め取られてしまい、舌と舌を擦り合わせ快楽で力が入らなくなってしまった。

倒れてる俺の体の上に乗ったまま、正美はそのまま、俺とずっとキスを交わしていた。

部屋の中では、くぐもった男女の音が響き、水音が響き渡る。

しばらくしてから、正美は、納得したのか舌を引き抜き唇を離すと俺の上半身の上着を剥がし、

腹筋にそうように右手の人差し指を下の方へずらしていく。

「まで！それはまずい」

俺のその言葉に、正美は唇を舌で舐め見せる事で答えた。

そして……。

鳥の鳴き声が、朝を告げる。

朝日が、ここの館の主、アレイの部屋の中に入ってくる。

「んっ」

男の部屋だと言うのに、伸びをした声は、とても美しい音を醸し出していた。

俺は、何かに寄り添うように寝ていた。

それは、自分より大きくて安心できる人の温もりを感じさせる。

夢うつろなまま、それに抱きつく。

抱きついた大きい手が裸の俺の胸の間に挟みこまれて太股の間に指が差し掛かる。

「……………」

あれ、おかしいな？指？

というかなんで俺以外の人の体温を感じるんだ？

そつと布団を剥がしていくと、俺は何も身につけてない状態での右手を太股に挟んだまま抱きついていた。

「な、な、な、これってどうなって！」

部屋の中を見ると、家具からベットまで俺が滞在している部屋とはまるで違う事に気がついた。

「こ、これってアレイの部屋？」

「なんで俺、こ、こ、ここにいるんだ？」

そこで、俺は昨日の出来事を思い出した。

ルアが俺の体を修復する為に、大量の力を使い、それを補充する為に男と契らないと行けない事。

そして、発情したまま、制御が効かなくなって意識が飛んで……

そこまで、考えが言った所で、顔がカーッと真っ赤に染まった。

昨日の、アレイとの一部始終が、脳裏に記憶として浮かんできたから。

「うあああああああ」

錯乱して部屋を裸のまま出て、自分が滞在している部屋に駆け込んで、ベットのの中に入って布団を被った。

次々と浮かんでくる、アレイとの情事の記憶が俺の男たる尊厳を傷つけていく。

「死ぬ、俺、恥ずかしさで死んでしまう」

昨日、アレイとキスしたことや、その後の事。そのあと……？俺最後どうなったんだ？

それでもあんな風に行動した事に自己嫌悪に陥った。

「うう、誰か俺を殺してくれ……」

ベットの中で悶えてると、布団の中で、変な手触りを感じてそれを手繰り寄せた。

そこにはシートでグルグル巻きにされたルアがいた。

そもそも、こいつが一番の元凶なんじゃないのか？

俺は怒りに燃えた眼差しをしたまま、

シートに巻かれていたルアを開放して両手でガシッと逃げられないように固定した。

「ありがとうでち、ご主人たま？」

クリッとした純粋な眼差しで俺を見つめてくる猫もどき小動物。

「ルア、お前のせいで俺はすごい恥辱を受けたんだぞ？どうしてくれるんだ！」

「だから、僕はご主人たまに言ったでち、耐えてくださいでちっとうっ！そういうええそんな事を言われたような気がする……」

「それに、ご主人たまの体を直す為、長時間憑依してたから自動的に契約になっちゃたでち」

「自動的じゃねえええ」

叫びながらルアをベットの天蓋を支えている柱に投げつけてしまった。

ルアがくるくる宙を舞いながらベチツと柱にぶつかる。

そして、鈍い音を立てて、ベッドの上に落ちてきた。

俺はそれを見て、ハッとしてやりすぎたと思い、すぐにルアを胸元に抱き寄せた。

「すまない、大丈夫だったか？」

「大丈夫でち」

俺の問いかけに、どこも怪我がないように反応してくれた事に安心した瞬間、背中にすごい衝撃を受けて息が出来なくなる。

「カ……ハッ。ど、どうなって……？」

痛みで思考が麻痺してしまい、考える事が出来ない。

「ご主人たまは、僕と契約したから使役獣のダメージはご主人たまに100%還元されるでち」

段々と痛みが引いてきた俺の頭にそんな言葉が入って来た。

「なんだと、なら俺が受けたダメージはルアが引き受けるのか？」

「そのへんは、大丈夫でち。安心安全設計でご主人たまが受けたダメージはご主人たまの物、使役獣が受けたダメージもご主人たまの物でち」

全然、安心安全設計じゃねえー。思わず心の中で盛大に突っ込んだ。

罪を憎んで人を憎まずだよ！

俺の名前はアレイクード・フォン・アーカルスドという。

この館の主であり、国に遣える公爵家の当主である。

早駆けの途中に、拾ってきた見目麗しく、清楚にて可憐な正美に一目惚れをしてしまい館に連れてきてしまっただけから退屈しない日々を送っている。

先日は、幼馴染であり、頭が上がらないメイド副長のエルフィーナの暴走により、手酷い事件が起きてしまった。

最後は、正美が一人で解決しエルフィーナと共に館の門前に倒れていたのを兵士が発見したのがつい3日前だ。

そして、昨日の夜に突然正美が俺の寝室に来て寝込みを襲ってきた。まさか、逆夜這いをかけられるとは思わなかったこともあり、かなり動揺してしまった。

途中まで正美にキスもされ放題だったが、正美の手が俺のズボンの中に入ってきた時に、ベットの上で押さえこんだ。

しばらくは、

『ほしいよー。我慢できないの。ねえ？お願いだからしてー。』

と言っていたが、明らかに正常の精神状態では無い事は一目で理解できた為、ずっと押さえつけたままにしていたらいつの間にか正美が寝ていた。

俺の寝室には、女の寝巻きは無い為、しばらく様子を見ていたが俺も眠くなってしまい寝てしまった。

俺の眼が覚めたのは、正美が叫びながら俺の寝室から飛び出して行った時だった。

正美が顔を真っ赤にして裸で走っていったのを見て、普通に戻ったのかと思ったと同時に残念に思った。

俺だって、健康な一成人男性という事もあり、そういう知識も正美を抱きたい気持ちも無くは無いが……ああいう状態は良くないと思う。

王国の男の諺で、求めてきたモノは丁重に頂けというのがあったが……。

そこまで考えて、俺は服に着替えて部屋を出た。

向かう先は、エルフィーナの部屋になる。

昨日決まった内容をエルフィーナに伝える事にある。

エルフィーナの部屋前につき、ドアをノックするとエルフィーナの声が聞えた。

中へ入る事を言った後、エルフィーナの部屋に入ると、所狭しと本が塔を作っていた。

これは、絶対、女の部屋じゃないだろと思いつつエルフィーナの部屋の椅子に座ると出された紅茶に口をつけた。

ローズマリーの香りが鼻腔をくすぐり落ち着く。

俺が彼女を見るとすっかり萎縮してしまっている。

あれだけの事をした後だ。普通なら手打ちでも問題ない。

「エルフィーナ」

「はい……。」

怯えてしまっているな。

クレイネルが、エルフィーナから聞いた話によると、ジェードとエルフィーナの精神は繋がっていたらしい。

つまり、俺と正美を自分自身の手で傷つけたという事になる。

俺は、心の中で溜息をつく。

「お前の今回の犯した問題は、正美に判断を委ねた。この屋敷で一番、害を受けたのは正美だしな」

「はい……。」

「正美からの答えは、今回の事に関しては不問にするという事だ」俺の言葉を聞いて、エルフィーナが信じられないと言った表情をした。

まあ俺も普通は信じられないがな。

自分を殺しかけた術者に何も求めずに無条件で許してしまうなど普通はありえない。

俺や、エルフィーナみたく幼馴染などでもなく、親戚や親族でもないのに、そんな事は普通はありえない。

特に王族、貴族は親族同士でも当主や王の座を手に入れる為に、暗殺などが日常的に存在するのに。

エルフィーナは以前、正美は高貴の出と言うのを報告してきた。だがそれは違うと俺は思う。

一般市民でも無いと思う。

ジェードに取り憑かれたと言えど、クレイネルと俺を相手どり逃亡したエルフィーナをたった一人で正氣に戻し、
捉えてくるなんて王宮煉研おうきゅうれんけんの十使徒に匹敵する。

そして、無条件で相手を信用し許すという事は恐らく平和な国から来たか、箱入り娘だと推測がつく。

だが、問題は、前者であれば平和な国だとエルフィーナを捕まえるほどの力があるのが気になる。

なぜならば、エルフィーナを捕まえる事が出来たのならば、最初あった時の魔物を一蹴できていたはずだからだ。

それに昨日の夜の正美の様子も普通ではなかった。

そこまで考えた所で言葉が聞えてきた。

「それでは、私をまだこのお屋敷に置いて頂けるのですか？」

「そうだ、また正美の専属という形を取らせてもらうが問題ないか？」

「は、はい。ぜひ、よろしく願います」

俺の前でエルフィーナがひさしぶりに涙を浮かべて笑っていた。思わずその笑顔に眼が釘付けになってしまった。

「さて、俺はもう執務室に戻らなければならない、朝食の準備が出来たら俺の所へ報告にきてくれ」

「はい、わかりました」

俺はエルフィーナと話して、肩の荷が下りたのを感じて部屋を出た。通路を歩いていると、クレイネルが立っていた。

「アレイ様、ありがとうございました。」

「礼なら正美に言ってくれ。今回は俺はあまり力になっていないしな」

軽く言葉を交わし執務室に入り、俺は書類に眼を通し始めた。

人物・世界観編集2

人物編集

《桂木正美》
かつらぎ まさみ

大学を出たが、彼女に振られしかも就職も決まらない典型的なダメな人。

すでに両親と祖父・祖母は他界、天涯孤独。

異世界へ飛ばされたと同時に体が女性化。

他の追従を許さないほどの美貌を手に入れる？

身長は150cmほど。

《桂木正美の使役獣》
かつらぎ まさみ

ルアカーゼ
幻獣王
まさみ

正美の事を幻想大陸に飛ばした謎の声の主が正美を守る為に授けた使役獣
しえきじゅう

《謎の声》

正美の中に寄生している人？とにかく人の話を聞かない。

《アレイ》

正式名 アレイクード・フォン・アーカルスド公爵 公爵領領主

《エルフィーナ》

アレイクード公爵邸のメイド副長。アレイの幼馴染

《クレイネル》

エルフィーナの父。王宮内でも屈指の医療技術を保有していた

《レイユーズ公爵》

貴族達から嫌われている。権力、お金大好き

《フィンナ》

レイユーズ公爵の娘

《ルフィン》

フィンナの母親であり、レイユーズの奥方。

世界観

《アレイクード公爵邸》

正美いわくバイオハザード1の洋館らしい？

《幻想大陸ルシアード》

桂木正美が謎の声により飛ばされた世界。

ルアの考察。

僕の名前はルアカーゼ。

ご主人たまの名前は正美^{まさみ}って言うの。

猫の姿をしてるけど、一応昔は、幻獣王と呼ばれてました。

ご主人たまに言ったのに、信じてもらえずにルアって名前をつけられてとっても不服なの。

ご主人たまは、僕の事をいつもひどく扱うし、シートでぐるぐる巻きにしたり柱に投げつけたり怖い眼でみたり言葉攻めしてきたりする。

僕は、Mっ子属性はないから困るの。

でも僕は知ってるの、ご主人たまは、誰にでも優しいことを自分の身の危険すら顧みないで助けにいくことを^{かえり}。

ご主人たまの心はとっても強いけど、とっても脆いの。

あの方が言ってた通り。

でもあの方のおかげで僕が相手に話す内容は全部、語尾に《でち》がついちゃうの。

楽しいからいいって、あの方は言ってたけど……幻獣王虐待だよ。

この幻想大陸ルシアードは、絶対的な階級制度で出来てる。

長い長い間、人の生活を僕は見てきたけど、たくさんの人たちが些細な事で貴族に殺されてきた。

だからご主人たまの考えはよくは分からないでちけど、きっとすばらしく発達した倫理観念をもった世界からきたと思う。

あ、ご主人たまが呼んでる。

俺は、ぽけーとしてたルアを呼んで近づいてきた所で、頭をガシツと鷲掴みにして持ち上げた。

《やめて、やめてください、ご主人たま》

「なるほど、どうやら致命的な痛みじゃない限りは中々フィードバックはしないよ．．．．う」

くああああああ、頭が割れるように痛い。思わずルアを離してしまいベットの上に落としてしまった。

ベットの上で座ってる状態で、持ち上げたからからベットに落下してもそれほど衝撃がないと思っていたが、

胃の内容物が逆流してきそうな程の衝撃を受けた。

ルアを良く見ると、ベットの角にお腹をぶつけていた。

「お、ま、え．．．．．な．．．．．」（後半の絶対わざとぶつけただろう？）という言葉は心の中で吐きながら俺は、ベットの上で意識を失った。

次に眼が覚めた時、もう日が沈み部屋の中はランプの明りで照らされていた。

誰か人がいる気配がする。

ランプの明りが届かない場所から青色の髪をツインテールにしたエルフィーナが、

タオルを水でしぼっておでこにのせた。

「眼が覚めたのですね。倒れられていましたから、アレイ様も私もとても心配しました」

心配そうな顔をして俺の顔を覗き込んでくる。

「もう、大丈夫です。」

「そうですか．．．．．」

俺は、そのまま体をベットの上で起すと、エルフィーナが俺の前でモジモジしているのが分かった。

だって視線が俺と自分の手元を交互にみているから。

俺は、話してくれるまでじっと待つことにしてベッドの上でぐたと寝ているルアを胸に抱き抱えた。

ルアは抱き抱えられると体をプルルと揺らしてから、首をくたつと倒して寝始めた。

こいつって本当に身を守ってくれるのかなーと疑問におもってしまった。

「えっと、正美様」

「は、はい!？」

余計な事を考えていたので、返事した声の上擦ってしまった。

「正美様が3日前の騒動を不問にしてくれるとアレイ様から聞きました」

俺はそこで、頭の中を整理していく。

そういえば、そんな事を聞かれた気がする……………。

「うん、そうだね」

俺の返答にエルフィーナが真剣な眼差しを向けてきた。

「何故、ご自分の命を危険に晒した者を助けたりするのですか？」

何故と言われても……………。

「だって、結果的にそうなっちゃっただけで、元々、命を狙おうとかしてた訳じゃないんだろ？」

なら不可抗力じゃないか。あんまり深く気にする必要はないんじゃない？」

私は正美様の言葉に、不可抗力と言い切れるほど信用していてくれる事に感謝の言葉もなかった。

「そうですか……………。正美様、ありがとうございます。信用に答えられるようにより一層、正美様のお世話に力を入れて行きたいと思います」

なんか、エルフィーナさんの瞳が燃えてる気がするよ？

ここは一言言っておかないと大変な事になる気がした。

「え、エルフィーナさん？ ほどほどにお願いします」

俺のその言葉に、エルフィーナは「はい！ 全身全霊でお答えします」と答えてきた。

ここにも、人の話を聞かない人がいたと思い知った瞬間だった。

クレイネルのお仕事場なのじゃ

ーアレイクード公爵邸・黎明庫れいめいー

一説によると、王家より古いとされる系譜をもつアーカルスド家の初代当主が発見した場所とされる。

ここの書物には、禁書など人に害を成すモノは存在はしないが、遥か昔の粘土板や石板に書かれた数多くの貴重な資料が眠っている。大半は、遥か昔に失ってしまった文法や文字で書かれているため、読み解く術すべがない。

黎明庫の多きさは地下にあるというだけあって半円のように広がっており、

直線にすると200mを超える。

蔵書の数数千に及ぶだろう。

ここを王家が徴収しないのは、文献に書かれてる内容の言葉が古すぎて解読ができないからである。

それでも、他国へは渡したくない王宮は、アーカルスド公爵家へ、ここの守番をするように通達していた。

それからずっと、守番をしているだけで特に黎明庫へは足を踏み入れる事を

代々当主としてはこなかったが、一人の男が仕官する事により話は変わった。

クレイネル・ディストラード

クレイネルは幼少の頃、エルハンス王国首都イースバールには、隣国との戦争により多くの戦争孤児が存在していた。クレイネルもその中の一人だった。

戦争孤児であったクレイネルは、その膨大な魔流力を見込まれ、王宮に召抱めしかかえられた。

師事した師が良かったのか12歳で成人したときには、クレイネルの名前を王宮内部で知らない者は居ない程であった。

《卓越した治療技術》

《膨大な魔流力》

《制御する技術力》

そして、明晰な頭脳を使つての古代文字の解析能力。

古代文字の解析については、危険性が高いという事をクレイネル自身も理解していただけに知る者はいなかった。

一時期は、最年少にして王宮十使徒入りは確実ともされていたが、権力に無関心な気質を伴つてその話は何時の間にか流れていた。

しばらくしてから政変が置き、クレイネルは王権争いに巻き込まれた。

貴族や有力な候補はクレイネルを味方に引き入れようとしたが、クレイネルは無関心を通した。

その態度を気に入らなかった貴族達は、あらゆる手を使い、クレイネルを王宮から排除した。

その時に、手を差し伸べたのがアレイクードの父である前当主であった。

クレイネルがこの館に来てから、しばらくすると、遊び半分で先代当主はクレイネルに守番けいしきを任せていた。

長い間に、守番は形式けいしきだけになっており誰がついてもいい事になっていたからだ。

時には見習いのメイドがついていた事もあるくらい。

アーカルスド家に仕官したとはいえ、治療師としてはそんなにいつも怪我をする人がいるわけでも無い事から、暇を持て余していたクレイネルにその仕事が回された事は必然であったと言える。

逆を言えば、メイドより暇だろ？という安易な考えにも取られるわけだが……

だが、クレイネルにとってこの黎明庫は宝の宝庫であった。

子供が宝物を見つけたように瞳を輝かせて、古代文書を読み漁り砂が水を吸うように吸収していく。

アーカルスド公爵家に仕官してから10年ほど経ったある日、5歳になった娘のエルフィーナとアレイ様は、黎明庫で遊んでいた。たくさん珍しい書物や粘土板、通路があるここは、子供達にとって秘密の隠れ家みたいな物なのだろう。

アレイ様が父親の前当主に呼ばれて黎明庫を出て行った後、娘の方を見るとエルフィーナが一個の粘土板の文字を読んでいた。

私は思わず、立ち上がり、エルフィーナの方へ歩いていくとそれは私ですら解析できなかった古代文字で書かれた粘土板であった。

エルフィーナは未だ、5歳。

それなのに、文字を自然に読み解いていた。

その日の夜、娘のエルフィーナに私はどうして読めたのか？と聞いてみたところ、

「粘土板についてる光が教えてくれたの」と無邪気に話してくれていたが、

その危険性に私は気がついていてた。

王宮に所蔵されてる禁書。

それは危険であるが読み解く事が私を含めていないからこそ、大きな争いに使われる事はない。

それをエルフィーナはもしかしたら読み解く事ができるかもしれないのだ。

だからこそ……私はエルフィーナには極力、黎明庫には近づけないように教え、

魔流認識阻害魔法をかけて本からは遠ざける事にした。

その結果、娘は光を見ることはなくなったが、弊害としてこの世界では誰でも使える魔法が使えなくなってしまった。

エルフィーナは自分が何故、魔法が使えないかを独自で研究しだし怪しげな書物を買ひ漁り、その結果、先日の事件が起きてしまった。

正美様が、娘を助けてくれた事はいくらお礼を言っても言い足りないほどだ。

だからこそ、正美様のお力になればと、私は寝食をここの黎明庫で行い、書物を調べていた。

顎鬚をさすりながら一冊の書物を読み解いていると一冊の本が棚から落ちてきた。

「なんじゃ？」

私はその本を、床から拾い上げると表紙を開いた。

中には書類を止めるバインダーがついてるだけの珍しい本であった。タイトルには………

「系譜原書」

と書かれていた。

私はそのタイトルをどこかで見た事があった。

すぐに心辺りを探していくと、一冊の書物を見つけた。

「たしかこれに書いてあったと思うのじゃが」

一人事を呟きながら、歴史書に眼を走らせていく。

しばらくすると、一節の詩に系譜原書というのが書かれていた。

墮落した人間達を戒める為、系譜原書を使い、数多の精霊を従えし

時の王は、世界を海の底へと沈め清めようとした。
生き物の死を悲しんだ、王妃は………を作った。

最後の一節が虫食いになっており読み解くことができなかったが、
歴史書に書かれてる事が本当ならばかなり危険な代物と言うのがわかる。

私は、系譜原書を唯一鍵がかけられる自分の私物が入っている机の中に入れ鍵をかけた。

「お父さん。」

娘が後ろに立っていた。

どうやら、集中しすぎて近くにいたのを気がつかなかったようだ。
娘は、夕食を机の上に置いた。

「エルフィーナ、正美様の容態はどうじゃ？」

「大丈夫みたい、でもお腹押さえて倒れてたからきつとどこかにぶつけたのかしら？」

「そうか」

我は会話しながらふと考えた事があった。

いつ結婚するのじやろうと………娘ながら、よく気がきくし、
母親に似ていて器量も悪くはない。

それでも20歳という行き遅れで、結婚が出来ないのは人の話を最後まで聞かずに暴走すると言うのが問題なのだろう。

よく、紹介した男がドン引きするほどの行動力を見せておるしの。

「お父さん、何か私の事で失礼な事、考えてなかった？」

「特に何も考えてはおらんぞ、正美様に謝ってくるのじやろう？早くいってきなさい」

女性というのは鋭いものじゃな。

ますます最近、母親に似てきておる。

部屋を出ていく、私は、エルフィーナを見て感慨に浸っていた。

やさしいおやすみのお歌

気がつくとも何もない白い空間に俺は立っていた。

俺は盛大に溜息をついた。

このパターンってあれだよな。

あの寄生虫が出てくるパターン。

俺は、声が聞えてくる事に対処する為、身構えていたがいつまでたっても変化は訪れなかった。

「おかしいな？いつもならここで頭の中で激痛が走るのに……」

立っていても変化が無かった事から俺は、何もない空間を歩き始めた。

どのくらい歩いただろうか……時間的感觉が狂って居るのかどれほどの距離を歩いたか分からない。

精神的に歩くのが辛くなって来た所で突然回りの景色が切り替わった。

辺り一面小金色の麦畑が風にやさしく撫でられていた。

「かあさま！」

一人の青色の髪の子が俺に抱きついてきた。

「もう、甘えん坊さんね」

俺の口から勝手に言葉が紡がれた。それと同時に、俺の意志に反して体が勝手に動き、

女の子の頭を撫でる。

女の子も気持ちいいのか、俺の胸に顔を埋めてグリグリしてる。

「かあさまの匂い大好き」

そう言っている女の子はとても幸せそうな顔をしていた。

「仕方ないわね」

俺の体が女の子を抱き抱えて、歌を歌いながら小麦畑を歩いていく。知らない歌に俺は戸惑いながらもやさしい音色の歌に聞き入ってしまう。

女の子も歌を聞きながら瞼を閉じている。

小麦畑の中にある木作りの一軒屋に入っていくと、どこかで見たことがある男が一人の怪我人を治療していた。

その男は、俺の姿を見ると溜息をつく。「また表に言っていたのか、あまり無理はするなよ」と言ってきた。

「大丈夫よ、あなた。無理はしていないわ」

「それならいいのだが……」

「とうさま、けんかはいや」

男は女の子を抱き上げると「けんかなんかしてないぞ」と言いながらやさしい顔で女の子と俺を交互に見つめていた。

「本当に無理はするなよ？ 娘を産んでからずっと体の調子が悪いのだから」

「ええ、大丈夫よ。今日はとっても調子がいいの」

「そうか」

男はそういうと納得したのか、次の患者を呼び診察を開始していた。

場面は変わり俺は、夕食の支度をしていた。

女の子が食事の支度をしてる間にテーブルの上に木のお皿を置いていく。

「かあさま、用意できたの。えらい？ えらい？」

「ええ」

そういうと、俺は女の子の頭を撫でていた。

「かあさま、今日のごはんは？」

「今日は絞リたてのヤギの牛乳を使ったお野菜のシチューとパンよ」

「かあさまのシチューすきー」

俺は出来たシチューを木のお皿に盛っていく。

そこで、先ほどの男性が部屋に入って来た。

「フィーナ、無理をしたらいけないとあれほど言ったのに、まったく仕方ないな」

「ごめんなさいね、あなた」

「お前が俺の話を聞かないのは前からだからな、もう慣れた」

「とうさま、かあさま、けんかしたらいやー」

大きな瞳に涙を湛えた女の子が二人に抗議してきた。

「あ。いや、その、なんだ？フィーナの作った料理が冷めてしまうから食べてしまおう」

男性がテンパってしどろもどろになりながら会話を変えた。

俺はその男性の態度にくすくすと笑っていた。

女の子は俺の笑った姿を見て、すぐに笑顔になってくれた。

「それでは、ご飯を食べましょうね」

椅子に俺が座ると女の子は膝ひざの上に乗ってきてから食事をした。味覚が遮断されているのか、味が分からなかった。

味だけじゃなくて、言葉も体もまったく別の人が動かしてる気がする。

食事が終わった後、女の子と二人でお風呂に入っているときに、髪の水が腰まで届く青色だった事に初めて気がついた。

お風呂を出たあと、眠そうにしていた女の子を俺は抱き抱えたままベットに向かっている途中で胸が大きく鼓動を鳴らしたと思った途端に視界が暗く染まっていくのを感じ意識を失った。

気がつくと、ベットの上で俺は寝ていた。

「かあさま、かあさま、いや、かあさま、死んじやいやあ！」

俺は男の方を見ると辛そうな顔を俺に向けてきた。

俺にも分かる。この体はもう、死に掛けている。

死にかけの体を支えているのは俺じゃなくて、母親が娘を思う気持ちを支えているのだろう。

「エルフィ、ごめんね。とうさまの言う事を良く聞いてこれからは生きていくのよ」

「いやー。かあさま、いやー」

「クレイネル、ごめんなさいね。私はここまでみたい、あとはエルフィーナを立派に育ててあげてね」

俺の体そう言うとかレイネルはベットの中に入っていた俺の手を両手で握り締めてから「わかった」と呟いた。

「エルフィ、こちらへいっしゅい」

「かあさま……」

震える手でエルフィの頭を撫でてあげると瞳に涙を蓄えながらも嬉しそうな顔をしてくれた。

そこで力尽き、エルフィの頭を撫でていた手が力を失ってベットの上に落ちた。

エルフィは瞳を虚ろにしたまま、「かあさま？ かあさま？ かあさま？」と何度もベットの上で冷たくなっていく母親の体を揺すりながら泣いていた。

場面が切り替わって、部屋の中で浮いてるような状態で俺は診療所の中を見ていた。

そこでは、クレイネルが今後の経過を説明していた。

産後、調子が悪い時は、絶対に無理をしないようにしてくださいと言って妊婦とその男性に説明してから診察を終らせていた。

その場面を、診療所の扉の隙間から10歳近くまで成長したエルフィーナが覗いていた。

私は、父様の話を聞いて頭の中が真っ白になった。

母様は、私の記憶の中だとずっと体の調子が良く無かった。

産後、体の調子が悪いときは？ それって私を生んだから母様は死んだの？ 私が殺したの？ 私が殺したんだ。わたしが……

その日は、父様が食事を作って部屋まで持ってきてくれたけど食べる事が出来なかった。

父様は私が話しを聞いていたのを知っていたみたいで、一言だけ私に語りかけるように言ってくれた。

「お前の中のフィーナは、どんな顔をしている？」と．．．．．私の中の母様はいつもやさしくて、おっちょこちょいで、人の話を聞かなくて強引な所があった。

でも、私を嫌っていなかった。私を愛してくれた。

そこまでで、父様は私の頭を撫でてから部屋を出て行った。

私の中ではまだ蟠り^{わだかま}が残っていた。

その場面を俺は浮いて見ていたが突然視界がブラックアウトして眼が覚めた。

瞼を開けると、エルフィーナが横で寝ていた。

きつと俺の看病を引き続きしてくれていたのだろう。それでそのまま寝てしまったと．．．．．

「かあさ．．．．．ま」

「ん？」

気になって、声が聞こえた方へ視線を向けるとエルフィーナが苦しそうな辛そうな表情をしてうわ言のように呟いていた。

ああ、そうか、あれはエルフィの夢の中の出来事だったのか。

俺はエルフィーナの母親フィーナが娘のエルフィーナに歌っていた歌を頭を撫でながら歌ってあげた。

しばらくすると、エルフィーナは幸せそうな顔をしながら、「かあさま」と瞼から幸せそうに涙を流していた。

エルフィーナと俺を窓から差し込んできている淡い月の光がやさしく照らしていた。

小動物は檻の中に入れないとイケナイと思う。

天蓋のついてるベットのの上では、日の光により一人の少女が照らされていた。

ベッドの上に広がる黒髪は日の光を反射して星の煌^{きらめ}きのように光輝^{ひかりかがや}く。

それはまるで湖面^{こめん}が光を反射するようにキラキラと光っており幻想的でした。

細く長い少女の眉毛が動くと、身動きしてからゆっくりと瞼を開けていった。

目を覚ますと、すでに日が昇っていた。

ベットで一緒に寝ていたエルフィが居なかった事から、気を使って部屋から出て行ってくれたのだろう。

「んっ」

自分で上げたとは思えない程、悩ましい声を上げながらベットの上で猫のように背伸びをした。

・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・。

猫のように背伸びした俺の視界には自分の手がモフモフの猫手になっていて足も膝から下がモフモフになっていた。

しかも、薄いネグリジュを着せられてるせいで体の線から何から何までばっちり見えてしまっている。

俺は一瞬放心したあと、すぐに現実に戻ってくることができた。

慣れっという物は怖いものだ。それよりも……。

「おい、ルア、どこにいる？」

《まだ眠いでち〜ご主人たま〜》

「眠いじゃねえ、お前の声が頭の中から聞こえてるって事は、また俺の体の中に入ってるのか？」

《ん〜そうみたいでち》

「そうみたいでち〜じゃないだろ。さっさと出ろ」

《分かったでち〜。えい、あれ？えい、あれ？》

「どうしたんだ？」

《ご主人たま、ごめんなさいでち》

なんか嫌な予感がどんどん膨らんでくる。

まさか出られないとかそういう落ちか？

《ご主人たまの体から分離出来ないでち》

はい、予感的中。

「まじか？いつ出られるんだ？何か原因あるんだろ？」

《わからないでち、昨日、ご主人たまの胸の谷間でぬくぬく寝ていたらこんな事になっていたでち》

「あー。いやー。なんだ、その。俺さ、今、むしように、殺意が芽生えたんだが気のせいだよな？」

《キノセイでち！気にしたらまけでち！》

「そうか、キノセイか、フフフフ」

《ご主人たま、笑い方がこわいでち！》

「キノセイだよ、ルアカーゼくん」

《絶対気のせいじゃないでち、ご主人たまの体から絶対出ていかないでち、出たら危険な香りがするでち》

「大丈夫だよ。怒ってないから頑張っ出てきなさい？」（ニコッ）

《（ガクガク、出たら酷い事絶対する気でち、怖いでち、危険でち、きつとシャツでぐるぐる巻きにされるでち）》

そんな事をしていると、扉をノックする音がしてからエルフィーナが部屋の中に入って来た。

「正美様、もう起きられたのです．．．．．か？」

俺を見て、エルフィーナが固まっていた。

そして．．．．．。

「きゃー。かわいいですー」

俺の方へ、獲物を見つけたチーターのように走ってきた。手が届く一歩手前の所で足を止めた。

「うう、モフモフしたいのに、でもダメよ。私、耐えるの。あんなに正美様にきちんと仕えるって誓ったんだモノ」

「えー、エルフィーナさん？」

あまりのエルフィーナの剣幕に俺は完全に引いていた。それが言葉にも出てしまう。

「お耳に尻尾に両足のモフモフ、触って愛でて舌を這わせて甘噛みしてみた」

俺の問いかけを完全にスルーしながら、自分の心の欲望を口に出しながら息を荒くして手を怪しげにニギニギしている。

もしかしなくても、これは俺の危機なのか？

エルフィーナが一歩俺に近づいてきた所で、鈍器が頭にぶつかる音がすると同時にエルフィーナが床に倒れた。

絨毯の上には、血が広がっていく。

じ、事件か？

俺はエルフィーナを倒した人を見ようとすると、エルフィーナより一回り小さいロングレイヤーの緑色の髪をした女性が銀色のお盆を持って立っていた。

「おはようございます、正美様、私の躰が行き届かないばかりにいつもご迷惑をおかけします。」

突然の事に頭がついていけない俺はそれは、「いえ」としか言い返す事が出来なかった。

その女性は部屋の外に向かって人を呼ぶと一人のメイドさんが入っ

て来た。

紫色の髪をポニーテールのようにしている。身長は俺より若干高いくらい155cmくらい？

そのメイドさんは俺の方へ近づいてくると、ペコッと頭を下げてから口を開いた。

「私の名前は、イリシア・ローストと言います。しばらく正美さまのお世話を任されました。よろしくお願いします」

「あ、ああ。こちらこそ、よろしく」

俺は、事態の把握が出来ていない事もあり、中途半端な返事を返してしまっていた。

「それでは、私はこれを連れていきますね。しっかりやるのですよ？イリシア。」

「はい、わかりました。エメラスさん」

イリシアが返答を返すと、納得したのかエメラスと言われた人がエルフィーナの足首を持ってから床を引き摺^ずるような形で部屋から退出していった。

なんか、床にこすり付けられて、エルフィーナの頭からゴリゴリ音がなっていたが気にしない事にした。

「えーと、イリシアさん？」

「はい、正美様なんでしょうか？」

「さっきの方は？」

俺の問いかけに一瞬考えたあと、教えてくれた。

アレイの母親であり、元公爵家の妻であり、現公爵家のメイド長のエメラスという事を。

飛び出せ！使役獣

えーあーそうなんだ。

エメラスさんってお母さんなんだ．．．．．

あの容姿で．．．？

身長なんて140cmくらいしかなかったよ？しかも中学生くらいの容姿だったし．．．．．

遺伝子の奇跡？というか突然変異？

いきなり言われた事に俺は動揺してしまい、思考が纏まらない。

俺が、思考を纏めてる間に、髪の毛の間に生えている白い猫耳がピコピコ動いて、ネグリジェを破いて飛び出している白い猫尻尾が左右に揺れる。

それをイリシアさんが興味深く観察していた。

俺の思考が纏まらない間にイリシアが左右に振られてる尻尾を「ぎゅっ」と掴んできた。

「ひゃあああああん」

俺自身、自分の口から出たと信じられない程の声を上げてしまった。それと同時に、体中の力が抜けて、ベットの上で「へにゃ」と倒れてしまう。

「正美さ．．．ま？」

イリシアが俺が突然声を上げて倒れた事に驚いて、尻尾から手を離して声をかけてきてくれた。

「大丈夫ですか？正美様」

「う、う．．．ん、だいじょう．．．．．ぶ」

俺は、息を切らしながらも、イリシアの声に反応するが、体の奥が「じゅん」って熱く火照ってるみたいでモドカシイ感じの波が体中を駆け巡っている。

《ご主人たま！やばいでち。発情モードになっちゃたでち》

なっちゃたでちじゃねー。心の中で突込みながらも、俺は混濁してる意識の中で、この小動物をあつでジェノサイドする為のリストに書き加えることにした。必死に俺は薄れ行く、意識を繋ぎとめながらイリシアさんを部屋から出す為に声をかけることにした。

「イリシアさん．．．」

私は名前を、正美様から呼ばれたので正美様を見ると、瞳を潤ませていました。

小さく形が整った真っ赤な花の様な口元からは、一筋の光る液体が流れ、正美様の透明なネグリジェを塗らしていました。

それは、とても扇情的でいて魅惑な色香を漂わせていて、同性でも虜にするくらい美しい。

私は、正美様の口元に自分の唇を無意識に近づけていきました。

俺は、イリシアさんがキスをしてこようとしてるのに驚き、離れようとしたが力が入らない事もあり、ベットの上で覆いかぶさってキスをしようとしてるイリシアさんを見ている事しか出来ない。

あと数センチでキスされるところで、小動物がいきなり俺から分裂して、俺の変わりにイリシアさんとキスをしていた。

助かった．．．．俺は安心しながらも

同時に俺の体の中に、渦巻いていたもどかしい感じも消えうせていく。

そして、体を普通に動かす事が出来るようになった。

イリシアさんは小動物とキスした途端に、瞳を開けて俺を見てきた。

あれ？私ったら何をしようと．．．．気がついたら私は白い毛並みの動物とキスをしていました。

．．．

かわいい

私は思わず、その動物を「ぎゅーっ」と抱しめていました。

なんか「ぐへっ」って声が聞こえて来たとうな気がするけどキノセイにします。

私が動物を抱いていると、突然、正美様が動物の頭を片手で鷲づかみにしてきました。

「正美様？」

「うん？どうしたの？」

正美様は、笑顔で話して来てくれますけど、何故がすごい怒ってる気がします。

もしかしたら、私は何か粗相そそごうをしてしまったのかと思っていますと

「イリシアさん、少し、目を瞑つむっておいてくれるかな？」

正美様は、私にそう告げてきたので、私は、瞼をすぐに閉じました。しばらくするとベットから、正美様が降りる音が聞こえてきました。

俺は、ベットから降りると「やめてーご主人たまー」と抗議を上げてるルアを無視したまま、驚掴わしづかみにした、ルアを空中にブラブラさせたまま、部屋に設けてある窓を開けた。

そして、ルアをベットのシーツと枕でグルグルに巻く。

これで、枕が緩衝材の役目になって俺には痛みは来ることはないだろう。

俺はそのまま、窓の外へ投擲とうてきのように庭へ向けて投げた。

「ご主人たま、ひどいでちー」

ルアは、そんな抗議をしながらも放射線状に庭に落ちていき、運がいいのか悪いのか木々の間に「スポッ」を見事はまに嵌はまった。

俺は、復讐を遂げた事に、満足しながらベットに戻った。

「イリシアさん、目を開けてもいいですよ」

俺の言葉に、ビクッと反応してからイリシアさんは瞼まぶたを開けて俺を見てきた。

「あれ？正美様、さっきまで白い動物がいたと思いますが？」

「キノセイじゃないのかな？俺はそんなの見なかったよ？」

「そ、そうですか……」

しばらく、イリシアさんは考え込んでいたみたいだけど、朝食まで時間もありませんし、お風呂に入りませんか？と俺に聞いてきた。

え？お風呂？

混沌な朝食

廻り、廻る時の中、何もない中空に一粒の雫が突然降り注ぐ。

それにより、波紋が生まれ世界を構成している、混沌と言う白い空間を震わせていく。

浮きし善のモノは空へ

積もりし深きモノは地へ

生まれし浮きしモノは空へ浮かび上がる大陸と神と精霊なる。

地に積もりしモノは万物を総べる存在となる。

神々は空へ浮かべし大陸の名をいつか消えてしまうという思いを込め、幻想大陸ルシアードと呼んだ。

部屋の中で男は溜息をつきながら、一冊の本を書棚に戻していた。俺は、過去の創生歴史から何か正美のヒントになるようなモノがあ

ればと幼少の子供に聞かせる本を読んでいた。

クレイネルの話によると、魔法が効かないのは正美で二人目という事だ。

一人は言わずとも知れず、大陸を消滅の危機から救った姫巫女であり、世界的に信仰されているもっとも人気の女神でもある。

扉をノックする音が室内に響き渡る。

「アレイ様、食事の準備が整いました」

どうやら、朝食の時間になってしまったようだった。

「わかった、すぐに向かうと伝えておいてくれ」

俺を呼びにきた、メイドは「分かりました」と言った後、すぐに食堂へ報告に向かったようだった。

まだ寝巻きのままだった事もあり、すぐに私服に着替え、食堂に向かうことにした。

食堂に入り、部屋を見渡すと、思わず一歩、下がってしまった。

俺の視線の先には、目を虚ろにして席に座っている正美の姿があった。

正美の隣では、イリシアが困った顔をしていた。

イリシアは、正美の両肩を両手で掴んで揺さぶっていた。

何かあった．．．の．．．か？と思わず口に出しそうになるのを堪えて、心の中で呟いていた。

「イリシア」

俺のその言葉に、ビクツと体を揺らして俺の方を見てくる。

「お、おはようございます。アレイ様」

「何かあったのか？」

「いえ、特に問題は無かったと思います」

そのイリシアの返答には特に、何か問題があったような響きは感じられない。

だが、正美が虚ろな眼差しで何か呟いているのが聞こえた。

女と一緒に風呂は、女と一緒に風呂は、とうわ言のように呟いている。

どうやら、お風呂に入ったときに何か問題があったと考えるのが妥当だが、それは紳士として聞くべきなのか迷う所である。

今の食堂は、虚ろな瞳でブツブツと呟いている正美と、それをなんとかしようと肩を揺すってるイリシアと、それを観察している俺の3人

そして、朝食の準備をしている給仕達だけ。

朝食の風景としては、些ちやうどか赴おもむきに問題があるような気がしないでもない。

そこで、俺は子供に良く聞かせる本の内容を思い出した。

それは、悪い魔物に呪いを掛けられ、眠らされた王女を男性が口付けで呪いを解くという内容であった。

もしかしたら、先日のジェードの問題もある。

正美の瞳が虚ろなのも何かの呪いなのかも知れないと俺は結論づけ、正美の方へ歩いていき正美の顎に手を添えると多少角度を調整した後、

口付けをした。

直後、右頬に痛みを感じた。

正美の右手が握られているのが見えた。

どうやら、グーで殴られたらしい。

正美は、顔を真っ赤にしたまま、体全体を震わせていた。

俺は、お風呂場で隅々まで体を強制的に洗わされてしまったことにずっとショックを受けていた。

女性経験が未だない、童貞な俺としては女性のしかも数人の裸を見るのは、はつきり言ってキャパオーバーだった。

そして意識が飛んでいる間に、自分の咥内を蹂躪してくる舌を感じて、良く見ればアレイが俺に口づけしていた。

それを、感じ取った瞬間に顔が真っ赤になって心臓がドキドキしてきて、思わず拳を握り締めて殴っていた。

アレイが俺の方を見て、呆気に取られた顔をしていたのが更にむかついて、

もう一発、殴ろうとした所で、振り上げた右手首がいつも容易く片手で抑えられた。

くっそ、男の時なら絶対抑えられないのに、心の中で悪態をついていると、

アレイが心配したような口調で話してきた。

「大丈夫か？正美、右の手の平が真っ赤になってるじゃないか」

アレイがそう言いながら、俺の右手を優しく触ってくる。同時に真っ赤に腫れ上がった所へアレイの手が差し掛かると、痛みが全身を突き抜けた。

思わず、眉間に皺を寄せてしまい、右手を引こうとしたがアレイが手首を固定してる為、引き抜く事ができなかった。

「やっぱりな、こんな小さい手で人を殴ろうなんて無茶な事をするもんじゃない。あとで腫れてくると思うからクレイネルに見てもらえ」

俺は、キスされた事と手を傷めた事。

そして、自分の体の情けなさのアレイの身勝手さにイラついて、席から立ち上がって自分の部屋に走っていった。

すれ違う誤解

通路を走り、何度も角を曲がる、そして、気がつくと、迷子になっていた。

・・・・・・・・・・ はぁ、俺何してるんだろ。

心の中で自分自身に突込みを入れる。

よくよく冷静になって考えて見れば、アレイがいるから俺は生きていたわけで、多少は仕方ないと思おう。その時、近くの部屋から物音が聞こえた。

部屋までの帰り方を聞こうと、驚かせないようにそっと近くの扉を開けた。

そこには、天井から吊り下げられているエルフィーナと黒い鞭を片手に持っているエメラスさんがいた。

・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・

しばらく、俺は二人の後ろ姿を見たあと、音を立てないように扉を閉めた。

「ふう・・・・・・・・・・ 何か見たらイケナイモノを見た気がするぜ」

眩きながら額の汗を拭う動作をしながらも、ここに、これ以上居たら危険な感じを動物的本能から感じとって離れる事にした。

「どうかしたのですか？エメラスさん」

「いえ、誰か見ていたような気がしたのですけど」

「でも、エルフィーナさん。これが本当に体罰になるのですか？」

「ええ、間違いありませんわ、書物に書いてありましたもの」

エルフィーナが体をクネクネしながら発言する。

それを見ながら、エメラスは何でこんな風に育ちゃたんだろう？と疑問を自分に投げかけていた。

エルフィーナとエメラスのちょっと問題のあるシーンを見てから、しばらく歩いていると、何やら奇声が聞こえてきた。

ん？なんだ？

気になって奇声が聞こえて来た方へ歩いていくと、地下へ続く階段が視界に入った。

「こっちから変な声が聞こえたよな？」

自分自身に突込みを入れながらも音を立てないように階段を下りていく。

2分ほど階段を下りていくと、目の前に突然、高さ2mほどの石作りの扉が現れた。

この館には不釣り合いすぎるほどの扉だ。

俺は思わず、唾を飲み込んでしまった。

唾が喉を通るとき、思ったより大きな音を響かせる。

扉は若干開いており、中を見ることが出来る。

そこには、クレイネルがいた。

俺が見る、クレイネルは普段とまったく違っていて、目の下に黒い化粧をしており髪がボサボサになっている。

そして、何百冊もの本に囲まれていて時々、奇声を発していた。

そしてクレイネルの視線が俺を捕らえたと思った瞬間、俺は思わず、石作りの扉から顔を離して逃げるように階段を駆け上がった。

「はて？ 誰か覗いていたような気がしたのじゃが？ さすがに5日寝てないと辛い、変なテンションになってしまう」

クレイネルはそう呟きながらも椅子に深く腰を下ろした。

その頃、正美は走りながら頭の中は混乱していた。

「な、なんなんだ？ 一体これはなんなんだ？」

「まさか、ここって怪しい系の宗教か何かしてるのか？」

アレイは突然キスしてくるし、エメラスさんとエルフィーナさんは変だし、クレイネルさんは何か怪しげな魔術師ばいしここにいたらヤバイ気がする。

思案していると、ふと窓から見える位置に正門とは明らかに違う小さい門が視界に入った。

使用人用の門か？それにしても誰も兵士がいないのは気になるが……

俺は、窓を開けて身を乗り出して庭へ降りると兵士がいない門へ走った。

門までたどり着くと、人が本来待機してるであろう部屋があったが、誰もいなかった。

俺は門を開閉すると、門の扉と扉の間に体を滑り込ますようにして館の敷地内から出た。

なんだか、ずっと敷地内で軟禁されていたのですごく新鮮に感じる。

ふと、アレイの話を思い出した。

館から南の方向へ進むとこの領地の町があるという事、そして魔物の領地からは離れている為モンスターが出る事はまず無いという事。

俺は、何か危なそうな館を出て、町に向かうことにした。

行き倒れました。

一台の幌馬車が街道を走っていた。

その幌馬車には、一人の男性が手綱を操り、馬を操作していた。

その幌馬車の中には、女性が乗っており、次の町で売る品物のチェックをしていた。

品物以外にその中には、明らかに痛んでいる家具が見受けられるのは何か事情があるのかもしれない。

「今日も暑いわね」

外の日差しから遮断されてると言っても、中はまったく風の動きが無い為、熱が籠ってしまっている。

手拭で、額の汗を女性が拭き取ると、水の入った皮袋を持って馬を操ってる男へ声をかけた。

「ユーエル」

「ん？どうした？ラン」

「外は暑いでしょう？お水でも飲んで一息つきましょう」

ユーエルはランに渡された、皮袋の水を口に含む。

「もうすぐ、町につくな」

「ええ」

二人は浮かぬ顔をしていたが、その間も、荷馬車は街道を疾走していく。

「ユーエル、待って！今、通り過ぎた道端に女の子が倒れていたわ」

「なに？」

ユーエルが荷馬車を止めたあと、ランとユーエルは急いで、倒れていた女の子の元へ向かった。

倒れていた女の子に近寄ると二人とも目を見張った。

倒れていたのはまだ幼さを残す可愛らしい顔つきの女の子だった。漆黒の長い髪が日差しを反射して光輝き、白くきめ細かい肌がそれを更に引き立てている。

良く見ると女の子が着ている服は、貴族でもめったに着る事が出来ないほど上質なドレスだった。

淡い赤色のレースと刺繍を惜しげもなく使い、仕立てられたドレスはそれ売るだけで一般市民の家族一年分の食費に匹敵するだろう。しかも、指輪、ネックレス、イヤリングとそれを売れば一財産に匹敵するほどの物である。

「ユーエル、いつまでぼーっとしてるの？こんな所で倒れたままにしてたら体を壊してしまうわ」

どうやら、この女の子のドレスと装飾品の価値に妻は気がつかなかったようだ。

俺は軽く返事をする、女の子を抱き上げて馬車の中へ運んだ。

「ずいぶん軽いな？まるでここにいないみたいだ。」

「そんなに軽いの？」

「ああ、ランより軽いとおも．．．．．わないというか．．．．．同じくらいじゃないのかな？」

途中から、機嫌を損ねたランの顔を見て、発言を訂正した。

「ねえ？ ユーエル」

「ん？ どうした？」

「この子って、私達の娘と同じくらいの歳よね？」

ランに言われて見ると、16歳くらいに見える。

「ああ、そうだな」

「これを見て」

ランが、女の子の右手を見せてくる。何かを殴った後か？ それにしては、いぶん腫れているな？

葉草がこの棚にあったような．．．．．

私は、葉草をすりつぶし女の子の右手を治療してあげた。

商人をしていると色々物騒な事もある事から、こういう簡単な傷の手当てくらいなら誰でも出来るからだ。

「ねえ？ ユーエル。この子って随分高そうな洋服とか装飾品つけてるけど何かの事件に巻きこまれた子なのかしら？」

「分からない、とりあえずドレスが汗を吸ってると思うから脱がせ

て他の服に着替えさせた方がいいな」

「わかったわ、あの子の服でいいわね」

「町までもう少しで着くと思うから、それまではその子が目覚めるまでついてあげてくれ。目を覚ましたら教えてくれ」

「ええ、わかったわ」

俺は妻がそう答えるのを背中越しに聞きながら荷馬車の中から出て、御者席に座り手綱を打ちつけ帆馬車を走らせた。

帆馬車の中では、ランが女の子のドレスを脱がして、装飾品を外していく。

そのあと、ランは手拭で体を拭いてあげてから淡い青色のワンピースを着せてから床に毛布を敷いてその上に女の子を寝かせた。

「少し熱があるみたいね、ずっと日差しを浴びていたからかしら？」

ランは、水を新しい手拭に掛けるとそれを女の子の額に当ててあげた。

こんな事をしたのって、あの子が風邪を引いた時以来かしら、心の中でランは呟きながらも女の子の様子を見ていた。

町につきました。

朝食の時間に正美を怒らせるという失態を犯したあと、俺は自責の念に囚われていた。

なんで、あんな事やっちゃったんだ……

これで当分、正美とは顔を合わせ辛いじゃないか……

「はあ」

俺は、溜息をつきながら執務室で王宮からの書類に目を通していた。執務室にある机の上には厚さ30cmほど積もり重なった書類がある。

「これ、案件300件くらいあるんじゃないのか？」

呟きながら、当分、正美に会えない事に少し心が痛んだ。

とりあえず書類を手にとろうとした所で、普段ではありえない強さで執務室の扉がノックされた。

「どうした？何かあったのか？」

「す、すいません」

どうやら、イリシアが執務室の扉を叩いてるようであったが、かなり慌てているようだ。

俺はイリシアに執務室に入るように伝えたと、入って来たイリシアは瞳に涙を浮かべていた。

かなり動揺しているのが俺の眼から見ても分かる。

「どうしたんだ？何かあったのか？」

「アレイさま、すみません。正美様の姿が朝から見当たらないのです」

なに？見当たらない？

館のどこかで迷子になってるのか？

「分かった、イリシア。取り合えず落ち着け。まずは朝食の準備をしてくれ」

「アレイ様？」

「そうか、まずは正美に会いに行かないとな」

「アレイ様、落ち着いてください」

その頃、アレイの母親のエメラスの指示により館全域に非常警戒態勢が敷かれており、正美搜索網が展開されていた。

幻想大陸ルシアードの街道は踏み固められただけの道であり、貴族が保有している高級馬車以外は衝撃が直接、伝わる為、お世辞にも乗り心地がいいとは言えない。
ランとユーエルが乗る帆馬車も例に漏れず中に加わる衝撃はかなりの物であった。

すでに、日は沈みかけ段々と空気が冷えてきており、帆馬車の中の

気温も下がり丁度過ごしやすい気温になっていた。

女の子が、震動の中でも寝て居られるのは、体の下に引いてある毛布とランの膝枕のおかげだろう。

ランは女の子の髪の毛を毛筋に沿って撫でてあげている。とてもやわらかく、しつとりと濡れたような髪質だ。

ランはそのまま、女の子の頭を撫でていると、女の子の体が身動きしたあと、ゆっくりと瞼を開けていった。

女の子の瞳の色は漆黒の色をしているが、その中心部では白い光が沸きだすように光輝いていた。

「ここは・・・どこ・・・だ？俺は一体・・・？」

そこまで呟いた所で、女の子は瞳を閉じてまた眠りに入ってしまった。

ランは女の子が言った言葉に疑問を抱いていた。自分の事を覚えてない？という事なのかしら？

確か辛い体験が合った時は、辛い出来事を忘れてしまう事があるって聞いた事があるけど、もしかしたらこの子もそうなのかしら？

ランは女の子を膝枕したまま、考えこんでいた。

気がつけば帆馬車は止まっており、外から複数の人の話し声が聞こえてくる。

ランも気になり表へ出ると、高さ5mもの城壁に守られた大きな門構えの町並が視界に入った。

城壁の兵士達もランに気がつくど頭を下げて挨拶をしてきた、ランもそれに釣られてつい挨拶を返してしまう。

夫のユーエルがランの元へ戻ってくると、一枚の手形を見せてきた。

「これって何なの？」

「これは、行商人手形って言って、商売をする人が一時的に住まいを借りられる制度がこの領地にはあるらしくて、そこを借りるのに使ってみたいなんだ」

「すごいね、だからここの領地ってこんなに豊かなのね」

「ああ、商人が集まれば、人が集まる、人が集まれば需要が増えるそうする事で供給の為に商人が増えると言う具合らしい。しかも税金はかなり安く抑えられている」

「すごいわね」

「ああ、今日は、借りられる家もあるからそちらへ移動しよう」

「そうね、そういえば、ユーエル。」

「ん？どうしたんだ？」

「あの女の子ね、どうも記憶が無いみたいなの」

「え？どういうことだ？」

「分からないわ、すぐに寝ちゃったし」

「そうか、一度、借家に行ってから今後の行動を考える事にしよう」

「そうね」

ランは帆馬車に乗ると女の子の頭を膝に乗せて、揺れが極力体に伝わらないようにした。

ユーエルも、町で手配された借家へ向けて夕暮れの中、荷馬車を走らせた。

記憶喪失になりました。

すでに日が沈み夜の帳が下りてきても、アレイクード邸では、嚴重の警備の元で搜索活動が続けられていた。館の一室にある執務室では、アレイは警備隊長より報告を受けていた。

「まだ、正美は見つからないのか？」

アレイはイラついた声で報告に来た警備隊長へ怒鳴りつける。今のアレイは、いつもの温和な雰囲気があったく感じられない。

「はい、まだ発見の報告は来ていません」

「ですが、一つに気になった報告があります。」

「気になった事？」

「はい、使用人の通行門ですが、衛兵達の交代時間の最中、人手が足りない時間を見計らったかのように、メイド長と副メイド長がおかしな事をしていたと報告を受けており、その確認に兵士が向かった短時間、通行門の兵士が不在の時間があり、閉めていたはずの門が若干開いていたと報告が上がってきます」

なんだと……？

母上とエルフィーナがおかしな事をしていただと？

俺は思わず頭を抱えてしまった。

「それと一つ気になった点があります」

「なんだ？言ってくれ」

「使用人の通行門側の窓が開いており、館内から庭へ降りた跡が地面に残っていたそうです。

これは推測に過ぎませんがもしかしたら、正美様は公爵邸の敷地内から外へ連れ出された可能性が高いと思われます」

連れ出された？だが正美の素性や情報はこの館以外の者は知らないはずだ。

この館の情報を知りうる事が出来るとなれば、相手は国家クラスになる。

それならば、突然、正美が消えた事にも納得がいく。

国家クラスが相手となると、生半可な戦力では逆効果か……………
搜索はかなり大規模に行わなくてはならなくなるな……………

「わかった、領地内の全軍動かしても構わない。すぐに正美の搜索を領全域に広げてくれ」

「わかりました。それでは各町の有力者へ連絡をつけておきます」

どこの国の間者か知らんが、俺の女に手を出した以上、只で済むとは思ふなよ。

アレイは殺気の籠った眼差しで執務室から外の風景を視界におさめていた。

その頃、正美と言えば、女性に頭を撫でられていた。

覚醒していく意識の中で、誰かが頭を撫でてくれるのが分かる。
やさしく頭を撫でてくれる手がとても気持ちいい……………

俺はゆっくりと瞼を開けると、女性に膝枕されたまま頭を撫でられていた。

「ここはどこなんだ？」

俺が、女性に話しかけると驚いたような顔をして俺の顔を覗き込んできた。

「もう、大丈夫みたいね」

「大丈夫？」

「そう、貴女は道端で倒れていたのよ？」

俺を助けてくれたのか……………

「助けてくれてありがとう」

「困った時は、お互い様。貴女お名前は？どこから来たの？」

「俺の名前は……誰……なんだ？」

俺のその言葉に女性が顔を泣きそうに曇らせると俺を毛布の上に下ろす。

「無理に思い出さなくてもいいからね。今ね、旦那を呼んでくるからね、少し待っててね」

「はい」

俺は思ったより素直に答えていた。

女性は俺の言葉を聞き、一度だけ頷くと別の部屋に入ってしまった。

女性の姿が消えた後、部屋の中を見渡すと、広間の中央には囲炉裏があり、そこから3部屋ほどあるのが確認できる。
かなり大きな家のようなだ。

女性の話によると、俺は道端で倒れていたようだが……
記憶の糸を辿ろうとすると、奇声を発する魔物の映像や、思い出し
たらいけない映像がフラッシュバックのように脳裏を駆け巡って頭
が割れるように痛くなる。

「うっ……」

頭を抱えていると、先ほどの女性が俺の体を抱き寄せてやさしく包みこんでくれた。

「大丈夫？無理に思い出さなくてもいいのよ？大変な事があったの
でしょう？」

そう言いながら、俺の背中をやさしく撫でてくれる。

それがとても心地よくて安心する。

気がつくとい人の男性が膝をついて、俺を見つめてきていた。とてもやわらかい印象を受ける金色の瞳をしている。

「私の名前はユーエル。今、君を抱えているのが私の妻であり、名前はランと言う。

君は自身の名前を、覚えていないそうだが名前が無いと困るだろう？ 名無しと呼ぶわけにも行かないしな……どうするか」

「ねえ？ 貴女」

「は、はい？」

俺は、思わずランさんより話を振られてしまって声がうわずってしまった。

「名前を思い出すまで、ミリルって名前かどうかしら？」

ミリル？ まあ名前が無いと困るしな、それでいいか。

俺は肯定の意志を込めて首を縦に振った。

「お……おい……ラン、それは」

「それじゃ決まり！ 貴女の名前はミリルね。記憶が戻るまでは、一緒に暮らしましょう？」

俺も行く宛でもないし、記憶も無いわけだし、この二人はなんか懐かしい匂いがして安心する。

しばらく一緒にいてもいいかなと思ってしまっていた。

私は強引に話を進めるランを見て、仕方ないかと肩を落とした。
まだ、娘が死んでから2ヶ月も経っていないのだ。

「ミリル、今から食事なの、一緒に食べましょう」

「はい、すみません」

「お礼はいらないわ、一緒に暮らすんですもの」

その夜は、食事をしながらユーエルとラン夫妻の話を俺は聞いていた。

最近、戦争が起きた町から着の身着のまま逃げ出してきて生きる為に行商を行い、

定住できる町を探して旅をしてきたと話してくれた。

不良になりました。

・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・み。

誰かが俺を呼ぶ声が聞こえる。

でも、誰かは、分からない。

懐かしいような忘れていたような気持ちを思い起おこさせる。

声のした方へ進もうとすると、急に現実感が増してきて、風景が霧のように霧散する。

意識が覚醒すると、誰かが俺の頭を撫でている感じがする。

暖かい人の温もりが感じられる。

臉をゆつくりと開けると、ランさんが俺を抱き寄せて、頭を撫でてくれた。

俺の頭が丁度、ランさんの胸に抱かれるような状態になっているため、

ランさんの心地よい心臓の鼓動と匂いが香ってきて、とても落ちつく。

気持ちよさそうにしていると、ランさんは、俺が起きているのに気がついたのか床に敷いてある毛布の上に俺を横たえ、ランさんも俺の隣に一緒にそのまま寝てくれて、頭を撫でてくれている。

部屋の中を見渡すと、窓の外がまだ暗く日が昇るまで時間がかかりそう。

ランさんとユエルさんと俺が寝ている所は20畳ほどの広間で中央に囲炉裏がある。

囲炉裏には、薪が燃えているが、夜は体感的に冷える事もあり思わず、体を震わせるとランさんが俺に毛布をかけてくれた。

「大丈夫？ うなされていたけど、怖い夢でも見たの？」

「怖い夢？」

どんな夢か覚えて無い。だから、曖昧に返事を返すことしか出来ない。

「ランさん、すいません。迷惑をかけてしまつて……………」

「いいえ、いいのよ。それとね……………」

言いかけたまま、ランさんが考えこんでいた。

言葉を区切るって事は、何か、言いづらい事でもあるのだろうか？

「えっとね、これから一緒に暮らすわけだしね、やっぱり周りに不審に思われないようにする必要もあるでしょ」

どうも、ランさんが何を言いたいのか要点が掴めないが、俺が道端で倒れていた事から何か問題に関つてるといけないから何か対策をする必要があるって事なのか？

「そうですね、周りに不審に思われるとまずいですからね」

俺も、周りの人に不審に思われないようにする事には、反対する気

はない。

俺の言葉にランさんが顔を明るく輝かせる。

ランさんは、綺麗な青い瞳をしていて、一目では、25歳くらいに見える。

腰まで届く金髪が、いまは毛布の上で広がっている。

「そうよね！それで、私、考えたんだけどね、私の事をお母さん、ユーエルの事はお父さんって呼ぶことにしてね」

なるほど、娘なら不審に思われないな。

問題は、ユーエルさんもランさんも金髪という点だ。

両親が金髪で子供が黒髪と言うのは常識的に考えてありえない。親子理論がこれでは崩れてしまうと俺は気になっていた。

「でも、ランさん。髪色がまったく違うのでそれは無理があるので
は？」

「大丈夫よ。こういう時もあるかと私は、髪の色を染める薬を売り物の中から一個くすねておいたの！」

あー。なんか、突っ込むポイントが今の会話から2つほど出来ただけど、突っ込んでもいいんだよね？

「髪を染める薬ですか？それより、くすねてきたのはマズイのでは？」

「ええ、この白い薬に、同じ髪質になりたい人の血を一滴垂らして薬が朱色になったら飲むだけでいいのよ」

後半の問いかけはスルーですか……

ランさんは俺に解説しながらも、親指に少しだけ傷をつけてから垂れてきた血を薬に垂らして朱色になった物を俺の口に突っ込んできた。

一緒に横になっていた俺は、ランさんから繰り出されてきた薬を避ける事が出来ずにそのまま、飲み下してしまう。

「かはっ、ランさん、ひどいですよ！いきなり」

「ごめんね、実際に体験してもらった方が早いかなって思ったのよね」

この強引き、どこかで味わった気がするのは気のせいか……？

しばらくすると、漆黒の髪が、ランさんと同じ色の金髪に変化した。俺は、それを見ながらスゲーと関心しているとランさんが俺の瞳を見て驚いていた。

「あら？瞳の色まで変わってるわ」

「瞳？」

「ええ、私と同じ青色になってるわ」

「それなら丁度いいかもしれませんね、余計に怪しまれにくくなりますし」

「そうね」

ランさんはしばらく、考えこんでいたようだったが、気持ちを切

り替えたのか、
俺の両頬に両手で触ってくると、決心を込めた眼差しで俺に向って
呟いてきた。

「ミリル、言葉の使い方がね、男の子みたいにガサツだから、
明日からは、女の子の言葉を教えてあげるからきちんと覚えてね」

「え、別にこのままでも．．．．．」

「ダメよ、ミリルはかわいいんだからきちんとした言葉使いを覚え
ないとダメよ。」

明日からはビシバシ教えますからね」

なんだってー。と俺は心の中で突っ込んでいた。

イメチェンしました。

「ミリルー、そっちの人もお願いね」

「ラジャ！」

しゅたと手を上げると、ランさんが俺の方を見て睨んでくる。

「は、はい………」

慌てて、俺は言いなおした。

それを聞き、ランさんもとっこりと笑うがあの微笑はあとで怒りま
すからねという意志が込められてる時の微笑みだ。

俺は、ランさんに任されたお客へ商品である丸薬くすりを渡す。

お客さんは俺の顔を見て、にっこりと笑うと俺の両手を包み込むよ
うにして手を軽く引いてきた。

「ミリルさん、俺と結婚してくれませんか？」

「だが断る！」

即答した俺の言葉に、お客だった男性が撃沈した。

まったく飽きもせず、よく求婚ばかりしてくるもんだ。

ここの通りに、店を構えてからすでに一週間が経過しているが、そ
の間に俺が求婚された人数は100人を超える。

最初は戸惑っていたので、ランさんが助け舟を出してくれたが3日
も立つとウザイと思うようになり、このような断り方をするのも仕
方ないことだろう。

夕方になり、お客が減って俺も暇になったのでボーっと座って考え事をしていた。

一週間前・・・・・・・・

髪と瞳の色がランさんと同じ色に変わってから、足首まである髪だと動くのに支障が出ると思い朝になってから髪を腰の位置で揃えるようにしてランさんに切ってもらった。

本当はもっと短くして欲しかったのだが、ランさんに却下された。髪を切った所で、ユーエルさんが家から出てきて、俺の方を見ると驚いたような顔をしていた。

その後は、商品をくすねた事に関して、ランさんはユーエルさんに結構怒られていた。

どうやら、かなり高額の商品だったらしい。

しばらく話していたが、結局使ってしまった物は仕方ないと結論つけたようで、ユーエルさんは俺を手招きしてきた。

その後は、明日から開く商店の手伝いの事と、この世界の基礎知識を教えてもらった。

記憶喪失だったから良くは分からなかったが、この世界での通貨はユルドという。

最小単位は1ユルド 10ユルド 100ユルド 1000ユルド

10000ユルド と通貨の価値が上がるみたいだ。

100ユルド硬貨までは、銅を使っているようだが、10000ユルドは銀が少し混ざっている。

10000ユルドになると金が混ざるようになる。

金・銀と銅の比重については国で決まっているらしく、製法は秘密らしい。

10000ユルドの上にも硬貨があるらしいが金で作られるらしい。一般的には流通していない。

かなり大きな商談で使われる硬貨らしい。

一般家庭で一日食費で使うお金は1000ユルド付近。

そして、ランさんが、俺に使った丸薬は30万ユルドする高価な丸薬という事。

ユーエルさんにそれを聞いた瞬間、俺は頭がクラツとするほど衝撃を受けた。

そして……ユーエルさんの肩に右手を置いて苦勞してたんだね。と哀れみを込めて見つめてあげた。

朝食を取った後、俺とユーエルさん、ランさんの3人で商店を開く事が出来る商会通りへ下見に向かった。

住んでる家から、商会通りは徒歩で5分ほどだった。

遠いと不便という事なのだろう？

通りを歩いていると、色々なお店が両脇に並んでいる。

本来は10m近い通りだと思うが、たくさんのお店が並んでいる為、間を縫うようにして歩かないと行けない。

きっと髪が長かったら大変な事になっていた。

手形に書いてあった出店許可書の場所を確認したあと、3人で町を見て回った。

興味を引いた建物が3つあった。

《魔流術師協会》 《派遣勇者協会》 《冒険者・傭兵派遣所》

俺は、それを見ながら勇者って派遣業なのかーと心の中で突っ込んでいた。

町を見て分かった事は、町は中心部に行政が設置されていてそこから東西南北に道が続いている。

俺達が住んでる家は南方に位置するらしく、商人や商店が多いようだ。

何も考えずに通りを歩いていると後ろからランさんが話しかけてきた。

「ミリル、明日からお仕事だけど大丈夫？」

「大丈夫です、ランさん」

俺がそう答えると、ランさんが少しムツとした顔で俺の方を見てきた。

「ミリル、違うでしょ。そういう時は、大丈夫よ、お母さんって言うの。さあ、言ってみて」

.....

「だ、大丈夫よ、お母さん？」

自分で言ってて違和感ありまくりなんだが.....

「えらい、えらい。良く出来たわね、ミリル」

ランさんが俺の頭をそう言いながら撫でてくる。

なんか、とっても犬扱いされてるのは気のせいだろうか？と密かに心の中で突っ込んでいた。

そこまで回想した所で突然、大声で名前を呼ばれた。

「ミリル！」

「ひゃ、ひゃい」

思いがけず、回想から引き戻された事もあり、中途半端に返事をし
てしまう俺。

「今日はここまでにして帰りましょうね」

「はい、お母さん」

露店を畳んで、自宅に戻る頃にはすっかり日が沈んでいた。

料理のお手伝いしました。

アレイクード公爵邸執務室では、部屋の主たるアレイが苛立ちを隠そうともせずに部屋の中を歩き回っていた。

「くそ、もう一週間だぞ？ 一体どうなってるんだ」

正美を探す為に、公爵領全ての兵士のみならず、傭兵や冒険者まで動員し厳戒態勢の下、探していたが痕跡すら見つかっていない。国境の通過すら制限してるというのに一切情報が入ってこない。すでに政務にも支障をきたしており、その証拠に執務室の机の上には書類が山積みになっている。

アレイが執務机の椅子に座ると、丁度、執務室の扉をノックしてくる音が執務室内に響き渡った。

アレイが入出を許可すると一人のメイドが中に入って来た。

「何かようか？」

苛立ちを隠そうともしないアレイの言い方に、イリシアは、泣きそうになるのを堪えてから一つの白い布に巻かれたモノを差し出した。

「なんだこれは？」

「警備隊長が、先ほど見つけて渡してくれた物なのですが、これは正美様の部屋のシーツと枕になります。」

「なに？ ということだ？ どこで見つけた？」

「正美様の部屋にある窓の下の木々の間に、嵌っていたのを偶然見つけたそうなのですが、何か手がかりがあればとアレイ様の元へお持ちしました」

「そうか、よくやった」

アレイが、イリシアの持っていた荷物を受け取るとシーツを剥がしていく。

中には一匹の白いモフモフの縫い包みもとい小さい魔物が寝ていた。

「……………」

アレイは思わず、額に手を当てて、溜息を吐いていた。

なんだ？この生き物は……………？

見たことがないんだが……………

アレイが、猫の耳を持つてぶらーんと持つと、猫が身動ぎした後、ゆっくりと瞼まぶたを開けた。

《我に触れるな、この幻想住民が！》
フエルナーク

アレイとイリシアの頭の中に直接、言葉が降ってくる。

例えようの無い圧倒的な畏怖と恐怖が二人の体から一瞬で力を奪いさり、見えない重圧プレッシャーが二人の体を床に叩きつけた。

床に叩きつけられた衝撃と恐怖でイリシアは気を失ったようだ。

気を失ったのはイリシアとしては行幸だったのかもしれない、このまま意識を持続していたならば恐らく精神が崩壊していただろう。それほど、この小さい魔物から発せられる重圧は常識ではありえなかった。

勇者の最高峰である聖騎士パラディンの称号を受けているアレイですら、身動みじろぎすら出来ないのだ。

「な．．．．．なんだ？き．．．．．貴様、い、一体何者だ？」

「幻想住民フェルナーク如きが、我に質問か？」

たった一言で、力の差を本能が理解した、圧倒的なまでの力の差、否、力の差など生ぬるい、

次元が違う、絶対的な捕食者を前にした《死》を感じさせる。

それでも、アレイが体を起そうとすると、魔物はアレイを見ながらも愉快そうに口元を歪めた。

「いいだろう、我の名は幻獣王ルアカーゼ」

幻獣王ルアカーゼだと？神すら喰らいつくすと言われるそんな禁忌きんぎの化け物がなぜこんな所に？アレイは、頭の中で、伝承にのみ出てくる神獣を思い出していた。その間も、魔物は一方的に話を進める。

「幻想住民フェルナーク、我が主はどこに行ったのだ？見当たらないが？」

主？こんな化け物を飼いならす奴がいるのか？
一体どんな奴がこんな奴を使役しているんだ？

「どうやら、ここには居ないようだな。だが、そう離れてもいないな、魂の在り方が変わっているのか、正確な位置の確認できないな」

「お前の主の名前は、い．．．一体何と言う名前なんだ？」

「そういえば、我の主の名前をまだ言ってはいなかったな。我が主

の名前は正美と言う」

その頃、正美はと言うと……………

「お母さん、お風呂沸いたよー」

「はい。貴方、先にお風呂に入ってきてね、夕食の準備しておくから」

「ああ、わかった。」

ユーエルが今日の売り上げの集計と、商品の在庫のチェックをしながら相槌を返した。

お風呂場にユーエルが向かうと、入れ替わりで正美が戻ってきた。

「ご苦労様、ミリル。今から夕食の用意しないと行けないから手伝ってね」

うっ……………めんどくさい。

俺の考えを読み取ったのか、ランさんが俺をニコニコした眼差しのまま見つめてきた。

やばい、あれは断ったら怒られる眼差しだ。

ランさんが持つ、包丁の柄の部分が震えているのが見える。

きっと内面ではかなり、ご立腹でいらっしゃる。

市場で、教え込まれてた女言葉が無視して男のようにお客に対応し

てた事にご立腹なのだろう。

「う．．．．．うん、何をしたらいいの？」

俺のその言葉に、ランさんが食器を並べてから料理を作る手伝いを
してねと言ってきた。

テーブルの上に食器とスプーン・フォークを並べていった後、
包丁の使い方や野菜、お肉の切り方、炒め方、シチューの作り方を
こと細かく説明された。

「うん、ミリル。明日の夕食は貴女が作るのよ？」

え？俺にそんな無理難題な課題は無理っす。と突込みを心の中で入
れていた。

口に出せないわけは、口に出したら怒られそうな雰囲気があったか
らである。

「うん、わかった」

俺の返事に気を良くしたのか、ランさんは料理をお皿に盛り付けて
いく、当然、俺も手伝われるわけだ。

一通り、用意が終ると、ユーエルさんがお風呂から出てきて3人で
食事を摂った。

食事の後、食器を洗いお風呂に入っているとランさんが入って来た。

お風呂は結構広く出来ていて3人くらいは一緒に入れる。

ランさんの話によるとここまで福利厚生、住居まできちんとしてい
る所は

他の領地や国では考えられないと言う。

ランさんもユーエルさんもこの町でずっと暮らして生きたいと言っていた。

俺は、二人の話を聞きながらも何故か疎外感を感じていた。

ランさんもユーエルさんも俺に家族のように接してくれる。

でも、何かが違う。

何が違うかは分からない。

でも、この世界は俺を必要としていない。

そんな漠然とした不安が日に日に強くなっていく。

お風呂の中に浸かりながら、そんな事を考えているとランさんも湯船に浸かってきた。

「ミリルは、ずいぶんと着痩せするタイプなのね」

「べ、別にいいでしょ」

俺は、恥ずかしくなってタオルで前を隠そうとするが、ランさんに剥ぎ取られてしまった。

「ふむふむ、形も色も悪くないから問題ないわね」

何が問題ないんだ！。心の中で盛大に突込みをいれつつ、

ランさんの裸と比較すると俺の体より遥かに女性的な体をしている。

くっ、なんだこの敗北感は……。

「べ、別にいいでしょ！これから成長するもん」

ランさんが俺の返答に笑っているといきなり真顔になった。

「ミリル、最近の貴女すごい人気があるのよ？男の人には、気を付けるようにね」

「そうなの？」

たしかに、一週間で100人近くから求婚プロポーズされてるわけだけど、あれって一種のイベントだと思ってたよ。

そういえば、最近しつこい人もいるな。中々手を解いてくれない人とか、結構うざかったりする。

うーん、ランさんに改めて言われると危機感が出てきた。

「わかったわ、気をつける事にするね」

その後、お風呂でランさんにみっちりと言葉使いと女の子としての考え方をレクチャーされた……………。

隠された才能開花しました。

お風呂から出た後、ランさんに髪の毛を結ってもらっているとユーエルさんが倉庫代わりに使っている部屋から出てきて、溜息をついてから肩を回して首を左右に振っていた。

「お父さん、どうかしたの？」

「ああ、少し肩が凝ってしまっただけ」

俺とユーエルさんの会話の最中に、ランさんは口を挟まずに俺の髪を三つ編みに結ってくれていた。

「さあ、出来たわよ」

「ありがとう、お母さん」

俺がそう言うのとランさんは、頭を撫でてくれた。

「お父さん、肩を揉んであげる」

ランさんに頭を撫でてもらって気分を良くした俺は、ユーエルさんの肩を揉もうと背中に回りこんでユーエルさんの肩に手を置くと、ユーエルさんの肩から黒い霧みたいなのが立ち上って、俺の手に纏まとわりついてきた。

突然の事に俺は驚いて、背中から床に倒れこんだ。

ランさんとユーエルさんは俺の様子を呆然と見ていて、どうかしたの？って顔をしている。

「お父さん、お母さん。今の見た？」

「ええ、見たわ、ミリルが転ぶ所をね」

そう言いながら、ランさんは笑っている。ユーエルさんも怪訝な表情をしてるだけだった。

二人とも、未だに俺の手に纏わりついてる黒い霧が見えていない。しばらくすると黒い霧は、俺の体の中に吸い込まれるようにして消えていった。

「お！体が軽くなったぞ？」

ユーエルさんが、突然そんな事を言い出した。

体調が良くなった要因は一つしか考えられない。

それはさっきの黒い霧が関係してるとしか……

「本当に？ミリルってもしかして癒しの力が使えるのかしら？」

ランさんがそんな事を言いながら、期待の眼差しで俺の方を見ている。

俺は思わず、サツとその眼差しから顔を背ける事に成功したが、次の瞬間には両頬を手の平で挟まれて無理矢理ランさんの方に向けさせられた。

ランさんが俺を見る眼差しがキラキラ光って、私もマッサージしてー。とジェスチャーしなくても手に取るように分かる。

これは、きつとマッサージしないと収まりがつかないんだろうなと諦めた。

ランさんが毛布の上に横になって、俺を手招きしている。

あー、なんというかこれって女性が男を誘うポーズなんじゃないの

かな〜？と心の中で突込みつつランさんの側に寄って背中と肩を押していくとユーエルさんより遥かに濃くて黒い霧が俺の手の周りに纏わり付いてくる、それが消えたあとランさんが妙にスツキリとした顔で見つめてきた。

「すごいわ、ミリル。貴女すごい才能があるわ、この才能を生かしたお仕事を始めましょう」

えー。嫌だよ。なんかこれおかしい感じがするし、めんどくさいよー。って思っても口に出せませんでした。

だって、ランさんがとってもいい笑顔で笑ってきたから。

その笑顔には、逆らったら体にお仕置きよって書いてある雰囲気を醸し出していた。

「ねえ？貴方、いいでしょう？」

ランさんが甘えたような声でユーエルさんに同意を求めている。

それに対して、ユーエルさんが、ランさんの一方通行的な態度に少し渋っている。

がんばれ！ユーエルさん、俺の未来は貴方にかかっているんだ！

「そうだな、ミリルが売り子をしてくれてるおかげで半年分の品物が一週間で売り切れてしまったからな。そういう仕事をするのでもいいかもな」

はい、一瞬で撃沈。俺は売られましたー。

「え？貴方。もう売り物がないの？」

「ああ、ミリル見たさで若い連中がたくさん購入して行ってくれる

からな、しかもミリルにプロポーズできる権利をつけた品物はすぐに売り切れる。中にはダース単位で購入していく奴もいるくらいだ。アハハハハ」

アハハハハ、じゃねええええええ。

何？それって俺にプロポーズする奴らは皆、高額のアイテムを抱き合わせ販売されてたって訳？

悪徳商法じゃねえの？

商魂逞しいとかなんというか……。

俺は呆れてしまっていた。

「よし、明日はミリルの仕事場の確保の為に住居を借りる事にするか」

「ええ、そうね。ミリル、がんばってね！」

ランさんが俺の頭を撫でながら激励してくれるが……。

あれ？俺、何も発言していないのに話が勝手に先に進んでしまっ
て決まっているんですがー。

俺の意見はスルーですね、わかります。

何か前もこんな事があったような無かったような気がする……。

一日24食始めました。

朝食後、執務室に戻るとそこには、ルアカーゼ幻獣王が絨毯の上で寝ていた。パツと見た目は、小さい小動物に見えるがこれは実は仮初の姿で、本来は数百メートルの巨大な幻獣らしい。

今は、主の正美の制御範囲から離れている為に、力に制限が掛かっていない状態という事だった。

まったく、やっかい極まりない人間じゃなくて魔物が住み着いたものだ。

しかもクレイネルと俺の母親と気が合い、正美を探すにも協力的な姿勢を見せてくれているが、

実際は、ここ数日こうして執務室の絨毯が気にいって寝てばかりいる。

俺は、ルアカーゼ幻獣王の気が悪くならないように遠巻きに執務机に座ると書類の整理を始めた。

ルアカーゼ幻獣王の話だと、ここからそう遠くない位置にここ10日間潜伏しておりほとんど動くそぶりも見せないという事。

そして、体調管理も特に問題ないと言ってきた事、そしてしばらくは放置しておいた方がいいかもしれないとルアカーゼ幻獣王の助言により領地内の兵士を解散し滞っていた書類を整理してるわけだが……

《おい、アレイ。》

「なんだ？」

《食事はまだか？》

「ルアカーゼ、さっきまで食べていなかったか？」

《馬鹿をいうな！一体何時の話をお前はしているんだ？》

「つい30分前の話だが？」

《これだから、幻想住民は愚かと言うんだ。何度も教えてやるが、我は一日24食なのだ。わかったらさっさと食事の用意をしろ》

「ルアカーゼ、お前どんだけ喰うんだよ」

《仕方ないであろう？主が離れて一週間何も食していなかったのだ、エネルギー消費を抑える為に仮死状態になっていたと言うのにお前が無理矢理目覚めさせたのだ》

「分かった。分かったから、俺を食おうと殺気を放つのはやめてくれ」

《ふむ、わかったならいい》

そう言うと、ルアカーゼ幻獣王は絨毯の上に寝転がった。

その姿は誰がみても、幻獣王とは言えない墮落しきった姿だった。

ちなみにイリシアは意識が回復してからしばらくは、お暇を出されて近くの町へエルフィーナと共に休暇休みを取りに行く事になっていた。

「本当に頭きちゃう。どう見ても相場よりも20%は高いわよね」

お母さんが、ぶつぶつ文句を言いながらも俺とお父さんの前を歩いている。

思い立ったがすぐという事で、今日は、マッサージ屋を開業する為の部屋を借りる為に

商工会所へユールさんとランさんと俺、3人で部屋を見て回っているのだ。

すでに朝から物件を回って21件目。

すでに俺の体力は限界です。お母様……。

「ここだわ」

疲れを感じさせない面持ちで、ランさんが指差した建物を見ると、そこは煉瓦作りの建物で入り口は人が並んで二人通れるくらいの大きさ。

中は30畳ほどの広さだった。

今までで一番広いかもしれない。

床には木材が打ち付けられていて素足でも問題なさそう。少し掃除が必要かな？

というかもう疲れたからここの物件で手を打ちたい。

「お母さん。もう疲れたよー」

「そうね、家までの帰り道は覚えてる？」

「うん、覚えてる」

「それなら、先に帰って休んでもいいわよ」

ランさんの言葉に俺は喜んだ。そしてユーエルさんも、もう帰りたいという顔をしていた。

俺はユーエルさんにがんばってつとジェスチャーすると建物から出て、通りを自宅の方に向かって歩きはじめた。

人通りの増えてきた通りを歩いているといい匂いがしてきた。

そういえば、御昼からご飯食べてないな……

匂いの根源を探してウロウロしていると、一つの屋台が視界に入ってきた。

焼いたお肉をタレにつけてパンで挟んである食べ物を売ってる。

とってもおいしそう……丁度お腹がくっとお腹空いたよという抗議の音を醸し出す。

「はうあ」

自分自身でも意味不明な言葉を発して周りを見渡す。

誰も俺のお腹が立てた抗議の音は聞いていないようだ。

俺は顔を真っ赤にしながらお腹を抑えていると、俺の視界に入っている屋台で買い物をした男の人が俺に近寄ってきた。

「金髪のお嬢さん、食べるかな？」

そう言って男の人が屋台で購入した、肉サンドを俺に差し出してきた。

俺は相手の顔を見る為に見上げると、身長が190近い紫の髪色の赤い瞳をした男性が俺を見下ろしていた。

俺が、その男性の瞳を見るとニコリと男性が笑いながら屋台で購入した物を再度、差し出してくる。

そこで俺はランさんにレクチャーされた内容を思い出していた。たしか、ランさんが男の人は、下心があるから物を上げるんだよ、だから物をもらったらイケナイって言ってたよな。

「いません。」

俺のその言葉に、男性は呆氣に取られたような顔をしていた。

「さっきお腹から音が鳴っていたぞ？」

その言葉に、俺は顔を真っ赤にして睨みつけた。

「そういう事を言うのって紳士としてどうかと思います！」

「別に俺、紳士じゃなくて冒険者だからな……」

ああ言えば、こう言う人だな。

それでも、俺に差し出してる肉サンドを手元に戻さないのは驚嘆に値する。

そして、お腹が空いてる俺としては当然、その匂いに負けてしまいそうになるわけで、くーっとお腹が俺の意思を無視して鳴る訳だ。

「ほら、やっぱり腹減ってるんじゃないか、遠慮しないで喰え」

「べ、べつにこれは生理現象であってお腹が空いてるわけじゃないし恵んでもらう訳にはいかないの！」

かなり支離滅裂な言い訳を俺はする。

大体、瞳を見たときにちょっとカッコイイかなって思ったけど、女の子に対して、お腹の音が鳴ったからとか、もう少し遠まわしに言

っても言いと思う。

私が今、耳まで真っ赤になってるのは、そういう配慮が欠けてる証拠だと自覚してほしい。

しかも、私がこういう状態になっても、男の人は全然動じてないんだもん。

何？この人、すごいむかつくんだけど．．．．．って誰でも思うと思う。

「なら、お金が出来た時にでも払ってくればいいからさ、俺の名前はロムスって言うんだ。

勇者協会では少しは名の知れた冒険者だから、受付に渡してくれればいいさ」

「え、ちょっと．．．．．」

ロムスは私が返事を返す前に、肉サンドの入った包みを渡して離れて行った。

追おうとしたが、通りには人が多くてすぐに見失ってしまった。

手元には、肉サンドだけが残った。

「はぁー仕方ないね」

私は、起きてしまったことは仕方ないと諦めて、肉サンドを頬張りながら家に帰った。

味は、なんか微妙な味だった。

まずくないけどおいしくもない微妙な味だった。

隠された過去

ロムスって変な男から、屋台の包みを貰って食べながら帰宅した頃には、

家の中から明りが漏れていた。

あっちゃー、もう二人は帰ってきてるのか……

迷子になって思ったより時間が掛かったのが原因か？

この町ってすごい入り組んでて迷子になりやすんだよねと言いつける事にしよう。

そう考えて、自宅の扉を開けると、言い訳をする前に、ランさんが俺にタツクルするように抱きついてきた。

「ミリル、心配したのよ？」

お母さんが涙声で俺を抱いて頭を撫でている。

「お母さん、おおげさだよー。こんな街中で何かある訳ないじゃない？」

俺がそう言っていると、ランさんが真剣な眼差しで俺を見つけてみた。

「ミリル、前にも貴女には注意したわよね？ 貴女は、この町の男性に人気があるの、もっと注意しないとダメよ、大切な体なんだからね」

ランさんに、少しおおげさすぎーと言おうとした所で、喉まで出かけた言葉を飲み込んでしまった。

だって、瞳に涙を潰えていたから……

「ごめんなさい、今度から気をつけるね」

その後の夕食の時間はとても気まずかった。

まさか、こんなに心配されるとは思わなかったから。

だから、お風呂に入ったあとに迷惑をかけたお詫びに、

ユーエルさんとランさんの体の黒い霧を取り払った。

その黒い霧は昨日より、濃厚でなんとも言えない感情が流れてきたような感じがした。

その後は借りる物件が決まった事や必要な家具も手配が付き、明日からでも開業できる手筈が整っていると聞いた。

その日は、何故かユーエルさん、ランさんと何かが終わってしまう気がして中々寝付く事が出来なかった。

・・・・・・・・・・・・・・・・。

・・・・・・・・・・・・・・・・。

・・・・・・・・。。

意識が覚醒していく。いつの間にか寝ていたようだった。

まぶたを
瞼を開けると、そこには凄惨な光景が視界一面に広がっていた。

辺り一面が炎で焼かれており、地面には普段、目にしないモノが転がっていた。

—大量の死体—

老若男女関係なく、たくさんの息絶えた人であったモノが横たわっている。

俺は、その光景に立ちすくんだまま、あたり一面を見渡した。

少し離れた所では、ランさんが血まみれの金髪の16歳くらいの女の子を抱いたまま地面に座っていた。

「ミリル、ミリル、目を開けて、ミリルー」

必死に、俺の名前を叫びながら泣いている。

その女の子の容姿は俺にとってもよく似ている。

でも、この子は俺じゃない。

ならこの子は？疑問に思っていたところで声が聞こえた。

通りを挟んだ向こう側から、ユーエルさんがランさんの名前を叫びながら走ってきた。

ユーエルさんはランさんが抱えてる女の子を見ると、顔を真っ青にしてから地面に膝をつけて女の子の顔を撫でてこう呟いていた。

「すまない、ミリル。全ては、町に伝わっている命樹原書が原因で
ラクトオリジン
お前をこんな事に……………」

そのユーエルさんの言葉にランさんが恨みの籠ったような眼差しでユーエルさんを睨んだ。

「何？ 私達の娘はそんな物の為に殺されたの？ そんな物の為に……………」

後半は言葉にならず、聞き取ることが出来ない。

「ラン、取り合えず今は、この町から逃げる事を優先にしよう、レイユーズ公爵が清教徒騎士本隊を連れてこの町を襲撃するまで時

間がない。

本隊が到着してからでは誰も生き残ることは出来ない、

それに命樹^{ラクトオリジン}原書はレイユーズ公爵には渡してはいけない物なんだ」

ユーエルさんがランさんの手を引っ張り無理矢理立たせると、ミリルと呼ばれていた女の子が地面に軽い音を立てて落ちる。

「いや！ミリル一人をこんな所に置いていけないわ、私もここに残るわ」

「いい加減にしないか、私達の娘が親の死を望むとも思っているのか？」

ユーエルさんは、ランさんに薬を飲ませて昏倒させるとそのまま帆馬車に載せた。

「ミリル、埋葬も出来ない私を許してくれ」

ユーエルさんはそう言うと、帆馬車の手綱を操り、町から逃げ出した。

街道を逃げるように走る帆馬車の後方には、空を焼き尽くさんばかりに燃え崩れ落ちる町の最期があった。

俺は、ユーエルさんとランさんに触れる事も出来ず、帆馬車に乗っていた。

2日程過ぎた頃に、ランさんは目を覚ますとユーエルさんへ食って掛かるように支離滅裂な言葉で罵^{ののし}っていた。

ユーエルさんもここ2日間の強行軍でかなり疲れていたのだろう。グツタリとしたまま、文句も言い返さずに罵られたまま帆馬車の中で座っていた。

「なんで、なんで、ミリルが死ななければいけなかったのよ！返して！ミリルを返してよ！」

ランさんがユーエルさんの襟首を掴んで泣きながら嗚咽している。

「一つだけ……一つだけミリルを生き返らせる方法がある」

ユーエルさんが、疲れ切った目でランさんを見つめながら囁くようにして言葉を紡いでいた。

ランさんはその囁くような言葉を聞いて、掴んでいた襟首を離してユーエルさんから距離を置いた。

「ミリルを生き返らせる事が出来るの？」

ユーエルさんは自分が思わず呟いてしまった言葉に、後悔しながらも語り始めた。

町が襲われたのは、ラクトオリジン命樹原書と呼ばれる精神と抛り代を作り出す力を有する書物の事が原因だった事を、

レイユーズ公爵が自分の領地内にあるフェルの町を焼き払い手に入れようとしたのは、清教徒教会の兵士たるゴーレムを無尽蔵に作り出しそれを私兵に加えようと画策していたからだ。

そこまでランさんは、ユーエルさんの話を聞いた所で、ミリルを生き返らせる方法を聞いた。

ユーエルさんは瞼を閉じてから、額に手の平を当ててから話した。

「娘を．．．．ミリルを生き返らせる為には、適合する人間が材料として必要になるんだ。

術を成功させる為には3つの条件が必要になる。

1つ目は名をもっていない同年齢の子に名前を付ける事。名前はその者の魂の在り方を現す。そこから魂を精製し作り変える事。

2つ目は容姿が似ていること。肉体を作り変える際の魔流力を最小に抑えられる。

3つ目は絆を作る事。信頼を作り、術に掛かりやすくする、絆は強ければ強いほど好ましい

この3つの条件を揃えれば、作り変えることは、
ラクトオリジン

命樹原書を使えばいくらでも作り直す事が出来る、

だが．．．．これは禁忌、生贄になる人の尊厳を冒瀆する行為になる。

それに適合者なんて居るわけがない、16歳で名無しの子など存在するわけがない。

だから、娘を生き返らせるのは無理だ、それにミリルも誰かを犠牲にしてまで生き返りたいなど思っていないだろう」

崩れ落ちる思い

俺は、二人の話を帆馬車の中で聞きながら、頭の中が真っ白になっていた。

今さっき聞いた言葉を理解する事を頭が拒否していた。

それは、理解したら全てが崩れてしまうから……

だが、時は無常に過ぎ、落ち着くと同時に聞いた事を強制的に整理していく。

同時に俺は、瞳から自然と涙を流しながら乾いた声で狂ったように笑っていた。

俺を助けたのも、

ミリルという名前をつけたのも

家族ごっこをしていたのも

全部、全部、全部、本当の娘を生き返らせる為の生贄にするためだった。

俺は、何もない空間を見上げた。

滑稽すぎて笑いがこみ上げてくる。

なんなんだよ、

これって、どうなってるんだよ、

俺が何をしたんだ？

俺が何したって言うんだよ！

誰か答えろよ、答えてくれよ。

正美の周辺の風景は帆馬車の風景ではなく、漆黒に塗り潰された空間に中に一人立っていた。

その頃、アレイクード邸では、執務室に一人の兵士が駆け込んだ。た。

「アレイ様、大変です」

「どうした？ 騒々しい。何か問題でも起きたのか？」

良く見ると駆け込んだのは、国境守備を任せた兵士であった。その取り乱しようから尋常では無い事が伺いしれる。

兵士が落ちつき、報告を上げてくるのをアレイは待つことにした。

「本日、夕方に清教徒軍が国境に侵攻、国境は2時間で落ち、清教徒軍が現在、南方の商業都市フェルンに侵攻中です。」

進軍速度から見て2日後には、フェルンに到着すると思われます。」

「清教徒軍の数と誰が指揮しているのか分かるのか？」

「清教徒軍の数は20万 率いている者はフェルの町にて虐殺を指揮したイドバーン祭司です」

「そうか」

アレイは、短く呟き兵士を下がらせると、執務室の椅子に深く座り、両手を机の下に隠して握りこんでいた。

あまりにも強く握りこんだ事で、絨毯の上に深紅の血痕が広がっていく。

2ヶ月前、異教徒が反乱を企てていたからと、偽りの情報を流し、確証もなしに町を襲撃し女子供赤ん坊まで皆殺しにし、あまつさえ、その亡骸を亡者にして今尚、いまなお他の町を襲っている外道共が！

「クレイネル！」

いつの間にか執務室の扉の側に立っていたクレイネルに視線を移しながら名前を呼ぶ。

「なんででしょうか？アレイ様」

クレイネルも今回の情報を立ち聞きしていた事から、今後どのようなことになるか予想がついていた。

恐らく、アーカルス公爵領と清教徒軍の全面的戦争になるだろう。だが、国が関与してくる可能性は低い。

なぜならば、清教徒は世界中に支部を持ち、強大な力を有する。この国のみならず、他国も清教徒に関して是不可侵を貫いている。

前回、クレイネルの両親が殺された清教徒軍との戦いの後、この国は軍縮を行っていた。

それにより、同じ規模の戦いが起きた場合、恐らく支えきる事はできない。

領民を領地を有事の際に命を掛けて守る事こそが、王や貴族の矜持という物なのだ。

だが、前に座っているアーカルスト公爵領の領主アレイクードは違う。

領民を第一に考える、貴族の中の貴族。

「至急、全兵団と集めろ！清教徒軍を一步たりとも町へは近づけさせるな」

「心得ています」

返事を返したあと、クレイネルはすぐに執務室から出ていき、アーカルスト公爵領の全兵士を集める為に、各地に早馬を走らせた。静かになった執務室の中に突然気配が現れた。

「母上、気配を消して部屋の中にいるのは心臓に悪いのでやめてください」

アレイは苦笑いしながら、気配がした方へ視線を向けるとそこにはメイド長が立っていた。

「あらら、アレイちゃんたら。私の方からは冒険者と傭兵を動員するように手筈を整えておくから、それとしばらくメイド達は戦闘に参加する為にお休みもらうわね」

「母上も出るのですか？」

「ええ、ひさしぶりに体を動かさないとね。それに領地内の全部の兵士が集まるまで時間掛かるでしょう？私達が時間稼ぎをしてお

くわ」

《エメラス、何故、我の方に視線を向けて言うのだ？》

「いいじゃないの、ひさしぶりに集団戦なんだしきっと楽しいと思うわよ？」

《悪いが、私の主に今、問題が起きている。主を優先させてもらおう》

「あら、残念」

エメラスは舌を出しながら諦めた。

そのあと、ルシアードは部屋の窓を開けて南の方へ飛び去った。

魂の隷属と解放（1）

朝、眼が覚めると二人を起さないように、俺が意識を失って倒れていた時に身につけていたドレスを着て、貴金属を持ち出して家からそっと抜け出した。

町の中心部へ歩いていくと、まだ朝早いだけあって、町の通りは人通りが疎^{まば}らだった。

町の中心部にほどなく到着し、大きめの建物の前に立った。

その建物には、『派遣勇者協会』と言う看板が掲げられていた。

赤い煉瓦作りの4F立ての建物だ、町の中では2F以下の建物が多いため必然的に目立つ。

扉を開けて、中に入っていくと女性と話をしている男性がいた。

「ロムス！」

思ったより大きな声で名前を呼んでしまった。

名前を呼ばれた男は、俺を方を見てから怪訝な顔をしていたが、すぐに何かを思い出したように笑いかけた。

「昨日の、お嬢ちゃんじゃないか！まったく違う格好をしていたから気がつかなかった」

「別に気がついてもらわなくて結構です。昨日のお礼をかねてこれを渡しにきたただけだから」

俺は、そう言いながらロムスにイヤリングを含めた、貴金属を全部押し付けて建物から逃げるようにして出た。

しばらく通りを歩いていると、突然腕を掴まれた。

「おい、待てよ。いくらなんでもこんなに貰えねえよ」

ロマスが俺を追いかけて来て、律儀にもそんな事を口走ってきた。俺には、必要の無い物。

「別に、相場しらないし、もらっておいてよ」

俺は、そう言って離れようとするともた腕を掴まれた。

男の方を見ると赤い瞳が俺の瞳を真っ直ぐに見つめてくる。

それが妙に恥ずかしくて、今の自分自身を見透かされてるような気がして、掴まれてる腕を振り解こうとするけど振りほどく事ができない。

「離してよ！もう話は終わったでしょ」

「終ってねえよ、お前泣いてんじゃねえか？泣いてる女を一人にするほど男として落ちぶれていない」

「別に、泣いていても泣いてなくても、他人の貴方には関係ないでしょ」

「だからさ、他人とかじゃなくて泣いてる女を放っておくのは男としてはずいだろう？」

しつこい男だな、さっさと俺から離れろっていうの！

「うるさい、貴方なんかは何が分かるっていうの？」

「何も分らないし、知らないが、泣く場所を貸すくらいは出来る

ぜ？」

はあ？こっちが赤面するような言葉を真顔で言われると俺の方が困るんだが……

俺が、どうしたらいいか迷っているとロムスは、俺の腰に手を当てて自分の方へ抱き寄せてきた。

パニックになっていた俺の顔の前にロムスの鍛えられた胸板が視界一杯に広がる。

そのまま、ロムスが俺の後頭部を軽く叩きながら気負わないように軽く俺にだけ聞こえるように囁いてきた。

「泣きたい時に泣けないといつか壊れちまう、だから少しは泣く事を覚えろ」

そこで初めて俺は、頬を伝っている涙に気がついた。
出会ったばかりでそんなに日数も立っていないのに自然とこうして抱かれていると安心する。

「なあ？お前の名前はなんて言うんだ？」

俺は、一瞬どう答えていいか迷ってしまった。
あんな夢を見た後なのだ。でも、俺には名前が一つしかないだから……

「ミリルだよ」

俺のその言葉に、今度はロムスの表情が凍りついた。

俺は額をロムスの胸に当てていた形になっていたので、それに気がつく事が出来なかった。

正美の滞在するフェルンの町から、凡そ2日の距離の所では、
イドバーン祭司が率いる20万の清教徒軍が進軍していた。

「祭司様、アンデットというのは便利ですな」

「うむ、いくら死んでも代用が効くからな。フェンの町の住人全員
をアンデットにしたのは正解だったな。」

そう言いながらイドバーンが後方を見ると白骨化した死体などが多
数混ざりながらも異様な統率をもって前進していた。

比較的新しい死体は、先ほど落とした砦の兵士達の死体だ。

イドバーンが、後方を見ながら込み上げてくる笑いを堪えていると、
斥候が戻ってきた。

「祭司さま、フェルンの町はこちらの行動にはまだ気がついていな
いようです」

「そうか、分かった」

フェルンの町の住人は確か30万ほどだったか？全部足せばそのま
まこの王国も落せるかもしれんな。

この指輪 アプラスオリジン 死霊原書の力はすばらしい。

近い将来、全ての国が私の足元に跪くことになる。

楽しみだ。アハハハハハ、声を出さずにイドバーンは心の内で笑っ
ていた。

魂の隷属と解放（2）

「お姉さま、ずいぶん早くついてしまいましたね」

「そうね、思ったより道程が楽だったしね」

イリシアとエルフィーナは、商業都市フェルンに長期休暇を貰い、買い物に来ているのだった。

二人とも、普段の紺と白を基調しているメイド服ではなく、サマードレスに身を包んでいた。

話し方から身のこなしまで美しく洗練されている事もあり、朝早い時間帯にも関わらず周辺の男性のみならず女性からも羨望の眼差しを向けられていた。

エルフィーナとイリシアは、そのような視線を意に介さず町並みを見ながら、

町の中心部に向かって歩いていく。

「イリシア、まずは宿を取る事にしましょう。そのあと、荷物を置いてから町を見て回りましょう」

「はい！おねえさ．．．．．ま？」

突然、イリシアが言葉を濁した事に疑問をもったエルフィーナは、イリシアの視線が自分自身ではなく、その後方に注がれているのに気がつき、後ろを振り返った。

「っ！？」

エルフィーナは視界に入ってきた光景に驚きを隠せなかった。

そこには、紫色の髪をした男性が、一人の少女を抱き抱えて町中を歩いている姿だった。

少女は金髪の髪を揺らしながら男の胸に寄りかかるようにして瞼を瞑っている。

それだけなら、特に気にする所ではなかったが、その少女は行方不明になった正美様と同じドレスを着ていた。

それによく見ると、顔つきも正美様に似ており、違うのは髪色だけだった。

エルフィーナは、すぐにでも飛び出したい気持ちを抑えて、事実関係を確認する為に二人を追うことに決めた。

「イリシア、正美様の後を追うわよ」

「はい、お姉さま」

イリシアとエルフィーナが男の後を追っていくと、3F建ての建物の中に入ってしまった。

そこにはこう書かれていた。宿屋「風見鳥^{かざみどり}」と……………

二人が、しばらく時間を置いてから宿屋に入ると、やさしそうな50歳くらいの女性がカウンターで立っていた。

「ようこそ、風見鶏へ。お泊り？」

特に不審がられていないと思ったエルフィーナはイリシアに指で合図を送った。

イリシアは時間稼ぎの合図を的確に理解すると、女性に話しかけた。女性の視線と注意がイリシアに向かってる間にカウンターの中を視ていく。

埋まってる部屋は3Fの301号室だけ……302号室は空いてる。

「ええ、そうなんですよ。お買い物で来たんです」

「そうなの、それは遠い所から来たのね。私は名前はユーネって呼んでね」

エルフィーナは二人の話から、女性の名前を聞きかじる。そして302号室を借りる為に、二人の話に割って入る。

「ユーネさん、お部屋ですが、どこのお部屋も一緒なのですか？」

「いいえ、2Fからはお二人以上の方が止まれる部屋になっていきます」

「そうですか。どうせなら見晴らしのいい部屋がいいので3Fの部屋をお借りしたいのですが？」

その言葉に、ユーネはエルフィーナに302号室の鍵を渡した。二人は、宿代を前払いし、木材で組まれた階段を上っていった。

「お姉さま、うまくいきましたね」

「ええ、泊り客の見える位置に宿帳を開いて、置いておくなんて襲撃してくださいって言うてるようなものだわ」

二人を知らない人から見れば、その言葉の意味は今から暗殺に行くんですか？と言われる内容の会話であった。

302号室に二人は入ると、イリシアは301号室の方の壁へ耳を当てて中の音を聞こうとしていたが、エルフィーナはカバンの中から黒いケースを取り出した。

黒いケースを開けるとそこには小型のナイフに、先端から少しづつ広がっているドリルの様な物など多種多様に入っていた。

イリシアは壁に耳を宛てながらも、なんでエルフィーナがそんな物まで持っているのか疑問が心の中で渦巻いていた。

「お姉さま、そ、それは一体？」

「ん？もしもの為に持ってきたの」

もしもって………どんな時を想定してもってきてるんですかー。とイリシアは心の中で突っ込んでいた。

イリシアが心の中で突っ込んでいる間にも、エルフィーナは道具を使って壁に小さい穴を空けていた。

さらに、その穴を鑢やすりを使って音を立てずに拡張していく。

お姉さま、普段から一体どういう生活をしてるんですか………イリシアは一人心中でエルフィーナの後ろ姿を見ながら考えていた。

魂の隷属と解放（3）

目が覚めると、俺はベットの^{いもむし}上で蓑虫のように縄で縛られていた。周りを見渡しても、俺しかこの部屋にはいないようだった。大声を出して助けを呼ぼうとしたが、口も縛られていてくぐもった声しか出せない。

そこで俺は思い出した。

俺が、自分の名前をロムスに言った途端、俺は首筋に痛みを感じたあと視界が暗転して気を失った事を……
って事は、俺はロムスに捕まったという事か？
そう考えるのが妥当だが……

そこまで考えた所で、瞳からポロポロ涙が零れた。

せっかくやさしくしてくれた人も、どんなにやさしくしてくれてもすぐに人は俺を裏切っていく。

そんな事をランさんとユーエルさんの時に気がついたはずじゃないか。

それなのに、また簡単に信じてしまってこんな状況になってしまっている。

こんな事なら、こんな思いをするくらいなら心なんかいらなかった。

嗚咽すら上げる事が出来ない俺は、涙を流す事しか出来なかった。

「ユーエル、起きて、ユーエル」

俺が、目を覚ますと妻のランが半狂乱になって俺を揺すっていた。ランの瞳は真っ赤に染まっており、涙が頬を伝っている。その状態から大変なことが起きていることに気がついた。

「ミリルが、ミリルがいないの！それにミリルと出会った時に来たドレスと装飾品も無くなっているの！」

「なに？」

そこまで行くと、普通に居なくなっただけとは思えない。

ドレスと装飾品がなくなっていると言う事は、どこかに出かけるとも考えられない。

それに、私達と一緒に寝ていて起きずに出て行くという事は、なんらかの別の問題が原因と考えられる。

「ユーエル、私は、どうしたらいいの？」

少し落ちついて現状を把握しようと言いかけたところで、ランの右手薬指に嵌っている銀色の指輪を見て凍りついた。

「ラン、ま、まさかお前、それを使ったのか？」

「だって、あの子だって私達の事を家族のように呼んでくれたじゃないの！だからミリルを本当の家族にしたいと思って貴方が教えてくれた術を使ったの」

ラクトオリジン

まずい、命樹原書の術式が起動した場合、魂から肉体の在り方まで全て組み変わってしまう。

あの子、ミリルが別のモノになってしまう。

「ラン、ラクトオリジン命樹原書を使ったのは何時頃なんだ？」

ランが、虚ろな眼差しで、私は悪くないと何度も呟いている。

くっ、術の反動が始まってきている。

オリジン原書を使う為には、術者にも膨大な力とそれを制御する器が必要になる。

下手に一般の人間が使うような事になれば心が碎け散り、魂そして肉体も崩壊する事になる。

術式を解除する方法はただ一つ、生贄となるミ ril の本当の名前を本人に教える事だけだが、ここにはミ ril はいない。

それに私達は、あの子ミ ril の本当の名前を知らない。

思案してる所で、家の扉を無理矢理開け放って一人の男が入って来た。

私はその男に見覚えがあった。

男の名前はロムス、娘ミ ril と結婚するはずの男であった。

「ロムス、生きていたのか」

「お久しぶりです、ユーエルさん。その様子だとラクトオリジン命樹原書を使ったのですか？」

いくら、ミ ril を生き返らせる為だとは言え、他人の命を犠牲にして生き返るなど彼女が本当に望んでいると思うのですか？」

その言葉に、虚ろな眼差しをしたランが反応した。

「ロムス！ 貴方に何が分かるのですか？ 貴方が、仕官する為にレイューズ公爵に与えたラクトオリジン命樹原書の情報が原因で町も娘もたくさんの方が殺されたのですよ？ 貴方に、私達を責める権利があるのですか？」

貴方がいなければ、娘は死なずにすんだの！

貴方がいなければミリルは今も生きていたの！ミリルだけじゃないわ、私の両親も妹も弟も死なずにすんだの、貴方は自分が仕官出来ればいいと町を売ったのよ！」

「俺だって、ラクトオリジン命樹原書を手に入れる為だけに町を滅ぼすなんて暴挙に出るなんて思わなかったんだ。」

ロムスが拳を握り締めて更に話を続けた。

「それでも、まったく無関係の人間を娘に仕立て上げようなんて間違ってると思わないのか？」

「思わないわ、だってあの子は私達の事を両親同然に慕ってくれているし本当の家族になれば、無関係でもなくなるでしょう？それにね、もうすぐあの子は生まれ変わるの、誰にも邪魔なんかさせないわ」

ランがそういうと、指輪が光を放ちランの体を覆っていく。

光が消えたあとは、髪の色が緑に染まり背中から昆虫のような4枚の羽を生やしたランが立っていた。

ロムスはそれを見た瞬間、ユーエルを押し倒し自分自身も床を転げた。

同時に空気の刃が、家を真っ二つに切り裂く。

柱を切り裂かれた家が崩壊していく。その中をユーエルとロムスは走り、家の外へ飛び出した。

飛び出すと同時に家が崩壊する。その中から緑色の閃光が迸り全てを吹飛ばす。

光の中から現れたのは、何一つ身に纏っていないランであった。その体は、すべて緑色に輝いており昆虫の翼、頭からは2本の触覚

が生えていた。

「ラクトオリジン命樹原書の精霊、生命と還元を司るラクトプリズム命樹精霊……」

《向こうに私と契約を交わした魂がいるわね》

ランだったラクトプリズム命樹精霊は翼を羽ばたかせて空へ飛び立ち、正美の方へ向かった。

一部始終を見ていたユーエルとロムスは呆然としていた。

まさか、伝承の中のみが存在していた精霊が本当に出てくるとは思わなかったからだ。

一足先に、正氣に戻ったロムスはユーエルの肩を掴んで揺さぶる。

ユーエルもすぐに正氣に戻ったが、もはやどうしようも無い事に二人は気がついていた。

精霊に取り付かれた者を、生きて元通りに戻す事など不可能だからだ。

それでも、二人はミリルを助ける為に、風見鶏へ向かって走った。

魂の隷属と解放（4）

もうすぐよ、もうすぐミリルは私達の本当の子供になるのよ。

薄れていく、意識の中でその言葉だけが反響する。

私達と契約をしている波動を感じとり、上空から見下ろすとそこには3F建ての煉瓦作りの建物が視界に入ってきた。

赤く染まり縦に開いた瞳孔で、見つめると娘に生まれ変わらせるミリルの波動を感じ取ることができる。

私達は上空に滞空したまま建物の上辺を風の刃を使い吹飛ばした。

鑢^{やすり}で壁の穴を拡張しているエルフィーナとそれを見ていたイリシアは突然、屋根が吹き飛んだ事に驚いていた。

「お姉さま、一体これは？」

「どうやら、得体の知れない者が近づいてるようね」

そう言いながらエルフィーナは、カバンの中から一冊のジェードを封印していた本を取り出し、正美の部屋にイリシアと一緒に向かう。

ランだったモノ、^{ラクトプリズム}命樹精霊が正美の近くへ降りてくる。

正美と言え、^{ラクトプリズム}疲れてそのまま気を失っていた。

命樹精霊は一步づつ、正美へ近づき正美の体に触れようとした瞬間、正美を縛り付けていた縄が光り幾何学的な模様を浮かびあがらせ結界を作り上げた。

その結界に弾かれ、^{ラクトプリズム}命樹精霊は壁まで後退する。

《こざかしい、結界など私の力で！》

ラクトプリズム
命樹精霊の羽が共振し、周囲の物質が分子崩壊していく。

その分子を、くみ上げ数十本の槍にして結界を破壊する為に、正美に向かつて放つ。

その時、力強い言葉が大気を震動させる。

「光の精霊ジエシカ！エルフィーナの名の元に盟約により汝の力を解放せん！」

正美と命樹精霊ラクトプリズムの間に光の壁が発生し殺到する槍を全て破壊する。

《誰だ？私の邪魔をする者は？》

「残念ですが、このような非常識な真似をする方に、名乗る名前はありませんわ」

ラクトプリズム
命樹精霊は、声のした方を見ると一冊の本を広げているエルフィーナと黒一式の戦闘服に身を纏い2本の長刀を両手に携えたイリシアが立っていた。

《なるほどな、だがこれは私と娘のミリルの問題、部外者は引っ込んでおいてもらおう》

「あら、困ったわね」

「そうですね、お姉さま」

突然、近距離から聞こえた声に命樹精霊ラクトプリズムが驚き、声のした方向を見ると二本の刀が殺到してきていた。

バカな、一時も二人から目を離していなかったのだぞ、こやつ本当に人間か？

ラクトプリズム
命樹精霊は分子崩壊結界を作りだすと、二本の刀から衝撃波が打ち出されてきた。

ラクトプリズム
その衝撃により命樹精霊が部屋の壁を突き破り、隣の部屋へ姿を消す。

「お姉さま、あれどうしますか？」

「私達の正美様に害があると認定します。確実に仕留めます」

途端、寒気が体中を駆け巡る。

「イリシア、私の方へきて」

イリシアがエルフィーナの側に寄ると同時に光の壁が自動的に展開される。

そこに不可視の力が叩きつけられる。

光の壁を破る事は出来なかったが、二人の立っている床が戦闘の余波で崩れる。

崩落していく床に二人は巻き込まれ2Fへ落下していき、姿が消えた。

しばらくして、壁から這うようにして出てきた命樹精霊は体中からラクトプリズム緑色の液体を垂らしながら正美の結界へ手を翳す。

結界が一瞬震えたあと、正美を縛っていた縄が燃えカスになって消えた。

正美を抱き抱えると、ラクトプリズム命樹精霊はお腹を大きく開き意識を失っている正美を飲み込もうとした所で地面に叩きつけられる。

なんだ、これは、物理的干涉などではない、凄まじいまでの殺気と
畏怖、恐怖？

《カッ、ハッ、体が言う事をきかない……………なんだ？これは、
何者だ？》

その途端、ラクトプリズム命樹精霊の魂に直接、声が降って来る。

《我が主を、愚弄する者よ、貴様には地獄じごくの業火ごうかで永劫えいこく尽きること
無き、苦痛を与えてやろう》

ラクトプリズム命樹精霊が声が振ってきた上空を見るとそこには、空を喰らいつく
さんばかりの強大な8つの頭を持つ、龍が空に鎮座していた。

魂の隷属と解放（5）

広大な白い空間が世界の作り出している。

そこに黒髪の少女が浮かんでいた。

．．．．．お．．．．．み

．．．．．

《起きんか！正美》

突然、頭の中を掻き回されるような痛みを伴う声で覚醒した。
目覚めは最悪だった。

「うっせええええええええええ」

《ようやく目覚めたか》

「ようやく？俺はずっと起きてたが？」

《まったくこれじゃから、お前は馬鹿じゃというのじゃ》

「うっせえな、何も用がないなら俺は戻るが？」

《ほう。どこに戻ると言うのじゃ？》

「だから自分の体にだよ」

《正美、前を見てみるのじゃ》

「なんだよ、何もないじゃねえか？」

《ふむ、お主何時の間に心が曇った？それとも心を閉ざしているのか？何時の間にそんなに他人を理解する事に対して怯えた？》

「何をお前言っているんだ？俺が怯えるだと、そんな事ある訳ないだろう？」

《くっくくっ、本当にお前は愚かよのう、自らの立場すら理解できんとは》

「お前、俺に喧嘩売る為に、毎回、俺の前に姿を現してるのかよ？」

《姿は現してはおらぬが、声はだしておるな。のう、正美よ。人間というのは、心の底で思っている事と、行ってる事は密接な関係を持っておるじゃ。》

それを全て理解する事は、人間程度の器では到底不可能じゃ、じゃが裏切られると思って人を最初から信じないよりかは人を信じて騙された方が面白いと思わないかの？》

「さっきから何を言ってるか分からないんだが？」

《そうか、さてもう見えるかの？》

突然、俺の意識の靄もやが晴れるように一人の金色の髪をした少女が空間に浮かんでいた。

それは、女性化した俺にとってもよく似ていた。

「どういう事だ？」

《正美、お前は这个世界で存在していく上で、使役獣の加護が無ければ幻想世界に異物として抹消されてしまうのじゃ》

「そんな事、聞いたの初耳なんだが」

《うむ、言うのを忘れておった》

「忘れておった。じゃねえー。そういう重要な項目は赤い線で引いて何度も教えるのがお前の仕事だろうがあ！っってもう頭いてー」

《そんなに気にする事はない、大事に至る前に正美の肉体と使役獣が会えたようだしの》

「お前は少しは気にしろよ！っっていうかこの女の子は一体なんなんだよ？」

《この子は、お前の自我が眠ってる間に作り出されたもう一人の正美じゃ、じゃが名前をミリルと名づけられてまったく別の存在として独立しているのじゃ。

正美、お主がこのまま覚醒した場合、ミリルと名づけられた存在は消滅すると思うのじゃが、お主はどうするつもりじゃ？》

「どうするも何も出来ないじゃないのか？」

《ふむ、それではもう一人のお主、ミリルの感情と記憶を見て見るかの？》

次々と白い空間に浮かび上がってくる映像。

何度も何度も裏切られても人を信じてボロボロに傷ついていくミリルと呼ばれた俺自身。

ミリルを生贄に失った自分の娘を生き返らそうとするラン。

それを見て葛藤するユーエル。

そして、ロムスがミリルを裏切った事により、完全に心が壊れ人形のように倒れこんだ映像で閉めくくられた。

「ひでえな」

《そうじゃな、それでもこの悲劇を止める為には正美、お主意外には無理なのじゃ》

「おい、俺は一般人なんだぞ？そんな事が出来るわけないだろ。

そもそもこんな私利私欲に走ってる奴らをなんで俺が助けないといけないんだよ？

どう見ても俺は被害者だろうが！加害者を助けるなんて馬鹿げてる」

《じゃが、これはすれ違いが重なって起きた事なのじゃ、正美、お前も他の人間の表層部分だけを見て決めつけて逃げたではないか？》

「うるせえな、お前には関係ないだろう？」

《そうじゃな関係はないが、正美には関係あるのう、正美が館から消えて一週間もアレイクードは領地内をくまなく探しておったのじや、その間どれだけの人間にお前は迷惑をかけたか分かるのか？》

「勝手に俺を探しただけだろう？」

《ならば、お前は自分が保護した者がどこかに消えた場合、それを

知らん振りするのかな?》

「うっ!」

《さてと、これを見てみるのじゃ》

表示された映像には、エルフィーナさんとイリシアさんが、怪物と戦っている姿だった。

戦闘は、エルフィーナさんとイリシアさんが怪物を圧倒していた。

「あの二人、強かったんだな………」

《正美、その二人と戦っておる怪物が何か分かるかの?》

怪物? 誰かに似てるような………これってまさか………

《そうじゃ、精霊に喰らわれてる最中のランじゃ》

「これってまさか、エルフィーナの時と同じなのか?」

《そうじゃの、その時よりは若干悪いかの? どうするのじゃ? 見捨てて逃げるか? 意識の無かったお前を助けた者をお前は見捨てるのかの?》

分かってる、こいつがいう事は一々腹が立つが正論だってくらいは、それにランという女性だって最初から、生贄にする為に助けた訳じゃないってのは映像からも分かる。
だったら俺のする事は………

「見捨てるだど? ふざけんなよ。俺が関った人間を見捨てるような

人間に見えるのか？」

《言葉だけでは、どうしても言えるのう》

言ってくれるじゃないか……

「なら見せてやるよ、男ってやつをな！」

魂の隷属と解放（6）

「大丈夫？イリシア」

「ええ、お姉さま。大丈夫ですわ」

エルフィーナとイリシアが落ちたのは運がいいのかベットのの上であった。

二人はすぐに立ち上がると部屋の扉を開けて階段を昇り、正美の部屋へ向かう。

部屋へ近づくほど、二人の額から汗が噴出す。

エルフィーナの耳に、軽い音が聞こえた。

それはまるで人が倒れたような音……

エルフィーナが後ろを見ると、イリシアが通路に倒れていた。

「イリシア、どうかしたの？」

「お姉さま、これ以上はこの得体の知れない気配に近づくのは危険ですわ」

表情を死人のように白くしながらイリシアが語る。

エルフィーナも、正美の部屋の扉を見ながらも気がつくとも体中が震えていた。

武者震いなどではない。その証拠に体中から冷たい汗が噴出してゐる。

薄れてゆく意識を繋ぎとめるだけでイリシアもエルフィーナも精一杯であった。

何なの？一体この先では何が起きているの？

エルフィーナの問いかけに答えられる物などその場には存在しない。
もし、上空に鎮座している幻獣王ルアカーゼの姿を見ていたならば一瞬で意識が吹き飛んでいた事だろう。それほど、幻獣王ルアカーゼという圧倒的な存在により、生物が本来持つ恐怖という根源的な意識で幻獣王ルアカーゼを見ることを恐れていたのだった。

それは、世界の根源を司る108枚の原版の書編ナンバーズを司る命樹精霊ラクトプリズムですら例外ではなかった。

命樹精霊は地面に貼り付けられたまま、体を引き摺るようにして正美に向かつていく。

だが、それを許すほど、幻獣王ルアカーゼは甘くはない。

幻獣王はたった一睨みひとにらで、命樹精霊ラクトプリズムを正美から引き剥がすように視線に力を込める。命樹精霊は吹飛ばされながらいくつもの壁を貫通し、最後の部屋の壁に激突し倒れこんだ。

3Fにある部屋は全部で5つになるが、貫通した壁だけで20枚に及ぶ。煉瓦作りの壁とはいえ、それを貫通した体が無事ですむ筈もなく、命樹精霊ラクトプリズムは起き上がる事すら出来なかった。

緑色の液体が命樹精霊ラクトプリズムを中心に広がっていく。
同時に、中で吸収されたランの生命の活動も薄れていく。

《ミリル、ミリル、ミリル》

すでに視覚も失い、肉体が崩壊を始めてるにも関わらず、必死に手を伸ばして娘の名前を呼び続けている。

その姿はまるで、失ってしまった大事な半身を捜し求めているようであつた。

そこにまるで神の洗礼のごとく声が降ってくる。

《さあ、地獄の業火に永遠と焼かれ、我が主に手を出した事を悔い

るがいい!」

ルアカーゼ
幻獣王が宣告すると、龍の顎を命樹精霊ラクトプリズムに向け、力を収束させていく。

原子同士を融合させ、巨大な熱量を生み出す。

俺が目覚ますと、巨大な龍が、ランに止めを刺す所だった。

さっき降ってきた声はルアの声に似ていた。

いつもと雰囲気違っていたが………

っていうかあいつ、何してるんだ?

あんなのを打ったら町が消し飛ぶだろうが!

「おい、ルア! やめろ! この町ごと吹飛ばすつもりか!」

俺がルアに止める様に叫ぶと、ルアが俺を一瞥してから、すぐに命樹精霊ラクトプリズムへ視線を移した。

《主よ、問題ない。この程度の精霊など一瞬で殺せる。それに人間など、いくらでも増える害虫のような存在だ。瞬きのような時間で同じくらいまで数は増える》

「てめえ、俺のいう事が聞けねえのか?」

《主よ、申し訳ないが主に無礼を働いた生物を生かしておいては私の沽券に関する。すぐに終る、待っていてくれ》

俺は、ルアの身勝手な理屈にムカついて来た。

沽券だど？マスターの沽券をてめえはどう思ってやがるんだ！

いいぜ、そこまでこの俺に反抗するならやってやろうじゃないか！

「私の正義が」

俺の足元に緑色の魔法陣が展開される。

「悪を撃ち滅ぼす。」

魔法陣の文字が動き出して大気に積層円の魔法陣が書き込まれていく。

「こい、神の使者！」

強力な光が視界を覆い、煙が発生する。

《なんだと！》

ルアが動揺し、その姿が空から消え失せた。

そして……魔法陣から出現したのは、白い小動物のルアだった。

《ご主人たま！ひどいでち！》

そう抗議してくる小動物を片手でアイアンクローしながら持ち上げた。

《痛いでち、痛いでち、やめてほしいでち、》

「ルア、俺に力を貸せ！貸さなかったら布団にぐるぐる巻きにして1週間の刑だ！」

《ひどいでち！ご主人たま、横暴でち！》

「答えはYesかNoどっちだ？」

《あううう、手伝うでち・・・・・・・・》

「よし、なら力を貸せ！」

《わかったでち！》

部屋の中を蒼い風が巻き起こり俺の着ていたドレスが巫女服に変わり白い尻尾とネコミミが生まれ、右手に巨大な赤いピコピコハンマーが出現する。

さあ、いくか。

金髪から黒髪に変化した髪を風に靡^{なび}かせながら、倒れこんでいる命^ラ樹精^{クトプリズム}霊にピコピコハンマーを打ち下ろした。

ピコという音と同時に緑色の瘴気が、ランの体から吹き上がり空気中で一塊になってからハンマーに吸い込まれていった。

倒れこんでいたランの体をチェックしていくと、どこにも怪我は無く意識を失っているだけであつた。

とりあえず、これで一段落かな？と周りを見渡すと2Fと3Fが廃墟になった宿屋が目に入った。

・・・・・・・・・・。

・・・・・・・・。

あー。なんというかこれは・・・・・・・・

魂の隷属と解放（7）

ユーエルさんと俺が宿屋、風見鳥についた時には、宿屋は廃墟と化していた。

俺とユーエルさんは急いで宿屋の入り口を開けて中に入ると、1Fのラウンジではミリルに良く似た少女が3人の女性を看病していた。似ていたというのは、まず着ている服が見たこともない赤いスカートと言えがいいのだろうか？そのような服をきていて、極めつけは獣人族のように動物の尻尾と耳を生やして居た事だった。

ラウンジをよく見渡すと、ミリルと名乗った少女が瞳を虚ろにしたまま椅子に座っていた。

俺は、ミリルに近づくと肩を揺すって名前を呼び続けたが反応がない。

俺に気がついた、ネコミミの少女は俺の瞳を見て一言言って来た。

「俺の体に触るな！ボケ」と……………

そこで、少女が看病していた女性が誰なのか分かった。

ミリルの母親である、ランさんだった。

ユーエルさんはランさんの側へ行き、首筋に手を当てて脈をとっていた。

ユーエルさんの表情から見て、ランさんは無事なのだろう。

だが、あの状態のランさんを元に戻すなど、思いつかない。

多くの魔法を習い、シルバーナイト銀騎士の称号をもつ俺ですら知らないというのに……………

110分前1

ランさんを元に戻したあと、俺は1Fのカウンターまで来て、巨大な龍が宿屋の上を破壊した事を正直に伝えた所、嘘つき呼ばわりされて全部俺のせいにされた。

まあ、普通は信じてくれないよな……賠償金もとんでもない額になりそうだ。

俺、賠償金全部払ったら旅に出るんだ……と心の中で突っ込んでいたのは懐かしい思い出

その後、3Fに転がっているイリシアさんとエルフィーナさん、そしてランさんを1Fのラウンジまで運んだわけだが、イリシアさんとエルフィーナさんの荷物を運ぶ際に俺の体が転がっているのが見えた。

え？と一瞬放心してしまっていたが、ルアが教えてくれた。

俺という膨大な力を受け止める器が表層意識に現れた事により仮想意識である、ミリルという存在が実体として生み出されてしまった事を。

だが生み出されたのは器だけであって中身が無い状態であった。

仕方なく、俺は体を一階に運んだわけだがそこで、ユーエルさんとロムスさんが宿屋の中に入って来たわけだ。

俺自身で無くても、ミリルという名前の俺の心を決定的に壊したロムスと言う男が俺の体に触っているのを見た瞬間に視界が真っ白に染まった。

「俺の体に触るな！ボケ」

思わずその言葉を、ロムスに叩きつけていた。

ロムスを良く見ると、薄らと一人の少女が後ろに浮いていた。その姿はまるで、俺の表層意識とまったく同じ姿であった。

そうか、この子はずっとロムスと一緒に居たのか。

この男は、俺の姿に失ったミリルの姿を重ねていたってわけだ。
しかもご丁寧に守護霊になったミリルさんの前で……まっ
たく最低な男だな。

《ご主人たま、今ならこの女の子をご主人たまの表層意識から生み
出したミリルの体に入れる事が出来るでち》

「そうか、ならそれでいくか……」

そこで、ルアが一言助言してきた。

《でも、ご主人たま。因果関係を変えることになるから、ミリルさ
んを含めて、ロムスさんもユーエルさんもランさんもご主人たまの
事を忘れてしまいうでち》

「別に俺は構わないが？」

《きつともう一人のご主人たまは、悲しむと思うでち……》

「なら、それとミリルさんの靈魂を合成して居れる事は出来ないの
か？」

《分からないでち、そんな事はやった事ないでち》

「ならやってみるしかないな……」

《申し訳ありません、正美様》

頭の中に一人の女の子の声が聞こえてきた。

「まさか、これって……ミリルさん？」

《はい、今回は両親もロムスも、正美様に変な迷惑をおかけしてすみませんでした》

「まあ気にすんなよ、行き倒れていた所を助けてもらったしな、それより俺の表層意識であるミリルの精神を融合させてもいいか？
どうも、俺の中の精神体であるミリルはあんた達と離れるのを嫌が
ってる気がするんだよ」

《ええ、構いません、私からもお願いしたいくらいですわ。だって私の両親を好きでいてくれているんですもの》

「そうか、それならいいか」

ロムスの後ろに浮いていたミリルさんが俺の側に寄ってきた。
俺の真正面には仮想意識が実体化したミリルが座っている。

「いくぞ！ルア！」

《はいでち、ご主人たま》

俺とルアの掛け声と同時に、赤いピコピコハンマーが緑色に変化していく。

《天より生み出されし全ての根源を司りし力 祝福の風 魂の隷属
を解き放ち 夢の彼方の扉を開かん！》

ラウンジ全体に、白と金が混じったやわらかく暖かい風が吹き、消えた。

ラウンジには、俺とエルフィーナとイリシアと宿屋の女将さんだけが立っていた。

願いに祝福の風を！

「起きて、ロムス」

もう聞くことも無いと諦めていた声が俺の鼓膜を揺さぶる。

瞼を開けるとそこには死んだはずのミリルが座って俺を見下ろしていた。

その顔は、2ヶ月前と変わっておらず、少し怒っているようだった。

「もう！ロムスもお父さんもお母さんも寝すぎだから！」

ユーエルさんもランさんも呆然とミリルを見詰めていた。

「ミリルなの？本当にミリルなの？」

ランさんが起き上がってミリルを両腕で胸の中に抱しめていた。

「痛いよ、お母さん」

ミリルが抗議の声を上げてもランさんは離そうとしない、強く抱しめてミリルの背中を摩さすっている。死んだ人間さなが生き返って前にいるのだ、無くした娘を放す母親などどこに居るだろうか？

だが、こんな事などありえるのか？こんなのまるで……
そこで俺は一つの推論にたどり着いた。

「ユーエルさん、まさかこれって……
命ラクトオリジン樹原書の影響でし
ようか？」

「いや、これほど完全に成功させることなど人間には不可能だ。そ

れに、あの子だったらもつと顔つきが違はずだ」

「あの子？」

俺がユーエルさんに聞き返すと、ユーエルさんも首を傾^{かし}げた。

「いや、なんだ？あの子。もう一人女の子がいた気がするんだが、
そこだけ記憶が虫食いのようにはつきりしないんだ」

そう、実は、正美が使役獣を行使し命樹原書ラクトオリジンを使ったため、ミリルの魂に引き摺られる形で肉体もミリルに構成し直されたのだった。
そのため、ランもユーエルもロムスもそれに気がつくことが出来なかった。

「ユーエルさん、俺、意識を失う前に一人の少女に暴言を吐かれた
んですよ、それにその子にひどい事をしてしまった気がします」

「君もか、私もあの子に酷い事をしてしまった気がする。」

「だが、酷い事をしてしまった子を思い出す事ができないのだ」

「俺もです。そこだけ記憶が抜け落ちたみたいで……」

二人が、抜け落ちた記憶を一生懸命思い出そうとしていると、ミリルがランに向けて話しているのが聞こえてきた。

「お母さん、もう私はどこにも行かないから大丈夫よ」

ミリルはそう言いながら、母親から離れた。

「ごめんなさいね、私ね、ミリルにとってもひどい事をした気がするの、何度謝っても許されないくらい酷い事をした気がするの」

ランはそう言って、視線を足元に移した。

その姿はとても悲壮感に駆られていて、見るに耐えない姿だった。そこに……風が言葉を運んできた。

《俺は大丈夫だよ、ランさん。だから、もう一度頭を撫でてくれるとうれしいな》

その声が聞こえた瞬間、ランの瞳から自然と涙が零れ落ちた。ランはそれに気がつかずに涙で濡れた視界で周りを見回した。周りには、草原と城壁しか見ることが出来ない。それに、今の声はミリルに似ていたような……。

「ミリル、今何か言った？」

「ううん、何も言ってないよ？どうかしたの？」

今、聞こえた声はとても懐^{なつ}かしくて、悲しくて、胸がとても締め付けられるけど、暖かい声だった。やさしく、壊れた心を包み込んでくれるような声。

「ううん、それならいいの」

私は、そう言いながら初めて涙を流してる事に気がついた。

その涙は不快ではなかった。何故が心が温かくなるような涙。私は娘を抱しめて頭を撫でてあげた。

いつも、あの子はこうするとうっとりと瞼を閉じて気持ちよさそうにしていたのを思い出して……

お母さんくすぐったいよー。とミリルは言いながらも気持ちよさそうに瞼を瞋まぶたつつぶつて母親の胸に頭を押し付けていた。

それを見ていた、ユーエルとロムスはお互いに顔を見合わせてから空を見上げた。

正午を過ぎたばかりの空はどこまでも青く白い雲がゆっくりと流れている。

そして、商業都市フェルンの外縁に位置する草原の上に座っていた4人の周りをやわらかい風が祝福するように舞っていた。

絶たれた退路

暗く光も閉ざさぬ暗闇にソレは居た。

ソレの居る場所は暗闇だけではなく、生暖かく、湿気を多分に含んでおり、

決して清潔な場所とは言えない所であった。

牢獄が作られてから30年近く立つが治安のいい、この領地内においてこの牢獄に犯罪者が入れられるのは初めてであった。

そこから、このモノがどれだけの罪を犯したか推し量る事が出来よう。

今、ソレに向かって一人の男が冷徹な眼差しで罪状を読み上げている。

罪状を薦めていくうちにソレは男に対して喰らい尽くさんばかりに言葉を発した。

「俺ではない！これは罠なんだ！信じてくれ！」

ソレの悲痛な叫びが、地下に設けられた牢獄と通路を震わすが男は冷徹な眼差しを変える事なく罪状を読み上げる。

器物破損 1万6997点

建物破壊（半壊・全壊含む）

公共施設破壊（公園・図書館・学校）の施設を含む

傷害罪 軽傷・建物から落下した重傷者含め 18万9780人

町への損害額 8762億6609万ユルド

これに上記の怪我人の治療と保障を含め 2兆1900億4400万ユルド

そこまで、読み上げた途端に、男は令状を懐に入れ一言牢獄に入っているソレに話しかけた。

「自分が犯した罪を認められないとは．．．．信じがたいほど愚かな者だな。せいぜい悔やむがいい」

男は牢獄に入っているソレに吐き捨てるように言う通路を戻っていった。

「俺じゃないんだ！あいつが！あいつがやったんだ！全部、あいつがやったんだ！これは罠なんだ！信じてくれ」

牢獄の中に残されたソレは、格子に手を当てて何度も誰もいなくなった地下で一人叫び続けていた。

悲痛な叫びがいつまでも地下に響いていた。

エルフィーナとイリシアが目覚めるとあたり一面が更地になっていた。

「こ、これは一体？」

二人とも、周囲を見渡すがどこまでもその光景が広がるばかり．．．

・・・半壊した建物や、全壊した建物に下敷きになった人達。
そしてそれを救助する人たち、女性や子供の泣き声が辺り一面に広がっている。

まさしく、それは悪夢と言わないでなんと言うのだろうか？

「ひどい・・・なんて事を・・・」

エルフィーナは、涙声で呟くながら地面に座り込んだ。

イリシアも呆然と見渡し、ふと足元を見ると白い小動物が落ちていた。

「これってたしか正美様の？」

どうやら、白い小動物は疲れきって寝ているようであった。

イリシアは白い小動物を抱き抱えると周りから声が聞こえてきた。

「これだけの大惨事なのに、死人が一人も出ないのは不思議だったな」

「ああ、一步間違えばこの町ごと消えていたからな、恐ろしい事だ。あれはきつと悪魔に違いない」

「聞いたか？町の上空に化け物が現れてそれが、町を焼き払ったって・・・」

「ああ、聞いた、聞いた。なんでもそれを見たものはあまりの恐ろしさのあまりに意識を失って卒倒したんだろう？それで何人怪我人が出たことか」

「見た目だけでは、想像もつかないよな、アレがそんな危険な者だ

ったなんて」

「ああ、俺も警備部隊に捕まって連行されていく姿を見ても半身半疑だったが、この町をこんなにした化け物を手足のごとく使ったのだろうか？」

「何人も目撃したらしいぞ、怖い世の中になったもんだな」

そこで一人の男が走ってきてビラを撒いていた。

緊急時、ここの領地内で考案されている情報伝達手段の一つである。ここの領地内の各町で危険な場合に撒かれる予報情報誌だ。

イリシアとエルフィーナはそれを手に取って読み出した。

ここ、商業都市フェルンから一日の距離の所に清教徒軍20万がこの都市に向かって進軍していると書いてあった。

「お姉さま、これって」

イリシアが慌てるようにエルフィーナを見る

エルフィーナも深刻そうな顔をしている。

都市がこのような有様では、防衛すらままならないだろう。

そう考えると、今回の破壊工作もカルト集団の清教徒軍の仕業とも思える。

効率的な手法だ。

二人は苦虫を潰したように顔をしかめた。

予報情報誌の下項目には、領主であるアレイクードは軍を率いてこの町に向かっていると書いてあったが、この町の状態では耐える事は不可能だろう。

軍が到着する前に、この町は略奪と虐殺が横行する場所と化す。

都市の人間もそれが分かっているのか全員が、死んだように立ち竦んでいる。

ここまで、巧妙な手段を取ってくるとは、優れた指揮官が清教徒軍を率いてると思われる。

もはや、この都市が存続できる手段は絶たれたと思っていい。

そこまで二人は考えた所で、重大な事を忘れている事に気がついた。

「お姉さま、そういえば……正美様は？」

エルフィーナはイリシアの言葉を聞きながらも辺りを見渡す、でも正美様の姿を見つける事は出来ない。

宿屋・風見鳥の女将ユーリさんが座っているのを見かけたイリシアはユーリさんに話しかけた。

一体自分達が気絶していた間に何が起きたのかを聞くために……

エルフィーナもイリシアとユーネの話を盗み聞きしながらもその内容は信じられない内容であった。

真実という名の罪状

あまりにも順調な進軍に、イドバーン祭司は上機嫌であった。

途中にあった村は、逃げ出した後なのか略奪を好き放題に行う事が出来た。

唯一問題は、死体を手に入れられない事くらいであったがそれは些細な事だ。

だが、斥候が届けた情報がイドバーン祭司の機嫌を損ねた。

「それは、本当の事なのか？」

「はい、斥候の話によれば、強大な魔物が現れ町を一瞬にして破壊し住民の大半に怪我を負わせたと……………」

我々以外に動いてる者がいるのか？

それに一瞬で30万人を要する城砦商業都市を破壊するなど、どんな化け物なのだ……………」

「祭司様、斥候の届けた情報が本当ならばこのまま、商業都市フェルンに向かうのは危険かと思いますが」

側近の言葉も一理ある。

せっかくここまで肥大化させた軍がその謎の化け物に蹂躪されてはたまらない。

今まで、全てが順調に事が運んでいただけに、イドバーン祭司は冷や水を浴びせかけられた気分であった。

「それと祭司様、その魔物を操っていたと噂される容姿も斥候から
の話によると……」

それを聞きながら、イドバーン祭司は一瞬呆気にとられたあと黒い
笑みを浮かべていた。

「ようやく、この時が来たのか」

清教徒教会の最高顧問団や上層部・法王様が聞いたらさぞがしお喜
びになると思い、

その魔物を操るモノを迎えに行く事に決めた。

もはや、都市を陥落させる必要はない、交渉でそのモノを手に入れ
るだけでいい。

それだけで、自分は清教徒教会の中でも高い位置を確保できる。

そう考えると笑みが止まらなかった。

ようやく、ようやくだ。この傀儡ウラウス・オリジン原書を使う時が来た。

この原書を手に入れる為にどれだけの下等生物にんげんを殺してきた事か、
地道な努力がようやく報われるときが来たな……

商業都市フェルンに向けて、嬉々として全軍に進軍するようにイド
バーン祭司は命令を下した。

水滴が、牢獄の中に滴って落ちてくる。

この牢獄に入れられてからすでに一日が過ぎていた。

その間、食事も水も何も出されてはおらず、堅く粗末なベツトの上で横になっていた。

「くそ、俺は何もしていないのに！」

俺は、そう言いながらも、このような状況下に陥った昨日の出来事を事を思い出していた。

—24時間前の回想—

ミリルを命樹原書ラクトオリジンで助けたあと、宿屋・風見鳥のラウンジに残った俺は、女将さんのユーネさんに怒られてた。

2Fや3Fのみならずラウンジまで突風で破壊するつもりなのかと、
・・・・

俺は、ユーネさんのお怒りもごもとも思い、怒られていた。

その後、ユーネさんにこの宿屋は、直すより建て替えをした方が安いと言われた。

たしかに、ここまでボロボロになってしまつては下手に修繕するよりはかは立て直した方が安く済むだろう。

だが、建て直しするだけのお金を俺が捻出できる訳がない。

俺が途方にくれていると、俺とユーネさんの話を聞いていた、疫病神である小動物のルアは提案してきた。

そう、全てはあのルアの提案に大した疑問を抱かずに乗ってしまった俺がいけなかった。

ルアの提案はこう言っていた。

「ご主人たま、僕だったら原子を構成することが出来るでち！このくらいの建物なら一瞬で再構成できるでち！」

その時、俺はルアもやれば出来る子なんだなと感慨に耽^{ふけ}っていた。そしてルアは俺と分離した後、上空に浮かびながら、宿屋の原子を変換させていく。

念の為、エルフィーナとイリシアと女将さんを外に退避させていた俺はそれを見て、一つ疑問に思っていた。

その疑問がどんどん膨らんでいき、疑問は疑惑に変わり、疑惑は危機的状况を想定させた。

これって……原子を弄^{いじ}るって事は何か問題が起きたらメルトダウンとか核爆発とかとんでも無い事が起きるんじゃないの？と……

その時、俺の顔は真っ青になっていたと思う。

そして、ルアの顔を見た瞬間、空に浮かんでるルアの顔に葉っぱが飛んできて纏わりついたのが見えた。

俺はそれを見た瞬間………終ったな………。

と心の中で冷静に第3者の視点で突込みを入れていた。

その後、ルアが盛大なクシャミをした途端、宿屋全体が原子融解を起しその巨大な運動エネルギーが周囲を吹飛ばそうと荒れ狂う。

ルアも一生懸命抑えようとしているようだが、力を制限されている姿では力の方向性を変える事しか出来ず、その破壊対象を無機物に変更するのがやっとであった。

そして、とてつもない爆発という名の暴風が去った後、城砦商業都市フェルンは町の機能の99%を失う事になった。

俺は、その原因を作ったルアのご主人様って事で、後から来た警備隊の人たちに連行され牢獄にぶち込まれた。

そこまで回想をした所で、やっぱり納得いかなかった。どう考えても俺って被害者なんじゃないのかと？

なんでこうなってるんだー。と心の中で突っ込んだ。

それに、俺が捕まって引き立てられる時、幸せそうにルアが寝ているのが視界に入った。

それを見た俺は殺意が芽生えた。

あとで絶対に、殺ったるリストに追加するのも忘れずに心の中のリストにカキコした。

とりあえず、俺は被害者なんだ！だから……………

「やったのは俺じゃないんだ！誰か信じてくれー。」

正美の声が地下牢獄の中で響いていた。

生贄として(1)

一城塞商業都市フェルン内の行政区域会議所―

今、ここではこの町の将来を左右する会議が行われていた。

清教徒軍総指揮官イドバーン祭司により、町を襲わない代わりに、町を壊滅させた主犯格を引き渡せと要請があったからだ。

徹底抗戦しか考えていなかった議会はその話を聞き、混乱した。

間者が忍び込んでいるのも気がかりであったが、

たった一人の人間を引き渡すだけで30万人の人間を助ける事が出来るからだ。

しかも、その主犯格は今魔物を従えてはおらず利用価値すら見出せない状況下であり、

牢獄に繋いでるだけであった。

だからこそ、その人間を引き渡すだけで、無条件にこの町のみならずアーカルスド領地からも撤退するという話は信じがたい内容であった。

だが、送られてきた書状には、清教徒教会の神 インフェルノに誓って約束を違えないと記載されていた。

彼ら、清教徒が神の名を出して誓うという事はそれは教会全体の意志となり、

約束を違えた事はここ数百年一度もない。

だからこそ、送られてきた書状について、2時間近く議論が繰り広げられていたのだった。

「ですから、私は、あの女を清教徒軍に差し出すのがいいと思うのです！」

一人の男が会議室で、意見を述べている。

そしてその意見に対して反対意見を述べる者もいるわけで、

「だが、女性を差し出しておめおめと生き長らえるなど軍人として
恥ずかしくないのか？」

どんなに罪を犯したとしても、それを悔い改めさせるのが法ではな
いのか？

我々の力で国や民を守るのが使命ではないのか？」

「理想はいいんですよ！問題は一人、生贄にするだけで何十万人も
の犠牲者を無くす事が出来る事なんです」

「だが、それは論理的に反するのではないのかね？」

「ですから言ってるじゃないですか！あの女は化け物なんですよ！
魔物を使役する化け物なんです！

そんな災いの種を生かしておくなど正気の沙汰とは思えません」

「女性を捕まえて、化け物呼ばわりはあまりにもひどい言い方だと
は思わないのかね？」

「化け物を化け物と言って何が悪いのです？たしかに見た目は美し
いですが、昔から言うでしょう？

見た目が美しいのが実は化け物だったと！」

会議室にいるこの町の有力者達から、次々と意見が上がる。

商業都市フェルンの市長 ハーゼス・グラッカスは、正直迷って
いた。

昨日の夜半に、一人の女性が宿屋・風見鳥の女性と一緒に上訴してきたのだった。

その女性は、アレイクード公爵の副メイド長であり、この町の基礎を作った先代市長であり、

現アドバイザーでもあるクレイネルの娘エルフィーナであった。

彼女の話聞く限り、問題を起したのは、事実ではあるがそれは壊れた宿屋を直す際に、牢獄に入っている少女の使い魔が使った魔法が暴走してしまい、

その結果、このような事態を招いてしまった事を……

そしてすでに町を3回ほど立て直す事が出来るだけの資金を、アレイクード公爵よりクレイネル経由で振り込まれていた。

それでも、この場で事実を伝えても何も変わらない事は分かっていた。

もし事実を伝え、彼らが正面から戦う事になれば、この町の住民は全員死ぬ事になるだろう。

今、この町で編成できる兵士の数に傭兵と冒険者と含めても1万にも満たない。

それに大して清教徒軍の数は20万にも及ぶ。

しかも大半が亡者で構成されており、こちらから一人でも死人が出ればそれは清教徒軍の強化に繋がってしまう。

この町が落とされる事があれば、倍以上に膨れ上がった清教徒軍により王都が蹂躪されかねない。

たった一人、生贄として差し出すだけで町や国が救われるのだ。

今は、私情を挟む時ではない。

そこまで思索した所で、ゆっくりとハーゼスは椅子から立ち上がり座っている有力者達を見回した。

ハーゼスが立ち上がった事により会議室は静まりかえる。

そして、会議室に明瞭に声が響いた。

内容は、正美を清教徒軍へ差し出すという内容であった。

エルフィーナとイリシアが目が覚めたのは、すでに御昼を過ぎていた頃であった。

ルアはまだ、眠そうにイリシアの膝の上で寝ており、その毛並みをイリシアはブラッシングしてあげていた。

「お姉さま、正美様は大丈夫でしょうか？」

心配そうな顔をしてイリシアがエルフィーナに尋ねる。

エルフィーナもしばらく思案していたがすぐに笑顔になると「大丈夫よ」と答えた。

商業都市フェルンの市長 ハーゼス・グラツカスは有能な人物であり父クレイネルの友人でもある。

破壊した町の復興支援金は、クレイネルとアレイが肩代わりしてくれるはずだ。

不幸な偶然が重なってしまったけど、死人は、出ていないしそこまで重い罪にはならないはずだ。

だから、今日中には牢獄から解放されるはず。

そんな軽い気持ちでイリシアに答えたのだった。

生贄として（2）

エルフィーナがイリシアを連れて、正美を引き取りに商業都市中央行政区画へ歩いていくと、

前方に数十人の兵士が囚人の入れられる檻を警護してる姿が視界に映った。

二人とも、その光景を見て、歩みと止めてしまっていた。

「お、お姉さまあれって………」

「ええ、あれは………」

二人とも言い掛けた訳は、檻を警護していた数十人の兵士は、清教徒騎士団であったからである。

カルト宗教である清教徒は、人の弱みに付け込んだ宗教であると同時に情勢が不安定なこの世界ではそこら中に信者がおり、どこから密告されるか分からないからだ。

エルフィーナは思ったより早く、到着し都市へ干渉してきた清教徒騎士団を疎ましく思っていた。

それより、檻に入れられているの人物の方が問題であった。

その人物の、夜空に煌く星のように光り輝く黒い髪が今は大量の血を吸って深紅に染まっていた。

着ている淡いピンクのドレスも体中からの血を吸い上げたように深紅のドレスになっており、それに反して顔は死人のように真っ白に彩られていた。

顔の中で唯一、唇だけが血を吸い上げたように赤く口紅を塗ったよ

うに艶かしく光っていた。

そして、檻の中では、体中に傷つけられた傷跡から血が少しづつ流れていた。

そしてその血を貪欲にドレスが吸い上げている。

まるで、着ている者の命を吸い上げるように……

「お姉さま！」

イリシアの声でエルフィーナは意識を取り戻した。

「どうしますか？お姉さま。きっとこの町の市長達は何らかの取引をして、都市を守るために正美様を売ったと思います」

「そんな事、ありえないわ。私の父の友人なのよ？」

「お姉さま、今、目の前で起きてる事が全てですわ」

イリシアはそう言いながら、寝ているルアを近くにあったベンチに置いてから腰に差してあった2本の長刀の柄を左右の手でそれぞれ掴み抜き放とうとした。

「やめなさい、イリシア！」

エルフィーナの言葉に、イリシアは柄に手をかけたまま固まってしまふ。

「何故ですか？お姉さま。正美様には治療術が効かないのですよ？早く助けて治療しないと命に関りますわ」

そんな事はイリシアに言われなくても分かっている。

それでも、清教徒騎士団に手を出せば向こうも黙ってはいない。

アレイ様の軍勢が到着していない今、報復されればこの町のみならず、国が危機に晒される事になる。

犠牲になるのは自分達だけでは済まないのだ。

それこそ何十万人以上の人間が死ぬことになる。

だからこそ、迂闊な行動は出来ない。

イリシアを見ると、唇を血が滲むほど噛んでいるのが分かる。

きっと、イリシアがいなければ自分も自制が効かなかったかも知れない。

それほど、正美様が血だらけになっていたショックは大きかった。

二人は、何も出来ない無力感に苛まれながらも運ばれていく正美の後ろ姿を目に焼き付けていた。

イドバーン祭司は天幕の中で先行させていた清教徒騎士団の報告を待っていた。

「ずいぶんとご機嫌ですな、祭司様」

「ああ、そうだな。これでようやく願いに一步近づけるのだからな。騎士団が戻ったら私の元へ、神の巫女を連れてくるように伝えろ」

「はい、わかりました。」

イドバーンは、立ち去っていく部下の後ろ姿を見ながら

「神の巫女か．．．都合のいい解釈だな」

そう呟いた声は、どこまでも絶望に沈んでいた。

いつの間にか、寝てしまっていたのかイドバーンが目を覚めたのは、部下が正美の到着を知らせにきた一報であった。

普段ならば、寝起きはかなり機嫌が悪い男であったがその時だけは違っていた。

嬉々として、報告のあった場所まで歩いていく。

そして、檻の中を見た瞬間、脳裏に焼きついた光景が浮かび上がってくる。

「貴様ら、何をした？この方へ何をしたんだ？」

「いえ、私達は何もしてません、商業都市の行政から引き渡された時にはすでにこのように傷だらけになっておりまして」

「わかった、すぐに巫女の治療と休息を与えろ、それとすぐに宗主国インフェルノへ帰国する。準備を急がせろ」

イドバーンはそれだけ言うと、檻を開けて中に入り、正美を抱き上げる。

微かに息をしていることに安堵すると、そのまま檻から出て、軍医に引渡し天幕へ向う。

忌々しい下等生物が！神の名の元に作った書状が無ければこの方を傷つけた奴らをすぐにでも殺したモノを！

イドバーンは心の中で吐き捨てていた。

世界観・人物編集

人物編集

《桂木正美》
かつらぎ まさみ

大学を出たが、彼女に振られしかも就職も決まらない典型的なダメな人。

すでに両親と祖父・祖母は他界、天涯孤独。

異世界へ飛ばされたと同時に体が女性化。

他の追従を許さないほどの美貌を手に入れる？

身長は150cmほど。

主人公補正で常に不幸に見舞われる。

《桂木正美の使役獣》
かつらぎ まさみ

《幻獣王》
ルアカーゼ
まさみ

正美の事を幻想大陸に飛ばした謎の声の主が正美を守る為に授けた使役獣
しえきじゆう

《謎の声》

正美の中に寄生している人？とにかく人の話を聞かない。

【幻想大陸住人】

<アーカルスド領内>

《アレイ》

正式名 アレイクード・フォン・アーカルスド公爵 公爵領領主

《エメラス・フォン・アーカルスド》

アレイクード公爵邸のメイド長でありアレイの実の母。
見た目がロリコンに見える。実際の年令は不明。

歴代最強の王宮十使徒で一人であり、その戦闘力は未知数。

《エルフィーナ》

アレイクード公爵邸のメイド副長。アレイの幼馴染

現在は、正美の手により浄化された光の精霊ジェードを操る世界唯一の精霊使い

《クレイネル》

エルフィーナの父。王宮内でも屈指の魔流術師であり、多くの医療技術を保有している。

《イリシア・ロースト》

アレイクード公爵邸の見習いメイド。

エルフィーナに妹として躰けられている。

戦闘力は、未知数

《ユーエル》

ミリルの父親。

命樹原書の管理者であり、商人。

《ラン》

ミリルの母親であり、20歳前半でも通じるほどの美貌を誇る

《ミリル》

すでに他界。

《ロムス》

ミリルの婚約者であった。銀騎士の称号を持つ魔法勇者

《ハーゼス・グラツカス》

商業都市フェルンの市長であり、クレイネルの友人

【清教徒教会関係者】

《レイユーズ公爵》

貴族達から嫌われている。権力、お金大好き
裏で教会と繋がってるらしいが？

《フィンナ》

レイユーズ公爵の娘

《ルフィン》

フィンナの母親であり、レイユーズの奥方。

《イドバーン祭司》

冷酷で無慈悲な戦い方により、教会関係者からも恐れられている。

世界観

《アレイクード公爵邸》

正美いわくバイオハザード1の洋館らしい？

《幻想大陸ルシアード》

桂木正美が謎の声により飛ばされた世界。
5つの国より成り立っている。

【インフェルノ】 世界中に信者を持つ宗主国 カルト宗教の本拠地

【レクイエム】 世界最大の軍事国家

【エルハンス】 アレイクード公爵が使える国 王政

《首都イースバール》

人口20万人の都市

《商業都市フェルン》

30万人もの人間を抱える巨大都市。鉄壁な城壁から城砦都市とも呼ばれている。

《商業都市フェル》

商業都市フェルンの姉妹都市であつたが2ヶ月前に、原書事件により滅びる。

【アルノート】 世界最大の資源輸出国

【レイゲン】 大地と大陸を救った女神を信仰する国。インフェルノとは敵対関係

生贄として(3)

「姉さま！姉さま！」

少年の声が冷たい回廊の中に響き渡る。

少年は連れ去られて行く黒髪の姉の元へ向かおうとするが、青い神官服を着込んだ数人の男達に押さえつけられて声を上げる事しか出来ない。

名前を呼ばれていた女性は、少年に振り向くと小さく口を動かしたが、その声が少年に届く事はなかった。

少年の姉が連れ去られた後、教会より神の御許へ旅立みもとったと少年と家族に連絡があった。

この国では、神の御許みもとにて仕える事は大変な名誉とされている。神は神々しく美しいとされていたからである。

だが少年は、大事な姉を奪われた事により心を病んでいった。

それは、姉の死を正当化するために、自分達の信じる神こそが唯一絶対の神であろうと思ひ込むように……

時は流れ、少年も青年へ成長し教会へ入信する。

そして、祭司まで駆け上がったある日、近隣の村にて黒髪の女性が発見された。

黒髪の女性は神の御許へ送るのが教会の慣わしになっている。

男は祭司になったばかりだったが、教会を妄信していたこともあり自分自身でその女性を迎えに行く事にした。

一人で行こうとした理由は、神に仕える事が絶対的な名誉であり、それを前提にするならば抵抗するなど考えられない事だったからだ。それが、この国に生まれた者の運命であるから……

初日は、どのような村か女性の様子だけ伺おうとして町民の服で来たのが間違いだったのか、全ての歯車はそこで狂ってしまった。

男は、黒髪の女性を見た時、一目で心を奪われた。

美しく輝くその髪は光輝き、白い肌と相まってとても幻想的に見えた。

男がその時、神官服を着ていればまた変わっていたのかもしれない。男は女性に最初に話した言葉は、「私と付き合ってほしいのですが？」であった。

突然、交際を申し込まれた女性は呆氣に取られてしまい、そのあと笑った。

男は何故？笑われたのか理解が出来なかった。

女性を神殿へ連れて行くために付き合ってほしいと言ったのに何故笑われてしまうのか……

「こんなに、男の人にストレートに交際を申し込まれる事なんて初めてで、驚いたわ」

その言葉に、男は混乱した。

交際？交際というのは、男女が付き合うと言う意味だ。

男は、何故このように話が進んでいるのか理解できなかった。

「えーと、貴方って見たことないんだけどどこから来たの？」

「ああ、私はヘーベンボルクの方から……」

「ふーん、そうなの。ずいぶん遠くから来たのね？旅してるの？」

「いや、仕事で立ち寄ったのだが……」

「商人さん？冒険者さん？面白い話があったら聞きたいな」

女性は男の方へ身を乗り出し懇願してきた。

男は神殿で多種多様の文献を読んでいた事もあり、多くの話を知っている。

そして……

「今日はとっても面白かったわ、また明日ね」

女性が手を振って離れていくと、男もついそれに釣られて手を振っていた。

そして翌日も翌々日も、男は女性と話をし互いに思いを育んでいた。

いつしか男の心の中から、教会の事はすっかり抜けていた。

一ヶ月が過ぎたある日、行方不明になった祭司の搜索に数十人規模の清教徒騎士団が村に派遣された。

男と女性が歩いていた所を見かけた清教徒騎士団の一人の騎士が男に、ご無事でなによりです、祭司様と頭を下げていた。

その様子を見た、女性は信じられないような眼差しで男と騎士を交互に見比べていた。

男は、自分を見た女性の眼差しに驚愕きょうがくしていた。

その瞳には、恐怖、怒り、疑心そして裏切られたという表情をしていた。

「ち、違うんだ」

男は自分で言っておいて、何が違うのか理解してはいない。

それを見ていた騎士も祭司の行動に疑問を抱き、そして……

「祭司様、何をしているのですか？すぐにこの黒髪の巫女を捉えて神の御許へお送りしなければ」

騎士が言っている言葉がまったく異国の言語のように男の脳裏を駆け巡り、理解を拒む^{こば}。

後ずさりする女性に、男が手を差し伸べると恐ろしい化け物を見るような眼差しで男の手を女性は振り払った。

そして……

「この、人殺し！」

その言葉が、男の胸を貫いた。

それは、今までのどんな言葉よりも男の心に響き渡る。

「貴様！祭司様になんという暴言を！」

その後、男の指示により女性は取り押さえられ、ヘーベンボルグにある神殿へ連行された。

男は気がつく^とと神殿にある自分の部屋で横になっていた。

しばらくすると、部屋の戸が叩かれ一人の男性神官が入って報告を上げてきた。

「祭司様、そろそろ儀式の時間ですが、体調が芳しくない^{かんば}ようでしたら出席せずともいいと思いますが」

「体調は大丈夫だ、それより儀式とは何のことだ？」

男が頭に手を当ててから、神官に聞き返す。

「え？黒髪の巫女を神の御許へ送る儀式の事ではないですか、そう言えば祭司様は今回の儀式立会いは初めてでしたね」

「ああ、そうだっ……た……な？」

男は、ベットから飛び跳ねるように立ち上がると祭司のがいとろ外套をは羽織る事もせず祭壇へ走った。

息を切らせて、祭壇の広間に走りこみ見たのは、元老祭司が女性の胸元に短剣を振り下ろす光景であった。

「アリシアあああああああ」

男が叫んだその名前に反応した女性は、小さく囁くように呟いた。その言葉は少年の姉が呟いた時のように男に聞こえる事は無かった。

そして、アリシアと呼ばれた女性の胸元に短剣が深く刺さり、その血が祭壇を染め上げた。

儀式が終ったあと、アリシアの亡骸を抱しめて男は、慟哭どうこくした。その瞳には黒い闇が渦巻いていた。

暗い天幕の中、イドバーンは息を切らせながら目を覚ましていた。

「はあはあはあ、またあの夢か、やはりあの少女を見たからなのか？もうすぐだ、アリシアもうすぐだ、もうすぐ下等生物にんげんの住む世界を滅ぼす事が出来る。全て殺せる力を私は手にする事ができる。お前の仇を討つことが出来る。この世界を消す！待っていてくれ」

両手に嵌められた8個の指輪を見ながら男は壊れたように笑っていた。

メイド達の戦場（上）

闇夜に紛れて、丘の上で二人の女性は20万もの清教徒軍を視界に納めていた。

「お姉さま、本当に襲撃をかけるのですか？」

「ええ、正美様を一度、手に入れたという事は向こうは約定を守らなければいけませんしね、
それにこの暗闇の中ではどこの陣営の者か特定は不可能でしょうしね」

清教徒は多くの人間から恨みを買っている。

暗闇の中で襲われては、どこの国の者か特定は不可能だろう。

イリシアは、エルフィーナの言葉を聞きながら、嬉々として腰に差してある2本の長刀を抜き放つ。

暗闇の中でも一際、その刀は妖しく光る。

刀は漆黒の鉱石で作られており、光を映さないが独特の輝きを見せていた。

エルフィーナも、ジエードを封印していた複写原書を開く。

そして……闇夜を巨大な閃光が切り裂いた。

夢から覚めたばかりの私は、夢うつつのまま寢床に座っていた。

そこに男が、天幕の中へ慌てて飛び込んできた。

「祭司様！大変です。敵襲です」

なんだと？この大軍に攻め込んでくる国があるというのか？

「どこの国の軍隊だ？」

「そ．．．．．それが．．．．．たった二人です。たった二人の女が本陣に奇襲をかけてきています」

その報告に、イドバーンは立ちくらみを覚えた。

「冗談を報告してる暇があるならば、見回りでもしておけ」

まったく20万の大群にたった二人で攻めてくる馬鹿などいるわけがないだろうが、子供でも分かる理屈だぞ？清教徒軍の質も落ちた物だな。

私の反応が気に喰わないのか、男はまだその場に立っていた。まったく面倒な男だな、仕方ない冗談に付き合ってるか．．．．．

「わかった、清教徒騎士団を向かわせて殲滅しろ」

「そ、それが」

「なんだ！まだ聞きたい事があるのか？」

「すでに清教徒騎士団の半数は、二人に壊滅させられました。」

静まり返った本陣の天幕の中で、イドバーンは驚愕していた。
どこまで、この男は冗談を言うのかと……。

「貴様、いい加減にしておけよ？」

清教徒騎士団はそれなりに訓練を受けた者だ、しかも数は1000人近く連れて来ている。それをたった二人で壊滅だと？
そんな馬鹿な事があるわけが……。

私はすぐに立ち上がった。

そう何も起きていない事を確認する為にだ！

私は天幕から身を乗り出した時に聞こえた音に驚いた。

まさか、本当に攻めてくる馬鹿がいるのかと……。

そして、戦いの剣戟^{けんげき}が響き渡る方へ視線を走らせた。

まだ距離はある。

すぐにそちらへ向かい走っていくと、巨大な閃光が、亡者の集団をぶち抜き吹飛ばしていた。

それを打ち出した女は光の粒子を体中に纏い青い髪を靡^{なび}かせていた。
そしてその女に近寄ってくる亡者が一瞬で細切れにされる。

「な、なにが、一体起きているのだ？」

「イリシア、どうやらこの軍を統率してる方が見えたようですわ」

エルフィーナがイドバーンを見て言葉を紡いだ瞬間、イドバーン祭司を警護していた5人の騎士が同時に体中から血を噴出し倒れた。

私は倒れた騎士達を見ながら、いつのまにか紫色の髪をした女が目

の前に立っていたのに気がついた。

そして、その女は漆黒の刀を私の首に向けてきた。

ばかな．．．．． 一体いつの間に接近して．．．．．

「貴方がこの軍の指揮官とお見受けしますが、少しお聞きしたい事があるのですがよろしいでしょうか？」

この私に、交渉だと？ 愚かな。殺しておけば良かったものを、これだから力を持つ者は氣にくわない。

イドバーンが嵌めている指輪がどす黒く変色していき、それが指を覆っていく。

「イリシア！ 下がって」

エルフィーナの指示を受ける前に既に、イリシアはエルフィーナの側まで退避していた。

100m近くの距離を一足飛びしたのであった。

「お姉さま、あれは？」

「あれは．．．．． まさか．．．．．」

エルフィーナとイリシアが見てる間に、イドバーンは闇に喰われていき30m近い巨大な黒龍と変化した。

《くっくくっ、お前が我の力を使うとは余程のモノなのかの？ ふむ、もう意識が沈んでしまったのか。人間というのは脆弱だのう》

巨大な黒龍は、エルフィーナとイリシアを見ると口から炎を噴出し

た。

「《光の精霊ジェード、盟約により全てを退ける壁とならん》」

二人の前に、半円の高さ3mの光の壁が作りだされる。

《愚かよのう、複写原書程度で世界の根源を司る108枚の原版の一枚、闇の原書たる我に牙を向けるとはな》

そして、光の壁に黒龍の炎が降りかかる。

光の壁が軋みを上げ、砕け散り複写原書も炎により焼き尽くされる。エルフィーナを纏っていた光も同時に消失し、力を失った反動により地面に倒れこむ。

「お姉さま!」

イリシアはエルフィーナを抱き抱えようと、気絶をしているだけのようであった。

だが、戦場で気絶するという事は、死を意味する。しかも前には、見たこともない怪物がいるのだ。

そして、黒龍は二人を見て、興味深そうにしていた。

最強の我を見ても、まったく揺るがない精神力そして胆力、それは、いままで数多の戦士を見てきたがその中でも最上級に相当する。

少なくとも、我を呼び出すことに発狂するこの男などより遥かに優秀。

この二人ならば、もっと優秀な生贄になっている事だろう。

それでも、契約を行ってる以上、この二人は我が焼き尽くす対象となる。

黒龍が炎を吐き出そうとした瞬間、残像を残すほどの速度で間合いを詰めてきたイリシアの双刀が黒龍の指に当たり砕けた。

「な！」

黒龍は巨体に見合わぬ俊敏さで空中で驚愕していたイリシアを叩き落とす。

地面に叩きつけられたイリシアは、内臓が傷ついたのか口から血を吐きながら数回、地面を跳ねてから岩に叩きつけられて動かなくなる。

《やはり、人間は脆弱よのう、これで終わりにしてやろう》

赤い炎が咥内に貯められていき、それがエルフィーナとイリシアに打ち出され巨大な爆炎が周辺を焼き尽くさんばかりに燃え上がった。

意識が戻った時に、一番最初に感じたこと、それは痛みだった……

どうやら、俺は、ルアを使った反動に耐える事が出来たようだった。ルアと融合するとその後、激しく異性を求めてしまうのはどうかしてほしい。

意識を保つ為に、体を傷つけてなんとか衝動が過ぎるのを待ったわ

けどが、

その甲斐があって今回は何とかなったようだ。

周りを見渡すと、天幕の中にいるようだった。

体中に包帯が巻かれている事もあり、治療されたのが一目で分かった。

それよりも先ほどから天幕の外から叫び声と轟音が聞こえてくる。

今いる場所も気になっていた事もあり天幕を開けると巨大な化け物にイリシアさんが切りつけ、

剣が折られて化け物に殴り飛ばされたのが見えた。

俺は急いでそちらへ向かおうとした所で、意識が一瞬飛んだ後、地面に倒れこんだ。

血を流しすぎたのか体に力が入らない。

力の入らない体を無理矢理起して、龍を見ると、イリシアさんが吹き飛んだ方へ巨大な炎を打ち出そうとしている。

まずい、あれは………。

立ち上がるとしても足に力が入らない俺はまた地面に倒れる所で一人のメイドさんに体を支えられた。

「大丈夫ですわ、正美様」

「え？」

俺に声を掛けてくれた人を見ると、その人は着てる服はメイド服ではなかったが、俺を一番最初お風呂に入れたメイド達の一人だった。

「メイド長が、すでに向かっています。何も問題はありませんわ」

さも当然の如く俺にそのメイドさんは言っ
てのけた。

メイド達の戦場（下）

黒龍が放った炎が周辺を焼き尽くさんばかりに燃え広がっていく。その炎が、突如発生した吹き荒れる暴風により消し飛ばされた。巨大な岩盤が周辺に飛び散り、それにより亡者が押しつぶされる。

黒龍の肉体にも、重量1t近い岩盤がぶつかりそのまま爆ぜる。

暴風が消えたあと黒龍とエルフィーナ・イリシアの間に一人の身長140cm程度の緑色の髪をした

メイド服を着た女の子が立っていた。

その足元には深さ5m以上、幅20mもの巨大なクレーターが出来ていた。

両手にはオタマとフライパンを携えている。

エルフィーナとイリシアを交互に見た後、エメラスはこの現況を作り出した黒龍を睨み呟く。

「調子に乗ってんじゃねーぞ、このクソ餓鬼^{がき}が！」

正面に亡者の大軍を視界に納めながら、アレイは領土内からかき集めた兵士と騎士に命令を下す^{くだ}。

「これから、我らが領地に土足で踏み入った者達へ討伐する！全軍、
．．．．．」

「突撃！」

アレイクード公爵を先頭に鶴翼の陣形にて5万に及ぶ軍が亡者の大軍へ側面から突っ込む。

一般市民を亡者に仕立て上げた軍は、正規の軍の敵ではなかった。形勢は公爵軍に傾いていく。

それを、見ていたクレイネルが有する三千の義勇軍

派遣勇者と傭兵・冒険者で構成される者達も突撃を開始する。

数こそ、少ないが一人一人が通常の兵士を遥かに凌駕するほどの武芸者揃いの事もあり

魔法や剣術が戦場にて乱れ飛ぶ。

数千もの亡者が瞬殺されていく。

そして、自国の民を守る為に、各地から集まった貴族達もそこに加わる。

「アレイクード公爵様に遅れるな！正面から打ち崩す。貴様ら、恥ずかしい姿を見せるんじゃないぞ！全軍突撃！」

数十人の貴族が自国を守る為に従えた私兵4万が正面の亡者の大群に突っ込んでいく。

後方、前面、側面より同時に、攻め入るアレイクード公爵の軍に清教徒軍は浮き足だった。

これほどの抵抗を彼らは考えてはいなかった。

まさか、清教徒軍にここまで対抗してくるとは……

「本陣に連絡は取れたのか？」

「そ、それが、本陣に向かわせた者が戻ってこないのです」

その間も、前線はアレイクード公爵と貴族連合軍により包囲されつつあった。

その頃、本陣も、アレイクード公爵邸のメイド部隊が獅子奮迅の戦いを見せ付けていた。

その動きは、清教徒軍には到底信じられる内容ではなかった。布切れで剣を打ち碎き、雑巾で魔法を防ぎ、モップで亡者の体を切断しているのだ。

その姿は悪夢としか言えないだろう。

戦場の空気が、変わった事には黒龍も気がついていた。

このまま、ここに居れば自らも討滅される可能性が出てくる事に気がついたのだ。

すぐにでも、ここを離れる必要があるが……その行動を黒龍が移す事が出来ない。

目の前に居る少女、否！化け物が逃亡を阻止しているのだ。

「あらゝ。どこに逃げようとしているのかしら？このクソ餓鬼さんは？」

突如、横から鈴の音が鳴り響くような声が聞こえてくる。
それと同時に30m近い巨体が浮かび上がり地面の上を転がる。

《い、一体何が……》

黒龍の視界には、オタマを刀のように振り切ったエメラスの姿と、自分の右翼が千切れ空中で滞空してから地面に落ちるのが見えた。

《くああああああああ》

黒龍は莫大な闇の力を、エメラスの頭上に集めそれを打ち出す。
それを、エメラスは微動だにせず右手に持っていたフライパンを振るっただけで消し飛ばす。

《ばかな？何が？》

「見せてあげましょうか？本当の技というモノを」

突然、体中に衝撃が走ったかと思うとその巨体が空中に浮かび上がる。

そして、わずか数秒の滞空中の間に数千発に及ぶ、
5mもの岩盤を打ち破る打撃が黒龍に浴びせられる。

一撃ごとに鱗が吹き飛び、翼が千切れ、牙が折れる。

黒龍が反撃をしようにも、エメラスの姿が数十、数百に見えてしまい実体が掴む事が出来ない。

《ばかな、こんなバカな事があるのか？人間がこんな力を有するな
ど信じられん。き、貴様は一体》

「私は、ただのメイドよ」

その声と同時に黒龍の頭が勝ち割られ地面に叩きつけられリバウンドした。

再度、地面に落下する頃には、黒竜は顕現^{けんげん}する力を失い、イドバーンに戻っていた。

そして．．．．．地面に倒れたイドバーンが目覚めた時には、すでに戦場の大勢は決まっていた。

昇華する魂と埋もれし史実の欠片

俺が、メイドさんに肩を貸してもらって黒龍がいた場所へついた時、視界の中には見知らぬ緑の神官服の男が地面に倒れ伏していた。

その男に向かってエメラスさんが近づいていくのが見える。

エメラスさん、何をするつもりなんだ？

俺が見てる前で、男の腹を蹴り飛ばして宙に浮かせると腕をオタマで切り飛ばしていた。

な！一体何をしているんだ？

切り飛ばした腕を拾い上げてその指に嵌っている指輪をエメラスさんは淡々と回収していく。

その行動に俺の頭の中は混乱していた。

何を、何を、何をしているんだ？

一体これは何なんだ？

これじゃ、まるで……強者が弱者から採取するようなモノじゃないか。

こんなのダメだ！やめさせないと！

エメラスさんが男のもう片方の腕を切り飛ばそうとした所で俺は渾身の力を振り絞ってエメラスさんに抱きついた。

「やめてください、エメラスさん。こんなのは良くない、人が人を殺すなんてそんな事はしたらいけない」

俺が抱きついた事により出来た隙を見て、男が俺に向かって残った

右手を翳^{かざ}してきた。

そして………周囲が凍りついた。

時が止まったような、空間の中では俺と男だけが動いていた。

私は、黒髪の少女が私を助けた事に驚いていた。

そして、憑き物が落ちてしまったかのように穏やかになってしまった自分自身の心に驚いていた。

そうか、あの女が切り飛ばした腕に嵌っていた原書は、呪われた物だったな。

その原書が私の精神をも蝕んでいたのだろう。

どちらにせよ、自業自得としか言えないな。

それよりも今は、姉と好きな女性に似ているこの少女に言わなければ行けない事がある。

「初めまして、黒髪の巫女。私の名前はイドバーンと言います」

「イドバーン？」

「はい、貴方を探していたのですよ、偽者ではない本当の黒髪の巫女を………」

本当の黒髪の巫女？何を言っているんだ？

突然、空間の景色が揺ぐ。

「思ったより時間がないようですね、これは早くしなければ………」

時間がない？　どういう事だ？

その時、2つの白い影が現れた。

男の後ろには、二人の女性が、悲しみを讀えた目で男を見ている。

「本当の黒髪の巫女には、死者の魂と会話し因果関係を改変し世界をあるべき姿へ返す力があると文献には書いてあります」

俺はその話を聞きながら、突込みどころ満載すぎるだろその文献！と突込みを心の中で入れていた。

口に出したらいけない雰囲気があったからであるが……

「それで、お前は何をしたいんだ？」

「何をですか、そうですね。望みを打ち碎かれ、しかも黒髪の少女までにも助けてもらい

時間までもらってしまうとは、私は何をしたかったのでしょうか？　たくさん命を奪ってまで最期にはこうして最期を迎えるとは、まったく愚かとは思えない。」

俺には、この男が何を言いたいのか理解できなかった。

それでも、側にいて男の懺悔とも言える言葉を聞かないといけない気がする。

「私はですね、大好きだった姉を守る事も出来ず、好きだった女性も守る事も出来ずにいた男でした。二人とも失ってから大切だったと気がつきました。もう、今になっては遅いですがね」

男はそれと同時に、口から大量の血を吐き出した。

俺から見ても、この男の体はもう死にかけてるのが分かる。

その時、女性の声で俺に語りかけて来る者がいた。そちらを見ると、男を見ていた二人の女性がそれぞれ言葉を俺に伝えてきた。

「おい、しっかりしろ、アリシアとユーメイスからの伝言だ」

俺の反応に、虚ろな眼差しをイドバーンは向けてきた。

恐らく、俺の声が聞こえた方向を見てきただけで、すでに見えてはいないのだろう。

「ユーメイスからは、イドくんのお姉さんで居られてよかった、でも貴方の心が傷ついていくのを見ていて、何も出来なかったのはとても苦しかった辛かったと言っている。

そして、アリシアからは、突然の事で驚いてごめんね、最期に貴方を見た時、私は貴方に言ったのよ、イドバーン、貴方と出会えて幸せだったって、でも貴方には私の言葉は届いていなかった。

本当にごめんなさいね、貴方一人がずっと傷ついていても助けられなかった私を許してね、だそうだ」

ユーメイス、それは私の姉の名前……

この少女は、本当の黒髪の巫女なのか……

それでも思わず確かめずにはいらなかった。

「それは、本当ですか？」

「ああ、本当だ、お前もさっき俺に言っただろうが、死者の魂と会話する事ができるって」

「そうですか、私は本当に愚かな選択ばかりしてきたのですね」

そこで、イドバーンが俺の方へ右手を見せてきた。そして、

「黒髪の巫女、この世界を作っている原書の名前は精神原書レウルリーオリジンと言います」

「精神原書？」
レウルリーオリジン

「はい、本来は、黒髪の巫女が持っていた物です。貴女の持ち物です。」

この空間が解けた後は、私の右手に嵌っている空色のリングを受け取ってください」

「わかった」

俺が、イドバーンという男に言葉を返すと同時に時が動き出した。抱きついていたエメラスさんから、俺は離れると事切れていた男の残された右手から空色の指輪を外して右手に嵌めてみた。その指輪は、俺の指の太さに変化すると綺麗に嵌った。

エメラスさんは俺を、興味深そうに見ながらもメイド達へ残りの亡者を処理するように命令をしていた。

清教徒騎士団20万が全滅した頃には、既に日が昇り朝日が戦場を照らしていた。

そして、数週間後に宗主国インフェルノの議会には一つの報告が成されていた。

そこには、教会に無断でエルハンス王国へ侵攻した挙句、アーカルスド領内にてアレイクード・フォン・アーカルスド公爵が率いる公爵軍そして、貴族連合軍、義勇軍と交戦し全滅したという内容であった。

そして続く書簡にはこう記載されていた。

上級一等祭司の死亡、数十人の神官、清教徒騎士団1000人、清教徒従軍部隊員10000人の死亡

そこには原書を使って作り出した20万の亡者は記載はされてはいなかった。

上司は部下の後始末をする為にいる？

「飽きた………」

俺はベットの上でゴロゴロしながらそんな言葉を呟いていた。

今、俺がいるのはアレイクード公爵邸のアレイの寝室の隣の部屋に当たる。

何故こんな危険な部屋にいるかという話は2週間前さかのぼに遡る。

ー回想開始ー

戦いの後、体中を痛めた俺は、行く宛ても無くアレイクードの館に、しばらく逗留する事になった。

「すみません、エメラスさん。無理を言ってしまった」

「いえ、困った時はお互いさまですわ」

「体が完治しましたら、ギルドでお金を稼いで逗留代をお支払いしますね！」

「逗留代もいりませんわ、この金額をお支払い頂ければ問題ありませんわ」

エメラスさんは、そう言う一枚の紙を俺に手渡してきた。

そこにはとんでもない金額が記載されていた。

0が1. 2. 5. 9.
13.

10兆円だよ。どこの反日国家の予算だよ！

日本円でウォンを買い支えられて、辛うじて国として体裁が維持できてる国が、払えないお金を個人が払えるわけないだろ！

「え、えっと. エ、エメラスさん？こ、これは一体何の冗談です. か？」

最後が疑問系になったのは、エメラスさんが真剣に見てきたから、冗談じゃないのか.

というかこの金額って何の請求だよ！俺何もしないぞ？

俺の反応を見て、納得して居ないのに気がついたエメラスさんはおも
う一枚の紙を出してきた。

そこにはルアの破壊した内容が詳細に表記されていた。

しかも、この国家銀行を通しての入金しましたプレートも証拠として添えられていた。

「エメラスさん、これはあの小動物じゃなくてルアに渡してください」

「ふふ、ダメよ。正美さん、ルアちゃんから聞いたけどね、
正美さんはルアちゃんの主様なんでしょう？」

「え！」

「部下の不始末は、主が責任を持たないとね。大丈夫よ、無理は言わないからね」

無理は言わない？ 10兆ユルドが？

「私の考えた返済計画を実行すれば一瞬で返せるわよ」

エメラスさんが自信マンマンに話してくる。

返済計画だと？ っていうか理不尽すぎるだろ、この借金までの流れ。それに嫌な予感しかないんだが……

「ど、どんな返済計画ですか？」

聞くだけ聞くことにした。

「アレイも貴女を気にいつてるみたいだし婚約しちゃいなさい。

結婚すれば妻の借金は、アレイの借金になるわけだしすぐに返済出来て円満解決ね」

いやいや、俺が円満解決じゃないですから……

というか男同士が結婚とかありえないから！

非生産的すぎるだろ！

「きっと、正美ちゃんはかわいいから、息子のアレイと結婚したら子供はとってもかわいいと思うわ」

……！？

そうだった今の俺、見た目は女じゃん。

だが、お金の為に、男としてのプライドを売るのか？

むしろこの体で男としてのプライドというのがアレなわけだが、だが！それでも！

「け、けっこんはむりです」

血を吐くように一文字づつ噛み締めるように、俺はエメラスさんに言い切った。

「あらあら、それって私の息子が結婚するに価値がないって事なのかしら？」

ゾクツと体中の血栓が開いたように寒気が体中を駆け巡った。

こ、これが殺気と言う奴なのか？

体中が震えて言う事を効かない……………

「大体ね、息子が気にいってるから貴女の我が侘を聞いてあげてるんだけどね、

人の善意の上に胡坐あぐらを書いてる女は気に喰くわないのよ。貴女にわかる？

どこの馬の骨か知らない女に大事な息子が誑たぶらかかされる気持ちがい

こつちが下手に出ていれば増長しやがってこの餓鬼が、絞め殺すぞ」

あー。えー。やばい、やばいよ。めっちゃ怖いって！

エメラスさんキャラ崩壊してるって！

しかも周辺に真っ黒な気オーラ？が立ち上ってるのが見えるし。

そこで扉を数度叩く音がして、アレイが部屋の中に入って来た。

「正美、体の調子はどうだ？傷だらけと聞いたから驚いたぞ。あれ？母上いたんですか？」

「そうね、オホホホホ。今ね、正美ちゃんと今後の借金の返済の計画についてお話してたのよ」

ちゃんって……

「そういう事でしたか」

「ええ、それでね、正美ちゃんと親交を深めていた所なの」

いや、深めてませんから！俺への殺意を深めましたから！

俺の内面の葛藤^{かつとう}に気がつかずアレイは俺が座ってるベットの側にくると、

頭の上に手を置いて話しかけてきた。

「正美、別に俺はお前の借金を建て替えた積もりはないぞ、話を聞いた限りでは不可抗力だったんだろう？」

幻獣王^{ルアカーゼ}の力の暴走ならば仕方ない。むしろあの程度の被害で済んだほうが奇跡的だ。

だから、お前は、十分な休息を取っていればいいんだ、もう以前のようにいきなり居なくなったり無理はしないでくれ」

そっか、心配かけてたのか……

「アレイ、すまなかった」

その間も、アレイの後ろでは、エメラスさんが持っている銀製のお盆が、

チーズを割く様に綺麗に千切られていくのが見える。

怖い、怖いから、マジでやめて！その、虚ろな目でしかもお前コロスみたいな、

口の動かした方をするのはやめてください！

「アレイ、お願いがあるんだけど」

「なんだ？」

「貴方の寝室の隣の部屋に俺の寝室を作ってほしいんだけど」

離れて寝ていたらマジで殺されそう、アレイの近くに住んでとりあえず安全を確保せねば。

「いいが、どうかしたのか？」

「エメラスさんに殺．．．．．ひっ！け、けっこう前提に付き合
つてみればと言われてですね．．．．．」

まじ、銀製のお盆が空气中で融解するとか何なの？もう嫌。

「ほ、本当か？そうか、分かった。すぐに用意させよう」

ー回想終了ー

ということもあり、俺は今、大変な危機的状況下に置かれてるわけ

だが、エメラスさんがあんな危険な人だとは知らなかった。

きつと今まで見てきた人の中で、エメラスさんほど見た目と中身が違う人は居ないと思うが、どちらにせよしばらくは部屋の中で、ゆっくりしてたほうが良さそうだ。

まずは、借金を返す為に金策をしないとな．．．．．

動き出す歯車

—アレイクード公爵邸・黎明庫^{れいめい}—

「どうやら、うまくいつてるようじゃな」

「ええ、こちらの思ったとおり万全の体制で黒巫女を、アレイの近くで一緒に護衛する事ができました」

5つの銀色に光る指輪を男は取り出すとそれを系譜原書^{ソファ}へ近づけていく。

それぞれの指輪が、黎明庫^{れいめい}を照らし、それぞれ縦30cm横10cm厚さ1mm程度の半透明の薄い板に変化する。

「思ったとおりじゃな」

5枚の半透明の薄い板を手に取り咥く。

「クレイネル、それが108枚の紀元原書の原版ですか？」

「そうなる、じゃが、系譜原書^{ソファ}を扱える者は書言の精霊を見る事が出来る者だけじゃが、

それがエルフィーナと言うのはこれも運命かの」

クレイネルは、手にもった原版を系譜原書^{ソファ}へ付けていく。

「これだけの数の原版が一度に、世界の表舞台に出て来るという事は、

彼らも暗躍し始めたのかもしれませんがね」

「ああ、黒巫女だけはどんな犠牲を払ってでも守り抜かねばならない、来る時のためにな……」

「ところで、クレイネル、気になった事があるのですけど」

「ふむ、めずらしいな。鮮血エメラスの死神と呼ばれてる者でも疑問に思った事があるとは」

クレイネルの言い方に、眉まゆを少しエメラスは動かす。

「その名前は好きではありませんわ。それよりも黒巫女がイドバーンから抜き取った指輪ですが、あれは一体何なのですか？

黒巫女が触った途端に、自動契約を行いそれによりあらゆる精神干涉が行えないように防御陣が黒巫女を覆ってます」

「恐らく、黒巫女が手に入れたモノは精神原書レウルリーオリジンじやな」

「精神原書レウルリーオリジン?」

エメラスが疑問を投げかけると、クレイネルは一冊の石版をエメラスに放り投げた。

それを空中でエメラスが受け取ると、石版を読み始める。

「精神原書レウルリーオリジン、精神干渉操作を行う事が出来る原書。魔流力次第では、相手を支配下に置くことも廃人にする事も可能」

それを読み上げるエメラスの顔は、複雑な顔をしていた。

「クレイネル、これはとてつもなく危険な原書オリジンなのではないですか？」

緊迫しているエメラスの口調とは、対照的にクレイネルは説明を始めた。

「問題はない、何せ今回の黒巫女は魔流力が一切ないのだからな。どこで生まれたかは知らんが魔流力を与えられてもそれも分解してしまうとは……」

その言葉を聞き、エメラスは目を丸くしていた。

「魔流力がない？ 一体どういう事ですか？」

その言葉に、クレイネルは不思議そうな顔をしてから、合点が言った様に頷くと話始めた。

「以前、アレイ様が黒巫女を連れて来た事があったのじゃが、その時、怪我をしていて、その際に魔法で治療しようとした事があるのじゃが、術が全て分解されてしまい、体に蓄積しなかった事があるのじゃ。そして、今回の体中の怪我に関しても治癒術は一切効果が見られなかった。

創生時代の黒巫女は、我々と違う術を使ったそうじゃが今回もそれと同じかも知れないのう」

「治癒術を分解？ それは……まさか……」

「エメラスが今、思った事で大体合ってるはずじゃ」

「クレイネル、エルフィーナには本当の事を言わなくていいのですか？」

エメラスのその言葉に、石版を呼んでいたクレイネルの手が止まり、エメラスの方へ顔を向ける。

そして、エメラスとクレイネルの視線が絡まる。

「まだ、その時ではない」

「ですが、隠し通す事など出来ないでしょう？彼女の力は、絶対に必要になります。

それに、フィーナと言う本当の名前の意味も教えてあげなくていけませんし、彼女の母親が死んだ本当の理由も教えてあげないのは……」

「わかっている！エメラス、お前に言われなくてもそのくらいは分かっている。

じゃがな、真実は時に残酷な者なのじゃ、簡単に話せる訳がなからう！」

「クレイネル、貴方は本当に残酷な人ですわ」

「ああ、そうじゃろうな。だが、もう動き出した時の流れを止める事は出来ない、それは私もエメラス、お前も同じじゃろう？」

エメラスは、クレイネルの言葉に沈黙していた。

それは肯定とも否定とも取れかねない内容であった。

日中の幻夢

―商業都市フェルン―

エルフィーナとイリシアは、市長のハーゼス・グラツカスにアレイクード公爵からの書簡を渡す為に、フェルンに訪れていた。

二人は都市の光景を目にして、驚きながらも行政区へ歩を進める。

都市壊滅からたった2週間で町のほぼ9割が再建されているのは驚嘆に値すると言えよう。

それも全て、アレイクード公爵からの多額な援助があったからであるが……

「お姉さま、ずいぶんと早い復旧ですね、2週間前の壊滅した町とは思えませんわ」

「そうね、でも、アレイ様はかなりの圧力を行政担当者の市長にかけたみたいよ？」

「そうなんですか？」

「ええ、それに違約金も取ったそうよ」

「違約金ですか？」

「詳しくは知らないけど、お父さんからかなりエゲツナイ事をアレイ様はやったって聞いたわよ」

「へーそうなんですか」

しばらく、二人は話しながら歩いているとイリシアは一つの骨董店の前で立ち止まった。

「どうかしたの？イリシア」

「はい、この前の戦闘で壊れてしまった双刀の代わりになる物を頼んでいたんですよ」

二人はそのまま、建物の中に入っていく。

骨董店の中には多種多様の東西から集められた様々な物が並んでいた。

イリシアとエルフィーナは、ごった返している建物の中を進んでいき、カウンターの前にたどり着くと骨董店の主人にイリシアが話しかける。

エルフィーナはそれを横目に見ながら、特に欲しい物も無かった事から店舗内の商品を見ていくと突然、一塊になった物が視界に入ってきた。

それは、この世界では本来存在しない物であるのだが、エルフィーナの探究心と好奇心はいたくソレを気にいつてしまった。

そして……………。

「お姉さま、見てください！今回の双刀はすごいですよ。刃が燃えるように赤いです。《双炎刀》って言う名前らしいですよ」

「ふーん、そうなの」

「お姉さま、反応が薄いのです！　そういえば何を買ったのですか？」

「私もよくは分からないんだけどね、ちょっと気になって買ってたのよね」

エルフィーナはそんな事を言いながら、巨大な荷物を背負っていた。

重量としては500kg近いだろうか？

エルフィーナはそれを平然と背負って歩いている。歩くと石畳にうつすらと足跡が残っていく。

イリシアもイリシアでその様子を平然と見ているが、周りの人達は化け物を見るような目で二人を見ていた。

「そういえば、お姉さま、本が燃えてしまいましたけど、もう精霊を使役出来ないのですか？」

「そうね、本が燃えて契約が消えちゃたから、今の私には何の力もないわね。何か新しい武器でも手に入れないと正美様をいざと言うときに守れないわ」

「そうですよね、お姉さまも私もアレイ様の館ですと戦力外通告受けてますものね」

「戦力外通告を受けてるのはイリシアだけですわ。それに、書状も渡しましたし、早く帰りましょう」

「はい、お姉さま！」

町を出てからしばらく歩いていると前方から5人の旅人と二人はすれ違った。

「え！」

すれ違った瞬間に二人は強制的に臨戦態勢へもっていカされた。

そして二人が同時に、旅人の方に視線を向けると忽然とその姿は消えていた。

まるで最初からそこには存在していなかったかのように……

「なに？今の殺気は？違う、プレッシャー重圧？まるでエメラスさんみたいだった……。」

呆然とエルフィーナは呟いていた。

くーりんぐおふ

今日も一日が終る。

少しづつ日が沈み、夜の帳が落ちてくる。

俺は、ベットの上で転がって今後の人生プランを立てていた。

まずは借金をどうにかしないといけない。

そのためには綿密な計画が必要になる。

まずは、借金の額から計算だ！

国家予算クラスの10兆か．．．．．そんな額返せるわけないだろ。

自分で言った言葉に自分で突っ込むという高等技術を使いながら、俺はベットの上でゴロゴロ転がった。

早く返済しないといけない。

なぜならば、アレイの寝室に扉一枚で繋がってるだけという事もあり、

最近のアレイからのアピールも酷くなってきた。

「はぁ、どうするか．．．．．」

とりあえず、ここは、経済大学を卒業した力を見せ付ける時が来たと思えばいい。

丁度、ほどよくミリルの時に蓄積した経験だけ俺の中にはある。それを分析すれば、突破口は開けるはずだ！

ユーエルさんの一日の売り上げが、一日30万ユルドくらいだったから、

これを10兆ユルドで割ればいいんだ！

そうすれば、何日で目標に到達できるかわかるはずだ。

たしかこの世界の暦は360日で1年って言ってたからこれを計算すれば

・・・・・・・・・・

・・・・・・・・

「きゅ、9万年以上だと？」

900回は余裕で転生できるな・・・・・・・・。

って突込みいれてる場合じゃねー。

とりあえず張本人にどうにかさせるしかないな。

俺、エメラスさんに監視くらってて部屋から出られないし・・・・・・・・

というか・・・・・・・・ここ2週間、ルアって見かけてないんだけど
どこ行ったんだ？

まあいいか、呼べば出てくるしな。

どっかのランプの魔人みたく。

さてと・・・・・・・・。

「私の正義が」

俺の足元に緑色の魔法陣が展開される。

「悪を撃ち滅ぼす。」

魔法陣の文字が動き出して大気に積層円の魔法陣が書き込まれていく。

「こい、神の使者！」

強力な光が視界を覆い、煙が発生する。

そして、煙が晴れた所にいたのはミイラ化したルアだった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

俺は、とりあえず花瓶の中に入ってる水をルアにぶっかけてしばらく様子を見た。

3分後・・・・・・・・。

《ご主人たま、生き返ったでち！》

カップラーメンか・・・・・・・・この小動物は・・・・・・・・

「ルア、お前なんで干からびてたんだ？」

《僕が寝てる間に、町に置いてきぼりされてそのまま2週間も放置されたでち。それで干からびたでち》

そっか、もう何も突っ込むまい。

「ルア、お前にはやってもらいたい事がある！」

《ご主人たま、なんでちか？》

「うむ！お前たしか原子いじれるんだよな？」

《はいでち！》

「それなら希少金属とか伝説的な金属とか作れたりするよな？」

《無理でち！》

「そうか、それならさっそく金をつくってって、え？」

《僕は、ご主人たまの影響を受けるでち、ご主人たまが持った事の無い物を作る事は出来ないでち》

なんだと？つまり貧乏人は一生貧乏人でって事なのか？

この使役獣ツカエネー。

クーリングオフとかつけておけよな、もったときちんとした使役獣がほしかった。

《ご主人たまから今、何か酷い事考えなかったでちか？》

「別に、この使役獣ツカエネーとか、疫病神とかクーリングオフ効かないのかと考えてないぞ？」

《ご主人たま、わざと口に出してるでちね！ひどいでち！》

「酷いのはお前だ、お前のおかげで、借金返済に9万年もかかるんだぞ？そのへん分かってんのか？

しかもそれを盾にアレイと婚約させられそうなんだ、どう責任取るつもりなんだ？」

《公爵と結婚でちか？ご主人たま、おめでとうでち》

「おめでたくねー。一度、お前とはきちんと話し合う必要があるようだな？」

あれ？目の前が暗く．．．．。

「ルア、お前何かしたのか？」

《何もしてないでち、ご主人たまから体力補充の為に力を分けてもらっただけでち》

ちからって．．．．おま．．．．え。

俺はそのまま意識を失ってベットの上で倒れこんだ。

2 度寝は危険な香り

静まり返る広間に旋律が鳴り響く。

《黒巫女は顕現したのか？》

《はい、ようやくこちらの要請に応じたようです》

《そうか、ようやく全てをあるべき姿に、戻すときが来たな》

《幻想大陸の住人は知られてはいないだろうな？》

《それが、一人の魔流術師と魔人には感づかれているようです》

《なるほどな、未だに監視者はこの世界に関与してくるという事か》

男の最後の言葉が消えると同時に、声は聞こえなくなり、あたり一面は静寂に支配される。

ってー。

俺は気がつくどベッドの上で、寝ていた。
すでに日差しが窓から入ってきている。
なんで、俺こんな所で寝て……。

そこまで、考えた所で昨日のことを思い出した。
当たりを見渡すがルアの姿が見えない。

毎度お決まりの償還魔法を唱えてルアを償還すると……
そこには、たくさんの生肉を頬張っているルアがいた。

俺がルアを見ると、一生懸命何かを訴えようと口を動かしていた。

《もごもご、もごもごもごごつくん》

「食べてから話せ！」

《ご主人たま！目が覚めてほっとしたでち！》

「ああ、そうだな、お前のおかげで俺は何度気絶させられたか分かんないな」

《ご主人たま、怒ってる気がするでち！》

「別におれは怒っていないぞ？そうだな、お前のその長い耳に釘を打ち込んで柱に貼り付けてやろうくらいしか考えていないぞ？」

《ご、ご、ごしゅじんたま、おちついてほしいでち》

「大丈夫だ、俺は充分に落ち着いている。あー、人間ってのは怒りすぎると逆に冷静になるって事を始めて知ったよ」

俺は、抗議を上げているルアの耳をむんずと掴むと枕の中の羽毛を全部抜き取って変わりにルアを押し込んで縛ってから花瓶の中に詰めた。

《やめてほしいでち！使役獣侵害でち！使役獣愛護団体に訴えられるでち！》

という言い分を無視して分厚い本を花瓶の上に載せた。

ふう、すっきりした。

そして、俺は2度寝をする為に布団に入り……………。

その後、イリシアが来る前に一人でさっさとお風呂に入り、髪と体を拭いたあと、恒例の男用の服を手に入れる為に、アレイの部屋に繋がってる扉を通るとそこには起きたばかりのアレイが立っていた……………。

しまった、ここ2週間ずっとアレイは部屋から早く出て行ってたからまさか、まだ部屋の中にいるとは思わなかったヨ。

そして、アレイも俺の方を見ていて、啞然としている。

それはそうだろう、俺はお風呂を出たばかりで、はだ……………か……………。

「いやあああああ、」

私は一瞬で、異性に体を見られたショックで顔を真っ赤にして自分の部屋に戻ってベットの中にもぐりこんだ。

見られた、見られた、見られた、私の裸を、アレイに？胸がドキドキして止まらない。何これ？

「大丈夫か？正美」

突然、声をかけられて心臓が早鐘のように鳴り出す。
なに？一体どうなってるの？

そのまま、アレイが俺の体の上に押し掛かってくる。

「お前がそこまでアプローチしてくるまで気がつかないなんて男として失格だな、悪かったな」

そう言うと、私が被っていた布団を剥ぎ取ると裸の体を見てやさしく触ってきた。

「いや、やめて、アレイ。やめて！」

俺が何度抗議してもアレイの愛撫は止まらず、俺の頭の中はすでに夢心地になっていた。

そして、アレイが中に入って来た所から意識が無くなった。

「ハッ！」

ガバッとベットから起き上がると俺は、さっき2度寝したままの服装で寝ていた。

「夢落ちか……………」

えらく危険な夢見てしまった。あんなのが実際起きないようにさっさと借金返して館から逃げないとな。

動き出す歯車 2

今、二人の目の前には見慣れた大きな門が立っている。

「お姉さま、やっとつきましたね」

紫色の髪をひるがえ翻し、後方を歩いているエルフィーナの方を振り返りながらイリシアは声をかけた。

「ええ、そうね。長かったわ」

軽快な足取りのイリシアと打って変わってエルフィーナは、500kgに近い荷物を背負って2日近く歩いてきた事もありかなり疲れ果てていた。

それでも馬車で数日かかる距離を、徒歩でしかも超重量の荷物を背負って馬車より早く移動しているエルフィーナの身体能力の高さは異常とも言えよう。

二人は館に通じる使用人専用の裏門を抜けていくと前方にツインテールの少女が立っていた。

「おかえりなさい、エルフィーナ、イリシア。それぞれ成果はあったよね？」

「はい、逸品の双剣を購入できました！」

イリシアが自信ありげに発言するが、エルフィーナとしては何故、メイド長たるエメラスが自分達を迎えに来ているのか想像がつかなかった。

メイド長の話によると、現在はしばらく様子見という事で、正美様とアレイ様の警護をメイド長とその周辺のメイド警護隊が行ってるはずだからだ。

エルフィーナの思案顔を見て取った、エメラスは少し困った顔をしていた。

少しは、エルフィーナも不測の事態に対応する力がついてきたのかも知れないわね。

それでも、まだまだ甘いわね。……

「ふう、エルフィーナ。貴方、そんな荷物をどこに運ぶつもりなのかしら？」

「え？」

「え？ じゃないわよ。そんな地面がめり込むような重量のある物を屋敷の中に入れる訳にはいかないの！ わかる？」

まったく、館の中から貴女達を見て急いで出て来たんですからね。

エルフィーナ、貴女の持っている荷物については裏庭の倉庫に入れて置きなさい、わかりましたね？」

「はい、わかりました」

エルフィーナは、釈然としないまま返答し荷物を背負ったまま裏庭に一人向かって歩いていった。

その後ろ姿を見ながら、エメラスが嘆息していると

「エメラスさん、帰り道におかしな事がありました」

「おかしな事？」

エメラスはイリシアが話して来た事に関して、相槌を打つ

「はい、すごい殺気を感じ振り返った瞬間にその人達の姿は霞のように消えていたんです」

エメラスは話を聞きながらも考えていた。

人が霞みのように？たしか町から館に戻ってくる間の街道は見渡す限り平野だったはず、それなのに姿が霞のように消える？

しかも、動体視力だけなら館の警護部隊にも入れるこの二人の視覚を誤魔化すほどの使い手？しかも殺気を出して手を出してこないと言う事は試した？

「そう、わかったわ。相手の人数は何人だったの？」

「5人です」

「そう、分かったわ、イリシアも今日はゆっくり休んで明日からお仕事お願いね」

「はい、エメラスさん」

イリシアの後ろ姿を確認せずに、エメラスはすぐに館に戻り通路を歩き、地下への階段を下りていく。

両開きの扉を開くと、クレイネルがエメラスの顔を見て驚いていた。

「エメラス、そんなに慌ててどうかしたのかの？」

「ええ、イリシアからさっき5人の不可視な者を遭遇したと報告を

受けたの」

「ふむ、まさかとは思うが、軍事大国レクイエムの五星将かもしれないな」

「私もそう思ったからこそ、急いで来たのですけど、まさか彼らが直接出張ってくる事はないと思いたいのですけどね」

「そうじゃな、まずは警護を強化する他はあるまい、そうじゃこれをエルフィーナに渡しておいてくれるかの？」

クレイネルはそう言いながら、エメラスに向けて一冊の本を差し出してきた。

エメラスはその本の表紙を読んでいく。

その本にはこう書いてあった。

ステイルオリジン
《閃光原書》

と・・・・・・・・

「クレイネル、これは一体？」

「前回、娘は、原書と戦って大怪我を負ったのだろうか？それは複写原書を使ったからと聞いている。

原書に対抗できるのは同じ原書のみじゃからな、これが在れば身を守る事は出来るじやろう」

「クレイネル、原書オリジンは本来、人には過ぎた力と言うのは貴方も理解しているのでしょうか？」

私の親友だった娘のエルフィーナまで、私達の計画に巻き込むつも

りなのですか？」

「わかっておる！フィーナの力は封印したままにしてある。この原書は光の精霊と契約を交わしたフィーナしか使う事は出来ない。それに副作用が無いようにきちんと手を入れてある。」

クレイネルの言い方に、エメラスは哑然としていた。

「貴方、正気なのですか？実の娘にこんな力を！力を得るという事は、それだけの責任を背負うという事になるのですよ？」

「何度も言わせないでくれ。全ての責任は私が背負う、それに本当にレクイエムが動きだしたとなると力が無ければ身を守る事すらできない。」

それと五星将については私も調べておこう」

クレイネルはそこで話が終ったとかと言う様にエメラスから視線を外して、空中を見て手を走らせていた。

それを見た、エメラスもこれ以上は話をしても無駄だと思い、ステイル閃光
オリジン原書を握り締めてから黎明図書館を出て行った。

動き出す歯車 3

「はあ、とつても憂鬱だ……」

俺は、宛^{あて}がわれた部屋に設置されている、やたらと精巧な作りの椅子に腰を掛けながらガラス越しに空を見上げて呟いていた。

今、俺が着ている服は、動きやすい簡易ドレスだが今日からメイドさん達につけられたコルセットにより体の制限がかけられ息が詰まりそう。

たしかに、今の俺の体はかなりバランスが取れてると思うが、それでもこの締め付け方は問題があると思う。

たしか以前、彼女に教えてもらったマメ知識では、コルセットで無理矢理痩せたり括^{くむ}れを作るのは体に良くないと聞いた覚えがある。

それでも、あのエメラスさんと借金を返すまでの約束の中に、このコルセットをつけるという条項があったのだから仕方なくつけてるわけであるが……

俺は、殆ど体を曲げる事も出来ず、椅子の上でボーッと朝食まで時間を潰すしか時間がない。

ボーッとしてると言うത്誤解を招いてしまうが、それでも今後の身の振り方を考えてる所である。

国家予算クラスの借金を返済出来ない場合、間違いなく俺はアレイの妻になる事は決定事項になってるわけであってそのお金を返済する術が思いつかない。

ルアに希少金属を作ってもらって一攫千金でお金を返済しようとし

た案も絶たれたし．．．．．んっ？

《俺、何か大事な事を忘れてないか？》

なんで、俺、この世界で生きて行く事を前提に物事を考えてるんだ？
よく考えたら、俺、この世界の住人でもないしさっさと元の世界へ
帰れば問題解決じゃないのか？

そうだよ！俺、何をこの世界基準で物事考えてるんだよ。

となると、どうやって元の世界へ帰るかだが、ルアに聞くのが一番
手っ取り早いかな．．．．．

俺はそこまで考えて、ルアを花瓶から解放する。

枕から取り出したルアを見た俺は一瞬、呆然とした。

なぜなら．．．．．幸せそうな顔をして寝ていたからだ。

俺は、ルアの長い耳を掴んで枕から引き出して抱き抱えるとルアの
額にデコピンをお見舞いしてやった。

その反応はすぐにかえってくる。

「イタイでち！ご主人たま。ひどいでち」

相変わらず、喚く小動物を俺は見ながら膝のスカートの上にルアを
下ろした。

俺の態度に不審に思いながらもルアはちょこんと膝の上で座ってい
る。

「おい、ルア。一つ聞きたい事がある。」

「なんでちか？」

「俺が元の世界へ帰る方法を知りたいんだ。」

「元の世界でちか？」

俺の言葉に、ルアは疑問を投げ返してくる。

こいつ、もしかして俺がこの世界の人間じゃないって事を知らないのか？

「ああ、そうだ。お前を俺につけてくれた変な奴に聞いてないのか？」

「聞いているでち。でも、ご主人たまは、この世界の食物を胎内に取り入れているから帰る事は出来ないでちよ。」

なんだと．．．．．？それは初耳なんだが．．．．．

「ご主人たまも、聞いた事あると思うでちけど、冥界に行った者が冥界の食物を口にしたら帰れなくなるという話があるでちよね？」

そういえばそんな昔話を聞いた事があるような．．．．．？

「ああ、そう言えば、そんな話もあったような．．．．．って！お前それってもしかして俺にこの世界でずっと暮らせて事なのか？」

「ご主人たま、一つ聞いてほしいでち。たぶん、ご主人たまは以前よりは元の世界へ帰りたいって望んでいなくなってると思うでち。それはこの世界に心と魂と体が順応し始めてるからでち」

なるほど、だからこの土壇場になるまで、この世界を基準に考えていたのか。

「きつと、ご主人たまを連れてきた、あの方は数日で戻る予定だったはずでち。それが何らかの障害にあって未だに戻れない状況下に置かれてるでち」

つまり、本来は数日で戻るはずが、結果的に数ヶ月滞在してる原因は全てのその何らかの障害が原因なのか。

っていうか無責任すぎるだろ。

強引に連れてきておいて、本人は未だに出てこないでこんな欠陥小動物一匹だけとか……。

「OK、わかった。つまりだ、俺がその障害ってのを取り除かない限り現状を打破する事は出来ないって事だな？」

「さすが、ご主人たまでち！」

ルアは俺が理解していた事を喜んでいたが、俺の方としては大変困った。

借金を返すまでは、淑女としての立ち振る舞いから、公爵家に嫁ぐ女性に相応しい教育が目白押しになっていて、とてもじゃないがそんな暇はないのだ。

まだ、朝食前の午前8時だが、朝食後は貴族としての嗜み^{たしな}や行儀作法やマナーやルールそしてこの国が出来てからの神学や歴史、そして言語習得など寝るまで組まれている。

しかも、専属教師付きと……。

「なあ、ルア。お前の力でなんとか借金返済出来ないのか？」

「無理でち！使役獣の力はご主人たまに異存するでち。ご主人たまが無能だと使役獣も無能になるでち」

お前、それ安易に自分が無能なのは主人である俺が無能だと言ってるようなもんだぞ。

俺が恨みと殺気を込めてルアを見ると、ルアが俺の気を取り成そうとしばらく考えたあとに一言発してきた。

「ご主人たまがこの世界の希少金属に触れる事が出来れば、そこから複製する事も可能でち！」

天啓のごとくルアがひさしぶりにいい事を言った。

つまり、この世界でもっとも高価な物を俺が触れさえすればそこから複製する事が出来るって事か？

「ふっ、ルア。お前もひさしぶりにいい事を言うな」

「僕はいつも良い事しかないでち！」

とりあえず、ルアの戯言はスルーしておくとして……。

今後の対応としては如何にしてその高価な物を手に入れるかだが、恐らくエメラスさんへ頼んでも却下されるのは目に見えている。

そうするとやはり、アレイに頼むのが一番いいのか？

なんか嫌な予感しかないがそれが堅実か。

夜の時間にこっそり、アレイの部屋に行って頼むのがいいな。
俺はその時失念していた、この体が女の体という事を、そして夜の
時間帯に男の部屋に行くというのはどう言う事なのかを。
。

動き出す歯車 4

—アレイクード公爵邸執務室—

部屋の中は、書類が飛び散らないように閉め切られてはいる事もあり、

インクと書類の匂いが立ち込めている。

そして一人の男が、年代モノの机の前に座り、書類整理に忙殺されていた。

「これは、大変な事になってきたな」

執務室の主である、アレイクード公爵はここ数日間の中に、

王宮より届けられた書類に眼を通してながら呟いていた。

書類には、こう記載されていた。

王都の禁書図書館が襲撃され、封印されていた原書オリジンが数冊盗み出されたという事。

その際、警護をしていた王宮十使徒の一人エスペラードが死亡していた事、

そして同じく警護についていた一般兵士数十人が同時に殺されていた事。

その事から複数人の犯人がいると推測される。

王宮十使徒を屠った事から相手の実力はかなり高いと推測される。

そして……………。

禁書図書館よりフードを被った5人組の不審人物が目撃されている事。

その5人組みが向かったとされる街道先はアレイクード公爵の領地を通る可能性が非常に高い為、不審人物を発見した際には王宮権限において如何なる人物であつても捕縛していいと記載されていた。

アレイは書類を読み終えると、眉間を指先で押さえながら椅子に深く腰を掛けながら天井を見上げた。

そして、先日発生した商業都市フェルンの崩壊の復旧に関する作業そしてその際、

上空に現れたという巨大な龍の報告を思い返していた。

その龍の大きさは数百メートルもあり、八つの頭を持つ龍であつた事。

そのようなモノに心当たりなど一つしかない。

黎明庫の書物にすら記されていない神話クラスの魔物であり神獣でもある幻獣王。^{ルファカーゼ}

本来、本性を解き放つた幻獣を再度、元の姿に戻す為にはそれ相応の代価が必要とされる。

それは、再契約に他ならない。

以前、正美の事を、幻獣王^{ルファカーゼ}は主と呼んでいた。

正美が主とすれば、元の姿に戻した力の代価はどのくらい必要だつたのだろうか？

そして、何よりも、正美が体中に負っていた傷の完治速度の方が問題であつた。

以前、正美を魔物から助けた際、怪我をしていた手足の完治までかなりの時間を有していた。

それが、今回の怪我が完治、否。修復に必要な時間はほんの一時間ほどであった。

まるで、肉体が自動的に回復術を使っているかのよう。

それは、まるで伝説の中に存在していた黒の巫女のようなか。……。

神話では、こう語られている。

再度、巫女降臨する時、世界は滅び有るべき姿へ戻るだろうと……。……。

世界を滅びから救う為に、巫女を抹殺する教団もあるくらいだ。だが、どう考えても正美が世界を滅ぼすような人には見えない。

「ふう、俺は何を考えているんだろうな、疲れてるようだな」

アレイはそう言うと言務机に立てかけてある魔流術で投影された画像に視線を移した。

「ルニア、お前が生きていれば正美と同じように成長していたのだろうか？」

そう呟いたアレイの声は、普段聞けないような声色を含んでいた。

—商業都市フェルン—

その外れにある、朽ちかけた建物の中でフードを被った者達がい

思いに座っていた。

そして、一人の小柄の体格をした者が、大柄な男へ声をかけた。

「ガイアス、アレイクード公爵邸の襲撃はいつ行うの？」

ガイアスと名前を呼ばれた男は、小柄な体格をした者を見て溜息をつきながらも声を発した。

「お前、昼間の二人組みの女を見たか？」

「うん、見たけどそれがどうかしたの？」

「由香里^{ゆかり}、あの二人はそれなりの使い手だった。

間違いなく彼女達クラスの使い手がアレイクード公爵邸を警護するとガイアスは言いたいんだ。」

由香里と呼ばれた小柄な体格をした者は、納得いかなかった。

自身が見た、あの二人組は確かにある程度の使い手というのは理解してはいたが、それだけ。

私がこの気になれば、あの程度ならば殺す事は容易。

それが、由香里がエルフィーナとイリシアから感じた実力差であった。

「でも、あのくらいの実力なら私達の力を持ってすれば殺すなんて簡単よ！」

それに早く、私は元の世界へ帰りたいの！早く帰らないといけないの！」

ガイアスは悲しい眼をして、由香里の発言を聞いていた。

由香里がこの世界に、現れてから1年が既に経過していた。

その間、由香里が殺してきた命の数はかなりの数に及ぶ。

最初は、多少の罪悪感があった。

だけどそれも、自分の命が危険に晒された時、そんな道德など一瞬で消え失せた。

その後は、自身の命を守る為、そして元の世界へ帰る為だけに剣を
そして力を振るってきた。

そして、元の世界へ帰る手が見つけたのは今から4ヶ月前。
古来より、アーカルスド領地内には数々の古の遺産いにしえが眠っており、
その中の一つに古代の知恵の泉である《黎明庫》なるモノが存在し
ている事。

そして黎明庫を現在管理しているのが領主であり公爵でもあるアレ
イクロード公爵という事であった。

「黎明庫なら、私が元の世界へ帰る術が見つかるかも知れないの！
だからどんな手を使ってもやり遂げてみせるわ」

由香里の決意の眼差しがフード越しにガイアスを射抜いていた。

動き出す歯車 5

翌日、アレイクード邸より時間的に2時間ほどの距離のある町ルエルにて、

由香里達一行はある準備をしていた。

「ガイアス！正気なの？私は嫌よ！」

由香里が、ガイアスに向かって抗議の声を上げていた。

その声は、仲間の一人が事前に沈黙魔流術を使用していなければ、町に一件しかない宿屋に響き渡るほどであった。

ガイアスは、由香里の抗議の声を右から左へ聞き流すと再度説明を始めた。

「いいか？由香里。」

アレイクード公爵邸には、あの王宮歴代最強と言われた鮮血の死神がいるんだ。

それに、若くして王宮十使徒に選ばれるほどの実力者であった、魔流術最高導師のクレイネルもいる。

さらに、冒険者ギルドと勇者派遣協会で10人しかいない聖騎士の称号を持つアレイクード公爵もいるんだ。

そんな所に我々5人が強襲したとしても成功率が低いことは理解できらるだろう？」

「だからって！なんで、私がメイドの仕事をしてはいけないのよ？」

ルエルの町のギルドで受けてきた臨時メイドの依頼書を見ながら、由香里は納得いかない顔でガイアスを睨む。

だが、由香里の今の格好は明日に向けて、アレイクード公爵邸のメイド達の標準的な仕事着をしている為、普段ならば、大の男ですらひるませる事の出来る眼力は、ガイアスとの30cm以上の身長差も手伝い、上目ずかいに媚びているように見えてしまう。

「由香里、相手の懐に入り信頼を勝ち取ってから情報を集めるのは密偵としては初歩だぞ？とにかく、今は始原原書の情報を手に入れる事に集中しろ。いいな？」

「いいな？じゃないわよ。第一ね、私、そんな情報を集めたりした事ないし、密偵でもないからね」

由香里はガイアスの言葉に的確に突っ込むも当の本人ガイアスはまったく意に介さない面持ちであった。

由香里自身、ガイアスの言い方に納得できずとも、他に代案が無い以上、頷く事しか出来なかった。

その夜……

明日から、始まるメイドの仕事に憂鬱になりながら、由香里は何故こんな事になってしまったのか思い返していた。

――1年前――

思いを寄せていた男性を、姉に取られてから精神が不安定になっていた。

しばらくしてから、姉の素行が悪くなっている事に気がついた由香^{ゆか}里は偶然、

思いを寄せていた男性と違う男が姉と付き合っている現場を目撃した。

気になった由香里は、二人の後を追っていくと大手チェーン店に入って行くのを見て、二人の近くに席を取った。

そして、男と姉の話を聞いた。

思いを寄せていた男性の両親を殺したのは、男の両親でありその財産を姉が狙っているという事を……。

由香^{ゆかり}里は、姉に騙されている男性に事情を説明しようと走り出した途端、歩道から足を踏み外した。

否！踏み外したというより歩道の一部が消えており、そこは真っ黒な暗闇のようであった。

そして、その中に由香^{ゆかり}里は落ちていった。

目を覚ますと、巨大な柱が立ち並びたっさんの人が、祭壇の上から起き上がった由香^{ゆかり}里に視線を向けていた。

突然、見知らぬ場所へ連れて来られた由香^{ゆかり}里はパニックに陥った。^{おちい}

そして、その時に由香^{ゆかり}里を宥^{なだ}めて世話をしてくれたのが、冒険者ギルドから派遣されていた召還術の使い手のガイアスであった。

ガイアスから、召還術の目的を達成する事が出来れば自動的に送還されるかも知れないという事を教えてもらった。

すぐにでも元の世界へ帰りたいかったが、方法がないのでは仕方がない。

目的をガイアスに聞き出した所、この召還のゲートは100年に1回の割合で自動的に起動すると言う話であった。

自分の不運さに嘆きながらも、この世界で生き抜く為にガイアスカらたくさんの方の知識や戦闘技術を学んだ。

由香里には、異界からの召還ゲートを潜った影響もあり、身体強化そして心の中で思い描いた内容がそのまま力になる幻想技術という特殊能力を得ていた。

その力により、ギルドへ加入後は一気に上層ギルドメンバーに抜擢された。

加入後わずか3ヶ月でギルドSランクまで駆け上がったのは由香里の力である幻想技術の部分が大半を占める。

そして、ギルドの討伐依頼で古代竜の一種である、水龍王ハイドラを討伐した際に一冊の古代王国期の本を手にする事が出来た。

そこには異世界人を元の世界へ還す手立てが記されていた。

その為に、必要な物が《始原原書》であると。

始原原書の在り処を見つけるために、由香里達一行は、冒険者ギルドの伝手を使い王国エルハンスに在ると言う禁書目録を調べる事にした。

高ギルドランクの由香里の申請と言う事もあり、閲覧だけならと目録で調べた所、アイレクード公爵邸にある黎明庫に現存する可能性が高いと分かった。

眉唾物かも知れないが、いくつかの書庫でアイレクード公爵邸の情報に魔流術で改竄されている部分がありそこを読み解いた結果かな

り確立は高いと言う事だった。

アレイクード公爵邸の情報改竄の魔流術はかなりの上級者が行ったと、

ガイアスの仲間も指摘しておりそれが本当ならば素直にこちらの求めに応じる可能性はとても低い。

そのため、一度、裏を取ってから正規の申請を行い言い逃れが出来ないようにするのがガイアス達の考えであった。

-
-
-
-
-
-
-

「はあ、明日からメイドさんのお仕事なのね。がんばらなきゃ！」

ベッドで横になりながら暗くなってきた夜空を宿屋の窓越しに見上げながら由香里は夢の中へ旅立った。

動き出す歯車 6

はあ、困ったわ。

まさかあの可愛らしくて、恥かしがりで、女同士なのにドキドキしてきちゃう仕草をする

正美様の御付き^{おっ}から外されてしまうなんて……。

私の、薔薇色メイド生活はどうなっちゃうのー。

と、エルフィーナはそんなくだらない事を考えながらも、入ってきたばかりのメイド達が行う窓拭きを行っていた。

その時、遠くからエコーの掛かった声が聞こえてくる。

「おねーさーまー。」

何やら、この原因を作った主の声。

エルフィーナは、無意識的に濯^{すす}いでいる窓を拭いていた雑巾を絞って絞って絞ってそのまま、捻じ切った。

それを見たイリシアは、何かエルフィーナお姉さますごい怒ってる！近くにいたらきつと殺されてしまうと本能が警鐘を盛大に鳴らす。そのまま、両足で急ブレーキをかけながら体を反転させようとするが、

そこでエルフィーナに首を捕まれて逃亡を阻止されてしまう。

「なにかしら？イリシアさん？」

冷静でいて静かにそれでいて、嵐の前の静けさのような怒りの籠もった声で

エルフィーナはイリシアに声をかけた。

だが、首を絞められてるイリシアの口から漏れる声は、「はうあう」という言葉にしかない。

万力のような身体能力を持つエルフィーナに首を絞められてるのだから仕方ないとも言えるが……。

イリシアはジタバタしながらも逃げようとするが少しずつ意識が遠のきはじめ、

そして、そのままイリシアの意識が飛ぶ寸前で2Fの窓から一人の女性が使用人専用門から入ってくるのがエルフィーナの視界に映った。

その女性をエルフィーナは見ると片手で吊るし上げていたイリシアを床に落とすと、その女性の姿に釘付けになった。

特別美しい、かわいいと言う訳ではない。

どこでもいる、町娘と大差はないだろう。

それでも、釘付けになったのは、副メイド長たる自分が知らない人間が使用人の格好をして入ってきてるからだった。

「新人さん？でも、新しい人が入ってくるなんて聞いてないけど？」

エルフィーナは、アレイクード公爵邸に仕えてすでに10年以上過ぎており古参に入る。

そのエルフィーナが見た事のない使用人などいるはずがないのだが、
……。

「ケホツケホツ、エルフィーナお姉さま、ひどいです。死んだおばあちゃんに一瞬再会しちゃいましたよ」

「そう、良かったわね。なんならもう一度逝っておく？」

「遠慮させていただきます。」とイリシアは気持ちいいくらいに即答しつつもエルフィーナが自分を見てない事に気がつく、エルフィーナが見ている窓の外へ視線を移す。

そこには、銀色の髪と瞳をした18歳くらいの女性が立ってこちらを見ている。

横で、エルフィーナがその女性の事をイリシアに聞いてくる。

イリシアも記憶の糸を辿っていくと先ほど使用人集りの際に一人新人が入ってくる事の説明があった事を思い出す。

「そういえば、問題ばかり起しているお姉さまの代わりに正美様が退屈しないように冒険者協会の方から一人メイドを期限付きで雇うって話がありました」

「まって！私がいっ？どこで？問題を起したっていうの？かなり侵害だわ！」

そう言ってエルフィーナが力説してるのを見ながらもイリシアは自覚ないんですか？と溜息をついていた。

「イリシア！」と切羽詰った声でエルフィーナがイリシアに声をかけてくる。

「なんですか？お姉さま？」

すぐくやる気のない生返事をイリシアはエルフィーナに返すが、エルフィーナの顔を見た瞬間に盛大な溜息をついた。

そこには、何か絶対問題を起しそうな顔をしたエルフィーナがいたからであつた。

その頃、フィーナエルガント幻想技術を使い髪の色と瞳の色を変化させていたゆかり由香里は、エルフィーナとイリシアを下から見上げながら値踏みしていた。

「やっぱり、門の守衛もあの2人も大した力は持ってないじゃないの。これなら私一人でどうにか出来そうよね。」

由香里は小さく呟くと、冒険者協会で支給されたメイド服のポケットから一枚の洋紙を取り出す。

そこには、仕事を始める前にアレイクード公爵邸の主とメイド長のエメラスとの顔合わせの日時と場所が書かれている。

由香里は、使用人の門から石畳沿いに公爵邸の裏口へ向かうと一人の少女が立っているのが見えてきた。

話しかける事が可能な距離まで近づいた所で、その少女の佇まいからさっきまで見上げていた2人の女性より遥かに強い力をもっている一瞬で理解した。

そして、幻想技術を使う事が出来る由香里だけが感じ取れるモノ……。

この世界には、本来存在しない力を感じ取ることが出来た。

それと同時に、この少女の危険性も……。

「こんにちわ、貴女が冒険者協会から派遣されてきた方ですか？」

由香里が思考の迷宮に入ってる所で、エメラスが機先を制してくる。それに由香里も戸惑いながらもルエルゆかりの町の冒険者協会から受け取った承諾書をエメラスに渡す。

「そう、ユカリさんと言うのね。私の名前は、エメラス。この公爵邸のメイド長をしています。これから、よろしくね」

13歳くらいにしか見えない幼女がメイド長だと知り、由香里は違う意味で心の中で驚いていた。

ここの主って、まさかロリコンなの？ロリコン好きなの？変態さんなの？

そう言えば、貴族って昔から変態が多いって何かの書物で読んだ事

があるわ、きつと変態さんなのね。

そうよね、貴族でまともな人なんて物語の中でも少ないし、きつとすごい肥満で変態でロリコンなんだわ。

凄まじいまでの偏見である。

その後、アレイクード公爵邸執務室へメイド長のエメラスにエスコートされながら移動してる訳なのだが……

5分歩いても執務室に到着しない屋敷の中を見ながら、どれだけこの屋敷広いのよーと由香里^{ゆかり}は頭を抱えていた。

動き出す歯車 7

由香里とエメラスが執務室へ向かつてる時、執務室内では、とてつもなく重い空気が立ち込めていた。

その空気の重さと言ったら、会社で言えば左遷を宣告され、学校では、抜き打ちテストのような空気である。

「はあーっ」

本日、何度目か分からない程の溜息が執務室の主たるアレイクード公爵から発せられた。

よく見ると、アレイクード公爵の顔は寝てないのか眼の下に若干の隈くまが出来ている。

そして、この執務室の主たるアレイクードは普段の仕事の出きる男と行った風貌からは遠く離れた姿をしていた。

執務室の机の上に倒れこむように力尽きているだけなのだが・・・

そして、その姿をひさしぶりに黎明庫から出てきたクレイネルが珍しげに見ている。

「珍しいですな、アレイ様がそんなに塞ぎこんでいるとは。何か問題でもありましたか？」

クレイネルなりに心配をしてアレイクードに声をかけるが、アレイはクレイネルの方を一瞥しただけで今度は考える人のポーズをとってしまう。

それを見た、クレイネルは放置しておく事にし王宮からの調査報告書に視線を落とす。

そこには、大体予想通りの内容が書いてあったが一つだけ気がかりな内容が記載されていた。

軍事国家レクイエム周辺において、謎の人型ゴーレムが多数発見されていた事。

そしてそのゴーレムが通ったあとは、おびただ夥しい魔物と人の死体が区別なく転がっている事。

生き残った者の話では、何かを探していた素振りが伺えるなど不審な部分もあると記載されていた。

そこまで読み耽ふけった所で、アレイクード公爵から突然声をかけられた。

「クレイネル、昨晚、俺の部屋に正美が来たんだが……」

その話を聞いた途端、クレイネルはアレイクード公爵の方へ視線を向けた。

夜中に女性が男の寝室に来ると言う事は、それは……。
だが、クレイネルから見る限りアレイが現在、纏まとってる雰囲気はうまく行ったという感じには見えない。

クレイネルから見た、アレイクードは恋愛には奥手であり好きと言う言葉を出すだけでも命懸けなほどのヘタレである。

恐らく、戦場で戦うのと意中の女性に愛を語るのかどっちか選べと言われたら即、前者を選ぶのは分かり切った事だ。

そこまで、クレイネルは考えた所でどうやら正美とアレイの間で何か問題があったのかと推測する。

正美に関しても、恋愛にはかなり疎く見える。

しかも、男勝りな部分もあり時より周りを意識しない振る舞いなど見る事からアレイと正美が両思いになるのは時間がかかるというのが

クレイネルの考察した所である。

「その時、ワインを飲んでいたのだが、かなり疲れてる事もあった酔っていたんだ。それで、何か正美が俺に話しかけていたのだが、つい………ベットに押し倒してしまっただけ………」

そこまで、聞いた所でクレイネルは頭が痛くなった。

正美にも夜、男の寝室に入った点で非はあるが、いくらなんでも、無理矢理ベットに押し倒すのはマズいだろうと………。

「それで、そのなんだ………正美の唇にキスをした所で少し抵抗された事もあった………今、考えても俺もやりすぎだとは思ったんだ。」

まさか、あんなに瞳に涙を浮かべて抗議されるなんて想像もつかなくてな」

「そうですか、それで正美様は何と言って部屋から出て行ったのですか？」

「そうだな………」アレイ、信じてたのに！アレイなんて大嫌い！もう顔も見たくない！」って言われた。」

「それは致命的ですな、最後までやってしまったのですか？」

「どうだろう？その辺の記憶が曖昧でよく覚えてないんだ」

クレイネルはその言葉を聴いて盛大に溜息をついた。

そして、心の中でエメラスに前途多難じゃと告げ口をしていた。

アレイとクレイネルが、正美の機嫌を取るための策を考えていた所

で執務室のドアが叩かれた。

扉が開くとそこにはエメラスと銀髪・銀の瞳をした少女が公爵邸のメイド服を着て、エメラスの横に立っていた。

動き出す歯車 8

今、公爵邸の執務室には、現在ここの館の主であるアレイクード公爵そしてクレイネルの2人に

たった今、入室して来たばかりのメイド長のエメラス、冒険者協会より派遣されてきた由香里ゆかりの4人が居る。

「エメラス、そちらは？」とクレイネルが尋ねる。たず

「冒険者協会から期限付きで雇ったメイドです」

クレイネルの問い掛けに、坦々（たんたん）とエメラスは答えながら冒険者協会からの証明書と雇った理由について説明を始める。

「ふむ、そうか。なるほど、たしかに最近の正美様は、元気がないからのう。まごみ

冒険者の方から珍しい話を聞くのも気分転換になるかもしれないのう」

とクレイネルは呟いているが実際の所は、アレイと話しても正美の機嫌をうまく取る方法が思いつかない2人にとっては渡りに舟だったりするわけで、エメラスの提案を却下する理由はない。

エメラスにとっても、息子のアレイクードが好意を持っており他家どころかこの世界との間に

なんら繋がりが無い正美がアレイの妻になる事は唯でさえ問題の多い貴族にとっても良物件である。

多少、言葉使いが乱暴な所はあるが、そこを抜かせば自分で出来る事は自分で行うという性質の持ち主は貴族の中では希少である。

だからこそ、エメラスも礼儀やマナーを無理矢理覚えさせる為に、

正美の護衛という大義名分を使ってクレイネルを騙し、正美には借金をチラつかせて教育をしているわけなのだが、最近はその仇になつてきたのか、以前のように正美に元氣が見られない為に気分転換にと

冒険者協会から人を雇ったわけだ。

問題は、正美に執着しているエルフィーナを如何にして離すかが問題であつたが、また訳のわからない物を購入したとイリシアに持たせた物、クレイネルが研究の結果作りだした広域探知術式を埋め込んだイヤリングから報告が来た事で行動に移す事が出来たわけだが……

そんな理由があり、特に由香里ゆかりに関しては追及も無くあつさりと正美付の期限付きメイドとして採用された訳だが……

由香里ゆかりとしては、部屋に入ってからずっと緊張していた。

思つてたよりずっと若く、イケメンに属する部類の顔つきに高い身長そして均整のとれた肉体、どれをとっても由香里ゆかりの中では彼氏にするなら及第点であつた。

そんな、男性が自分を一使用人としても見つめて来ているのだから、緊張するなというのは無理と言うもの。

由香里ゆかりはボーっとアレイクード公爵の顔を見ていた事もあり、声を掛けられていた事に気がつくのが遅れた。

「ユカリさん！」と強めにエメラスに声を掛けられてしまい思わず、「は、はひっ」と思わず舌を噛みながら答えた・

それを見た、アレイクード公爵とクレイネルは、笑みを零していたがひそかに痴態をさらした由香里ゆかりは内心落ち込んでいた。

エメラスは話という顔合わせは終わったとみて、由香里ゆかりの手を引いて執務室を出て行った。

執務室に残されたアレイクード公爵とクレイネルはこれで正美の機嫌が少しでも良くなればとお互い目で語りあっていた。

執務室から廊下へ出た、由香里^{ゆかり}はエメラスの背中を追いながら考え事をしていた。

誰よ！貴族は太っていて油ギタギタのロリコン変態オヤジって言うてたのは！

第3者が聞けばお前だろ！と突っ込みを入れる場面だが、心の中で呟いてる由香里に突っ込みを入れる者はいなかった。

「ユカリさん、貴女にはこの部屋の女性のお世話をしてもらいます。ですが、身の回りの世話は必要ありません。

貴女が冒険をしてきた体験談を聞かせてもらえばいいです。」

由香里^{ゆかり}としても一般的な家庭で育ってきた以上、メイドの仕事は何をしたらいいのか皆目見当もつかない。

それが、話をするだけならば、簡単な事。

由香里^{ゆかり}としても異論は無い、すぐにエメラスの言葉に頷くと、エメラスも納得したのか一つの扉の前に立ちノックをした後、入室の確認を部屋の主に取っていた。

「エメラスです。よろしいでしょうか？」

「は、はい」と中から聞こえてきた声は、鈴を鳴らしたようなとても綺麗な音色の声色であった。

そして、エメラスが扉を開けるとベットのの上には16歳くらいの黒髪の少女が涙に濡れた瞳でエメラスと由香里を見つめていた。

ルアなナレーション!?

エメラスが正美の部屋に入る数時間前のお話……。

「うああああああ」

大声を上げながら、隣の部屋と唯一繋がる高さ2 m程の扉を壊れそうな勢いで開けると一人の少女が開いた扉から飛び出してきた。そして、扉を片手で音を立てて閉めると扉に背中に押し付けながらズルズルとその場に座りこむ。

少女は正美といい、この部屋の主でもあるが今宵は希少金属や宝石を貸してもらおうとアレイクードの部屋に向かったわけだが……。

何やら複雑な事情があったようで、詳細は不明である。

「って!何ナレーションしてんの!?!」

正美が、ナレーションをしていた使役獣ルアに突っ込みを入れた。ルアは、主たる正美の突っ込みにナレーションを止めて顔を向けた。

「だって、ご主人たま!最近、僕の出番がめっきり減ってきつと読者様に忘れられてると思うでち!」

読者って一体なんの読者だよ。と心の中で正美は突っ込んでいた。そして正美自身、ルアの言葉を聴きながらもそう言えば俺も最近影薄いんじゃない?とか心の中で突っ込んでいたが、それを知るものは誰もいない。

正美が自分自身に突っ込みを入れてる間にも、ルアは熱心に弁論をしていたがそれはまたのお話。

1時間経過・・・・・・・・。

「で！僕はそう思うでちよ！」

長い長い、あまりにも長い熱弁を語っていたルアは自分の言葉に酔っていて正美がベットの上で、話の途中から寝ているのに気がついていなかった。

ルアの話が一段落つく頃に、正美も目を覚ましてから何かまずい事でも思い出したのか顔を真っ赤にしてから真っ青にしてベットの上で反省のポーズを取っていた。

それはまるで、人生が終わったかのような雰囲気醸し出している。ルアもさすがにその事に気がついたようで？

「ご主人たま、どうかしたでちか？」

そのルアの言葉に顔を真っ青にして正美は頷いていた。

さすがに、いくらかなりの美貌を持っている正美とは言え、そういう雰囲気と空気を纏っているとルアも感づいたのか少し引き気味だったか、そこはやはり腐っても獣と言う事もあり、聞き難い事すらサラッと聞いてしまうのが獣たる所以である。

「ああ、実はな・・・・・・・・。」

正美がそこで話を区切った事からかなりの重大な事が起きたとさすがのルアも身構えると同時に、主たる正美に危害を加えたならばアレイという小僧をくびり殺してやろうとまで考えていた。

だが、その考えは……。

「…………た。」

「ご主人たま？」

あまりにも声が小さかった事もあり、ルアでも聞き取る事が出来なかった。

再度、ルアは急かす。

「…………された。」

「…………？」

「だから！男にキスされたんだ！」

最後は、部屋中に響き渡るような声で正美は、アレイクードにキスされた事を告白していた。

その言葉に、ルアは違う方向で考えを改めた。

「ご主人たま、男というのは好きな女性にキスをしたいものでち」

ルアの一言に、正美はグッと堪えて考えた。

たしかに、今の自分は容姿端麗でありスタイル抜群である。

男ならまずは放っておかないと思う。

でも、それは自分が男としての立場の時であって、自分が女になつてゐる時の立場ではない！

それに、性格や人格は男なのだから男にキスされるって事は同性同士でキスするって事であり、簡単に言えば男同士でキスしたって事になるわけであり、そのショックは計り知れない。

結局、その夜に正美は、アレイクードに借金返済のために希少金属や希少宝石を借りに行った所で酔っていたアレイに押し倒されてキスをされた所で、火事場のなんとやらでアレイクードの鳩尾を殴り昏倒させて急いで戻ってきたのが一連の騒動だったのだが、昏倒させられていたアレイクードはキスをした後の記憶が無いのではなく、気絶してたから無かった！のだが、律儀なアレイクードは何があったのが考え込んでしまっている。

自業自得と言えば自業自得と言える。

一連の話をルアにした後、正美はベッドの上で男にキスされた。と落ち込んで瞳に涙を湛えていた。

そこで扉がノックされ、正美がそのノックに答えると、今！もつとも会いたくない人N O 2のエメラスと見知らぬ女性が部屋に入ってきたのであった。

交差する思惑

私が最初見た、その少女は涙に濡れた瞳で私とエメラスさんを見ていた。

エメラスさんを見てる瞳は違和感があった。

怯えてる？ううん、違う。苦手意識があるように私は感じた。

そして、私の方を見ると、一瞬あれ？って顔をしてからエメラスさんへ視線を戻していた。

私は一瞬、会った事があったのか気になってしまったけど、どれだけ記憶の糸を辿っても彼女のような美少女に会った事はない。

まず、間違いなくこんな女の子にあってら脳のメモリーをフル回転してでも覚えてるはず。

私が思考を終わらせると、目をキラキラ輝かせてと言うのは比喻かも知れないけど、そのくらい期待の籠もった眼差しで私を見てきた。あれ？エメラスさん何か余計な事言ってますんよね？

少し心配になりつつ、エメラスさんを見ると、口の端が歪んでいるのが分かった。

同性じゃないと分からないくらいの変化。

私は、それを見たときにどっと疲れが出た。

きつと、たくさんさんの冒険譚を話すハメになる。

こういう刺激の無い貴族的な生活を送ってる少女や女性は外からの刺激に対してとっても敏感なのだ。

以前も、このパターンで永遠と話相手をさせられた事がある。

その頃の事を思い出して、心の中で思わず頭を抱えた。

その事で、次の大事な話の内容を私は聞き逃してしまった。

「それでは、正美様^{まゆみ}。くれぐれもこの部屋からは出ないように願います。」

エメラスさんがそんな事を言ってくるが最初の方は聞き取れなかった。

恐らく、この少女の名前を言っていたのだろう。

すでに、頭を抱えていた私にはどうでもいい事だったけど……

それでも、部屋から出ないようにつて言葉には少し引っかけりを感じた。

確かにこの部屋は学校で言う教室くらいの広さはある。

それでも、ここの部屋にずっと閉じ込めておくと言う事は何らかの要因が考えられる。

警護の依頼を受けた時も依頼人が部屋に閉じ籠って出て来ない時があったけど、それと同じなのだろうか？

でも、こんな屋敷の中で危険な事など起きる事は無いと思う。

身内が余程、暴走する人で無い限りそんな事は有りえない。

でも、私が担当するこの女性を見る限りなにか問題を起しそうな印象は受けない。

それと、話相手をさせる為だけに、態々（わざわざ）大金を使ってまで冒険者を一時的に雇い入れる事など普通は考えられない。

考えられる線としては、どこかの貴族のご令嬢と言う線があるけど、冒険者みたいな人と接触させる危険性を考えない訳が無い。

其れでなくても、この世界の貴族は毒殺とか日常にあるし……

そう考えると、貴族のご令嬢という線は消える。

問題は、これだけの大きな部屋を宛がって、身柄を監禁？に近い事として冒険者を話し相手として雇い入れるのは何故か？

そこまで、私は考えた所で、一つの結論に達した。

よく分かんないって事に！

そもそも、私って知識使う依頼クエストを受ける時って基本、ガイアスとかに丸投げだったんだよね。

なんでも力任せに解決してたし……。

はあ、私ってこういう潜入捜査とか本当は向いてないのよね。でもパーティーメンバーだと私しか女いないし……。

「それでは、ユカリさん。きちんと話相手になってあげてくださいね」

思考中に突然、エメラスさんから声を掛けられて、内心ドキドキしながら頷いていた。

我ながら、反射的行動としても頷けたのは上出来だと思い、視線を少女へ移した。

私が視線を移すと同時に扉が閉まる音が聞こえてきた。

思わず、私は、後ろを振り返った。

冒険者風情と大事にしてるご令嬢を一人にさせていいのか！？と扉越しに突っ込みを入れそうになってしまった。

そこで、「えっと、貴女は冒険者の方ですか？」と鈴を鳴らすようなそれでいて聞き心地の言い音色のような声が聞こえてきた。それを聞きながら、私が振り向くと少女はニツコリと笑った。

その笑顔を見た途端に私はこの人、歌手になったら元の世界だと一瞬でミリオンにランクインするんじゃない？って考えながらも「はい、そうです」

と私は、普通に答えた。

「そう、よかったわ」

少女が顔をニンマリ？させながら私の方を見つめてきた。

その、笑顔は明らかに整いすぎた少女の顔に合わない笑顔だった。そう、何かを企んでるような笑顔。

「えっと、そうね。私の名前は正美っていうの。よろしくね」

「あ、えっと、私は、由香里って言います。」

シドロモドロになりながら、挨拶を交わした。

原因はマサミって名前。今までたくさんさんの依頼人や人と接してきたけど、英国人ばいカタカナ表記の名前ばかりで日本人ばい名前は今まで無かった。

それが行き成り飛び出して来て、私は驚いた。

数年ぶりに聞いた日本語表記の名前。

さすがに異世界で、同じ日本人に会う訳はないけど、それでも同郷に近い名前を持つ人には親近感は沸く。

私は、正美と言う少女を再度見ると、その少女も固まったままじっと私を見つめ返していた。

とっても澄んだ、湖底のような黒いクリッとした瞳をしている。

何故かこの世界に来てからたくさんさんの命を奪って生きてきた私はすごい居心地は悪くなった。

しばらく、私を凝視して思案をしていた正美と言う少女は、確固たる視線で私を見つめてきた。

そして、「あの、日本って国をご存知ですか？」と

絶対に耳にしないと思った、言葉が私の鼓膜を揺さぶった。

交差する思惑 2

「え？」

思わず、私の口からそんな言葉が漏れた。

それは、無意識に出た言葉だった。

なんで？という感情が一番先に先行していた。

そんな、混乱してる私を見て、正美という少女はきょとんとしていた。

そして、一言呟いてきた。「どうして泣いているの？」と。

私は、言われて初めて気がついた。

瞳から次々と涙が頬を伝って流れていく事に……………。

何度、拭っても涙が溢れてきて止まらない。

そんな私を、少女は困った顔をしながらも一枚のタオルを差し出した。

私がそれを受け取ると

「ごめんなさい。私の言った事で泣かせてしまつて……………」

少女は、申し訳なさそうに私に頭を下げてきてくれた。

「ううん、違ふの」

そう、私が泣いていたのはきっと同郷を知ってる人がいたからだ。この異世界では、私は異質な存在であると同時に異分子でもある。そんな中での孤独感はどうだけのモノなのだろう？

今まで、必死に生きてきて、生きるために他者を殺して明日への糧として日々生きてきた私は知らない内に、その孤独感を貯めていたのだろう。

そして、この少女が日本人ならば人殺しが日常茶飯事なこの世界と違って平和な日本では、絶対的なタブーである人を殺す必要はない。

そこまで考えた所で、少女の瞳を見ると真っ直ぐに私を見ていた。その瞳には、無条件で人を心から信じ人に信じられると言った日本人特有の甘い考えをもった感情と共に人に安心感を与える暖かさを感じた。

そこで、私はハッとした。

そう、だから、私はきつと最初、この少女の瞳を見た時に動揺したんだ。

きつと、私もこの世界に来る前はこんな瞳をしていたかも知れない。でも、今は……。

きつと、酷い顔をしている。

自分の国を知ってる人と会っただけで、何でこんなに動揺してしまふんだろう？

この世界に来て、一人でも生きていけるように強くなるってあの時、誓ったのに。

そんな私を心配そうに見上げるように私を正美という少女は見ている。

私から見ても、その少女はとても小さく映った。きつと私よりずっと幼い年齢なのだろう。

私が部屋に入ってきた時に泣いていたのも、元の世界への恋慕かも

知れない。

そう思ってしまうととても、愛いとしくなってしまう。

私は、ベットのの上に座っている少女を抱きしめると、少女は特に抵抗もしなかった。

私は、すでに十分動揺して取り乱していたけど、安心させるように「なんでもないの。」と何度も繰り返し自分に言い聞かせるように呟いた。

そして、少女の髪の毛を手櫛しようとした所で、白い猫みたいなのが私の頭の上に乗ってきた。

「なっ!？」

雰囲気ぶち壊しの声を思わず私は上げてしまっていた。

それもそのはず、その白い猫ぼいのが人の言葉を話してきたからだ。

「ご主人たまに、馴れ馴れしくしないでほしいでち！」

「喋った？魔物？」

喋ってきた白い猫を左手を振るってベットと反対側に弾くと、一本の刀を右手の中に作り出す。

そしてそのまま叩きつけるように白い猫を斬りつけようとした所で、「やめて！ルアを斬らないで！」と後ろから、切羽詰った声が聞こえてきた。

それと同時に、私の腰の部分に、白く細い手を絡めて抱きついてきた。

ここまでの動作を無意識に行っていた私は、その声を聞くが長年、冒険者をしてきた私が、すでに振り下ろした刀を止める事は出来な

い。

何故なら、魔物は狩るものと体と心に深く刻み付けてるからだ。魔物は存在するだけで人に害を及ぼす。

それは、この世界では共通の認識であり絶対の真理だから。

真っ二つになる場面を想像していた私は目の前の光景を見て驚いていた。

私を作り出した刀は白い猫の体毛で止まっていたからだ。

「そんな!？」

私は、驚いた。

龍の鱗ですら切り裂く私の刀を受け止められるとは思わなかったから。

『やれやれ、ずいぶんな歡迎ぶりだな。当代の原書よ』

そんな声が威圧感と共に、私の中に降ってきた。

交差する思惑 3

正美と言う少女にルアと呼ばれていた、白い猫のような魔物と睨みあった所で、部屋の外で待機していたエメラスを筆頭とする数人のメイド達の介入によりその場は有耶無耶にされた。

そして、今、部屋の中では正美が一人ベットの上で横になっていた。

「なあ、ルア。お前がご主人たまと同じ匂いがするでちー。とか言ってたから元の世界の情報を出して反応を見たけど、どう考えても痛い子に思われたぞ」

そう言いながらも、正美は先ほどの由香里との会話を思い出していた。

たしかに由香里と言う女性は顔の輪郭を見る限り、果てしなく日本人に近かった。

それでも、髪の色と瞳の色は元の世界では考えられない色だった事から日本人では無いと思い、エメラスとの会話に集中したのだった。お互いに名前を名乗りあった後、元の世界への帰還の方法に望みをかけてこちらから、元の世界の情報を出して反応を試してみたが、哀れみの涙を誘っただけで後は、ルアを魔物と勘違いし殺そうとしたくらいだった。

これだけでは、いくら名前が由香里という日本人に近い名前でも日本人というのは特定は出来ない。

それにこの世界へ連れて来たのは尊大な態度で話す女だった。

「はあ、どうするか」

ベットの上で正美は、上向きになり天井を見つめた。

正美のお腹の位置にルアが走ってきてスカイジャンプを決めてくると、その衝撃で正美の口から吐息が出る。

「ルア、いい加減、人のお腹の上で寝るのやめろよな」

「使役獣は、ご主人たまと一緒にいないと死んじゃうでち！スキンスリップは大事でち」

俺は、思わずお前は青い兎かよ？と心の中で突っ込みながらもこれからの事について考えた。

借金を完済しない限り、間違いなく男と結婚させられる事は目に見えている。

体は女でも心は男な俺にとって、それは拷問以外の何者でもない。それを回避する為には、何とかしてこの監禁状態から抜け出して逃げ出すしか方法がない。

前回、この館から逃げ出した時には、記憶喪失というトンデモ状態に陥ってしまい、色々とゴタゴタに巻き込まれて一つの商業都市を丸ごと吹き飛ばしてしまった。

吹き飛ばしたのは、ルアだったけど……………。

そう言う事から考えると、外で生きる為の絶対的情報が足りてないのが分かる。

今日のアレイの部屋から出てきたあと、情報を得る方法をずっと考えていた。

そして、丁度良く外の情報を得られる冒険者が話し相手として雇われた。

その冒険者から外の情報の話と普段の私生活の体験を聞けば何とか

なるかも知れない。

そう考えて、エメラスから話を聞いた時にこの窮屈な生活から抜け出せるかもと期待を込めた眼差しで冒険者たる由香里を見ていたのであった。

「でも、ご主人たま。あんまりあの由香里って人とは仲良くしない方がいい気がするでち」

知ってか知らずかルアが正美に忠告をしてくるが、当然それを正美はスルーする。

「そうだな、問題は一人で生きて生けるように情報を由香里って人から得るのが大事だよな！」

「ご主人たま、僕の意見はスルーでちか？スルーなんでちか？」

ルアが喚いて何か言ってるが当然スルーする。

「この際、同じ日本人かも？って言う幻想は捨てて、外で生きる為の知識を頂く事にするか！」

その考えがとても良案だと正美自身は思い、明日からは公爵邸脱出プロジェクトを開始する事を心の中で固めていた。

（ルア）実際は声に出していたのはいつもの事である。

「だ・か・ら、ナレーションしなくていいからな？」

正美はそう言いながらルアのコメカミをグリグリする。

ルアの痛い！痛いでち！という声が部屋に響き渡っていた。

神様も忙しいのですっ！

日の明かりが消え、暗き帳が世界を支配する時刻。

人はそれを夜という。

夜は不可思議な現象を起すと古今東西で文献にて語られている。

それは、人が持ちえる原始的な恐怖により空想的に書き立てられた物語も含まれる。

夜の帳は、全ての生きとし生けるもの存在する全てのモノに等しく降り落ちる。

それは、必ず死という最後が全てのモノに降りかかるように……

正美の中に存在するもう一人の妾にも、いつの日か終わりが来るのだろうか？

普通の人間では、持ち得ない程の容量キャパシティの中を妾は漂いただよながら思考していた。

この世界へ、戻る為とは言え、神たる妾が一時的とは言え、人間の力を借りてしまうとは……

だが、それは仕方の無い事であった。

上位神であっても、別の世界への規律を乱す異世界干渉を簡単に行える程、世界と世界の狭間にある壁は緩くはない。

地球という、星に飛ばされてから数百年、この世界へ戻る為に力を行使する場所を星中周り探したが、すでに神が絶えた土地ばかりで

神域は存在しなかった。

多数の宗教は存在していたが、それは全て、偽りの神ばかりであり神域と名がついてる場所には低級霊が闊歩してるだけであった。

長い長い旅の果てに辿りついたのが、日本という小さな国であった。そこにたどり着いたのは本当に偶然と言える。

日本に興味を持ったのは、遠くインドという国に居た時であった。上位神である妾をも遥かに凌駕する力の衝突。

それを感じたからであった。

そして、急いで極東の島国に着いたときには、全てが終わっており戦いの残滓が残っているだけであった。

否、その残滓ですら本来、存在するはずの無いほどの力を内包していた。

そして、その残滓を吸収したあと、一時的に力を回復させ、元の世界への門を開こうと心みたが、それは失敗に終わってしまう。

しばらく、極東の日本という国を観察していると気がついた点があった。

それは、世界では数えるほどしか存在しなかった力を持つ者が、それなりに存在していた事であった。

その中で異世界への扉を開く力を持つ者が居ないのか、妾は探した。

そして……一人の男を見つけ出した。

その男は、人には有り得ないはずの術式が体に組み込まれており膨大な力を有していた。

妾は歓喜した。

これで、元の世界へ帰れると！

世界に侵攻してきた異形の船と魔物を滅ぼす事が出来ると！

だが、男には妾の姿、声は一切届く事はなかった。

妾は、信じられなかった。

これだけの力を内包するものが上位神である妾の声を聞くことが出来ないことに……………。

そこで、妾は自らが意識を失い夢を見ていた事に気がついた。

そして、ふと前を向くと一人の少女がこちらを見つめてきているのが見えた。

「また、来たのか？ いい加減、この世界から出て行ってくれとうれしいのだが？」

そう言って少女が本当に嫌そうな顔をして妾に話しかけてきた。

「残念ながらそうはいかんのう。妾にも目的があるのでな」

妾の言葉に、その少女はほんの少し楽しそうに笑っていた。

交差する思惑 4

いろいろあって、翌日――

部屋で朝食をとった後、沐浴をし着替えさせられた後。

今、正美が居る部屋には、この部屋の主たる正美と由香里がベツトの上で座っていた。

お互いに何か思うことがあるのだろう。

正美の場合は、外に出た時に生きる為の技術であるが……。

だが、それを部屋の中に漂う現在の^{プレッシャー}圧力の中で聞くことは、少しは空気嫁とまで言われる正美でも出来なかった。

正美と由香里の間には、ルアがちょこんと座って由香里と対峙している。

しかも無言でだ！

その空気の張りつめ方と言ったら、東京駅で校歌を一人大声で歌えと言いくらいの難易度である。

実際は、テレパシーぽいので一人と一匹は会話していた訳なのだが、
……。

『おい、当代の原書。^{オリジン}2度は言わないぞ？ さっさと屋敷から出ていけ』

『はい？ 貴方にそんな事言われる云われはないんだけど？』

『ほう、我が主によからぬ事を吹き込もうとするのを事前に食い止めるのは私の仕事だ。』

『ふうん、でもお生憎様。貴方のご主人様は私との話を望んでるみたいよ？それに私を解雇した原因は貴方って言えばまた、グリグリされちゃうわよ！ぷっ』

由香里はテレパシーをしながらも、相手を小馬鹿にする。

『貴様、何故昨日あった事を知っているのだ？』

そう、ルアが頭をグリグリされた時、部屋には2人しかいなかったのだ。

それを、由香里は正確に察知している。

ルアはそれが不思議でたまらない。

何故なら、ルアは五感が人のそれと比べて遥かに発達しているために侵入者やそういった者を見極める力はとても高い。

それを掻い潜って情報収集するなどまず不可能なはず。

由香里としては、自身の能力である幻想技術フィナーエルガントを利用して、空气中に無数の受発信をもったカメラを作って覗いていただけなのだ。

それを素直に言うほど、由香里は馬鹿ではない。

むしろそれってストーリーカーじゃないの？とか人権侵害だとか日本だと訴えられそうだが……。

『女の子には、秘密が多いものなのよ？それに小動物に言ってもね。理解出来ないでしょ？ぷっぷっぷっ』

そのテレパシーを受け取ると同時に、ルアの額に血管が浮き出る。

それを見ていた正美は、何をしているか知らないけどこれ以上放置してたら部屋がとんでもない事に！むしろまた借金加算されるんじゃない？と思いルアを持ち上げて胸の位置に抱っこすると頭を撫でた。

「ご主人たま、やめてほしいでち。」

ルアはそう言いながらジタバタと短い手足を動かすがガツチリと正美の細い両腕にホルドされた体はその程度では外すことは出来なかった。

「ダメ。せつかくの貴重な情報じゃなくてめずらしいお話してくれる方なんだからそういう態度はダメ」

思わず、ポロリと本音が出てしまっていたが、今までルアと一触即発の戦い？をしていた由香里は、その事に気がつくことはなかった。それでも、ルアと由香里がこの部屋で他者から見たら無言の戦いを繰り広げてからかなりの時間が立っていた。

正美が、由香里に冒険者というのはどう言う事をするのか聞こうとした所で、部屋の扉がノックされた。

本題に入ろうとしていた正美としては、面白く無いわけなのだが、エメラスからの命令で由香里に接してる間は極力、女性として接するように言われていた為、それを表情に出すわけにはいかない。

「はい、どうぞ」

正美がそう答えると、ティーセットを用意したワゴン車を押してエルフィーナとイリシアが部屋の中に入ってきた。

予兆

エルフィーナとイリシアがお茶の用意をした後、2人はすぐに部屋を出ていったように正美の目には映っていたが実際は、二人が部屋を出て行く際、由香里は一人の女性に睨まれていた。

部屋の外では、イリシアとエルフィーナが廊下を歩きながら正美と由香里の事に関して話をしていた。

「エルフィーナお姉さま、ルアカーゼ殿とどうやら由香里っていう新人は仲が悪いようですね!」

そう、2人は短い時間で部屋内の不穏な空気に気がついていていた。

ルアカーゼの普段はボーっとしてる丸い瞳が、細められてそれが由香里を射抜くように見つめていたからだった。

あれならば何か問題が起きることは無いだろうとエルフィーナは安心する。

むしろ、周りから見たらエルフィーナがいつも騒動を起してるわけなのだが……。

「ええ、そうね。特に不審な点もないようですし、一週間の滞在の間だけの辛抱ね」

その言葉に、イリシアは正美の専属のお付を外されてる自分達が口にするモノを持っていくのが一番不審なんですけどねっ!とひそかに突っ込みを入れていた。

それでもその事を言えば、要らぬ雷が落ちてくる事を知ってるだけに余計な事を言うのを控えてるあたりイリシアはきちんと成長してるのかもしれない。

その頃、アレイクード公爵邸の執務室では問題が起きていた。

「クレイネル、これを見てくれ」

アレイが書簡をクレイネルに渡す。

その書簡は黒く塗られており、独自のルートで手に入れた情報であった。

「これは!？」

クレイネルが書簡に目を通していくのを待つ事もなく、アレイが口を開く。

「ああ、軍事国家レクイエムが女神信仰国レイゲンと宗教国家インフェルノへ同時に宣戦布告を出した。」

アレイも自分でその事を言いながらも信じがたい心持であった。

そもそもこの大陸の国家間の力は絶妙にバランスが取れており、ほとんどの国のパワーバランスは均衡に保たれている。

アレイクードが仕える国家エルハンスは弱小国家と言えど、アレイクード公爵が保有する軍事力やエメラス、クレイネルなどと言った核兵器に近い人材が抑止力となっている。

女神信仰国家レイゲンそして宗教国家インフェルノに至っては膨大な信者を世界各地に抱えている為、これらの国に宣戦布告をすると言う事は自国内にいる信者も敵に回す事になる。

だからこそ、この2国を同時に相手にするなど本来は考えられない

事であつた。

「なるほど、だからこそここ数年、レクイエムで不審な動きがあったのですな」

クレイネルが妙に納得した顔で呟いていたが、アレイとしてはその言葉に不審を持った。

公爵クラスの情報網ですら手に入れる事が出来なかった不審な動きをクレイネルが感知していたからであつた。

「数年前？ 俺には情報は上がってきてはいないが？」

アレイの疑問に、クレイネルは少し思案すると「いえ、まさかこの様な事態になるとは思いませんでしたの」と言葉を濁していた。アレイはクレイネルにどうやって知ったかなど、問い詰めた事があつたがそれをひとまず置いておくことにした。

「それで、レクイエムがこの2国と戦つて勝てる可能性はあるのか？」

誰でも疑問に思うことをアレイはクレイネルに尋ねるとクレイネルはしばらく思案した後、分かりませんと答えた。

「ですが、一つだけ言える事があります。レクイエムには何らかのこの戦争の勝敗を決定づける物を手に入れたと考えられます。モノによってはかつての大戦を超える戦いになるかも知れません。」

その言葉にアレイはしばらく思案した後、物資の調達を含む書簡をいくつも仕上げて領地内の各都市・町・村の長そして王宮への伝令を送ることに決める。

そして、これは幻想大陸のみならず本来の世界すらも巻き込む事になろうとは誰にも神にすら予想は出来るものでは無かった。

首都イースバール

軍事国家レクイエムが宗教国家二国へ宣戦布告し、国境を侵犯し戦争が始まりすでに一週間が経過していた。

エルハンス王国の首都イースバールでは、多くの難民が押しかけっており、城下町にある門を閉ざす事で進入を防いでる状況であった。難民を受け入れれば、自国の民との温度差により問題が多発するのは明らかであった。

事実、先の大戦では多くの難民を受け入れてしまった為に、治安などが著しく低下してしまい国内の治安維持を優先してしまった結果、他国からの侵攻を許してしまい、

王宮が陥落の憂き目に合った事もある。

その事から、難民の受け入れに関しては城壁の築かれている町においては戦時中も平時も受け入れないのがこの国の暗黙のルールであった。

そのような背景もあり、この国にエルハンス王国に住む大半の人間は難民を心良く思っていない。

それは、国と利権の強く結びついてる貴族においては最も顕著であり、自らの領内に難民が来るものならば兵を出して追い返すか過激な貴族ならば手打ちも已む無しという行動を取る者もいた。

エルハンス王国が難民の受け入れを拒んでいる事は、他国の国民にも周知の事実として知られてはいたが大陸に存在する五国のうち女神を信仰する国家レイゲンと宗主国インフェルノが軍事国家レクイエムと戦争を始めた為に、安全な国は、エルハンス王国と軍事国家レクイエムを挟んだ先にある資源国アルノートしかない。

戦時中の敵対国を超えていくなど、自殺願望者以外行方不明者などないだろう。

そのような理由によりエルハンス王国へ難民が流れてくるのは必然と言えた。

すでに難民の数は数万人規模に達しており、首都に入れない不安と着の身着のまま非難してきた事からの不安からいつ暴動が起きても仕方のない状態であった。

そして、難民達を連れ立った兵士達を使い進む貴族の一団があった。

「もう、汚らしいですわ、お父様」

場違いな程、煌びやかに装飾された馬車に乗ったレイユーズ公爵家の娘フィンナが愚痴を零す。

だが、その事をまったく気に留めた様子もなく、馬車から遠くを見るようにレイユーズ・フォン・ベリアス公爵は考え込んでいた。

エルハンス王国を内部から瓦解させる為に多額の資金を宗主国インフェルノから渡されてこの地位まで上り詰めたと言うのに、今度はその最大のクライアントが戦争を仕掛けられて危機に陥っているからだ。

宗主国インフェルノより、今後のエルハンス王国の動向を決める際の会議において、クライアントの有利になるように事を運ぶように打診が来ている。

その事に、レイユーズは頭を抱えていた。

何も無ければ、多くの信者の事を表に出し、根回しした王宮内の重鎮と貴族を利用し会議である程度の物資支援を取り付ける事も出来たはずであった。

そう、数ヶ月前にイドバーン祭司が暴走し、レイユーズ公爵領内の資金源である貿易都市を滅ぼしさらにアレイクード公爵と戦い殲滅させられていなければ……。

レイユーズ公爵の中には一切の愛国心は存在していなかったが、それでも今回のクライアントである宗主国インフェルノの打診を通す事は、無理がありすぎた。

その事が、レイユーズ公爵が領内よりずっと頭を悩ませる一因であった。

あまりにも強く会議で言い過ぎれば、自らの進退を危うくしてしまう可能性もある。

それに、最初は計略で婚約をしただけの妻であるルフィンがレイユーズは愛してしまっていた。

ルフィンは現在、二人目を生んでからずっと体調が悪く動かす事の出来ない状態が続いている。

そして、レイユーズ公爵の中では宗主国インフェルノとの決別も少しづつ視野に入れていた。

そう、自分の家族を守るために……。

「お父様っ！」

フィンナの大きな声で、レイユーズは現実に戻された。

かなりの時間、考え込んでいたようであった。

娘のフィンナはかなりの剣幕で怒っている。

馬車の窓から表を見るとどうやら、城下町を走っており王宮へ向かっているようであった。

レイユーズ公爵の娘のフィンナも、久しぶりに通る城下町が気になったのか外を見ている。

いつも屋敷の中にいるからか、めずらしいのだろう。

顔を見る限り機嫌は直っているようであった。

「まったく、ルフィンに似て喜怒哀楽が激しいな」

そう呟きつつ、レイユーズは如何にして王宮会議をうまく立ち回るかを考えていた。

王宮への召集を受け、レイユーズ公爵の到着から二日後、アレイクード公爵が率いる従軍がイースバールの城下門外、避難民が集っている場所に到着していた。

従軍と言うのは、その規模であつた。

数は見渡す限り数千、否。1万に達しよう。

「思ったとおりだったな。クレイネル！」

名前を呼ばれると、白い法衣をビシッと着込んだクレイネルがアレイクード公爵の下へ向かってくる。

「はい、やはり先の大戦と同じように避難民が多数流れてきてるようですな。大量の物資を確保しておいて正解でしたな」

その言葉に、アレイは頷くと城下町へ入る門へ視線を走らせる。そして、エメラスに合図し、近くに来るのにと同時にクレイネルへ後は任せるとばかりに口を開く。

「クレイネル、俺は先に王宮にエメラスと二人で出向く。後の事は任せたぞ」

そう言うと、アレイとエメラスは徒歩で城下へ続く門を向かう。

それを慌てて従者が引き止める。

いくらなんでも、王宮に向かうのに公爵が歩きで城下を闊歩するなど考えられないからだ。

むしろ、常識では有り得ない。

だが、さらに従者と避難に集っていた他国の国民をも驚かせる発言

が飛び出した。

「今、一番馬車を必要としているのは病気などで身動きが取れない避難してきている者ではないのか？俺には、必要ないし王宮に行くだけなら歩ける足がある」

それでも、従者は反論しようとしていたがエメラスが首を振り、無理ですよと従者に教える。

「そうですね。若いうちの苦労は死んでもしろと言いますしな」

死んだら苦労出来ないジャンと正美がこの場にいたら突っ込みを入れていただろう。

クレイネルが従者を納得させている間に、アレイとエメラスは二人で城下町へ通じる門を通過してしまっていた。

「クレイネル様、公爵様とメイドのお二人だけで王宮に行かせてしまっていていいのでしょうか？」

恐る恐ると言った感じで従者は、クレイネルの顔色を伺いながらも聞いてくる。

その様子に、クレイネルは少し思案した後、従者に意地悪ぽく言った。

「そうじゃな。幻獣王クラスが出てこない限りあの二人を何とかする事は出来んじやろうな」

その言葉に、従者は「へっ？」と言いながら呆け、それを見てクレイネルは苦笑しながらも指示を出していく。

する事はたくさんある。

アレイクード公爵内の全ての都市、町、村には避難民の受け入れをするように打診しており、その用意もここ10年ほどで完璧に済ませている。

はつきり言えば、一国丸ごと避難民が来ても受け入れる程の準備をしてきたのであった。

そして、それは幼少期にクレイネルが悲惨な体験をしてきたからであり、民を守る事を最優先にしてきたアレイクードの父と共に進めてきた結果でもある。

これから、避難民はもっと増えてくる。

それを如何に処理し振り分けるかはどんな学問より難題であろう。だからこそ、クレイネル以外がこの仕事をこなす事は出来ないだろう。

「さて、始めるかのう」

クレイネルは、そう言う съсうでに受付を開始しているテントへ歩を進めた。

王宮での一コマ

城下町へ入った二人は、レイユーズ公爵が通った王宮まで続く石畳の道を、歩いている。

レイユーズ公爵達を通った時に、開いていた多くの商店などはここ二日の間に出された伝達により閉まっており、通りは閑散としていた。

そして、アレイは、人の姿が疎らな通りを見て眉を潜めていた。それに気がついたエメラスは、通りを見てある事に気がつく。

「アレイ様、城下町に配備されている兵士の数が常時より少ないです。」

そう、他国同士の戦争とは言え、いつ戦時になるか分からない現時点で常時より配備されてる兵士が少ないと言うのは明らかにおかしい。

それに先ほどから疎らとはいえ、見かけるのは女性や老人そして子供ばかりであった。

「ああ、嫌な予感がする。まさかとは思うが……………」

その頃、アレイクード公爵より二日前に到着していたレイユーズ公爵は、会議を行う前に少しでも有利な状況下を築こうと画策し水面下で動き回っていた。

そして、そのために多額の賄賂も持参していたが……………。今、レイユーズ公爵が宛がわれた部屋で、苛立ちを隠さない、いや、隠す事が出来ない程の衝撃を受けていた。

自らが、賄賂を贈っていた重鎮が軒並みに不審な死を遂げており、

聞いた事も無い名前の者達がその役についていたからであった。

そして、裏に手を回して手に入れた書類が部屋に設置されていたテーブルの上に広げられていた。

そこには、こう書かれていた。

女神を信仰する国家レイゲンへ戦を仕掛け、領土を拡大を新国王が画策していると・・・・・・。

前国王は何者かの手によって崩御しており第一王子が国王になっていると書いてある。

さらに、怪しい者を何人も抱えており何かを行っているとも書いてあり、すぐにでも王都よりの脱出を優先するようにとも報告がされている。

レイユーズ公爵でなくとも、国王が不審な死を遂げさらに重鎮もその後を追ひ、国王が代わった途端に戦争を始めるなど、どう見ても毒殺して王位を奪いましたとしか思えない。さらに国王が崩御し新国王になった情報すら公爵へ届けられていない。

つまり、公爵家が軽んじられていると言っても間違いではない。

いや、むしろ、公爵家が干渉してきた際、問題の発覚を抑えるために秘密裏に事を進めたと言う所だろうか？

それにレイユーズにとって、女神を信仰する国家レイゲンへの宣戦布告は、宗主国インフェルノとレイゲンを同時に攻略している軍事国家レクイエムへの援護になりかねない為、それも頭が痛い課題であった。

今は、自分の力が及ぶ王宮内の重鎮が軒並み暗殺された以上、何とかして戦争を回避しなければならぬ。

「まったく、民を引き合いに出して戦争回避を訴えるなど、ガラではないのだがな」

レイユーズは、アレイクード公爵が王宮へ到着した事を使いの者から聞くと、これから始まる王宮会議へ向けて部屋を後にした。

一方、王宮へ到着したアレイクード公爵とエメラスは王宮内の回廊を歩きながらも不信感を募らせていた。

「やはりおかしいな」

「はい、王宮内とは言えど警備の者が少なすぎます。それに、王宮十使徒の気配も感じません」

王を守る、最高守護隊王宮十使徒すら居ないと言うのは明らかにおかしい。

そこまで考えた所で、そのシリアスな空気ムードを壊すように、一人の女性が駆け寄ってきて、アレイに抱きついた。

「アーくん、ずいぶんと男らしく育ったわね！」

その女性は、紫色の腰まである髪を背中中で束ねて露出の高い青いドレスを着ている。

アレイは、抱きついてる女性を拳を握り締めてボディを殴りつけ、女性がお腹を抑えてる間に引き剥がして廊下に打ち捨てた。

「いったーい、何するの？子供埋めなくなったら責任取れるの？ねー。ねー。」

女性が、豊満な胸を強調するようにアレイに近づいていく。

それをアレイは避けずに、顔を殴りつけた。
その反動で女性が壁まで吹き飛ぶ。

「ひどい！アーくん。ひどいよ！お父様にも殴られたことないのに！」

「うるさい！ヴェルド。いい加減、女の格好するのをやめろ！」

ヴェルドと呼ばれた女性？は立ち上がると殴られた頬を押さえながら笑う。

「残念ね！アーくん。私のコレは魔法で女性になってるのよ！つまり真正正銘の女性って事なの！わ・か・る？てへ」

ビキッという音が聞こえてくると同時に、ヴェルドが吹き飛び大理石の壁にめり込む。

そして、何事も無かったかのようにヴェルドが大理石の壁から這い出してきた。

それを見て、アレイは盛大な溜息をつき、突っ込みを入れる。

「まったく、大理石の壁に頭から突っ込んで、無傷のくせに真正正銘の女性なのくは無理があるんじゃないか？それより、ヴェルド。お前も一応公爵ならそれなりの格好をしろ。」

アレイの言ってる事は至極まっとうな意見であったが、女装癖のあるヴェルドには意味がなかった。

「アーくん。失礼ね！私は体は男だったけど、心は女なのよ！ヴェルドじゃなくてベルって呼んでね。その方がかわいいし。」

よく分からない言い回しをしながら、ヴェルドは体をくねらせてい

る。

「だから、そう言う事をするなど言ってるんだが……。」

違う意味でアレイは疲れを感じていた。

まったくどうして、俺の同世代の公爵家の連中は変な奴が多いんだ。その変な連中の中にレイユーズ公爵の娘も含まれていた。

アレイが、ヴェルドを殴るのを我慢していると誰かがアレイの肩を軽く叩いてきた。

こういう叩き方をする奴は一人しかいない。

「まったく、ベルカストールまで来るとはな」

アレイは肩を叩いてきた張本人を見るために振り返ると10歳くらいの女の子が宙に浮いていた。

そして、アレイと目を合わせるとニツコリと笑う。

それはまるで天使のような微笑であった。

そう、ベルカストールという公爵を知らない人から見れば……。

「アレイ、お前相変わらず領地運営のために引き籠もりしてるのか？　もう少し他人と交流持たないと友達できないぞ」

そう、この天使のような微笑を持つベルカストール公爵は毒舌であった。

「ベルカストールなんて友達のと文字もないじゃないの？」

横から、ヴェルドは、ベルカストールに突っ込みを入れるがその間

いにニツコリとベルカストールは笑う。

「女装癖の変態の対人恐怖症の女性恐怖症の年間TOPを独占してるゴミルドに言われたくないな」

クハッ、という何かを吐血した声を吐き出してヴェルドが床に土下座ポーズを行った。

かなりの精神的ダメージを負った？ようだ。

その不毛な会話に釘を刺したのはエメラスであった。

「三方ともそろそろ会議の時間のようです。急ぎましょう。」

エメラスを先頭に、アレイ、ベルカストールの順に続き、その場から離れるとヴェルドも急いでアレイ達の後を追った。

王宮会議

「アーくん。」

ヴェルドが小さい声で、アレイクードへ話しかけた。

アレイがそれに反応し、振り向こうとすると、「振り向かないで聞いて!」と小さめながらも強い口調で注意される。

注意してきた声色が先ほどもまでの碎けた物から真剣な眼差しに反映されるように緊張した雰囲気包まれていた。

アレイもそれを察し、先ほどもまでの芝居だったのかと自分を納得させた。

「分かった。それで何かあるのか?」

アレイが、ヴェルドの声の大きさに合わせて話の先を促す。

「うん、今ね王宮は、第一王子が黒いローブを着た男に誑かされて王を毒殺し仕えていた重鎮を暗殺して得体の知れない連中を王国の主な役職につけたの」

その話のアレイは耳を傾けているが、内心では信じられないと言った心持ちであった。

馬鹿と評判であったが、第一王子のファルウェルは少なくとも父であるファルナーク王を尊敬しており毒殺を企てるような人柄では無かった。

「どういう事だ? 何かに操られているのか?」

そう、一番分かりやすいのは催眠、暗示などで自我を操作され毒殺

に及ぶというのが一番確率が高い。が

「ううん、分かんない。特に何かに操られてるとかそういうった感じは受けなかったけど……。」

ヴェルドは自信なさげに声を窄めてしまう。

そして横から、ベルカストールが話に混ざってくる。

「アレイ、ヴェルド。今、沈黙魔法を展開した。声だけを通さない優れものだ。これで話を聞かれることはない。」

それに、ヴェルドは安心すると歩きながら話を再開する。

「でもね、アークくん。今回の侯爵以上の召集は罠だと思うの。だって、侯爵以上と詠っているのに実際集ってるのは私達とレイユーズだけだもの」

たしかに罠という線は捨て切れないが、三侯爵とエメラスを止める為には王宮十使徒の力を持つてしても不可能と言わざるえない。それなのに、王宮には十使徒どころか、兵士の数も疎らである。これでは、自分達を止めることなど、到底……。

そこまで、アレイクードが考えた所で、ハッと気がつく。

「エメラス、ヴェルド、ベルカストール。今回の召集は間違いなく罠だ。」

アレイクードの言葉に、三人は怪訝な顔をする。

自分達を止めることなど、不可能に近いからだが、それを察した、アレイが言葉を続ける。

「狙いは俺達じゃない。俺達の領民を人質に交渉をしてくるつもりだ。」

その言葉に三人とも驚きを隠せずにいる。

まさか、自国の民を人質に交渉などするほど愚かな王がいるはずが、

だが、本来居るはずの王宮守護隊そして、常備より遥かに少ない兵士の数など不審な点を上げていくとそれだけの戦力をどこで必要とするのか？となる。

つまり、今回の召集は名ばかりの話合いではなく一方的な命令の場となる可能性が非常に高いと言う事になる

「だが、これはあくまで俺の推論。まさか自国民を人質に交渉するほど愚かでないと思いたいな」

アレイが最後にそう締めくくると、高さ3 mほどの会議堂の扉の前に立つ。

扉の両脇に控えていた兵士が扉を左右に開けると中へ入る。

会議堂はかなり広く、レイユーズ公爵を含め、10人ほどの見たこともない人間が本来、重鎮が座っているはずの席についている。

そしてそれを見た途端、アレイを含めの残り二人の公爵も先ほどまでのだらけた雰囲気から一転し荘厳な空気を纏った公爵として席についたのだった。

胎動

エルハンス王国の会議堂はとても広く作られている。

それは、軍事・政治など多くの高官との意見が交わせるようにと、初代の国王が命じて作らせたからである。

しかし、今、この場に居るのは、アレイクード公爵を含む四公と名も顔も知らぬ12人の人間が会議堂に存在していた。

これだけの人数で、国のこれからの将来を決めるなど本来はあっては成らないはずなのだが……。

緊張感を孕んだ空気の中に扉を開けて一人の男が入ってくる。

アレイがそちらへ視線だけを移すと、黒いフードで顔を隠し本来、王族が立つ位置まで進むとアレイと他の三公を見て口元を歪めていた。

「貴公は、何故その位置に立っているのかね？」

いつの間にか、男に戻っているヴェルドの冷ややかな声が会議堂に響く。

その声にフードで顔を隠していた者は反応せずに、ローブの中から30cm程の丸い鉄球を取り出し台の上に固定する。

そして、男はヴェルドの方を見るとフードを取り払った。

髪はブロンド、年齢は20歳前後、多少掘りは深いが何度見ても忘れてしまうほど特徴の無い顔であった。

そう、特徴が無いのが特徴と言えば良いだろうか？

男は、顔を愉快そうに歪めるとヴェルドの言葉に応じずにどこか物語りを語るように話だした。

その頃、アレイクード公爵邸では戦争が始まった事に対して、アレイクード、お目付け役のエメラス、クレイネルが不在になった為に正美は自由に羽を伸ばしていた。

今は、元の世界へ帰るために黎明庫で由香里と一緒に書物を読み漁ってる所であった。

正美が文字が読めるのも、エメラスの徹底した花嫁教育の産物であるが……。

それでも個々100年ほどの文字しか読めない為に、読めない書物にスルーしていく。

「それにしても、中々元の世界に戻る方法が書いてある書物がないよな」

正美の男言葉も解禁されている。

由香里も最初は、正美の男言葉に驚いていたが気にしない事にしていった。

自身にもすでに時間が無く、些細な事を気にしてる場合ではないからだ。

由香里が情報収集を開始する前に、戦争の事で館の警備が手薄になった事や正美の異世界から来たと言う話から、黎明庫の話を出していた。

黎明庫ならば、元の世界へ帰る方法もあるかもしれないと……。

その話に、最初は正美はしっかりと来ていなかったが、巷では誰でも知ってますよ？とそんな言葉に、ああそうなのか？と引き籠り気味な正美は由香里にあっさりと言い包められてしまっていた。

そして、そんな二人を本来止めないといけない役周りの副メイド長のエルフィーナは主が不在中に届く書簡の中で重要機密以外の物資や人材派遣などの書類を代行して処理していた為、執務室から出る事は出来ないでいた。

イリシアと言えば、手練の使い手であるメイドや執事達がアレイクード公爵と同行している為に、人手不足である館の中を駆け回って仕事をこなしている。

つまり、由香里とパーティを組んでいるガイアス達が襲撃を掛けるには打ってつけのチャンスなのだが、情が移ってしまっている正美を仲間と館の警備の者達の戦闘に巻き込みたくない由香里は仲間からの打診を断っている状態であった。

それでも、今日中に見つける事が出来ないのならば、今日の深夜には襲撃を実行に移すと打診が来ている。

「ないですね」

正美の言葉に相槌を打ちながらも、自身の指に嵌めている指輪である原書オリジンを前方に翳し反応がないか確認していく。

反応が芳しくない事から、由香里が苛立っていると離れた所にいた正美が驚いたような声をあげた。

由香里は思わず、そちらへ駆け寄り指輪を翳すが反応は無かった事にガッカリしながらも正美が広げた書物に目を通した。

その文字は、由香里がこの世界に来てから見た文字とは違っており、読み解く事は出来なかったが……。

正美はその文字を見て、驚いていた。
なんでだ？この文字だけは分かる。

そう、この文字は……。

正美は無意識の内に、物語を読み始めた。

それを聞いた、由香里はそれほど気にはしていなかったが、少し休憩も兼ねて正美が読む物語に耳を傾けるために近くの床に腰を落とした。

そして、巨大な図書館の中に声が鳴り響き始めた。

「遙か昔、この世界は何もありませんでした。空も大地も空気も人も動物も植物も何も存在しませんでした。」

「けれど、長い長い年月の果てに、異界から来た翼を持つ者がこの世界に一つの種子を放ちます。」

「その種子は長い年月を経て、世界に魔術の根源たる力を広げて行きました。」

「さらに月日が経ち、世界の根源たる力は正と負の力に分かれます。正は神々に成り、負は幻獣に成りました。」

「神々と幻獣は互いに力を合わせ、一つの大陸を作ります。そして、その大陸を支えるかのように幻獣は柱となりて、大陸を支え、神々は自らの力を振るい多くの生物を作りだしました。」

「最初に作り出したのは巨人でした。それは作り出した世界を理想の形にするために。次に作り出したのは知恵と優しさを備え自然を愛するエルフです。次に作り出したのは創造を司るドワーフでした。そして神々は最後に、世界を守護するために協調性と探究心を持つ人間を作り出します。」

「長い長い年月をかけ、巨人とエルフとドワーフと人々は互いに力を合わせ大陸を緑多き楽園へと変えました。」

「そしてある時、世界を脅かす者が現れました。翼をもつ4人の男は不可視な力を使い、多くの命を無作為に奪い楽園を自らのモノにしようとしました。」

「世界は数多の犠牲を払い、異界から来た翼を持つ者を退ける事に成功しました。ですが多くの犠牲も払ってしまいます。」

「世界の根源たる創世の種子がその戦いの最中に消滅してしまったのです。」

「そして……」

由香里が、そこまで聞いた所で正美が床に倒れこむ。

急いで正美を抱き上げるとアレイと弱弱しく言葉を発しながら正美は閉じた瞼から涙を流していた。

同時刻 エルハンス王国歴 2111年7月11日 PM17時

王都イースバールは巨大な閃光と爆発により大陸の版図から消滅した。

襲撃

「正美様！」

名前を呼びながらも由香里が何度も、正美の体を揺するが苦悶の呻きを上げ聞きなれない言葉を発してるだけで目を覚ます気配がなかった。

その頃、アレイクード公爵を5時間後に襲撃する手はずを取っていたガイアスを含む4人はアレイクード公爵邸を近くの岩場に身を隠しながら様子を伺っていた。

そこで一人の男がガイアスに声を発した。

「なあ、なんで由香里は俺達が襲撃するって事に対して反対するんだ？何か予想外の事態があったのか？」

男は言うのは尤もな意見であった。

ここ一年、由香里が元の世界へ帰るために取った手段は、狂気に近いものがあつた。

殺し合いも何もない日本人が、異世界で、しかも冒険者の中で最高ランクのSランクになる為には、それなりの事をする必要がある。

そして、今、ここにいる4人は一分でも一秒でも元の世界へ帰りたいと言っていた由香里を知っている。

だからこそ、元の世界へ戻る術が書かれている可能性が高い始原^ア書を手に入れる為の襲撃を延期している由香里に疑問を抱いたのであつた。

その二人の会話を遮る者がいた。

「待って、ガイアス、イスピル。」

「どうしたんだ？リメラ」

フードを深く被っていた、リメラと呼ばれた者がフードを取り払う。年齢は25歳くらいだろうか？白い肌に金色のストレートの髪、そして両目は青と茶色のオッドアイである。

町を歩けば同性でも振り向くほどの美人である。

だが、ガイアスとイスピルはその事に、特に反応せずにリメラが魔術を発動させるのを待っている。

「ガイアス、まずいわ。何だか分からないけど、禍々しいモノが多数、私達の方に近づいてきてるわ。」

ガイアスは、リメラの話を聞きながらも自分達と背後にはアレイクード公爵邸があることに気がつく。

「リメラ、恐らくだが、そのお客さん達は俺達じゃなくて公爵邸を狙って来てるかも知れないな」

「おいおい、ガイアス、いくら普段より警備が手薄とはいえ、公爵邸を襲うってのは俺達以外には考えられ「ウーネイ、リメラすぐに気配消しと姿を一時的に隠す術を展開しろ！急げ！」

イスピルが言い終わる前に、ガイアスが自分達の前方を見ながら指示を出す。

その危機的な言葉にウーネイと呼ばれた男が、気配消しの術を展開

し、姿を一時的に知覚出来なくする術をリメラが展開する。
そして、その直後、ガイアスだけでなく、歴戦の冒険者であるイス
ピル、魔流術師であるリメラ、高位神官のウーネイまでもが息を呑
んだ。

見渡す限り、そう、大地を黒く染め上げるような大群が4人の視界
に入ってきたからだ。

「おい、おい、おい、おい。な、な、なんなんだよ、あれは!?!?
一体なんなんだよ!?!」

イスピルが、驚き体を硬直させたまま、その言葉だけを言い切った。
リメラは何も反応を示さない、恐らく、現実離れした光景に頭の処
理が追いついてないのだろう。

そして……………。

ウーネイと呼ばれた者が腰を抜かしてその場に座りこむ。

そして、恐怖が張り付いた顔でガイアスと二人に聞こえるように声
を絞り出した

「ガ、ガイアス。あ、あれは、闇の魔人ジェードだ」

闇の魔人ジェード。その噂は、ガイアスも聞いた事があった。
数百年前に実在した、不死身にして冷酷な殺戮者である魔人。

女神信仰国家レイゲンの清教徒騎士団を100年以上に渡り1万人
以上惨殺した魔人と……………。

一人の魔人ですら、それだけの被害が出て結局、倒す事が出来な
かったと聞かされていた。

そして、冒険者協会では、魔人ジェードと会った場合、即逃げるよ
うにと最初に教育を受ける。

だが、実際、教育と実践はまったくの別物だ。

事実、ガイアス以外は放心状態に陥ってしまっている。

だが、放心していたのが良かったのか、気配と姿を隠していたからなのか、黒の魔人ジェードは全て、ガイアス達を通り過ぎアレイクード公爵邸へ向かっていく。

それを、見るだけしか出来ない4人は自然と理解した。

アレイクード公爵邸は、いや、自分達を含めエルハンス王国は終わると………。

そして、闇の魔人ジェードが公爵邸へ向かう、光景を見ていたローブを纏った男は愉快そうに笑っていた。

その男は、エルハンス王国の王宮にいた男であった。

そして正美が見れば分かってただろう、ジェードを作り出した男であることに………。

「クククッ、我が主が警戒する化け物があの館にいるとは思えませんがこれだけの数を向かわせれば十分でしょう。」

男がそこまで言い切ると、数万に及ぶジェードが公爵邸の壁を抜ける前に全て弾かれ吹き飛んだのであった。

「バカな!？」

男が、驚くと同時にアレイクード公爵邸の屋根の上には、臨戦態勢の幻獣王ルアカーゼが小さい体で、ちょこんと座って男を見下し、男が先ほど取った仕草を真似るように愉快そうに笑っていた。

幻獣王ルアカーゼ

魔人と恐れられ、冒険者達の恐怖の象徴となっている魔人が木の葉のように舞い散る。

そしてその都度、地面には赤黒い血痕が刻まれていく。

すでに、アレイクード公爵邸を護衛する兵士だけではなく、館に勤める人間が全てがその光景を目の辺りにしている。

多くの人間が、吹き荒れる竜巻そして降り落ちる氷槍を驚愕の眼差しで見ている。

そして、その中にはエルフィーナとイリシアも含まれていた。

イリシアはこの一方的な殺戮が始まった直後、ルアカーゼが館を守るために戦闘に入ったと一瞬で悟っていた。

そして、すぐにエルフィーナの詰める執務室に飛び込む。

「エルフィーナお姉さま！」

イリシアが飛び込み、声を上げるとすでにエルフィーナは執務室の窓から外で起きてる光景を椅子から立ち上がり見っていた。

エルフィーナはイリシアの声に反応し、視線だけをイリシアに向けた。

「イリシア、今、正美様はどうしてるの？」

そう、正美を常に護衛しているのが幻獣王ルアカーゼだからこそ、冒険者と二人きりにしていたのだ。

そのルアカーゼが矢面に立っていると言う事は護衛が居ない状況に置かれている。

もし、アレイクード公爵が不在の時に、正美の身に何かあれば取り

返しのつかない失態となる。

だからこそ、エルフィーナは正美が今、どこで、何をしているのかイリシアに確認をしたのだが……。

「はい、今、部屋を見てきたのですが、不在でした。おそらく館の中を歩き回ってるかと思います。」

そのイリシアの回答に、エルフィーナは立ちくらみを覚えた。

いくら、人手が足りないとは言え、正美の護衛を冒険者風情一人に任せる形になっているからだ。

エルフィーナが、館に残ってる人間を使い、正美を探すように指示を出そうとした所で、由香里が正美を背中に抱えたまま執務室に入ってきた。

それを見た途端に、エルフィーナは安堵の表情を浮かべたがすぐに表情を硬くする。

正美の顔色が真っ白になっており、生気をほとんど感じる事が出来ないからだ。

イリシアもそれに気がつき、執務室に備え付けてあるソファアに正美を寝かせるのを手伝う。

エルフィーナは、顔色を真っ青にしながらも、この場にクレイネルが居ない事を恨みつつ、由香里に事の顛末を聞くが、地下にある黎明庫で調べ物をしている時に、突然倒れた以外にはこれと言った理由を聞き出す事が出来なかった。

父である、クレイネルが医療術を使っていたのを見ていたエルフィーナは、肉体の細胞を活性化させ回復を促す治療術を展開するが全ての術が正美に浸透する前に消えてしまう。

「つつ！一体どうなってるの？なんで、回復術を受け付けないのよ

「？」

すでに、正美の顔は死人のようになっており息をしているのが不思議な状態であった。

そして、アレイクード公爵邸の外での戦いはすでに一区切りを迎えようとしていた。

ルアカーゼは館の屋根上に座りながら館全域を防御結界術でドーム状に覆い魔人を寄せつけずに、一方的に竜巻を引き起こし、それにより発生するダウンバーストと雷そして氷槍にて魔人達を殲滅していた。

結果は、魔人シェード数万の大部隊は何も出来ずに一方的に惨殺されたと言って過言はない。

だが、実際、そんな事が出来る人間がいるのかと言えば全員がNOと言うだろう。

事実、ルアカーゼが魔術を展開し一方的な殺戮をしていた範囲の外から見ていたガイアス達は、数万の魔人を見た時以上のショックを受けているのか全員が立ったまま呆けている。

そして、それはローブを来て笑っていた男も例外ではなかった。

「ば、ばかな。た、たった数分で私が、数百年も実験を重ねて完成させ王都の人間達を素材に作った最高の人形が結界ごときに殲滅させられたと言うのか？そ、そんな馬鹿な事があっていいわけが……。」

そう、ルアカーゼは一切姿を現さずに魔術のみで一方的に殺戮を行ったため、クレイネルが館を出る時に敷いた結界と男は誤認していたのだった。

恐らく、ルアカーゼが最初から姿を現しておけば適度に注意を引きつつ逃げていただろう。

だが、結界という固定的なトラップと誤認してしまったからこそ、逃亡という道を男は閉ざしてしまっていた。

ブッ。

と言う音が男の耳に聞こえてきた途端に、男の視界が上下逆さまになる。

そして、ルアカーゼが咥えた頭を其のまま咥えていると男が驚愕の眼差しで喚き始める。

「な、何者だ、貴様！私を誰だと思って……………（グシャツ）」

男が途中で何かを話す前に、10m程の^{シルバールフ}白狼に変化したルアカーゼは男を噛み潰すがそれが霧となり、切り離された胴体と一体化し、元通りに戻る。

そして、男はルアカーゼを見ると少し驚く。

「ほう、まさか絶滅していたと思っていた月の狼の一族が残っていたとは。さすがは、大陸最強と名を馳せた邪魔者^{クレイネル}だけの事はありませんね、こんな化け物を使役していたとは……………。ですが、ご主人様亡き後、生きてても仕方ないでしょう？このエウルレイス様が引導を渡してあげましょう。貴方のご主人様や王都を消した方法と同じやり方でね！」

エウルレイスと名乗った男が、服の中から黒い鉄球を取り出しそれを宙に投げ術式を展開する。

同時に鉄球が共振し、周りの空間を喰らいつくし始める。

「この鉄球はですね、周りの空間を喰らいつくしこの世界を構成している物質とはまったく異なる物質を作り出してそれを既存の周囲にある物質に混ざり合わせる事で莫大的なエネルギーを生むんですよ！分かりますか？理解出来ないでしょう？確かに月の狼は神の眷属で気象を操るとは聞いていましたが、これだけの力を保有していても貴方如きではこれを止める事は出来ないでしょう？私の可愛い、人形達を壊した償いは貴方が守ろうとした館ごと消滅して償ってください……。クククク」

そして、エウルレイスが、大声で笑い始めた途端に、世界を光が埋め尽くし其のまま何事も無く消え去った。

「い、一体どういう事ですか？」

起きるはずの爆発が起きない事に、エウルレイスが狼狽する。

そして、先ほどルアカーゼが居た所に目線移すが、すでにそこには、ルアカーゼの姿は存在していなかった。

『くだらん手品だな』

圧倒的な死という圧力が、プレッシャー声に乗せられ空から降り注ぐ。

そう、全ての生きとし生けるもの全てに．．．．．。

そして、その空に滞空するルアカーゼを、エウルレイスは驚愕を含んだ表情で自失呆然と呟いた。

「げ、幻獣王ルアカーゼが．．．．．な、なぜ、ここに．．．．．」

戦いの終局

アレイクード公爵邸の上空に鎮座している巨大な姿は畏怖と同時に絶対的な死を連想させる。

エウルレイス以外は、上空を直視する事すら出来ずに空から降って来る声に体の自由を奪われていた。

「何故！何故！？何故こんな所に幻獣王がいるのですか？」

エウルレイスは、信じられないと言った表情でルアカーゼを見上げている。

そして、狼狽しきっているエウルレイスを嘲笑うかのように空から声が降り落ちる。

「そのような問いかけを我にできて、貴様の死は変わらんぞ？我が主の身を狙いに来た償いはしてもらおう。貴様の命でな」

その言葉に、エウルレイスが瞳を限界まで見開く。

「主？幻獣王とも在ろう者が使役されているのですか？それほどの化け物が此処にいたので………」

言葉の途中で、エウルレイスが大地に叩きつけられる。

その際に、叩きつけられた場所を中心に大地が割れ、深さ3mほどのクレーターとなる。

「我が主の愚弄は許さん、貴様を逃がす気もないがな。先ほど、貴様は面白い事を言っていたな？王都を破壊したと、貴様は誰の命令で動いている？」

一体、どれほどの力の差が、私と幻獣王の間にあると言うのだ……

エウルレイスが、疑問に思う事は仕方の無い事であった。

何せ、ルアカーゼはまだ、何の攻撃すらして来ていないからだ。

殺気、そう只、貴様を殺すといった意思だけで大地を砕きエウルレイスを地面に這い蹲つくろはらせている。

そして、突如エウルレイスの右腕が吹き飛び塵と化す。

信じられないと言った顔つきで右肩口を見る。

エウルレイスの体は、どのような事があっても塵まで分解しても再生するように作られている。

それが一切、再生する気配を見せない。

それがどれほど異常な事か………

「少しは話す気になったか？ 矮小なる存在よ。そしてこれが本来の対消滅だ。貴様がさっき使ったモノとは次元が違うというのが理解出来るか？」

エウルレイスにも、ルアカーゼの言ってる事は理解できる。

が、理解は出来ても信じられないと言うのがその顔から考察する事が出来た。

だが、確実に一つ分かる事があった。

それは、戦うどころか逃げる事すら不可能だという事。

本来ならば、想定外どころか計画を根底から覆すほどのイレギュラーが出てきた時点で主へ報告に戻らないと行けない訳なのだがそれすら許されない。

ならば………

「ええ、理解出来ました。そして……」

エウルレイスを構成していた精霊力が共振し、世界を構成する魔力と融合し魔力の溶鉱炉となり全てを飲み干そうと暴走を始める。

「ルアカーゼ、貴方だけでも道連れにしていきます」

そう告げた後、エウルレイスの体が分解し周囲を喰らい始める。それをルアカーゼは面白く無さそうに見て、片腕を振るい暴走を始めた周囲の空間ごと削り取り消滅させた。

「くだらん。こんなゴミが我が主に出そうなどとは。なんだと？」

契約が消失しかけてる事に驚いたルアカーゼが一瞬で、その場から消え去る。

ーアレイクード公爵邸 執務室ー

「なんで？なんでなの？なんで治療術が一切、効かないの？なんでなの？」

涙で顔を腫らしながらエルフィーナは、クレイネルに習ったあらゆる治療術を施していた。

それが一切効かず、最初の頃に蒼白だった正美の顔が土気色になっていた。

すでに呼吸も絶え絶えになっている。

その痛々しい姿に、イリシアも声を上げる事が出来ずにいた。

そこに、小動物サイズになったルアカーゼが何もない空間から現れた。

「ご主人たま！」

ルアカーゼが、走ってソファアの上に寝かされていた正美の近くに近寄るが同時に、契約が解除されてしまう。

そして、エルフィーナが握っていた正美の手もエルフィーナの手からすり抜けてソファアの上に力無く落ちた。

「ご主人たま!？」

「そ、そんな・・・・・・・・。なんで？何ですか？なんでこんな事が・・・・・・・・。」

由香里も、正美が死んだ事にショックを受けて執務室の床の上に座り込む。

執務室の中には、ルアカーゼの主を呼ぶ声が響き渡っていた。

戦いの終局（後書き）

正美）あれ？何か俺、死んでないか？

一応主人公なのに？

主人公が死んで物語続くのか？おい。作者！どうなんだ？

作者）次回からは、由香里の幻想冒険がスタートしますミ☆

由香里）そんな話聞いてませんよ！？

作者）だって言って無いから……。

ルアカーゼ）ネタが無くなったからって主を殺したなら作者貴様を

（ガルル

作者）ひっ！そ、そんな事ないですよ。きちんと考えて計算してるはず？

フィーナ）あらあら、そんなに攻めたら可愛そうですよ。

エルフィーナ）お母さん！？なんでここに？

フィーナ）なんとなく？

作者）まって、フィーナ。貴女が出てくるのはまだ、さ（ry

正美）だからー。主人公どうなっちゃうのー？

真実と虚像

俺の意識が、際限なく深い場所へ向かって、どこまでも落ちていく。その都度、俺に誰かが語りかけてくる気がするが、意識が朦朧として感じ取る事が出来ない。

少しづつ、自らの存在が、消えていくのが分かる。

そのうち、チャンネルが切り替わるように、異世界の記憶を遡っていき、次々と記憶が現れては消えていく。

大学を卒業してからの記憶が現れ、それが消え、高校時代の俺が現れそれ消える。

そして、しばらくすると腰まである黒い髪の5歳くらいの少女が突然、俺の前に現れた。

少女は、今にも泣きそうな瞳で俺を見ると、俺から距離をおいて走っていく。

「お、おい。一体は誰なんだ？それにここはどこなんだ？」

突然、俺は意識がはっきりし周囲を見渡す事が出来た。

そこはまるで、そう俺が最初、この異世界に飛ばされて来た場所であつた。

只一つ違う事は、今回は俺だけではなく子供が二人仲良く草原に座って話しをしていた。

一人は赤い髪に、現代日本に合わないような服を着ている男の子だった。

そして、もう一人は先ほどの少女がサマードレスを来て座って話を

している。

二人の真横にいるのに、その会話がまったく耳に入っていない。分かる事は、この少女と少年はとも仲がいいと言う事が分かる。距離としては1mにも満たないのに俺にまったく気がついた様子もなく二人は話を続けている。

そこで少年が時を止めたように凍りつき停止した。そして少女が、突然俺の方を振り返った。

「正美、ようやく、貴女に会えたわね。」

少女が俺の方を見て笑う。

それはとても楽しそうに。

だが、俺は素直に微笑み返す事は出来なかった。

そう、例えるならば何か、大事な物事がこれから告げられるような感じを受けているだった。

それでも、何かを問わなければ先に進めないと言うのは本能が理解した。

そう、ここにこれ以上いたら取り戻せなくなるという感覚。

「お、お前は一体誰なんだ？そ、それに一体俺はどうなったんだ？、ここは一体どこなんだ？」

俺自身、最後に記憶が残ってるのは黎明庫で本を読んでは所までだ。その後の記憶が一切ない。

脈絡もなくこんな世界に放り出され、すでに俺は精神的に余裕がなかった。

どんな情報でもほしかった。そして……。そんな俺の様子と矢継ぎ早に質問に、少女は少し驚いたような顔をして俺の背後を

指差した。

俺は思わず、後ろを振り返ると、先ほどまで少年と話していた少女が血を流して倒れていた。

その横では先ほどまでの少年が泣きじゃくり、少女を励ましているが腹部からの流血を見る限り助からないというのは素人の俺でも理解できた。

その時、突然周囲の音が耳に入ってきた。

風がざわめく音、緑の匂い、そして少女が倒れている川岸とその横に座って手を握ってる少年の息遣いまで聞こえてくる。

俺は思わず近づこうとしたが体が、石になってしまったように身じろぎする事が出来ない。

「ムダよ、今の貴女では何も出来ないわ。」

辛うじて声のする方へ視線を向けると、異世界に来てからのもう一人の俺、そう黒い髪の少女が腕を後ろに組んで前かがみになって俺を見上げていた。

そして、気がつく俺はこの世界に来る前の男の体に戻っていた。

「俺が何も出来ない？　どういう事だ？」

少女が俺の疑問に、笑う。楽しそうに何度も笑う。

俺は、自由に体が動かせない事もあり、「何が面白いんだ？」と少女に大声で怒鳴ってしまっていた。

そんな俺の剣幕に少女は、キョトンとした後、悪戯ぽく微笑む

「だって、貴女、自分の事すらまったく理解出来てないじゃないの？　貴女自身の事すら満足に理解出来てないのに何かできる訳ないで

しょう？」

「何を言ってるんだ？俺が自分自身の事が分かってない？」

「ええ、そうよ。だって、私から見たら貴女は本当に何も理解して
いないわ。いいえ、知りたがってすらいない。自分の都合の良い事
しか、聞かないし、信じゃないし、見ようとはしないじゃないの？そ
うね、一つ例を上げましょうか？貴女の恋人の結城奈津実さんだっ
け？」

その名前に、俺は忘れかけていた記憶が穿り返されるような痛み
を受けた。

そして、「お前には、関係ないだろうが！」と思わず怒鳴ってしま
う。

俺の、怒鳴り声も少女は何食わぬ顔で受け流す。

「ねえ？貴女。まさか本当に彼女が裏切ったと思ってるの？」

そんな言葉を俺に、少女は投げ掛けてくる。

だが、俺は見たんだ。そして聞いたんだ。

結城奈津実が、大学で何と言われているかを！そして俺にんと言っ
たのかを、そしてホテルから出てきたのも目撃したんだ！
だから、だから……。

俺の心の中の葛藤を少女は、見透かすかのように目を細めて見て来
ているが、怒りが再燃した俺がそれに気がつく事は出来なかった。

「うるさい、うるさい、うるさい。あいつは、奈津実^{なつみ}は俺を裏切っ
たんだ！それに俺が両親から受け継いだ財産を狙っていたと言っ
ていたんだ！」

「貴様に何が分かる？お前に何が理解出来る？俺は婚約の約束までしていたんだ。それを一方的に破ったのは向こうからだ！なのに、なんで俺が攻められないといけないんだ！！」

「そう、本当に愚かよね、見てて耐えないわ。今の貴女は……」

俺を見て、本当に哀れみを込めた眼差しでそう告げてくる。

そして、少女が指を振るう。

空間上に一つの風景が現れた。

そこは、リビングであった。

あったというのは原型を止めない程に荒らされていたからだ。

そして、俺には、そこがどこの家か分かった。

「な、な、なんで俺の家が？」

まったく要領を得ない。

家宅捜索でもここまでは荒らしたりはしない。

そもそも、今、風景に映ってる奴らは人間じゃない？

そして、一人の見知った男が風景に映る。

「おい、見つかったか？」

「いえ、ありません。ですが、正美という男がこの家から出て行ってはいないと見張りからも報告が来ています」

黒いスーツを着てる男がその男に、そう報告を上げている。

「ちっ、まったく使えん人間め！あと少しだった所を！最後の理性を絞り邪魔をしおって。最後まで騙しておけばいいものを……」

・。
」

男が、気分を晴らすようにリビングの壁を魔術を使い破壊する。

「エウルユニス様、あまり問題を起しますと兄上のエウルレイス様に我々が叱られてしまいます。」

「分かっておる。こちらの世界では秘密裏に事を進めろと言う事だろう？」

男が怒りに満ちた目で、正美の家を出ると一人の女性、結城奈津実が瞳に光を無くしたままで人形のように立っていた。

それを見て、エウルユニスが結城奈津実の顔を殴りつけると、家の前に止まっていた黒塗りの車に乗り込んでいく。

背後から追いついてきたエウルユニスの部下が、急いで車にかけつけるとゆっくり窓が降りていく。

「あの女、結城奈津実の処遇はどういたしましょうか？」

と追いついてきた部下が聞くとエウルユニスは、すでに関心無くしたのか無表情のまま「いつものように処理をしておけ」とだけ言い窓を閉めた。

そして車内で、ワインを一口飲むと、運転手に出発するように合図を出す。

「まったく、転移した創世の種を見つけたが良いが、まさか桂木博士が裏切るとは……。」

そう車内で愚痴を零していた。

そして、それを見ていた正美は驚きのあまり凍りついていた。
桂木博士？なんだ？どういう事なんだ？俺の両親は普通の企業に勤
めてるはずじゃ？そんな困惑してる俺を愉快そうに少女は見て取る
と、男達がいた風景を手を振るい消した。

「どう？少しは言ってる意味が理解できたかしら？」

少女の言葉に正美は、困惑した顔で俯いてしまっている。

「だからって．．．．．なんで俺に相談しないんだ．．．．．」
「

少女は溜息をつきながらも本人に直接聞けばいいと正美に問おうと
した所で、待ち人が近づいてくるのに気がつき、正美の肩を叩き、
少女が倒れてる方を見るように促した。

俺は、たった今見たばかりの現実が受け入れる事が出来ないまま、
少女に示された方を見ると見た事のある女性が少年と少女の元へ歩
いてくるのが見て取れた。

「あ、あれは、まさか．．．．．」

その女性は、腰まである青い髪を靡^{なび}かせ長い耳を持った女性であっ
た。

黒の巫女姫

この話は、エルハンス王国が建国される前の話。

「お待ちください、姫様！」

数人の侍女が、青いドレスに身を纏った青い髪の少女を追いかける。
歳の頃は17歳程だろうか？

150cm程の身長のために実際より若く見える。

「お待ちを！姫様」

侍女達が必死に少女の前に立ち塞がるが、意に介さず回廊を進んでいく。

そこは、大理石で組まれ作られた神殿のようであった。

通路の両端に大の男が一抱え出来るほどの巨大な柱が永遠と続いており、柱には繊細な彫刻が施されている。

そして回廊には、踝^{くるぶし}まで沈み込むような青い絨毯が永遠と引かれている。

本来は、暗い回廊はだが、今は少女の周りに浮かぶ数十に及ぶ精霊達により幻想的に照らされている。

少女は、進めている足を止めないまま、一つの扉の前に立つ。

扉には華美な彫刻が施され、表面には金が貼られ光輝いている。

「おやめください、姫様！」

その静止の声に耳を傾ける事なく、少女が扉に手を当てると音も無く扉が開いていく。

開いた扉を進んでいくと、突然、視界が開く。

人がゆうに1000人は入れそうな巨大なドーム状の広場の中央には大理石の台座が鎮座しており、その台座を取り囲むように背丈の高い、

緑色の服を着た数十人もの男女が台座を中心にして床に書き込まれている魔法陣に力を注ぎ込んでいる。

力を注ぎ込まれると、呼応するように魔法陣の光が増していく。

そして、その集団から離れていた男が少女が入ってくるのを見ると眉を吊り上げた。

「フィーナ！何故、こんな所に来ているのだ！」

「お父様、いつまでこのような事を続けるおつもりなのですか？この世界の問題は、私達自身が解決しなければいけないはずです！」

「また、エメラスに何かを言われたのか？いい加減、お前も少しは王族としての自覚を持て！」

「民を守り慈しむのが王族ではないのですか？異界の者とは言え、そのような者達に私達が本来負うはずの責を負わせるなど間違っています」

「奇麗事だけでは国は回らん。それに世界の崩壊を食い止める為には、異界の者の心と魂と力が必要なのだ。」

フィーナと呼ばれた少女は、両手を強く握り締める。

たしかにより多くの人々を守るためには小さい犠牲はやむを得ない

と言える。

そして、その決断を取る者こそ、指導者としては相応しい。だが、フィーナの年齢では、頭では理解していたが心では納得出来なかった。

フィーナは、400年近く生きているが、人間の年齢で換算すれば未だに14歳という若さであった。

だからこそ、理想を追い求めていた。

それが、とても難しいと分かっているも……。

そして、二人が言い争ってる間にも、異界の人間を召喚する魔法陣が完成してしまう。

あとは、王族である国王が宣言し召喚すればいいだけである。

フィーナは、召喚を食い止めようと台座まで走り寄る。

突然の事に、周りが反応出来ないでいると台座の上に設置されていた光り輝く宝玉オーブに手を伸ばし掴み取る。

「やめるのだ、フィーナ。自分が何をしているのか分かっているのか？」

「分かっています！お父様達は、異界の者の魂と心をこの宝玉に喰わせて成長させるつもりなのでしょう？そしてこれを使って世界の再生を考えているのでしょうか？」

フィーナは、叩きつけるように自らの父親の前でその宝玉オーブを床に叩きつけて砕いてしまっていた。

「な、何をしているのだ？数千年続いてきた儀式を…….
んということを…….」

余りの突然の事態に周囲が凍りつき、男は怒りのあまりに言葉を無くしていた。

その中で、砕けた宝玉^{オープン}から立ち昇る光がフィーナを中心に集っている。

「大丈夫です、お父様。私が、このフィーナが最後の黒の姫巫女としてこの世界を守って見せます！これでこの世界中に作られた魔法陣が起動して関係の無い方々を召喚する事はなくなります。」

フィーナがそういい切ると同時に、光が全てフィーナの中に流れ込んでいく。

その様子を、男は目を見開き見ていた。

翌日、トントンと扉を叩かれその音でフィーナは目を覚ました。返事をするとな人の少女が入ってくる。

「エメラス？どうかしたの？」

「フィーナ様、昨日の事は聞きましたよ。なんであんな事をしたんですか？ゼブル様はあの後、ショックのあまり倒れられてしまったのですよ？」

そんな口調に、フィーナはムツとする。

「だって、いつもエメラスだって言ってるじゃないの？よく考えた後は行動するだけだって！」

その良く考えたらが、フィーナ様は抜けているのですけど……

・と突っ込むのをエメラスは我慢した。

どうせ、今更言っても聞かないのだから。

エメラスが何も言い返さない事に、フィーナはブーツと膨れ面をするが次のエメラスの言葉でその表情が氷ついた。

「フィーナ様、私も人魔改造オベリスクの契約を受けてみたいと考えています。」

人魔改造、この世界の生物と神話大戦時に異界より侵攻してきた際に手に入れた魔物を合成させる事により強大な力と長命な寿命を得る事が出来る法。

だが、成功確率はとても低く、1000人の兵士がそれに志願したが成功例は只の一例のみ。

それでも、わずか1000年程で死んでいた。

フィーナ達、エルフの平均寿命は2000年程である。

無理に、そんな危険な事をしなくてもいい。

「ダメよ、そんな危険な事、させられないわ。絶対許可は出さないわ」

「フィーナ様が黒の姫巫女と成られたのでしたら、お付の私も出来る限りフィーナ様に仕えたいと考えています。」

「でも、私は嫌なの！友達がそんな危険な事をするなんて認められないわ。」

「私は人間です。幼い頃よりフィーナ様と一緒に過ごして来ました。でも、先月、ゼブル様から言われたのです。もう私の体を維持しておくことは無理だと……。」

「そ、そんな……。」

フィーナはその言葉に、自失呆然とし、床に座り込んでしまう。たしかに人間は、フィーナ達が瞬きするほどの間で生まれ、そして死んでしまう。

エルフ達の出産率は、長命であるがゆえに恐ろしいほどに低い。数十年に一人生まれればいい方だ。

そして王族となれば、年頃で一緒に遊べる子供など入るはずもない。だからこそ、王であるゼブルは他国の王族に外交的に圧力をかけ一人の王族の年頃の娘を人質同然に手に入れ、

娘であるフィーナの遊び相手としてエルフが誇る延命技術を使いフィーナ付の侍女にしたのだった。

だが、その延命技術も万全ではなく、少しずつ細胞が死んでいく。そして、最後には……。

本来、エメラスは其のまま死ぬつもりであった。だが、事態は変わってしまう。

エルフ達の間ではこう言われていた。

創世の種子

それを作り上げるために、魂と命と心を喰らい成長する事を目的に上級神ユーゼイによって作られた生贄の宝玉。

そして、本来であれば、生贄はこの世界の者が行うはずであった。だが、残念な事にこの世界で生贄の宝玉に力を与えられる程、力を持つ者はいなかった。

だからこそ、異界から力ある者を召喚しそれを生贄とする事によって宝玉を成長させてきた。

実際、生贄と言っても簡単なモノだ。

召喚は上級神ユーゼイが世界各地に作り上げた魔法陣が何百年に一

回の割合で召喚を執り行う。

何百年に一回の割合と言っても世界中にそれは点在してる為に、百年一回のペースで異界より住民を召喚する。

そして、召喚された者にはその者の心に呼応し固有した特殊な力が付随される。

この世界で生き抜くための力が………。

だが、その力を振るえば振るうほどこの世界に肉体のみならず全てが侵食され最後には、力だけを残し全てを召喚された魔方阵に喰い尽くされる。

そして魔方阵が得た力は、^{オーブ}宝玉を成長させる贄とされていく。

そして、力は、その者のもつとも強い残留思念を元に組み替えられ一冊の力ある原書^{オリジン}となる。

と………。

そして、何故か召喚される者は黒い瞳に黒い髪をした者だけであった。

だからこそ、この世界の人々は生贄となる者に哀れみの感情を込めてこう呟いた。

【黒の巫女姫】と………。

召喚自体されていない、フィーナが魔方阵に喰われるかはまだ不確定だが、

それでも、いつもエメラスに姉妹のように接してくれたフィーナが、力を使いきり、魔方阵に喰われるのは見たくない。

だからこそ、少しでも長く生きられるように力を使わずに居られるようにとエメラスは、人魔改造を受けフィーナを守る決意を固めた

の
だ
っ
た。
。

失われたエルフの都 前編

―王都イースバールが壊滅した直後―

辺り一面は暗闇で覆われており、目を凝らしても周囲を伺う事は容易ではなかった。

暗闇に閉ざされた空間で数人の呼吸音が感じられた。

「うつ．．．．．ここは一体．．．．．」

一人の紫色の髪をした25歳程の青年が立ち上がり周囲を見渡すと、白い法衣に身を包んだ男がおぼろげに視界に映った。

男が青年が目を覚ましたのに気がつくのと近寄ってきて青年の腕をとり脈拍を測る。

「ふむ、もう大丈夫そうじゃな。しばらく体を休めておけば問題なく動けるようになるだろう」

青年は男に見覚えがあった。

一度だけ王宮で父親にアレイクードの父と共に紹介された男であった。

「まってください、クレイネル殿。一体、何がどうなったのですか？」

青年の言葉を聞きながらクレイネルは他の倒れている者の容態も見

ていく。

そして、只一人を除いてとくに異常はないと判断すると、異常が認められた青年に近づいていく。

クレイネルから見て、それはもう手の施しようが無い。満身創痍の状態であった。

おそらく、もうすぐ……。

「クレイネル！アレイは？」

何時起きたのかエメラスが、アレイクードの近くに駆け寄りその変わり果てた姿を見て座り込んでしまう。

いつも、感情を表さないエメラスであったが、この時ばかりには顔を伏せて嗚咽を嚙締めている。

「クレイネル、アレイを助けることはもう出来ないのですか？」

エメラスの問いかけに、クレイネルは首を横に振り答えた。

むしろ、この状態で生きてる方が不思議なのだ。

だからこそ、エメラスはどうにも出来ない自分の無力に打ちのめされた。

これでは、フィーナとの約束を守る事が出来ないから……。
何の為に、今まで生きてきたのか。

「お、お父様はどこですか？お父様はどちらにいらのですか？」

どうやら、もう一人も起きて父親を探してるようであった。

そして、もう一人も起きて、クレイネルとエメラスとアレイクード公爵が横たわっている場所まで歩いてくる。

そして、変わり果てたアレイクード公爵の姿を見るとフィーナは、凄惨な姿を始めて見たのか嘔吐し、他の公爵達は信じられない面持

ちで見ていた。

「クレイネル殿、一体どうやって、私達はあの場から脱出する事が出来たのですか？」

ヴェルドが疑問に思った事を口にした。

そしてクレイネルは説明をした。

今、クレイネル達が居るのは滅亡したエルフの都の転送陣跡地であり、自分達が助かったのはクレイネルが非常用に持たせていた転送呪文を刻み込んだイヤリングのおかげだと．．．．．。

だが、転送呪文の発動には人一人を運ぶだけでも膨大な魔流力が必要であり、今回はエメラスを始めとする6人で会った為、その力を無理やり行使してしまった為、肉体を構成してるはずの生体エネルギーまで力に変換、さらには肉体にも欠損を生じさせ今のような事態になっていると．．．．．。

「ふざけんなよ！何してんだよ。俺の魔力を使えば支え切れたのに、アレイ！貴様なんでいつも一人で解決しようとしてるんだよ！」

事情を聞いたベルカストールが苛立ちを隠さずにアレイに毒を吐くが、その瞳には薄っすらと涙が貯まっている。

「アークくん。なんで、こんな事を．．．．．。」

ヴェルドも座り込みながら呟いている。

「こ、ここは一体どこなのだ？」

どうやら、最後の一人が起きたようであった。

クレイネル達に気がついたのかこちらへ向かってくる。

「フィンナ！無事か？」

男が、娘に気がつき走ってきて娘を抱きしめる。

「お、お父様。アレイ様が、アレイ様が皆を助けようとしてご自分の犠牲に……………」

後半は掠れて聞こえては居なかったが、レイユーズがアレイの横たわった姿を見ると痛々しい者を見るように眉を潜めていた。

クレイネルはその光景を見るとこれからどうすればいいのか考え込んだ。

こここの転送陣は、エルハンス王国の王宮の最深部に位置しており、ここまで余波が届いているという事は相手は戦略級の魔流術を短時間で構築しそれを発動させたという事になる。

ここは、王宮の最深部とは言え、地下2百メートルに位置している。まさしく相手がどのような術を使ったのか皆目検討もつかないというのがクレイネルの考えである。

そして、相手がそのような術を使用したのならば、おそらく王都とその住民、そして避難民にアレイクードが救済のために組織した従軍は壊滅したと見て間違いなかった。

そして、これだけの事を躊躇なく行う勢力はあの者達しか思いつかない。

かつて世界を支配していたあの者達しか。

そして……………。

「まずいぞ！」

思わず、クレイネルは声を上げてしまっていた。

自分達を邪魔者として、都市ごと消そうとしてきたならば、アレイクード公爵邸にいるフィーナの忘れ形見であるエルフィーナも危険に晒される可能性が高い。

あの者達に対抗できる力を有しているのは、歴史上最高の天才と言われたフィーナの才能を受け継ぐエルフィーナしかないからだ。考えすぎかも知れないが、本来の目的は、公爵邸を襲う為だけに自分達を引き離すのが目的で戦争を起した可能性も……。

「クレイネル、以前にフィーナが言ってました。エルフの王家には死に掛けた者の肉体を再生させる術があると……。」

突然、声をかけられたクレイネルは、その言葉に反応し頷きつつ、自分はアレイの延命を行い、エメラスや公爵達へ王家の再生術を探し出すように指示を出す。

そして、全員が、部屋から出て行ったのを見るとクレイネルは空間上に多数の回復術の陣を展開していく。

「アレイ様、がんばってください。皆が、戻ってくるまでどうか……。」

失われたエルフの都 中篇

カッーン、カッーンと大理石で作られている回廊には、人が歩く靴音が鳴り響いている。

転送陣が存在していた大広間を出てから全員無言であったがしびれを切らした一人が口を開く。

「でも、本当にここってエルフの遺跡なのか？エルフなんて空想上の生物じゃないのか？」

ベルカストールが、独り言を愚痴る。

だが、内心は皆、同じ気持ちであった。

自分達が習ってきた歴史の中にはエルフは、伝説上の生き物と書かれているからだ。

神話時代、人が誕生し今まで、人がずっと世界を支配してきたと各国では教えている。

先頭を歩いているエメラスは、後ろを振り向かずに関廊行き止まりにある壁を押す。

押した途端、周囲に青い魔方陣が展開され、壁が両側に開いていく。

「隠し扉なの？」

ヴェルドの問いに、エメラスは反応せずそのまま、開いた空間の中に入っていく。

中に入ると、突如、日の光に照らされ全員が一瞬視界を失ったあと、数度瞬きするとそこは広場になっていた。

直径100m程の空間の中の中央には、噴水があり水が一定の間隔で形を変え、吹き上がる。

そして、天井には白いシャンデリアが光輝いており、一定の光で周囲を照らしている。

それを見た瞬間、エメラス以外は固まってしまう。

「これは一体なんですか？魔流術？それでもこんなに安定した光を生む事は出来ないはずですよ！」

フィンナが興奮しながら全員の意見を代行するように声をあげた。他の者も、王宮で噴水などを見たことはあったが、一定の間隔でテナポを取り、形を変えて噴出す噴水などではない。

王宮にあるのは、高低差を利用した噴水であり、今、自分達が見てる物とはまったく違う技術が使われてるのが分かる。

「皆さん、こちらへ」

エメラスが、先に進み全員を誘導していく。

そして噴水を回り込み、入ってきた入り口と反対側にある扉の隣にあるパネルに近づき、エメラスは手を翳した。

「指紋パターン解析・・・・・・・・。魔力照合開始・・・・・・・・。網膜パターンを解析・・・・・・・・。」

突然、周囲に合成音が流れる。

「な、なんだ？敵か？」

ベルカストールとヴェルドが臨戦態勢に入り周りを見渡す。

周囲には何も気配を感じ取る事が出来ない事に二人は困惑する。

フィンナとレイユーズも周囲を警戒するが、何も見つける事が出来ない。

「トライデルオベリスク戦術級人形エメラスと確認。第2アクセス権限まで認証を許可します。ゲートを開放します。」

合成音が再度流れると同時に、パネルの隣に位置していた扉が音も無く開いていく。

そして、その情景を全員が呆気に取られて見ていた。

エメラスは気にかける事なく、開いた扉を進んでいく。

未知なる場所に置かれる不安からか全員もエメラスの後を追っていく。

「まってください、エメラスさん、ここは一体何なのですか？それにさっきの声も、トライデルオベリスク戦術級人形って一体、どういう事なのですか？エメラスさん、一体貴女は、何者なんですか？」

ヴェルドの問いかけに、足を止める事なくエメラスは、通路を進んでいく。

他の者も、理由を説明されなままついていくしかない事もあり、突然理解できない事が続き、苛立ちが募っていく。

そこで、エメラスは仕方無さそうに子供に教えるように言葉を紡ぐ。その声は、靴音しか響かない通路に響き渡り全員が聞き取れる音量であった。

「昔、そう、とっても古い時代に、この世界には巨人とエルフと人間とドワーフが手を取り合って文化を村を町を国を都市を作っていました。ある時、異界からの侵略者達と戦いが始まりました。長い長い戦いの末、疲弊していた人間達は自分達だけでも助かろうと、他の種族を裏切り侵略者達に寝返ってしまいます。」

劣勢に立たされた、巨人、エルフ、ドワーフは上級神である煉獄のれんごく審判神エウメディアに助けを求めます。

エウメディアは、己の力を108枚の原書オリジンに変え、3種族に与えます。

そして、その力を使い、巨人、エルフ、ドワーフは最後の決戦おもむに赴き、多大な犠牲を払い異界の侵略者達を大陸の遥か下方に封じる事に成功しました。

ですが、最後の戦いの際に神々の力を削ぐ為に、人間達は世界の根源たる力を司る、創世の種子を別世界へと飛ばしてしまいます。

創世の種子を無くした後、世界は崩壊を始めました。

そして、その崩壊を食い止める唯一の方法を見つけたのが、エルフ族の中であつてもっとも身分が低い男でした。

そして、世界崩壊を食い止める為に、創世の種子の代替物、生贄となる為に、異世界から召喚され人柱とされたのが黒の巫女姫だったのです。」

話がそこまで進んだ所でフィーナが顔を真っ赤にして反論した。

「そ、そんな……。そんな話聞いた事ありませんわ。どこの国の教会や教団だって黒の巫女姫は世界の危機の際に現れて、この世界を救い報酬を受け取らず元の世界へ帰還したと言ってますもの！人柱とか生贄とかそんな事あるわけじゃないですよ！それに、エウメディアなんて聞いた事ありませんわ」

その反論に、エメラスは溜息をつきながら、報酬や、世界の危機に都合よく現れ世界を救うなど、どこの物語なの？とエメラスは心の中で突っ込みながらも尚も足を止めずに歩く。

ベルカストール、ヴェルドは、その話を聞いて黙ってしまっていた。

「なるほどな、そう言う事か。つまり、ここの遺跡も、権力者達が隠した真実の一つと言う事か」

レイユーズが一人得心を得たかのようにのように呟く。

やはり、レイユーズも元、商人と言う事だけあり、多角方面的に物事を見る癖が抜け気っていない為に、目の前にある現実と照らし合わせ、結論をだしているのだった。

だが、レイユーズの娘であるフィンナは、多角方面的に物事を見る術を学んでいない事、そして熱心なインフェルノの信者でもある為に、教え込まれた経典と違う歴史を認める事が出来ずにいた。

そんな中……

「たしかにね。こんなすごい遺跡を残すくらい発展してた国なら、自国の内情を考えちゃうと隠したくなっちゃうわよねー。」

ヴェルドも、エメラスの話とレイユーズの独り言に妙に納得したように周囲を見渡す。

そして、全員が通路を歩いてると前方に高さ3mほどの扉が見えてきた。

一向が扉の前に立ち止まる、

「皆さん、ここに求める物があります」

エメラスが一同を見渡すと、扉の隣に設置されていたパネルに手を伸ばした。

失われたエルフの都 後編

エメラスが扉のパネルに手を触れようとした所で、暗闇の中から光り輝く物が飛来してくる。

『構成よ、我が身を脅かすモノから身を守れ！』

エメラス達の周辺を、魔流術の防御障壁が展開し、飛来したモノと火花を散らし双方ともに消滅する。

「そ、そんな馬鹿な!？」

ベルカストールが、自身が展開した防御障壁がたった一度の攻撃を受けただけで消滅してしまった事に驚いていた。

今、ベルカストールが展開した障壁は、本来であれば戦争時に数人の高位魔流術師達が展開する戦術クラスの魔法に対抗するための防御障壁であった。

そのような術を一人で唱える事が出来るのは、ベルカストールがクレイネルに匹敵する程の天才と王宮で言われていたからであったのだが……。

エメラスが、攻撃術が飛んできた方向を見据えて身構え、ベルカストールとヴェルドもいつでも戦闘に入れるように術式を編んでいく。レイユーズ公爵とフィンナに至っては、三人の影に隠れて事の成り行きを見守っている。

「ほう？ 低級魔術であったが私の魔術を防げる者がいるとはな」

攻撃術が飛んできた方から男の声が聞こえる。

コツ、コツと床を踏み近づいてくる音が通路に反響する。
そして、男の輪郭が見えてくる。

「え？まさか！？」

エメラスが驚きのあまり普段、出さないような声色で驚きのあまりその男を見つめていた。

その頃、クレイネルとアレイクードが居る転送陣の広場では、突然殺気向けられたクレイネルがアレイクードを背にし、一人の男と対峙していた。

「ひさしいな、クレイネル。20年ぶりか？ずいぶん歳をとったな。」

相手の男はクレイネルと一定の間を開けて、気安くクレイネルに声をかけている。
クレイネルは、反対に緊張した面持ちで男を見ている。

「エドルガルド、何故生きて……？」

「おいおい、ひさしぶりに会った兄弟子にそれはないだろう？」

エドルガルドは、30歳前後、クレイネルと比べても父と子程の年齢差があるように見える。

「エドルガルド！あの時に死んだはずでは？」

その言葉に、エドルガルドは愉快そうに口元を歪める。

「そうだな、お前にあの時殺されたからなあ。でもな？別に前を今、どうこうしようなど考えてない。」

「なんじゃと!？」

「まあ本当はな、王都を破壊する可能性のある部下を引き取りに来たんだが。」

エドルガルドは、そう言うときアレイクード公爵の体を見る。

「クレイネル、お前、この程度の怪我すら治せる術をまだ覚えてないのか？あいつに貸しでも作っておくのもいいな？」

エドルガルドは、寝かされているアレイクードに近づいていくが、
「エドルガルド！アレイクード様に近寄るでない」とクレイネルが空かさず進行方向を遮るように両手を広げて進行を阻止する。

「おいおい、クレイネル。俺は、今、一緒にきてる奴の息子だから助けてやろうとしてるだけだぞ？邪魔をするなよな」

「なんじゃと？ウエスクード様が？」

クレイネルが動揺すると同時にエドルガルドは、クレイネルに人差し指を向ける。

そして『^{ナルテ}現睡魔術』と声を紡ぐ。

「瞬間発動？馬鹿な！」クレイネルが驚愕の眼差しのまま、抵抗できずに膝から崩れ落ちる。

エドルガルドはそれを見てクレイネルが寝たのを確認すると、アレ

イクードに手を翳した。

場所は替わり、エメラス達一行は、男と距離を取っていた。

「ほ、本当にウエスなの？」

エメラスが、男を見て信じられないといった表情で呆然と立ち尽くしている。

そして、フィンナ以外の公爵達も亡霊を見ているように視線を投げ掛けていた。

「ひさしいな、エメラス。アレイは元気にしているか？」

「え！？ あっ！」

エメラスは問いかけられて、自分が何故急いでこの場に來たのかを思い出すと、顔色をサツと変えた。

その様子に、ウエスと言われた男が気がつく、エメラスに何があったのか問いかける。

「アレイが怪我をしまして、瀕死の重傷を．．．．．」

その話を聞くと、ウエスクードは頷くと、空間に手を走らせる。それと同時に空間上に魔方陣が展開され、一つの光景が表示される。丁度、エドルガルドがアレイを治療し終わった場面が表示されており、一切の傷らしい傷が見当たらない。そして、側にはクレイネル

が倒れている。

「クレイネル殿！」

ヴェルドが声を上げると同時に、画面上に一人の男が映りこんでくる。

金髪に、青い瞳をした痩せ型の180cmほどの青年であった。

「おいおい、ウエス。覗きとは趣味わりーな。まあ丁度いいか。お前の息子を治療しておいてやったから、貸し一つな！」

「ああ、分かった。あの方がこの遺跡を消せと言っている。そちらの二人は公爵邸へ転送しておいてくれ。こちらは私がやっておこう。」

二人の会話を聞いていた、エメラスはハッとするとウエスクードと距離を詰めようとする。

「来るな！エメラス」

エメラスは、信じられないといった心境で踏み出しかけた足を振り下ろす事が出来なかった。

エメラスの瞳からは涙が貯まり、少づつ頬を伝って流れ始めている。

「なんで？なんでなの？ウエス！どうしてずっと姿を隠していたの？」

「今はまだ何も話せない。すまないな、エメラス。もう少ししたら世界はあるべき姿に戻る。それまで、アレイの事を頼んだ。」

ウエスクードはそれだけ言うと、エメラスを含む全員に手を振う。それと同時に全員が光に包まれてその場から消え去った。

「ウエス、そっちは終わったのか？」

「ああ、丁度転送が終わった所だ。私は先に、あの方の元へ戻る」

「あいよ、後は任せておけ」

ウエスクードが通信を切るのを確認すると、エドルガルドは転送陣に空中に作り出した魔法陣を重ねる。

「さてと、これで任務完了つと。あの方も自分の過去を消し去りた
いのかねえ？さて、そろそろ戻らないと………」

エドルガルドが呟くと一瞬でその場から消え去った。

そして、男が消え去ると同時に、エルフの都は白い閃光に包まれ、
王都イースバールのあった周辺地域を巻き込み崩壊し地の底へ崩落
していった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0677v/>

神様それはないよ！

2011年12月7日00時21分発行